
神と俺のコイントス

すちゃらかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と俺のコイントス

【Nコード】

N5870K

【作者名】

すちゃらかん

【あらすじ】

麻帆良学園男子高校に通っているあまり平凡ではない青年風間誠次は、ある日突然神を名乗る変態紳士によって性別を変えられ、女子中学校2-Aに放り込まれてしまう。

ただでさえ騒動の種が多い2-Aだが、ヒトをおちよくることを至上の楽しみとしている神が居る以上、平凡な生活などあるわけがなかった。

風間誠次のトラブル女子中人生が始まる。

まあそんな話です。

なお、この作品は Arcadia との二重投稿です。挿絵がつけられると聞いて来ました。

第1話 神と俺のファーストコンタクト（前書き）

本作はネギまのオリ主ものです。

ところどころバトルとシリ阿斯を入れようかと考えておりますが、基本は思いついたネタを垂れ流すギャグです。

注意事項としては

独自設定が多々あること。

主人公たちがかなり強いこと。

オリ主がしょっぱなで性別転換すること。

ときおり三国志、封神演義、神話などの登場人物をオリキャラ化して登場させること。

などがあります。

以上のものが嫌な人は読まない方がいいです。

それでも読んでやってもいいという方はどうぞ読んでください。

なお、この作品は「Arcadia」というサイトに投稿している物です。

ずっとあちらのみで書いていたのですが、偶然訪れたこのサイトで挿絵が入れられるということを知り、二重投稿してみることにしました。

第1話 神と俺のファーストコンタクト

神と俺のコイントス

空を埋める満天の星々。

それに向かって手を伸ばす。

とても小さな己の手。

星を掴むどころかそのはるか手前の木の実すらつかめそうにない小さな手。

しかしそれでも、天に届けと握りしめる。

それが自分の始まり。

第1話 神と俺のファーストコンタクト

朝起きたら執事服の似合いそうなダンディなおっさんが妙なポーズを決めて立っていた。

セーラー服姿で。

> i 5 6 7 3 — 9 2 6 <

体はおるか思考まで凍りつく。

よく肉食獣の様だと称される目を見開き、 たつぷり3分ほど硬直して風間誠次はベッドから足を下ろした。

柄も何もない掛け布団の掛けられた飾り気のないベッド。

まあ男の部屋のベッドに可愛らしいプリントだらけのベッドがあったらそれはそれでミスマッチである。

そこは誠次の自室だ。

といっても今いるのは誠次の家ではない。

彼の家とはある片田舎の山奥。

殆ど人の寄りつかない小さな屋敷だ。

ここは誠次の通う高校の男子寮だった。

麻帆良学園。

世界最大規模の学園都市。

小学校から中高ときて大学まである、学生と言う人生のそれなりの期間を占める時代をその中だけでも過ごせる充実した街だった。

今は屋内ゆえ見えないが、少し上着でも羽織って散歩に繰り出せば、西洋の街並みを参考に作られた洒落た街が誠次の目に移るだろう。

全体的に完成された都市で、各種施設も充実し買い物娯楽もほぼすべて街の中で済ませてしまえる。

実際誠次もこの麻帆良に来てからたまにしか街の外まで足を運んでいない。

施設の充実と言う点ではそれは学園周りにも当然行きわたっており、男子寮とはいえ小汚なさや古臭さはそれほどなく、非常に生活しやすい環境ではあった。

友人のリサーチによると女子寮の方はさらに綺麗だそうだが、誠次にはあまり興味はなかった。

というかむしろ何をリサーチしているんだとツツコみたい。

まあ今はそんなことを考えてもしようがない。

いい加減現実逃避をするのをやめて、ベッドに腰かけた状態で眼前の物体を眺める。

体つきはスマートだ。

無駄な肉がなく、それでいて痩せすぎではない。

理想的な体型と言っていていいだろう。

顔は先ほど述べた様にダンディと言っていていい、整ったものだ。

外人的な彫りの深い顔立ちに、ヒゲがいい感じに風格を出している。

だがセーラー服。

これが全てをぶち壊しにしていた。

良い格好をする必要はない。

普通の格好をするだけで見れるものになりそうなおっさんだがセーラー服ではどうにもならない。

ただの変態だ。

誠次は起きぬけのショッキング映像で痛みだした頭を抑え、眼前の物体（人と呼びたくない）へと低く押し殺した声をかけた。

「オイあんた……」

「私は……」

物体は誠次の言葉を遮る様に口を開くと、ポーズは崩さぬまま顔をグリンとこちらに向けた。
巖かとも取れる声音で続ける。

「私は神だ」

誠次は物体の発した言葉を心の中で反芻する。
一度では理解できなかったのだ。
5度ほど反芻して、ようやく理解する。
そして行動を開始した。

「だあっしゃああああ!!」

気合の声と共に渾身の力を込めて拳を「物体」の顔面に叩き込む。

「物体」は悲鳴を上げる事すら出来ずに錐揉みしながら吹っ飛んだ。そして勢いよく壁に激突し、そのまま壁に突き刺さって止まる。

「ただの変態じゃなくて筋金入りの変態だったか」

動かなくなったソレを睨みながら吐き捨てる。

毒づきながら枕もとに置いてあった携帯を手を取った。

そして迷わずボタンを押す。

1、1、0と。

言わずと知れた警察への通報番号である。

罪状は何になるのだろうか。

不法侵入か。

猥褻物陳列罪あたりを適用できないだろうか。

頭の中で電話に出た警察の人間にどう説明するか言葉をくみ上げながら、聞きなれた呼び出し音の後返事が来るのを待つ。

すると近くからジリリリンと古めかしい呼び出し音が響いた。

電子音が主流になった今ではめっぼう聞くことのなくなったベル式の呼び出し音だ。

無論のこと誠次の携帯電話の着信音はそんな音ではない。

購入時から全くいじっていない電子音だ。

見れば壁に突き刺さっている筈の男が何時の間にか傷一つない姿で部屋の床に正座し、ポケットから電話を出しているところだった。

携帯電話ではない。公衆電話として置いてある様な奴だ。

当然だが到底ポケットに入るような代物ではない。

啞然として見つめる誠次の前で男は受話器をとった。

「もしもし私だ。神だ」

声は誠次の耳もとの携帯電話からも聞こえてくる。
110に掛けた筈なのだが、どうやら眼の前の男の元につながったらしい。

誠次は無言で電話を切ると発信履歴を調べた。

表示される番号は110。

やはりあっている。

もう一度かけてみる。

(1、1、0、と)

心の中で読み上げながらボタンをプッシュする。
ブルルルルという聞きなれた音。

近くで鳴りだす古めかしい電話の音。

男が手元の電話の受話器を取る。

同時に耳もとの誠次の携帯電話から声が響いた。

「もしもし。神だが」

誠次は立ち上がり、男のもとに行くと緑色の受話器ををむしり取った。

「をいコラ」

怒気を込めて告げる。

「なんで110番にかけてお前んところにかかるんだよ」

男はさも当然とでもいう様に頷くと、

「それはな……私が神だからだ」

「いや意味解らんし。おおかた俺の携帯に細工でもしたんだろう？
ほれ戻せサッサと戻せやれ戻せ」

男の額にぐりぐりと携帯の角を押し付ける。

それなりに力を入れているのだが男は眉ひとつ動かさない。
痛覚が欠けているのではと疑いたくなるほどに平気な顔で、こちらの問いに答えてくる。

「お前の携帯電話に細工などしていない。単に神の力でお前の通話を私の携帯電話につないただけだ。戻せと言われても戻しようがない。その携帯は何一つ変わっていないのだからな」

誠次は訝しげに眉をひそめると押し付けていた携帯をひっこめ、代わりに人差し指を男の鼻先に突きつけた。

「神の力だあ？寝言は寝て言え。それとその公衆電話もどきはケータイじゃねえ」

「寝言ではない。ゴッド・パウワアだ。それと携帯しているのだから携帯電話だ。何の問題がある？」

二人して睨みあう。

もつとも険悪な眼差しで唸っているのは誠次の方で男は泰然とした

ものだが。

数十秒ほどして誠次は根負けしたように嘆息した。
携帯を後ろのベッドに放ると、虫でも追い払うかのような仕草で手を振った。

「わかったわかった。お前は神の力を持ってる。そういう事にしてやるからとっと出てっくれ。そして二度と俺の前に現れんな」

心底うんざりした様子の誠次の言葉に男は不満げに眉を寄せた。
体を反らし、両手を高く掲げたみようちきりんなポーズを決めながら男は言う。

「ふっ。どうやら信じていないらしいな。ならば見るがいい！神の力を！」

高らかに宣言し男は右拳を胸の前で握りしめた。
そのまま真剣な表情で唸り始める。

「ぬふおおおおおおお！」

窓の外で雷鳴が鳴り響き、雷光が閉まったカーテン越しに誠次の部屋を照らし上げた。

その気迫に誠次は息をのみながら男の見せる神の力とやらを待つ。

「はあっ！！」

裂帛の気合いと共に男が右手を開く。右手の中に一輪の花が表れていた。

薄闇に閉ざされた部屋を沈黙が支配する。

男はどうだと言わんばかりの自信満々な表情で花を片手にこちらを見ている。

誠次は大きく息を吸い込み、男の顔に狙いを付けた。

「手品じゃねえかあああ！！」

咆哮と共に全身全霊でドロップキックをお見舞いする。

男の体がボールの様に吹っ飛び、壁に人型のへこみを生んで止まる。半分ほど壁にめり込んだ男はよっこらしよと言いながら体を引っこ抜き、体についた埃を払った。

そして息を荒らげる誠次を眺めながら明らかにわかっていない口調で呟いた。

「全く何が不満だと言っんだ」

「何かと聞くか……」

やれやれと首を振る男に誠次は震える声で唸る。

誠次はまなじりを吊り上げると、己の最大声量で叫んだ。

「もういい！でてけ！テメエみたいな変態の相手なんざうんざりだ！いま直ぐ出てけ！即出てけ！！10秒以内に俺の視界から消えろ！」

「むっ……」

男は訝しげに眉をひそめる。

何を怒っているのか解らないという様子だ。

首をかしげ、腕を組みながら歩き出す。

なぜかドアでは無く誠次の方へ。

そして誠次のすぐ前まで来るとぐるりと誠次の体を迂回して後ろに回る。

誠次はこめかみに血管が浮き上がるのを確かに感じながら右拳を握り締めた。

「誰が後ろにまわれつつたああああ！！」

咆哮と共に振り向き、昇竜拳じみたアッパーを叩き込む。

唸りを上げる拳が男の顎をとらえ、砲弾じみた速度でその体を上へと吹っ飛ばした。

轟音と共に男の体が頭から天井へと激突した。

男は天井に突き刺さり、首から下だけをぶら下げている。

誠次は大きく息を吸い込み、ゆらゆらと揺れる男の体に怒声を叩きつけた。

「俺は出てけつつつたんだ！つまんねえことしてんじゃねえ！」

「ふと思ったのだが」

突然後ろから響いた声にびくりと体を震わせる。

恐る恐る振り向くといつの間にか男が後ろで顎に手を当ててこちらを見ていた。

先程男が突き刺さっていた場所を確認すると人の頭位の穴が開いているだけで何も無い。

「お前は少し乱暴だな」

言ってパチンと指を鳴らす。

すると信じられない事に壊れた壁や天井が、時間が巻き戻るかの如く修復されていく。

床に散らばった破片たちが重力に逆らって浮かび上がり、それぞれの本来あったところへと飛び込んで行った。

まるでパズルのように破片たちは隙間なく詰め込まれていき、数秒後には破壊された後などかけらもない綺麗な天井と壁が誠次の前に現れた。

その様を呆然と見詰めていた誠次に不思議そうに男が問いかけた。

「何を驚いているのだ？」

驚愕の抜けぬ声で誠次は答える。

「何をつて……んな魔法みたいなもん見せられれば誰でも驚くと思うが」

男は修復された壁と殴られた時に落とした花を見比べながら、

「ふむ。物体のゼロからの創生で驚かずに単なる修復で驚くとは。やはり人間はわからん」

男が手を広げると光と共に床の上の花が消失し、男の手の中に現れる。

「おお！」

驚愕の声を上げる誠次に気を良くしたのか、男は得意げな顔で鼻を鳴らす。

花はそのまま浮き上がり、空中で淡い光と共にひまわりへと変化し、男が指をならすと光の粉になって消えた。

「おおお！」

更なる驚愕の声に男は胸を逸らす。

「ふん。どうやらようやく信じる気になったようだな。私が神だと」

「いんや全然」

誠次がきつぱりすつぱり告げると男は驚愕に目を見開いた。信じられないというようにこちらを見つめ、問いかける。

「何故に？」

「何故ってお前」

誠次は男の脳天から足の先までを視線でなぞると、

「セーラー服姿で人の部屋に忍び込むおっさんを神だと認める奴なんぞ、この世にやいないと思うが」

そう告げた。

その言葉にショックを受けるかと思いきや男は低く笑いだした。

「愚かな。神たるこの私のサービスに気付きすらないとは」

笑う男に誠次は半眼になって呻く。

「どんなサービスだ。それは」

誠次の言葉を聞くや否や男はビシリとポーズを決めた。

そのポーズの意味はわからない。

今までに見たこともないポーズだった。

男は左手を胸に、右手を天にかざし、視線だけはぴったりと誠次に固定したまま、

「神である私は何でも知っている。お前が実はセーラー服好きで、麻帆良の女学校の制服がセーラー服でないのを常日頃から憂いている事も」

「人聞きの悪い事を言うな。セーラー服姿も見てみたいつつただけだ」

男は目を見開き、

「ならば……嫌いなのか？」

「いや嫌いじゃねえけど」

「それみたことか!!」

言いながら懷から取り出した扇子と腰を激しく振り出す男に誠次は頭を抱える。

「で？俺がセーラー服好きなのとお前の恰好とどう関係があるんだ

「？」

呻くように言いながら、男の手から扇子ををもぎ取る。

男はぴたりと動きを止め、

「お前の渴きを癒してやろうと思ってな」

「お前が着てどうする！おっさんのセーラー服姿なんぞ見たくもないわ！」

叫びながら扇子を床に叩きつける。

男は投げ捨てられた扇子を目で追ったあと、

「それは計算外だった」

悪びれもせずになんか言い放った。

誠次は盛大に痛む頭に左手をあてた。

風邪の時よりも遥かに酷い頭痛な気がした。

もつとも、この上なく健康に過ごして来た誠次は、かなり軽い風邪しか引いたことはないのだが。

呻く。

「学校行くまでもう少しだけ寝たいんで、そろそろ帰ってもらえねえか」

言葉の上でこそ頼む形を取っているが、込めた気迫は命令に近いそれだ。

というか命令のつもりで言った。

だが男にはその誠次の意図は伝わらなかったようだ。

「それは困る。私はまだ目的を何も果たしていない故」

ポーズをとりながらそう答える男に誠次は訝しげに眉をひそめる。

「目的い？どうせ碌な事じゃあるまい。どうでもいいから帰れ帰れ」
しっしつと手を振る誠次に男は不満げに唸ると。

「そういうわけにもいくまい。ことはお前に関わることなのだから」

「俺にかかわるだあ？」

誠次は嫌そうに眉間にしわを寄せて唸る。

絶対ろくでもないことに違いないと直感が告げているのだが、ほう
っておくと大変なことになる気もした。

そのためいやいやながら男の言葉に耳を傾ける。

男は誠次が聞く体制に入ったことを確認すると朗々とよく通る声で
告げた。

「実は最近暇でな。なにか面白いことがないかとあちこち見て回っ
ていたのだ」

「ほう」

とりあえず相槌を打っておく。
どう対応するにせよ、話を最後まで聞かないことには判断はできな
い。

男は鷹揚に頷くと、

「そこで私はこの麻帆良学園においてついに、実に面白そうな連中を見つけたのだ」

「面白そうな連中ねえ」

その言葉に納得しないでもない。

確かに麻帆良は个性的で気質的に元気のいい連中が多い。

この麻帆良なら確かに面白そうな連中の一つや二つ簡単に見つかるだろう。

かくいう誠次の友人にも面白い奴は結構いる。

「ただ彼らを観察するのでも面白そうだったが、もっと面白くできないかと思つてな」

「ほう」

雲行きが怪しくなってきた。

誠次は眉間の皺をより深くした。

いやな予感がしたのだ。

だがそんなこちらの心情などまったくお構いなしに男は楽しそうに語り続けた。

「そこで同じ麻帆良に興味深い奴がいることに気付いたのだ」

「ほほう」

言いながら組んでいた腕を解き、握って開いてを繰り返し、準備する。

それに気づいているのかいないのか、男は拳を握って力説する。

「そこでそいつを件の面白そうな連中の中に放り込み、それを眺め、ときには私自らひつかきまわして楽しもうと思ったわけだ！」

「なるほど。その興味深い奴つてのが俺か！」

男は左手を天に掲げ、右手でびしりと誠次を指さす。
なんのポーズだろうか。やはり覚えはない。

「その通り！」

「絶対嫌じゃボケ！！」

指された右手を弾きながら叫ぶ。

男は驚愕の顔で両手を戦慄かせると、

「なんと！神の意志に逆らうと！？」

「やかましい！俺はお前を神だなんて認めてねえ！」

男はまじめな顔で顎に手を当て、からかうようないやらしい笑みを浮かべて言った。

「照れ屋なのだな」

誠次は確かにこめかみ血管が浮き上がるのを確かに感じた。
怒りに震える声で呟く

「殺されてえのか？お前は……いいんだぞ。俺はここでお前の顔面

を叩き潰しても」

胸倉をつかみ上げ、ただでさえ鋭い目つきをさらに鋭くして睨み上げる。

だが、男は誠次の放つ殺気などはじめから無いかのように、嘆息して肩をすくめて見せた。

「やれやれ血の気の多いことだ。そんなことでは日々いさかいが絶えないのではないか？」

「余計な御世話だ。お前ほど俺の神経を逆なでする奴は普通いないから問題ないんだよ」

男は何気なく誠次の手に触れるとあっさりと胸倉をつかむ手を開かせてしまった。

力を吸い取られたかのようにあっさりと開く自分の手を驚愕の面持ちで見つめながら誠次は低く唸った。

男は涼しい顔でしわの寄ったセーラー服を叩いて整えると言葉を紡ぐ。

「残念だがお前に拒否権はない。人はすべてからく神の言葉に従うものだ」

「てめえ……たいがいにしとかねえと本気で頭蓋をへこますぞ」

険悪に言う誠次に男は苦笑して手を振った。

井戸端会議のおばちゃん並に軽い仕草である。

「まあまあ。そう邪険にせずに軽い気持ちで入ってみるがいい。面白いクラスだぞ」

「クラブですらねえのかよ！違うクラスなんかに入れるわけねえだろ！」

叫ぶ誠次に男はかつと目を見開き、吼える。

「案ずるな！そのためのゴッドパワーだ！すでに根回し、手続き、細工は済ませてある！」

「何しとんだお前は！無茶苦茶なことすんじゃないねえ！」

「貴様もあきらめて2 - Aに入るがいい！」

叫び返そうとして誠次は訝しげに眉を寄せた。

誠次の記憶では2 - Aはそれほど面白いクラスとは言えない。むしろ自分のいるクラスの方が面白いと言っていいぐらいだ。

「2 - A？あそこはどちらかというと真面目なクラスなような……」

誠次の言葉に男はさもありなんと頷いた。
意地の悪い笑みを浮かべ、口を開く。

「当然だ。お前の通う男子高校ではないからな」

男の口から吐き出された無茶苦茶な言葉に誠次は叫び声をあげる。

「男子中かよ！行けるわけねえだろ！」

その言葉に男が心外だと言わんばかりに声を張り上げた。

「違う！女子中だ！」

「なおさら行けるかああああ！！！」

力の限り絶叫しながら拳を男の顔面に埋め込み、そのまま地面に叩きつける。

フローリングの床が軽く陥没し、埃を巻き上げた。

鼻息荒く、床に沈んだ男の背に言葉を吐き捨てる。

「男の俺が女子中に行くだ？お色気シーンが売りのハーレムマンガじゃねえんだ！そんなことできるわけねえだろ！」

男はがばと身を起しこちらをびしりと指さすと、非難するように言い放った。

「ハーレムだと！現実を甘く見るな！ちょっと顔がいいからって図に乗るんじゃない！」

「ハーレムマンガ“じゃねえ”つつってんだ！その単語にだけ反応すんじゃない！」

ひとしきり叫んで荒くなつた息を整えながら誠次はゆっくりと言葉を紡いだ。

「俺が女子中に行くなんて絶対無理なんだよ。お前もあきらめて帰れ。迷惑にならん程度にそのクラスを見物してろ」

男はふむと唸ると右手の人差し指をぴつと立てた。

「お前は自分が男だから女子中には行けんと行っているのだろう？」

その言葉にしぶしぶだが頷く。

「まあ他にもいろいろ問題はあがあるが、最大の理由はそれだな」

男は誠次の言葉に得意げな笑みを浮かべると歯を輝かせてサムズアップしてきた。

「ならば安心しろ」

自信たっぷりの言葉に誠次は嫌そうに顔を歪めながら一歩退いた。

「どう安心しろって言うんだよ」

男は誠次が一歩引いた分前に歩み出ると、ぐいと顔を近づけてきた。息のかかる距離で男が言い放つ。

「私が神の力でお前を女に変えるからだ」

「絶、対、いやじゃわボケが!!」

荒々しく怒鳴り、男の体を押しのける。

男に指を突きつけ、

「何が悲しゅうてお前の気まぐれで人生狂わせられなきゃならんだ。冗談じゃない。あきらめろ。そして帰れ！」

男は鷹揚に頷き、腕を組んだ。

厳かな声音で言う。

「お前は絶対に女になって2・Aに行きたくはない。だが私も引く気はない。私たちの意思は真っ二つに分かれたわけだ」

誠次は不機嫌そのものの顔で吐き捨てた。

「変態の気まぐれに俺が付き合う義理はねえがな」

「神たる私が人間風情の都合を気に掛ける義理もない」

当たり前のことのように言い放たれた言葉に誠次が青筋を浮かべながらバキボキと指を鳴らす。
その様子を涼しい顔で流した男は懷に手を差し入れる。

「だが私は寛大だ。お前にチャンスを与えよう」

何かを取り出した。

コインだった。

百円玉とかそういう安っぽい代物ではない。
金色で精緻な細工の施された立派な代物だ。

「いわゆるコイントスというやつだ。表が出たら私は実行する。だが、裏が出たらあきらめて帰ってやろう。結果は神のみぞ知るというやつだ」

「だからそもそも俺には付き合う理由がねえつつつてんだよ」

不機嫌に唸る誠次を無視して男は続ける。

「ちなみに人の顔が書いてある方が表で、建物が書いてある方が裏

だ」

「だからな……」

腹の底から絞り出すように唸る誠次。

そうしないと声が出てこなかったのだ。

だがそれをあくまで無視して男は目を見開き、雷鳴を背負って叫んだ。

「刮目せよ！！これはお前の運命を決めるコイントスである！！」

言ってコインを弾く。

コインは金色の輝きを撒きながらくると回転して宙を舞った。

男の頭の少し上で停止し、重力に引かれて落ち始める。

男はコインを右手の甲で受け止め、素早く左手で押さえつけた。

数秒して男はゆっくりと左手をどけた。

これまたゆっくりと視線を落とし、コインを確かめる。

コインは人の顔の面が上になっていた。

男が厳かに言う。

「表だな」

確かに人の顔が上に出ている。それは間違いなかった。

誠次は無言で歩み寄ると男の手からコインを取り上げた。

「……おい」

凶悪な笑みを浮かべながらコインを裏返しながらつきつける。

「両面とも人の顔なんだが……どういうことだ？」

殺気すら込めた言葉に男はふっと笑うと、

「言っただろう。結果は神のみぞ知る、と」

「インチキじゃねえか!!」

叫びながらコインを男の眉間に叩きつける。

男の首が勢いよく後ろに倒れ、戻って来た頭の額の部分には綺麗に赤いコインの跡がついていた
だが、男は痛がる風もなく、掲げた右手に光をためだす。

「まあ何はともあれ表が出たわけだし」

「ちょっと待てっ……!!」

「いざ！これが神の力だ!!」

まばゆい光が部屋を埋め尽くし、男の右手から一条の稲妻が迸った。
稲妻は誠次の体を打ち据えると、その全身を覆い尽くす。

「があああああああ!!」

激痛が誠次の体を襲った。

全身が焼き尽くされるような灼熱感が走り、触覚嗅覚聴覚が一瞬で吹っ飛ぶ。

次第に視界が虫食いのように黒く染まっていき、やがて視覚が消滅する。

すべての細胞一つ一つがバラバラに引きちぎられるような痛みが容赦なく誠次の意識を叩き潰し、大地も空もない闇の底に落ちたような浮遊感が体を襲った。

体が崩れていく。

感覚の消えゆく中、そんな感覚を覚えた。

突然ふつりと痛みが消える。

痛覚も消えたのだろう。

自分が魂だけの存在になったようなそんな不安定な感覚。

吐き気を催すその中で、光の粒が収束するイメージが誠次の頭に浮かんだ。

光はゆつくりと、その形をはっきりとさせていった。

まるでどこかにある設計図の通りに光の粘土をこねあげていくかのよう。

五感の消えたはずの誠次の目に、その設計図が映ったような、そんな錯覚が生じた。

突如として感覚が戻ってくる。

浮遊感が消え、足の下に確かに床の感触を感じた。

拳を握ってみると確かに感触が返ってくる。

ゆつくり目を開くと、先ほどと変わらぬ部屋の光景が飛び込んできた。

眼前では男が満足げに頷いている。

「終わった……のか？」

「うむ完璧だ」

恐る恐る己の体を見下ろす。

昨日寝た時と同じパジャマ。

だがその胸の部分を立派な二つの膨らみが押し上げていた。正直きつい。

両手で触ってみる。柔らかい感触が両手に返ってきた。

下のほうも触ってみる。

あるはずのものが跡形もなく消えていた。

「見るがいい！生まれ変わった己の姿を！」

男が体の後ろから服屋に置いてあるような大きな鏡を取り出す。

「どっから出した、今……」

ツツコミを入れながら鏡に映る自分の姿をじつくりと眺める。

少し伸びたざんばらの黒髪。肉食獣じみた鋭い目つきをしたちよつと恐めの美女が鏡に映っていた。

明らかに女の顔なのだが、もとの誠次の面影も残っていた。

自分に姉か妹がいたらこんな感じなのかなと思わないでもない。

身長は前と同じ１７０後半ぐらいで、出るところ出て引つ込むところ引つこんでいる見事なプロポーションだった。

「ま……まじで女になっちまっている」

震える声でいう誠次に男は鏡を体の後ろに戻しながら

「無論だ。私は神だぞ。これぐらい朝飯前だ」

その能天気な声に、驚愕によって頭の隅に追いやられていた怒りが

舞い戻ってくる。

誠次は近くにあった男の胸倉を乱暴に掴んで引き寄せると、声でその横っ面を殴ろうとするかのように激しく言葉を叩きつけた。

「得意げになってないで戻さんかい!!」

「はっはっはっはっは」

胸倉を掴んでがくがく揺らす男は気にした風もなく笑っている。
どこからともなく服を取り出し、それを見せてきた。

魔帆良女子中の制服だ。

男はそれを持ってにじり寄りながら

「さあ！これを着ていざ2・Aに行くがいい!!」

「ぜ・っ・た・い・嫌じゃああああああ」

絶叫が誠次の部屋でこだまする。

窓の外から夜明け特有の半端な光が差し込み、部屋の二人を照らしあげていた。

第1話 神と俺のファーストコンタクト（後書き）

1話を終えて登場人物2人。おまけにオリジナルキャラのみ。
なんてこった。

原作キャラは次回以降でできます。
お付き合い頂ければ幸いです。

第2話 戦艦SEIJI、味方なし

第2話 戦艦SEIJI、見方無し

誠次は困り果てた顔で唸っていた。
残念ながら不可思議な力で性別を変えられてしまった時の対処法など誠次の頭には存在していない。

女になってしまった体を今までと同じ男子高校の制服に包みながら、誠次は昨日まで通っていた高校の前で唸っていた。
女が着ることなど想定してない男子校の制服に締め付けられる胸の苦しさが苛立ちを加速させていた。

どうしたものか。

風間誠次の親戚を名乗り、新たな人生を送るか。
戸籍も後ろ盾もなくそんな真似をできるとは思えない。

何事もなかったかのように風間誠次として今まで通りの生活を送るか。

いきなり女になるなんて超常受け入れられるわけがない。
なぜこうなったのか問われて、正直に話しても誰にも信じてもらえないのは明白だ。

「そうか！いつそニューハーフを名乗ってしまえば風間誠次が女で

も問題は……！」

そこまで言って口をつぐんだ。
嘆息と共に頭を抱える。

無理だ。

ニューハーフを名乗るなら、女口調で女っぽい仕草をしなくてはならないだろう。

だがそんな生活には耐えられそうにない。

「どうすりゃいいんだ？」

泣きたい気分で誠次は呟いた。

昨日の変態を捕まえて戻させるのが一番なんだろうが、それも難しいだろう。

怒り狂った誠次に詰め寄られながら、やたら格好いい顔でたとえ殺されても戻すつもりはないと告げる男に堪忍袋の緒が切れるのを感じたのを覚えている。

怒りのままに男を血みどろになるまで殴り続けてやったが、男はさしてこたえた風もなく、一瞬で殴られる前の無傷な姿に戻ると「ジョニーが呼んでいる」とか言いながら壁をすり抜けて後ろ向きに走り去って行った。

ここで立ち往生していても仕方がない。

勇気を出してクラスにでも行ってみようか。

意外とナチュラルに受け入れてもらえるかもしれない。

「はっはっは。大変だったな」とか言って普通に今まで通りの学校生活に……

「んなわけなかる。うう、ちくしょう。いつそ山にでもこもろうか」

それが一番な気がしてきた。

丁度おあつらえ向きにとある田舎の山奥に親戚の家が一軒ある。

誠次も住んでいたことのある家だ。

そこで誰ともかかわらずに仙人の如く隠居するのもいいかもしれない。

うつろな眼差しで虚空を見つめる誠次には後ろから近づく人影になど気づける由もなかった。

「超美乳のかわいこちゃんめっつけ」

突然軽薄な声と共に胸に妙な感触が走る。

視線を下ろすと後ろから伸びてきた腕が誠次の胸を鷲掴みにしていた。

> i 5 7 2 6 — 9 2 6 <

無理やり首を回して後ろを見ると、そこには見慣れた顔がある。

2枚目と3枚目の中間の、整ってはいはいるがひょうきんな色を宿す顔。

安っぽい金色に染められた髪が肩口まで伸ばされており、口元にはへらへらした笑みが浮かんでいる。

「ダッ、ダイゴ！」

思わず声が裏返る。

あつさりと知り合いに遭遇してしまった。

須藤大吾。誠次の友人の一人だった。

いつも女性を見ては真面目な顔で胸に点数をつけている変人ではある。

どうしたものか。

ごまかすか。カミングアウトするか。

誠次の心に嵐が吹き荒れる。

だが背後のダイゴはそんな誠次の胸中など知る由もなく、どこか抜けた声で残念そうにつぶやいた。

「うゝん。バストは俺の人生で見してきた中でも最上級だし全身のフォルムも素晴らしいんだけど、ちよつとというか滅茶苦茶筋肉付きすぎだなゝ。なんつか冗談抜きに鋼みたいだ。男ならカッコイイけど女でこれは……」

言いながら誠次の胸を揉みしだく。

その感触にしばし沈黙したのち、誠次はとりあえず考えることをやめて振り返った。

そのまま悪友の頬に思いつきり拳を叩きつける。

「やめんかあああ!!」

「ぶべらっ!」

妙な悲鳴と共にダイゴの体が錐揉みしながら吹っ飛んだ。

5メートルほど飛んで完全に壊れた姿勢で地面に突っ伏す。

首根っこを掴んで引っ張り起こしてやるとダイゴはうめき声をあげた。

「うゝ、うゝ……」

殴られた頬に手を当て、怪訝そうに誠次の顔を見やる。
視線が頬と誠次の顔を往復するにつれてダイゴの顔に驚愕の色が現
われてくる。

きっかり30秒後、ダイゴは驚愕の叫びをあげた。

「こ、このパンチ……誠ちゃん！誠ちゃんなのか！？」

「お、おう」

興奮冷めやらぬ様子で詰め寄ってくるダイゴに、誠次は一步引きな
がら答えた。

さりげなく胸に伸ばされる手を弾くことも忘れない。

「どったの誠ちゃん？オレには誠ちゃんが女になってるように見え
んだけど」

「いやまあこれには深いわけがあつてだな……」

言うかどうか思い悩む。

正直な事を云ったところでクレイジー扱いされるのがオチな気もす
る。

だが言い訳もなしでは怪しいことこの上ない。

言葉に詰まる誠次をどう思ったのかは知らないがダイゴはからから
と笑つと誠次の度肝を抜いた。

「ま、いいか」

「いいのかよ！」

思わずツツコむ。

普通友人が突然女になって現れたりしたら困惑しているいろいろ問いた
だすもんだろうに。

何を普通に受け入れているのか。

「いやだつてさ。手術して女になるニューハーフの方々とかいるわ
けじゃん。だったら誠ちゃんが女になることもあり得ないことじゃ
ないのかな」

あつけにとられながらもどうにか口を開く。

軽く受け入れられたのならそれに越したことはないのだが、どこか
納得のいかないところもあった。

「そ、そうか。まあ受け入れてもらえるのは嬉しいというか何と言
うか微妙なところだが」

困惑する誠次にダイゴは笑顔で、

「それにしても誠ちゃんに女体化願望があつたとはね。むしろそっ
ちの方が俺には驚きかな」

たまらず誠次は声を張り上げた。

「ただけない。あまりにいただけない勘違いを正さないという選択
肢があるうか。」

「うをい！言つとくがこれは俺の意思じゃねえからな！」

誠次の切実な叫びに、ダイゴは笑みを崩さぬまま冷汗を一筋流した。

「ウツソ。マジで？それは……なかなか壮絶だね。ショッカーに改造された仮面ライダーに匹敵する体験じゃん。貴重だね。もちろんオレは味わいたくないけど」

「他人ごとだと思つて気楽に言いやがつて」

不機嫌に唸る誠次に、ダイゴは一転して軽い調子で笑いながらしばしと誠次の肩を叩いてきた。

「まあまあ。生きてりゃいろいろあるさ」

「なんつーか、そんな一言で片付けられる次元の話じゃないと思うんだが」

言つて誠次は嘆息した。

いつの間にかこちらの胸を触っているダイゴの手をきつくつねり上げながら、残った手で頭を抱える。

するとそれを見たダイゴが怪訝そうな顔をした。

「なあに悩んでんの？誠ちゃん」

だが声音に緊張感は、正直無い。

ダイゴの気楽な声に誠次は顔を向けながら、

「いや、俺はこれからどうするべきなのかなあと」

「うーんそうだねえ」

ダイゴは少し真面目そうな顔で唸ると、ぐりんと顔をこちらに向けてきた。

「俺とお茶しない？」

とりあえず顔面に拳を埋めておく。

誠次はそのまま、大きくのけぞったダイゴに怒声のコンボを叩きつけた。

「アホかつ！俺は男だぞ！見境つてもんはねえのか、お前には！」

叫ぶ誠次に、ダイゴもまた素早く体を起こすと、憤慨したように声を荒らげた。

「何を言う！俺は可愛いこちゃんにしか声をかけん！」

腕を組んで自信たっぷりに言い放たれたその言葉に、誠次は親指で自分を指しながら、無駄に真剣な表情のダイゴの顔を睨み据える。

「だからなんでその“可愛いこちゃん”に俺を入れるんだつつてるんだ！」

「自信を持て！誠ちゃん！いまの誠ちゃんは確実にAランクはくだらないかわいこちゃんだ！」

「違あああう！！そもそもなんだ！Aランクって！？」

ぜいぜいと息を荒らげる誠次ににつこりと笑ったダイゴが肩に手を掛ける。

その笑顔は雲ひとつない青空のように澄み渡っていた。

「心配するな。もちろん俺のおごりさ」

「何の話をしとるんだお前は！」

叫ぶ誠次にダイゴは不満そうに口をとがらせると、たしなめるように言う。

「駄目じゃないか誠ちゃん。折角女になって声も美女っぽい感じになったのに。声が嘎れたらもったいないぞ」

「何の心配をしてるんだっ。おのれは！」

「はっはっはっは。だまされたと思って俺とお茶しようぜ。いいじゃん。お前はダチと飯食ってるだけと考えて、俺はかわいこちやんとお茶してると思えばあら不思議。二人とも楽しめて万々歳さ」

爽やかに、だがどこか底の抜けた鍋を彷彿とさせる笑みを浮かべながらダイゴが言う。

頭痛のしだした頭を抱えて誠次は呻いた。

「こ・い・つ・は・」

そのときだった。遠くから何かが聞こえてくる。

それは風の音のようでもあったし、人の声のようでもあった。無意識に耳を凝らしてその音を拾う。

「……………っは……………は……………」

だんだんと近づいてくるその音は、妙に空にこだまして方向を特定させない。

誠次は無言で、またもこちらの胸を触ろうとしているダイゴの鳩尾

に拳を叩きこみながら音が近づいてくるのを待った。

しばらくするとそれは人の声だと判別できた。さらに待つと笑い声とわかる。

「はあーっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ は」

高らかに笑いながら何者かがすさまじい勢いで駆けてくる。走行の軌道で土埃が舞い上がっていた。

「はあーっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ は」

やかましいぐらいの笑声の主は誠次の横を通り過ぎた瞬間、車の急ブレーキじみた音を足元から響かせながら急停止して見せた。

地面に靴とすれたブレーキ跡が黒く残っている。

立ち止まったのは20代後半の男だった。

体育会系のさわやかな笑みを浮かべながらやたら元気な声であいさつしてくる。

「おはよう！須藤に風間！ちゃんと朝飯食ってきたか！」

これを親しみやすいととるか暑苦しいととるかは人それぞれであるが、ちなみに誠次は中間であつた。

しかもこの男これで数学教師である。

年がら年中ギア全開で行われる授業は不思議とわかりやすいというのだから侮れない。

この良くも悪くも個性的な教師が誠次の担任だった。

「どうした風間！ 暗い顔して！ 悩みがある時は運動だ！ スクワット

でもするがいい！」

ちなみにこの男、生徒が宿題を忘れると教壇の横でスクワットをさせることで有名である。

そしてなぜか忘れた者が二人以上いるときは自分まで一緒になってスクワットをやりだす。

面白いといえば面白いが、謎である。

先生は爽やかに白い歯を輝かせながら、

「友達同士仲がいいのはいいことだが、ほどほどにしないと遅刻するぞ！とくに風間は今日から女子中の方に行くんだろう！？」

強烈な爆弾を落としていった。

「ちょっと待てえええええ！」

思わず絶叫する。

「何だそれ！？なんで俺が女子中に行くことになってんだよ！」

すると先生は困ったように眉を寄せた。

無駄に活力のこめられた声で答えてくる。

「そう言われてもな！先生は上からそう伝えられたただけだ！」

「おかしいだろ！男の俺が女子中なんて！」

誠次自身は至極当然なことを言っているつもりだ。

だが先生は無意味にガッツポーズなどとりながら、

「だが今のお前はどこからどう見ても女だ！ならば女子校に行くのは当然！」

「そこにも疑問を挟むべきだけど、百歩譲って女子校にいかにならんとしても行くべきは高校だろう！なんで中学なんだよ！」

「だからそれを先生に言ってもしょうがない！」

「くっそー！。何がどうなってやがるんだ」

そのとき昨日の変態の言葉が脳裏をかける。

『すでに根回し、手続き、細工は済ませてある！』

誠次はこみ上げる怒りのままに噛みしめられた歯の間から声を漏らした。

「おのれええええ。あのセリフはこういう意味か。マジで殺しとくべきだったか。あの変態」

全身から鬼気を噴き出す誠次の肩をダイゴが叩いた。

振り向くと驚くほど真剣な表情でこちらを見つめている。

その顔には一片のおふざけも感じられなかった。

「誠ちゃん……誠ちゃんが女子中に言っても俺たちは親友だ」

「お、おう」

その妙な迫力にのまれて誠次は生返事を返す。

ダイゴは頷くとその真面目な顔のままで口を開いた。

「だから向こうで見つけたかわいこちゃんを俺に紹介してくれ」

とりあえず脳天に拳骨を落としてやった。

学園長室。

質のいい調度品で構成された広いその部屋で誠次は二人と向き合っていた。

ダイゴとも別れ、途方に暮れている誠次に高畑を名乗る男が「話があるから学園長室に来てくれ」と言ってきたのが今から15分前。言われるままに後について、学園長室に来たのが2分前だ。

学園長らしいやたら後頭部の長い老人と無言で睨みあつて今に至る。これで高畑とやらの方が学園長だとしたら驚きだが、まあそれはないだろう。

なんかどつかで聞いたことがある気がするし。デスメガネとか。

先に沈黙を破つたのは学園長だった。

「お主が風間誠次君じゃな」

「ああ」

ぶつきらぼくに返答する。

相手はこの魔帆良の学園長なのだが、どうにも敬語で話す気になれなかった。

眼だ。

不審の色を宿してこちらを探るように見るその眼が気に入らなかったからだろう。

学園長は一度息を吐いて鬚をなでると、口を開いた。

「今朝がたのことじゃが、この魔帆良女子中の名簿や書類に細工がしてあるのが発見された。風間誠次という人間が新しく入ることになつておつたのじゃ。それと同時にかわりのある教師にもいつの間にか通達がいつておつた」

頭を抱えて呻く。

あの変態の仕業に間違いあるまい。

「常識で考えて男の、しかも高校生が女子中に入ることなどあり得ない。だがそれを怪しむものは誰もいなかった」

担任と友人の様子を思い出す。

彼らも誠次が女になっていたことにさしたる疑問も持っていなかった。

今にしてみればあれも変態の力によるものなのだろう。

まあダイゴに関しては変態の力抜きでも、美女の知り合いが増えることは嬉しいことだとかぬかして受け入れそうではあるが。

嘆息する誠次に学園長は射抜くような眼差しを向けた。

誠次はいぶかしげに眉を寄せる。

学園長に睨まれるようなことをした覚えなどなかった。

だが、事実学園長は誠次を睨むように見ている。

「偶然魔法の力を知って、自分だけの特別な力だ、いけると踏んだのじゃろが、残念だが魔法は世界に普及しておる。お主の思い通りにはいかんよ」

「は？」

意味が分からずに問い返す。

だが学園長はそれを無視して続けた。

「書類と学園の者にかけられた暗示はわしらの方で解いておく。お主もあきらめてもとの姿に戻って高校に戻るのじゃ」

沈黙する。

ゆっくりと噛みしめるように学園長の言葉を読み解いて、意味を理解した瞬間誠次は絶叫した。

「ちょっと待てい！あんたらひょっとして俺が自分の意志でこんな

「ことやってると考えてんのか!？」

悲鳴にも近い叫びを上げる誠次を学園長は胡乱気な眼差しで見ると、当然だと言わんばかりの声音で答えた。

「そりゃそうじゃろう。こんなことやって得するのはお主だけじゃ」

ずんずんと歩み寄って学園長の前の頑丈そうなデスクに手を叩きつける。

強烈な衝撃とともにデスクが陥没し罅を走らせた。

「なにが悲しゅうて男の俺が望んで女になって女子中に通わにやならんのだ!得する事なぞ何もないわ!」

学園長は陥没したデスクを一瞥し、次にこちらに呆れを含んだ視線を送ると、

「どうせたくさん女の子に囲まれた生活を送ってみたいとかそんなこと考えたんじゃないやろう?女になれば簡単に女の子たちの着替えや入浴シーンを覗けるからの」

「見抜いてんだぞ、みたいな顔でふざけたことぬかしてんじゃないやねえ!一時の性欲を満たすためにその後の人生棒に振るかっ!その後頭部の分、脳みそでかいんじゃないやねえのか!空かそこは!？」

「なっ!わし仮にも学園長じゃよ。もう少し言葉づかいに気をつけた方がいいんじゃないかのう」

「最悪最低の冤罪かけてくる相手に言葉づかいを正す義理などないわ!」

学園長はやれやれと嘆息しながら背もたれに身を預けた。
半眼で誠次を見つめる。

「一般人が偶然魔法の力を手に入れた場合、たいてい調子に乗って暴走するんじゃないよ。そしてすぐに鎮圧され、魔法の力を手に入れても世の中を思い通りになど出来ないと知るわけじゃ。お主ももうあきらめなさい。ここでねばっても女子中には入れんぞい」

「いつ俺が女子中に行きたいつつたよ！俺は純然たる被害者だ！」

「被害者？」

訝しげにこちらを見る学園長たちに誠次は血走った眼でまくし立てた。

「今朝いきなり神を名乗るセーラー服着たおっさんがあらわれて、暇つぶしに俺を女子中に放りこむとか言ってきたんだ！断ったら無理やり俺を女にして逃げてったんだよ！」

「むづ……」

繰り返し叫んだことで荒れた息を整えながら誠次は学園長を睨み据える。学園長はフォッフォッフォとバルタン星人のような笑い声を上げると、

「錯乱したふりをしてダメじゃぞ」

「違あああう！！俺は正気だ！」

「それはそれで問題じゃのう」

「う・があああああああ！」

頭をかきむしり、天を仰いで絶叫する。

凄絶な様相に冷や汗を垂らした高畑がなだめかけた。

「まあまあ。少し落ち着いて」

肩に手をかけようとする高畑の前で誠次がぐりんと首を回す。
そのまま地獄の底から響くような声で叫んだ。

「誰だ今笑ったのはああああ！」

「いや誰も笑ってな……！」

「そこかあああああああ！」

慌てて言う高畑を無視して誠次は何もない場所に向かって拳を繰り出した。

壊れた。

高畑達の視線に痛々しいものが混ざる。

そしてそのまま凍りついた。

「ぐふおおおうー！！」

何もない空間から悲鳴とともに男が殴りだされたのだ。

セーラー服を着たおっさんが。

強烈な代物に高畑と学園長の時が止まる。

男は血をだくだく流す頭を押さえながら床を転げまわった。

「へこんだ！頭蓋がへこんだ！」

男はひとしきり転げまわるとけろっとした顔で立ち上がった。
その顔にはもう血の跡もない。

「何をするのだ誠次。今は私じゃなかったら大変なことになって
いたぞ」

不満げに口をとがらせる男の顔にもう一度拳を埋め込みながら誠次
は叫んだ。

顔を抑えてのけぞり、のけぞりすぎて頭ブリッジをしている男に
指を突き付ける。

「大変なことになってしまえ変態め！お前のせいで俺は人生狂わさ
れかねんばかりか、いわれのない冤罪までかけられてんだぞ！」

男は数秒前まで苦しんでいたのが嘘のようにあっさり起き上がると、
真顔でこちらの目を見据え、頷きながら言ってきた。

「うむ、知っている。ずっと見ていたからな。……面白かったぞ」

「死にさせあああああ！」

咆哮とともに渾身の力で殴り飛ばす。

男の体は砲弾の如く吹っ飛び、学園長室の壁をぶち抜いて向こう側に
消えた。

人間離れた筋力なのだが、セーラー服ダンディのショックが強す

ぎて学園長たちはそちらに気が回っていないようだった。

据わった眼のまま、肩で息をする誠次に困惑した声がかかる。

「な、なんじゃね。今の個性がオーバーフローしてる男は？」

その問いに誠次は、憎々しげに吐き捨てた。

荒れた息のせいで言葉がとぎれとぎれになる。

「だから、さっき言った、神を名乗る、変態だ」

壁の穴を見つめながら学園長が戦慄の表情で呟く。

「本当の話じゃったのか……」

「まったく酷い話だ」

突如として後ろから響いた声に学園長はのけぞった。

驚愕の眼差しで高畑が見る。

そこには壁の向こうに消えたはずの男がいつの間にか立っていた。

「神の気まぐれに振り回される哀れな子羊を助けるどころか犯人扱いとはな」

「むう……それはすまんかったと思うとる。……っってお主にだけはひどいとか言われたくないぞい。誠次君の話が本当ならすべての元凶はお主じゃろうに」

非難された男はなぜか高速回転してビシリとポーズをとると高らかに告げた。

「その通り！すべての元凶は私だ！」

「開き直つてもダメじゃぞ。そもそも何者なんじゃお主。誰にも気づかれずに書類を改竄したり、先生方の認識を操作したり。ただものじゃあるまい」

詰問する学園長に男は不敵な笑みを浮かべると、

「私が誰かと聞くか。ならば答えよう！」

男は意味もなくポーズなどとりながら全員を見渡した。
よく通る声で告げる。

「私は神だ」

痛いほどの沈黙が世界を支配した。

学園長も高畑も軽く眼を見開き、言葉を失って硬直している。

念のためもう一度言っておこう。

この男はセーラー服を着たダンディなおっさんである。

信じる奴などいない。

学園長は軽い嘆息とともに吐き出した。

「そつか。神か」

思わず肩をこけさせる。

学園長に詰め寄り、非難するように問いかけた。

「うおい！信じんのかよ！」

学園長は表面上は表情を変えないままこちらに視線だけを向け、声をひそめて答えてくる。

「失礼じゃな。誰があんな終焉の具現（セーラー服のおやじ）を神だと認めるものか。話を合わせて情報を聞き出すだけじゃ。お主も合わせなさい」

無言で頷いておく。

隣で高畑が苦笑しているがまあ大した問題ではないので無視しておこう。

「むう失礼な奴だ。ばつちり聞こえているぞ」

不満げに言う男に舌打ちしながら誠次は腕組みして唸った。
学園長は視線を男に戻すと鋭い口調で問い詰める。

「お主が誠次君を無理やり女に変え、女子中に入れようと画策した。間違いないかの？」

「うむ。その通りだ」

鷹揚に頷く男に学園長はさらに問いを重ねる。

その言葉には虚偽は許さないという言い知れぬプレッシャーがあった。

男はさして気にした風もないが。

「何が目的じゃ」

視線は鋭い。

普段の飄々とした姿からは想像もつかない。

まあ誠次は普段の飄々とした方を知らないのだが。

男は学園長に負けず劣らぬ鋭い視線を送ると、厳かに言い放った。

「暇つぶしだ」

その言葉に学園長は嘆息とともに片目をつむる。
残った眼で男の姿を眺めながら、

「それを信じろと?」

「無論だ。事実だからな」

責めるような言葉に男は頷いた。

「お主が誠次君を入れようとしたのは、知っての通り特別なクラスだ。それも今は大事な時期。どう考えても何か企んでいるとしたか思えん」

「性格、才能、過去、素性。ひと癖もふた癖もある面々を一か所に集めたクラスで、もうすぐ英雄の息子もやってくる。不確定要素は抱き込みたくないと言いたいわけだ」

誠次はきよとした表情で話を聞いている。
全く意味が分からなかった。

そもそも誠次は一般人である。ついていけるわけもないのだが。苦い表情で押し黙る学園長に男は肩をすくめる。

「それでお前たちは私が何をしようとしていると疑っているんだ？暗殺か？諜報か？スプリングフィールドだけでなく関西呪術協会の長の娘もいるし、ああ……“あの娘”もいたな」

部屋の空気が凍りつく。

学園長の気配もより鋭いものになっていったし高畑もポケットの中で拳を握っている。

誠次は意味のわからない状況にただ眼を白黒させていた。

誠次は春野さんが誰かなど知らないし、関西呪術協会と言われても関西に呪術の協会があるんだなあということしかわからない。“あの娘”などの娘だよという感覚だ。だが学園長たちには重要なことだったらしく一触即発の空気を醸し出している。

「そんなに疑わしいのなら魔法でも何でも使って私の心を読めばよかろう？特別に受け入れてやる」

言われて学園長は何事かを呟いた。

その指先に光がともっている。

「真面目くさった顔で疑ってくれているところ悪いが、私は面白そうなクラスに面白そうな奴を加えてもつと面白くしてそれを見て楽しみたいだけだ」

「嘘はいつとらんようじゃの」

学園長は深く嘆息すると背もたれに身を預けた。
沈痛な表情で告げる。

「お主はただ誠次君を加えた2 - Aを観察したいだけ。これでいいんじゃない。わかった。受け入れよう」

「うえええええ！最後の砦があっさり落ちた！？」

驚愕の展開に悲鳴を上げる。

あまりの驚きに声が裏返りかけていた。

「学園長！」

高畑が避難するような声を上げる。

高畑は学園長に詰め寄ると。

「あの男に悪意がないとしても、男子高校生である誠次君を2 - Aに入れることなんてできません。まして誠次君自身もそれを断固として拒否しています。あの男の気まぐれで……」

「あの男……ロキじゃ」

言葉を遮って告げられた名前に高畑の動きが凍りつく。

高畑は驚愕の面持ちで男を見つめた。

誠次もまた驚愕の眼差しを向ける。

「お前……名前があつたのか」

さりげにひどいセリフなのだがツッコむでもなく男は軽く肩をすくめると

「ロキというのは魔法使い達が勝手に呼んでいる名だ。私に名はない。私は唯一無二の神。神と呼べ。神様、でも構わんぞ」

「いや例えこの世の終わりが来ようと、お前を様付で呼ぶ日などこないと断言してもいいが」

誠次は学園長に顔を向けると男を指差して問いかけた。

「で、こいつがロキとか呼ばれてるやつだって事と、俺の女子中入りを受け入れちゃうことに何の関係があるんだよ」

不機嫌にそう言う誠次に高畑が沈痛な面持ちで答えた。

「彼は神を自称する超能力者で、行く先々で悪戯をすることからロキと呼ばれるようになったんだ。正直なところ僕たち魔法使いは彼に頭が上がらないんだ」

「悪戯野郎にか？」

納得いかなげにうなる誠次に、高畑は言葉を続ける。

「悪戯だけじゃないんだ。彼がやったのは。世界各地で起きた災害から人々の命を救ったり、紛争を止めたりと、僕たち魔法使いの手が届かなかった数えきれない人の命を救っている。ふらりとあらわれて何でもないことのようにね。極めつけが1999年の隕石騒ぎだ」

「ああ、あれか」

1999年に地球との衝突軌道にある巨大隕石が発見された。

ノストラダムスの予言はこのことだと大分騒がれたものだ。

かくいう誠次もダイゴと一緒にポテトチップスをつまみながら「大変だね」と語りあったものである。

女つけない誠次に世界滅亡の前の饞別だと言って大量の工口DVDを持ってきたダイゴの頭を軽くはたきつつ、誠次の田舎の山の話やダイゴのナンパ話などいろいろと語りあった。

だがまあ騒ぐのも面倒だったので結局二人でゲームして過ごしたのだが。

騒ぐ周囲と一線を画しながら、なんだかよくわからないうちに件の隕石はアメリカの新型ミサイルによって破壊されたというニュースが流れた。

世間というものは喉元過ぎればあつというまに熱さを忘れるもので、2カ月もしないうちに隕石のことについて話題が上ることもなくなつた。

「あの隕石を未然に防いだのが彼だ」

高畑の言葉に誠次は訝しげに眉を寄せる。

「お前がぁ？」

「うむ。まあ人間どもの自滅ならまだしも、天災による滅びなら救つてやるのが神の役目かと思ってな。ちよつと行って壊してきた」

「んなコンビニ行くようなノリで言われても」

男は胸をそらして誠次を見下ろすと、傲然と言ってくる。

「私の力が理解できただろう。何だったら神様と呼んで崇め奉ってくれてもいいぞ」

「そんな日は永遠に来ないと断言してやろう。つーかお前が世界を救ったとしても気紛れで俺の人生狂わせる行為が正当化されるわけじゃないし」

半眼で告げた言葉に男が悔しげに唸る。

「むう。余計なことに気付きおつて。黙って2-Aに入ればよいというのだ」

滅茶苦茶な言葉に誠次の喉が唸りを上げる。
拳をふるふると震わせて誠次は言った。

「なんか本気で殺したくなってきたなコイツ」

「はっはっは。やめておけやめておけ。私がいなかったら人間なぞ500年以内に自滅するぞ。魔法使い達が頑張っても100年延ばすのが関の山だ」

能天気な笑うその顔にさらに殺意が募るのだが、男は何ら気にもせずが続けてきた。

「お前もあきらめて状況を楽しめ。2-Aは美少女ぞろいだぞ。数十人の美少女に囲まれて学園生活を送れるなどそうそうないことだ。おまけに今のお前は女だ。普通に女風呂にも入れる。美少女達の裸が見放題だ。やったね」

「だ・か・ら・一時の性欲のために人生棒に振るつもりはないっつ

ってんだ！」

男の首を締めあげながら獰猛に唸る。

男は顔色を青く変色させながらも真顔で言ってくる。

「それは女性蔑視というものだ。女には女の人生がある。女になったからと言って人生を棒に振ることにはなるまい」

「俺にも男としてのプライドがあると言っとなるんだ！」

叫ぶ誠次に男は呆れたように言ってきた。

「むう。注文の多い男だ」

ぶちりと何かの切れる音がした。

「ぎがあああああああ！」

奇怪な叫びをあげながら男の体を天高く持ち上げる。

首をつかむ右腕の先からメキメキと音が響く。

男はどす黒い顔色をしながら、案外平気そうに困ったような顔で口を開いた。

カレーに使おうと思っていた野菜が冷蔵庫に入っていなかったときのような困った顔だ。

「ぬう。それ以上力を入れられると首の骨が折れそうなんで、いい加減放してほしいのだが」

「コ・ロ・ス・ゾ！お前はあああああ！」

どす黒い殺意とともに絶叫する誠次に対し男はからからと笑って見せた。

「はっはっはっは。それは無理というものだ。お前の力では私を殺すことなどできんよ。ほれお前もいい加減あきらめて私の首を離してくれるがいい。そして2・Aで新たなレディ・ライフを送るのだ」

「……………」

誠次は無言で男の体を振り上げる。

突き抜けるような怒りに言葉すら出てこなかったのだ。

声無き叫びとともにそのまま渾身の力をこめて床に叩きつける。

床の碎け散る感触とともに手の中でも何かが碎ける感覚が返ってきた。

床の穴から右腕とそれにつかまれた男の体を引っこ抜き、誠次は荒い息をついた。

男の体をゴミのように放り捨てる。

死んだと思われた男は地面に放り出されると普通に立ち上がってきた。

首が途中で変な方向に曲がっているのだが平然と口を開く。

「死にはしないが普通に痛いのもう少し遠慮というものを覚えてくれないか」

その顔面に拳を埋め込んで昏倒させ、誠次は学園長に食って掛かった。

「あんた！魔法使いなんだろう！俺を元に戻せないのか！？」

「幻術を応用した性別転換なら簡単じゃったんじやろうが、お主の場合、遣伝子レベルで女に変えられておる。少し難しいのう。それに直せたとしても。わしらが直してロキが変えて、わしらが直してロキが変えて、とどうどうめぐりになることは間違いない」

絶望的な答えに唸りながらも誠次は可能性を模索する。

「男に戻れないとしてもあんたらの魔法で俺を高校に行っても不自然じゃないようにできないのか？」

「出来んこともないじやろうが、やはり最終的にはあの男を説得するしかないぞい。今でこそわしら裏側の人間はお主の2・A入りに違和感を感じているが、あの男がその気になったらわしら裏側のもも普通の先生同様に疑問をもたなくなるじやろう」

学園長の言葉に男は頷こうとして、首が折れていてうまく頷けないことに眉をしかめた。

手を添えて無造作に首を戻す。

光が軽く首の回りを舞うと、もう男の首は治っていた。改めて頷く。

「その通りだ」

「んでそんな回りくどいことを」

問う誠次に男は指を左右に振り、わかっているいなあと笑うと、

「違和感を完全に消してしまうと騒動の種が減ってしまうだろう。もったいない」

「いつぺん死ね！お前は！」

叫ぶ誠次の肩に男が手をかけた。

振り向くと男がにっこりと笑みを浮かべている。

「あきらめろ。さもないと魂まで細工するぞ」

ぱつと学園長に視線を飛ばし、叫ぶ。

「学園長！」

学園長は通夜の席のような沈痛な表情で告げてきた。

「犬にでも噛まれたと思って……」

「高畑先生……！」

高畑はひきつった苦笑とともに言う。

「いい娘達だよ」

「味方はいないのか味方はああああああ……！」

学園長室に悲痛な叫びが響く。

だが、それに応えるものは誰もいなかった。

第2話 戦艦SEIJI、味方なし（後書き）

絵を新しく描いてみました。
やっぱり難しいです。

第3話 それだけは勘弁してくれ

第3話 それだけは勘弁してくれ

少女少女少女少女。

見渡す限り少女づくめ。

少女たちがずらりと並んだその光景はなかなか壮観である。

最も少女と呼べないぐらい大人びた連中もいるのだが。

（ぱつと見俺より身長高い奴も何人かいるな。本当に中学生かよ）

逆に小学生じみたやつまでいるのだが、小さいのは誠次の友人にもいたからさして驚きはなかった。

チビといわれると激怒するくせに映画館や遊園地などは子供料金で入る。そういう奴だ。

（冷静に考えると俺も身長178あるから、中学生やるにやでかすぎるんだよな）

自身の数奇な運命に内心で嘆息する。

それにしても神（神だと認めるつもりはないのだが、その呼び名しか認めないというのだからしょうがない）の言うとおり可愛い娘の

多いクラスである。

そういう方面に疎い誠次でもわかるくらい整った顔立ちの娘ばかりだ。

中学生離れた胸の持ち主も多い。

ダイゴが見たら狂喜しそうな光景である。

ついでに言うとなぜか外国人っぽいのも多い。

見れば見るほど妙なクラスだ。

誠次は改めて周囲を見回して嘆息した。

たいていの少女は興味深げにこちらを見ているのだが、一部そうではない者たちもいる。

事情がある程度知っている裏側の連中ということなのだろう。

自分が女でこのクラスに居たとして、男が入ってくるなどと知ったらそりゃあ嫌がる。

やたらと長い金髪をした人形みたいな綺麗さをもつ少女はつまらなそうにこちらを一瞥して、興味を失ったようにあくびをしている。

眼鏡をかけた少しニキビのあとが見える少女は怪しむようにこちらを見ると、忌々しげに舌打ちして視線を下に向けた。

艶やかな黒髪をサイドでまとめた少女はあからさまな不審と嫌悪の視線をこちらに向けてきている。

色黒の背の高い少女はこちらを見て苦笑していた。

担任である高畑が白いチョークで黒板に名前を書く。

なかなか綺麗な字だが、それを見て誠次は再び嘆息した。

「今日からこのクラスに転入することになった風間君だ。みんな仲良くしてやってくれ」

『ハーーーーーイ』

少女たちは声を揃えて元気に挨拶する。

その明るさとノリの良さに思わず口元が緩む。

中学生とはこんなものだろうか。

自問して否と答える。

自分が麻帆良にやってきたのもちょうど同じ中2のところだが、そのときのクラスメートはもう少し無関心だったように思う。

高畑の紹介に合わせてできるだけ自然な笑みを浮かべて名乗った。

「風間誠亜だ。よろしく」

そう風間誠亜だ。

2 - Aに入るにあたって、性別転換という超常を隠すために風間誠次の親戚の女を名乗るよう言われた。

それにあたり新しく考えた名前が風間誠亜だ。

とくに深く考えずに語感で決めたが割と気に入っている。

なんでも神の力で自分が風間誠次だと知られても普通に受け入れられるよう細工してあったらしいが、魔法使いたちが嫌がったため隠すことにした。

風間誠次が転入してくることを知っていた先生方には書類ミスだったと通達され、誠次は転校、女子中に入ってくるのは誠亜だとされたのだ。

誠次が女になっていることを知っている一般人はみなその記憶を消されたいらしい。

ただダイゴだけは慈悲とやらで言いふらせないよう暗示をかけるだけで済まされた。

これまで築き上げた人間関係をすべて白紙に戻してしまうのは可哀そうだと神が主張したのだ。

学園長たちは最初渋ったがよくわからないうちに神が論破した。

個人的には嬉しいことだが、どうせ情けをかけるのなら女子中入りそのものを無しにしてほしいものである。

「それじゃ何か聞きたいことがある人は手を挙げて」

『ハイ!』

高畑の呼びかけにたくさんの少女が一齐に手を上げる。

根掘り葉掘り聞かれるのはぼろが出かねないためあまり歓迎できないが、ある程度興味を持つてもらえるのはいいことだ。

最低でも神が飽きるまで彼女らとは付き合っていかなくてはならないのだから。

高畑が手を挙げた少女の一人を指す。

少女は明るい声で聞いてきた。

「趣味は何ですか？」

そんなことを聞いてどうするのやら。

まあ趣味が共通すれば会話のきっかけにもなるし意味のない質問ではない。

自分の趣味は何だ。

考えて誠次は首をかしげた。

言われてみるとあまり趣味らしい趣味がない。

都会に来て、ゲームや漫画もたしなむようになったが、物のついでやダイゴの付き合い程度で終わる部分も多く、趣味といえるほどのものじゃない。

テレビは苦手だ。

なんだか喧しく感じる。

「趣味……トレーニング……かな」

歯切れも悪く言う。

小さいころから毎日欠かさずトレーニングをしているが趣味というのともなんか違う気がした。

体を鍛えること自体が楽しいわけでもないし。

だが、他に思いつかなかった所以说ったのだが失敗だったかもしれない。

少女たちは微妙な表情をしている。

一部こちらに興味を示したものもいるようだが。

「他に質問はないかな」

微妙な空気を振り払うように言った高畑にまた生徒達が答える。

「好きな言葉は？」

「一撃必殺」

迷いなく答える。

この言葉こそが誠次の一番好きな言葉であり、彼のポリシーだ。

何やら中国人っぽい少女の内、少し色黒の方が目を輝かせたように見えたが気のせいだろうか。

「特技は何？」

「特にないけど鍛えてるから人より力が強い自信はある」

答えるとすぐに次の少女が問いを発す。

「好きな男のタイプは？」

その問いに思わず頬がひきつった。

まさかこんな問いをされる日がこようとは想像だにしていなかった。
見れば隣で高畑も苦笑している。

「と、とくにないかな」

震える声で答える。

「そろそろ終わりにしようか。それじゃあ……」

言って高畑が誰かを指名した。

立ち上がらんばかりに元気よく手を挙げていた小学生じみた双子の
片割れが見たまんまの勢いで問いを発する。

「好きな食べ物は何ですかー？」

「ダイ……」

ダイゴの飯ならなんでも。

そう言いかけて踏みとどまる。

新たにこの学園に入ってきたはずの誠亜がいきなり男子、しかも高
校生のダイゴと面識があるというのも不自然かもしれない。

いやそこは大した問題じゃない。

誠次つながりで知り合っていたとすればなんとでもなる。

問題は多感な女子中学生たちに、女である誠亜が年上の男の料理が

好物だなどと言えはいらぬ想像を掻き立てるに違いないということだ。

ぎりぎりで踏みとどまった自分を褒めながら、誠次は無難にカレーと答えようとした。

その時だ。

頭に聞き覚えのある忌まわしい声が響いてきた。

『あーこちら神。聞こえているか誠次。いや誠亜』

聞こえてくるのは誠次が女子中に入る原因となった男の声である。軽く視線で周囲を探るが声に反応した様子はない。自分にしか聞こえていないのだろう。

聞こえているかと言われても返事のしようがない。でかい声で返事するわけにも行くまい。

突然一人で喋り出したら電波だ。

『頭の中で喋るイメージだそれで聞こえる』

『聞こえてるよ。何の用だ？』

不機嫌に返す誠次に神は気にした風もない。挨拶でもするような気軽さで言ってきた。

『今現在。危ない筒でそちらを狙っている。吹っ飛ばされたくなければさっき言いかけたことを言え』

『冗談じゃねえ！何考えてんだ！学園長たちを敵に回すつもりかよ』

！』

思わず冷や汗を流す誠次を少女たちはいぶかしげに見ている。
高畑は何か感じ取ったのか少し鋭い目つきで周囲を見回していた。

『案ずるなこの筒の弾には炸薬の代わりに脱げ魔法が籠められている。爆発してもお前が裸にされて恥をかくだけで怪我人は出ない』

頭に響く声に誠次は半眼になって返す。

『なんだよ脱げ魔法って』

『対象の持っているものと服を一瞬で吹っ飛ばす魔法だ。魔法使い達がよく使う』

『……魔法使いに対するイメージが変わりそうだ』

「誠次君？」

訝しげに高畑が聞いてくる。

それにあいまいな笑みを返しながら誠次は神に言葉を送る。

『なんで面倒になりそうなことをわざわざ言わにやなんのだ』

不機嫌に告げる言葉に神はさも当然と返す。

『その方が面白そうだからだ。ほれお前が黙ってるから皆不思議がつているぞ。言うか脱ぐか二つに一つだ』

『くたばりやがれ』

アレってなんだと言いたい。
髪の長い少女が生暖かいものを見る眼で口元に手をあて、笑いながら聞いてくる。

「ダイゴ君の得意料理はなんなんですか？」

突っ込みたいところはいっぱいあるが誠次は一応答える。

「和・洋・中・伊・仏・印。何でも作れるし、どれも同じぐらい美味しいな」

おお〜と関心の声が響く。

ちゃらんぽらんな見かけとは全く似合わない特技である。

ただのおっぱい好きではないのだ。

世界的シェフを両親に持つダイゴは幼いころから料理を学ぶ機会が多かったらしい。

驚異のレパトリーと腕を誇るダイゴの料理は友人の間でも大人気だった。

もつともダイゴの料理を馳走になれるのは誠次を含め特に親しい数人だけだったが。

高級食材使えば美味しいのは当たり前。普通の食材使って超美味く作れて初めて一流だというのがダイゴの持論らしい。

高級ホテルで厨房を任されてる父親とは料理方面ではウマが合わないとき々漏らしていた。

もつともほかのところでは非常に気が合うらしく、一度家に遊びにいった際、二人は料理について論争していたと思っただけのまにか胸談義で意気投合していた。

白熱するおっぱいトークについていけずに誠次が困っていると、現れたダイゴの母が二人の頭をお盆でひっぱたいて去っていったのが

印象に残っている。

その時のことを思い出して苦笑していると、誰かは分からないが気楽なノリで問いかけが飛んできた。

「超包子とどっちがおいしいですか」

としてそういうこと聞くのか。

このクラス確か超包子のシェフとか従業員とかいるはずだ。超包子に行ったときに見た顔がいるし。

これでダイゴとか答えたら印象悪くなるじゃないか。

「ほほう。それは是非とも聞きたいネ」

なにやら眼を輝かせているのがいる。
色の白いほうの中国人だ。

誠次は苦笑しながら答えようとする。

「だいたい同じ……」

<須藤さんの方が上手ですよ>

だがそれを遮るものがいた。

少しふつくらとした少女で温和な空気を醸し出している。
確か超包子のシェフじゃなからうか。

<少し変わっていますけど料理人としては凄いですよ>

おお〜とまた感心の声上がる。

誠次は内心で苦笑した。
あまり持ち上げてくれるなと言いたい。
しよせん変人だし。

「あの！」

ショートカットの少女が胸の前で拳を握りながら言ってくる。

「やっぱりダイゴさんとは恋人なんですか？」

背筋が凍りついた。

あいつと俺が恋人……なんて、なんて恐ろしいことを言うのか。
予想できることではあった。

こういう反応が返ってくることは。

だが、それでもなおその恐ろしいセリフは容赦なく誠次の心を打ち
すえた。

鳥肌が立つ。

隣では高畑が苦笑していた。

誠次はひきつった顔で噛みしめるように言う。

「絶・対・それはない」

静かなる気迫を発する誠次に少女たちは気圧されたように頷いた。

「なーんだ、違うのかー」

そこ。なぜに残念そうなのか。

窓の外から笑気を感じて誠次は鋭い視線を送った。

おそらくあの変態が爆笑しているのだろう。

殺意で人を殺せたなら3人ぐらい殺せそうな目つきで睨んでおく。

横では高畑が手を叩いて皆をまとめていた。

「それじゃあ質問はこのくらいにして。まだ何か聞きたいことがあったら休み時間にも聞いてくれ。新しい学校で分らないこともあるいろいろあるだろうから、みんな教えてあげて欲しい。誠亜君の席は一番後ろの空いているところだから。それじゃあHRを終わりにするよ。」

誠次が席に着いたのを確認すると、委員長らしき少女の合図で全員が立ち上がって礼をする。

高畑が出ていくと同時にどつと人が駆け寄ってきた。

あつという間に誠次の周りに人の壁を作ってしまうと、好奇心に充ち溢れた表情で口々に質問しだす。

「ちよちよちよつと待ってくれ。そんな一氣に言われてもわからん」

困ったように言つと周囲の少女たちは笑いながら頷いた。

「そうだよー。聖徳太子じゃないもんねー」

「しょうとくたいしが誰かは知らんが。一人ずつ聞いてくれ……どした？」

誠次が答えると、周囲の少女たちは驚いたようにこちらを見る。

「誠亜ちゃんってひよつとして……」

「ひよつとして、なんだよ」

聞き返すと少女はあわてたように手を振った。

「うっん何でもないよ。アスナー。仲間が増えるかもよー」

その言葉に髪留めに鈴をつけたオッドアイの少女が微妙な顔で返事している。

何の仲間だろう。

『ククク。いいぞ。もっとやれ』

『お前は黙ってろ』

頭の中に響く声を切り捨てる。

不機嫌に唸っていると肩をつかまれた。

振り返るとそれほど長くない髪を後ろでまとめた少女がメモを片手にこちらを見ていた。

たしかH Rの質問タイムで最初から手を挙げていたのに当てられなかった子だ。

「ふっふっふ。この妙な時期の突然の転校。あたしの情報網にも一切前情報がなかったことも怪しいわ。あたしの記者の勘が事件のおいをかぎつけたわよ。さあ洗いざらいはいてもらうからね！」

何となく高畑が彼女を指さなかった理由がわかった気がする。
だが、もう遅い。

誠次には苦笑しつつ一言告げるのが精いっぱいだった。

「…………お手柔らかに頼むよ…………」

「あー疲れた。女子中学生って凄いわ」

嵐のような質問攻めにあつた放課後。

寮のベッドに突っ伏しながら誠次は呻いた。

男子寮ではない。女子寮の一室だ。

もと男である誠次を女子寮に入れるのは問題があるだろうに、てっきりアパートでも紹介してもらえるのかと思っていたが、女子寮の一室をあてがわれてしまった。

こっちの精神的にも女子寮は御免こうむりだったのだが、学園長には他に空きはないといわれた。

あの学園長、楽しんでるように見えたのだが……気のせいだろう。

きつと。

枕に顔をうずめたまま大きく息をする。

使われていたわけじゃないので女の子の甘い匂いがするわけでもなく、鼻に届くのは生活臭に欠けた清潔なシーツのにおい。

それが残念というわけではないが誠次は一つ嘆息した。

なかなか強烈なクラスだった。

確かに楽しそうではある。

だがそれ以上に大変そうだ。

体力には自信があったのだが、今日一日で大分消耗した。

「とりあえず……着替えるか」

誠次の纏う制服は誠次自身すら知らないスリーサイズをどう図ったものやら体にぴったりだった。

だからと言って制服はいつまでも着ていて気の休まるものではない。くつろぎやすい部屋着に着替えてゆつくりしたい気分だった。

億劫な体を動かし、クローゼットの前に立つ。

男だったところに着ていた服は一応全部持ってきている。

胸がきつかったりして着れないものがあるのだが、大きめのＴシャツなどは普通に着れる。

クローゼットの扉に手をかけ、欠伸とともに開いた。

開いて動きを止める。

入れた覚えのない服がハンガーラックにかかっていた。

大量のセーラー服が。

ゆつくりと首を回す。

部屋の入口のところで、扉をわずかに開いてその隙間から神が覗いていた。

ニヤニヤと笑ってこちらを見ている。

誠次はセーラー服を片手に扉へと大股で歩み寄っていった。扉を開き、冷たい眼で神を見下ろす。

「なんの嫌味だ。これは？」

だが神は低い含み笑いを洩らすと、

「ふっふっふ。素直に喜んでいいんだぞ」

「何をだよ」

不機嫌に言う誠次に神は軽く笑うと。

「これからはいくらでもセーラー服の女子が見れるぞ。なに簡単だ。お前が着て鏡の前に立てばいい」

「で、お前はそこで何をしてるんだ？」

問うと神は鷹揚に頷いて見せた。

「うむ。セーラー服を着て鏡の前でポーズをとったりニヤニヤしているお前を写真に収めてからかってやるうかと」

扉を閉めた。

しっかりと鍵もかける。

嘆息しつつ。セーラー服をクローゼットの中にきとうに放り込んだ。

クローゼットの中から比較的ゆったりした部屋着を引っ張り出し、制服を乱暴に脱ぎすてて部屋着にそでを通した。

ベッドにもう一度突っ伏そうとして、聞こえてくるノックに顔をしかめた。

神の奴ならノックなどしない。

よくわからない超能力で鍵をあげて勝手に入ってくるだろう。

「うーい」

頭をがりがりとかきながら無造作に扉を開ける。

そこに見えた顔に少なからず驚いて誠次は動きを止めた。

「ダイゴ？」

「おいーっす。今日は誠ちゃんの女子中入りを祝してプレゼントを持ってきたよん」

紙袋を右手に提げたダイゴが能天気な笑みとともに部屋に入ってくる。

さりげなく胸を触ってくるので腕にきつめに手刀をいれた。

「殺風景な部屋だねえ。まあ入りたてだし当然か」

部屋を見回して言うダイゴ。

誠次は台所に向かい、冷蔵庫を開いて、舌打ちした。

見事なまでに空っぽだ。

飲み物一つ入っていない。

誠次がこの部屋をあてがわれてからまだ一度も買い物に行っていないのだから、当然と言えば当然だ。

食器棚からコップを二つ取り出し、水を注ぐ。

部屋の中央で周囲を見回しているダイゴにそれを手渡しながら問いかけた。

「よく入れたな。女子寮って男子禁制って感じがあると思うんだが」

「はっはっはっは。まあ細かいことは気にすんな誠ちゃん」

笑うダイゴに誠次は半眼になって呟く。

「忍び込んだのか？」

「そんなおおげさなもんじゃないさ」

視線をそらしつつ言うダイゴに誠次は嘆息すると一口水を飲んだ。

「前にもやってたんじゃないだろうな」

「はっはっは。そんなことはしないよ」

「まあいいけど。あんま問題になるようなことはすんなよ」

言う誠次にダイゴは顎に手をあてて唸ると。

「堂々と誠ちゃんに会いに来ましたっつって入ってきたら、それはそれで面白い噂が立つと思うけど」

「それは……面白くないな」

今朝とていらぬ誤解を受けかけたばかりである。
顔を青ざめさせる誠次に対し、ダイゴはからからと笑うと、

「まあ、俺は構わないけどね」

「構えよ」

力なくツツコミを入れつつ、誠次は嘆息した。
ダイゴの手の紙袋が目に入り問う。

「で、プレゼントってなんだよ？」

「むふふ」なんでしょう。あててみ」

楽しそうに言うダイゴに誠次はとりあえず適当に今欲しいものをい
つてみた。

「飯か？」

「どこの食いしん坊さんですかあんたは。それはまた今度だあね」

紙袋を見ながら今度はもう少し真面目に考える。
あの紙袋に入りそうなもの……

「菓子か？」

「ブー。食べ物じゃないよ」

「服」

「おいしいね」

誠次は頭をかきつつ答えた。

「ギブアップだ。何なんだよ」

「ふっふっふ。これからの誠ちゃんに欠かせないものさ」

言ってダイゴは紙袋の中に手を突っ込んだ。
だいぶ勿体ぶった後、勢いよく抜き放つ。
その手に握られた物体は。

「ブラ……ジャァー？」

「そう！ブラジャァーだ！服は男だったころから着てた服も着れないことはないけど、こればかりは持ってないはず！レディライフを送ることになる誠ちゃんのために俺が買ってきました！」

そう叫んで紙袋をひっくり返す。

バラバラと出てくるブラジャァー。ブラジャァー。ブラジャァー。

色気もなくもないスポーツブラから清純なイメージの白のレースやら色気重視の黒いものもある。何の冗談か透けてるのまであった。

誠次はがくがくと震えながら後ずさる。

「い、いらねえよ。ブラジャーなんて。っか下と違ってなくても困らねえし」

ダイゴはその中の一つ、黒のレース生地を右手に、白のレースを左手に持って誠次ににじり寄った。

「だゝめゝだゝよ。誠ちゃんは今女の子なんだよ。ちゃんと身だしなみに気を使わなきゃ。それともそれだけのバストを持ちながらノーブラで行く気だったのかゝい？」

後ずさりすぎて背中が壁にぶつかる。

誠次は頬をひきつらせながら裏返った声で言った。

「別に問題ねえだろ！怪我するわけじゃあるまいし！」

しかしダイゴは信じられないことを聞いたといわんばかりに手を戦慄かせ、ブラジャー両手に詰め寄った。

「何を言っただ誠ちゃん！それで胸の形が崩れたらどうするつもりだ！それだけの美乳を持ちながらそれを保つ努力を怠ることは罪だよ！それも許されざる大罪だ！」

そのかつてない剣幕にかなりビビりながら、誠次は苦笑いを浮かべる。

「なにもそこまで……たかが胸じゃねえか」

ダイゴは一步飛び退るとこちらの胸をビシリと指さして叫んだ。

「わかってない！わかってないよ！誠ちゃんは自分の胸の素晴らしさを全然わかってない！大きいだけじゃない。形、弾力、そして全体とのバランス。すべてにおいてパーフェクトな誰もがうらやむバストだ！」

なにやら暴走を始めかけているダイゴを慌てて止める。

「わかった！お前が乳好きなのはよくわかった！それが行き過ぎて俺にブラジャーを強要したがつてることも！だが俺にも男としてのプライドがある。ブラジャーだけはつけるわけにはいかん！」

二人の間で視線が火花を散らす

たつぷり1分ほどにらみ合つてどちらともなく視線を外す。

ダイゴは一度嘆息するとコップの水を飲み干した。

「しかたない。誠ちゃんにはブラジャーの重要性をみっちり享受してやろう」

「いやきつぱりと遠慮させてもらう」

「いいかい。そもそもブラジャーの始まりとは……」

「聞けよ」

30分後。

論破された。

誠次は手の中のブラジャーを見下ろして頬をひきつらせた。
なんというかこれをつけてしまうと男としての大事な何かが修復不可能なほどに壊れてしまう気がする。

油の切れた機械のような動きでダイゴの方へ首を向けた。

「な、なあ。また今度にしないか。ほら。サイズもあってないかも知んないだろ」

「はっはっは。その心配はいらないよ。オレは服の上から見ただけでも女の子のバストサイズを完璧に把握できるからね。ぴったりのはずさ」

笑いながら退路を断ってくれる親友に低いうなり声をあげながら、誠次は親の仇でも見るかのように手の中のものを睨みつけた。別にブラジャーに罪などないのだが恨まずにはいられない。

5分ほど葛藤して誠次は諦めのため息をついた。

諦念とともに服の上を脱ぎ捨てる。

瞬間、

「NGイイイイイ！」

響き渡る叫びに誠次は身を震わせた。

「な、なんだよ？」

わけがわからないと戸惑う誠次にダイゴは目を閉じたままビシリとこちらを指さした。

眼を閉じているので指の示す先はだいぶずれているのだが。

だがそれには構わず、ダイゴは言ってきた。

「誠ちゃんはまだ女の子だ！だからもっと恥じらいを持ちなさい！」

「恥じらい？」

胡乱気な眼差しの誠次にダイゴはきっぱりと告げる。

「そう、恥じらいだ！たとえば男の目のあるところでは裸にならないとか！」

力強い言葉に、しかし、誠次は半眼で言った。

「俺に恥じらいがどうのというんなら俺の胸触ろつとすんのもやめろよ」

「それはヤダ」

「お前な……」

ダイゴはしゅたつと手を上げると空になった紙袋を持って立ち上がった。そのまま入口へと向かう。

「それじゃ俺はもう行くけど、ちゃんとつけるんだぞー。あと、女の子らしい服も少しは買うこと。さもないとまたオレがまた滅茶苦茶可愛いやつ買って持ってくるからなー」

「可愛い服なぞ死んでも着るもんか」

精一杯の抵抗として不機嫌に唸っておく。

ダイゴはまだ目を閉じているのか2度ほど壁にぶつかってから部屋を出て行った。

それを見送り、手の中のブラジャーを見て深く深く息を吐いた。

これもみなあの変態神のせいだ。
いつか殺してやる。

どす黒い決意をしながら誠次はもう一度嘆息する。
鏡の前に立ちながら恐る恐るブラジャーを身に付ける。
背中ホックをかけて装着完了だ。

「なぜだろう……泣きたくなってきた」

鏡に映る己の姿を見ていると自然と涙がこぼれそうになってくる。
不自然さはない。

今の誠次の体は間違いなく女なのだから。
だがその不自然さの無さが逆に哀愁を誘った。
心の中で何かが壊れたような感触が確かにあった。

どばんという激しい音とともに扉が開く。

「誠亜あ！何か面白いことになってないかあ！」

こちらの心情などまるで意に介さない神の声が響き渡る。

誠次はそちらに向かって床をずしんと踏みしめながら歩み寄る。

こちらの姿を見てとった神が口に手をあてて嘔き出した。

「プツ。何だ誠亜。その格好は。とうとう女性に目覚めたのか？」

拳を振り上げる。

そのまま持てるすべての力でもって神の顔面に突き刺した。

「ノックしろやあああああ！」

魔帆良女子寮に血の華が咲いた。

第3話 それだけは勘弁してくれ（後書き）

どうもすちゃらかんです。

今回はちよつと神濃度薄めのダイゴ濃度濃い目になりました。

微妙にギャグも薄いかな。

ダイゴの意外な特技発覚。

だがそれと同時に変人ぶりにも磨きがかかったように思えます。

ダイゴは次回からは少し出番減るか。

とか言つてダイゴの混ざるネタを思いついたら出てきますが。

挿絵は今回は思いつかなかったので無しで。

拙作ですが今後ともよろしくお願いします。

第4話 お前に俺の気持ちかわかるか！？

第4話 お前に俺の気持ちかわかるか！？

風呂に入ろうと思ったたら水管工事の恰好をした神が風呂をいじっていた。

誠次に発見されるや否や神はバケツ一杯の墨を誠次にぶっかけ、壁をすり抜けて逃げに行った。

服は脱いでいたので数少ない着れる服がダメになることはなかったが、全身真っ黒になってしまった。

こめかみに青筋を立てながら風呂の蛇口をひねるがお湯が出ない。お湯どころか水すら出なかった。

シャワーも同じだ。

わけのわからん状況に腹を立てながら台所に行くと、その水まで止まっている。

どう考えても神の仕業なのだが、意味が分からなかった。

首をかしげていると、体の墨が固まってきて体に張り付いた。

パリパリとした感触がたまらなく不快なうえ、非常に墨くさい。

おまけに風呂も水も止まっているので体を洗うこともできない。

そんなとき何の嫌がらせだと唸る誠次の頭上から一枚の紙が落ちてきた。

そこにはこの女子寮の大浴場の場所が記された地図が描かれている。なるほどつまり

「ここでのハプニングを希望しているわけか」

誠次は獰猛な笑みと共に手の中の紙を握りつぶした。

大浴場にたどりつくと誠次は軽く更衣室を覗き込んだ。
先客はいない。

ずらりと並んだ衣類かごを覗き込んでも服は見当たらない。
どうやら狙い通り女子たちのいない時間に来れたようだ。

安堵の息とともに誠次は着ていたシャツに手をかけた。
慎重にひっぱり上げて脱ぐ。

しかし、やはり体から固まった墨がパラパラとはがれ、シャツについてしまった。

舌打ちしながらはたき落す。

墨を付けずに脱ぐのは諦めズボンが無造作に脱ぎ、大きく振って墨のかけらを払い落した。

下着も脱ぎ去り、腰にタオルを巻いて浴場に向かおうとする。

そのときちょうど聞こえてきた扉の開く音に、誠次はぎくりと身を強張らせながら振り向いた。

入口には黒髪をサイドポニーにした少女と色黒で背の高い少女が軽い驚きと共にこちらを見ている。

クラスメートのはずだが名前はまだ知らない。

誠次が何か云うよりも早く、サイドポニーの少女が不機嫌に吐き捨てた。

「ふん。お前と共に風呂に入るつもりなどないからな」

「まあそうだろうな。俺が女でもそうする」

とりあえずそう言つと少女はさらに不愉快そうに眉をひそめた。何が気に入らんのだ。同意してやったのに。

「被害者らしいし、学園長の命だから追い出さないでやるが、ほかの生徒が入らない時間を狙うぐらいの気遣いはしたらどうだ？」

「したつもりなんだが。女の子たちはみんなこんな早い時間に風呂入るのか？」

首をかしげて問い返すと少女は言葉を詰まらせた。

そのまま難しい顔で黙り込む。

なんとなくだがこの子が一番こちらを目の敵にしている。

まあ無理もないことなので文句も言えないが。

少女はしばらくこちらを不機嫌に見ていたが突然何かに気づいたように目を鋭くした。

探るようにこちらを上から下までじろじろと眺める。

どこか怪しむような色が強くなっているように感じる。

「なんだよ？」

「お前……」

少女は何かを言いかけるとそのまま踵を返して去って行った。

わけがわからずそれを黙って見送っているともう一人の色黒の少女が苦笑しながら言ってくる。

「気難しい奴だね。気にしないでやってくれ」

「いやまあしょうがない部分も大きいし」

誠次は頭をかきながら答えた。

パラパラと落ちる墨のかけらに舌打ちする。

少女は先のサイドポニーと同じようにこちらの体を上から下まで視線でなぞると、呆れたように言ってきた。

「ひどい有様だね。真っ黒じゃないか」

誠次は不機嫌に唸るように告げた。

「忍び込んだ変態が俺の部屋の水を全部止めて、墨をぶっかけて逃げたんだ。ここで女の子とニアミスして慌てふためく俺を見て笑お

うって魂胆なんだろう」

すると少女は苦笑しながら人差し指と親指で丸を作りながら言ってきた。

「大変だね。よかつたら被おうか？有料だけど」

「いくらだ？」

0秒で真顔で返す誠次に、少女は苦笑いで答えた。

「冗談だよ」

肩を落として頂垂れる誠次に少女は汗を一筋流す。

「まあ……頑張ってくれ」

「あんたは割と好意的なんだな」

少女は少し意地の悪い笑みを浮かべると、

「立場を利用して女の子の裸を見ようとしないうらいには紳士的だとわかったからね」

それに誠次も苦笑する。

「今日は体育があつたからいつもより早く風呂に入ろうとする子たちもいるはずだ。あまり長湯をしないほうがいいよ」

「忠告どうも」

少女はそれだけ言うつと踵を返した。
だが、扉の所で一度振り向くと、

「隠すなら胸も隠した方がいいよ。それじゃまるで男みたいだ」

そう言つて去つて行つた。

言われて自分の体を見下ろす。

下だけ隠して豊かな胸がむき出しになったその姿は確かに不自然だ。

無言で腰に巻いたタオルをほどくと胸の前に持つて誠次は浴場に向
かった。扉を開けて目に入つた光景に思わず息を呑む。

そこはまるでプールか何かのようだった。

広い湯船に洒落た内装。

白い照明に照らされたそこは華やかだった。

「あきらかに男子寮のよりグレードが上じゃねえか。差別だ」

寮の前の立派な桜並木もそうだ。

寮の建物自体も女子寮の方が新しくてきれいである。

なんだか女子の方が優遇されている気がする。

話には聞いていたが、実際に見ると実感できる。

いつまでも愚痴つていてもしょうがない。

誠次は周囲を見回し洗い場を見つけると、そちらに向かった。

小さな椅子を引いて腰を下ろすとシャワーで頭からお湯をかぶる。

溶けだした墨が黒い流れを作る。

意外とあっさり流れ落ちる様を見るに、普通の墨より洗い流しやす

い代物なのだろう。

そんなところに気を使っぐらいなら、はじめから悪戯などするなと言いたい。

あらかた流し終わり、石鹸をつけて体を洗う。

それを終えるとシャンプーで頭を洗った。

女になった際髪が伸びたので少々手間がかかる。

頭からお湯をかぶりしっかりと泡を流し終えると、もう墨汁臭さも張り付いた墨の生む引っ張られるような不快感もなくなった。

すっかりきれいになった体に満足しながら誠次は立ち上がった。

洗い場から湯船に一直線に向かい、体を湯船に深々と沈めた。

肩まで湯の温かさに浸しながら、天井を見上げて嘆息ともい呻く。

「女子中なんて環境ですごさにやらんだだけでも大変だったのに、あの変態のいたずらまであるんじゃないやなあ。マジで身が持たんよ」

照明に手をかざす。

男だったところに比べるとやはり指が細くなっているし、筋肉質ではあるものの体全体も女らしくなっている。

ちゃんと調べたわけじゃないのでわからないが、神を殴った時などの感覚からすると筋力自体は衰えていないようだが。

「なんかサイドポニーには嫌われてるしなあ。まあしょうがないんだが」

握りこぶしを作る。

握りしめられた拳から帰ってくる力は今までと変わらない。

というか10年以上かけて鍛え上げた力を、こんな事で全部消されたらさすがに泣くが。

「あゝ〜いい湯だ。これからもときどき人のいない時間を狙って来ようかな」

くつろいだ表情で深く息を吐きながら誠次は大きく伸びをした。だらけた表情で口を開く。

「でもまあ今日はもうあがらねえとな。鉢合わせしちまう」

龍宮の忠告によれば、少女達は早めに来るかもとのこと。だったら、ニアミスしないうちに出ねばならないだろう。

「それは困るな」

誠次は立ち上がろうとして聞こえてきた声に動きを止めた。

半眼で背後の人影を見つめる。

そこにはセーラー服姿のダンディなおっさん。神だ。

「おい……ここは女湯だぞ」

目一杯冷たい目で見てやるが神は真顔で答えてきた。

「問題ない。私は神だ」

「神だろうとなんだろうと男がここにいりや大騒ぎになると思うが……ほれほれ女の子たちとはち合わせる前に出るぞ変態」

虫でも追い払うように手を振りながら立ち上がる誠次に対し、神は

人差し指を左右に振りながら言った。

「そういうわけにはいかんよ。今お前が風呂からあがってしまったら、何も起きないではないか」

誠次は頭に手を当てながら呻く。

「何も起こさないために今あがるんだよ」

湯船の縁に足をかけたところで、神が大浴場に妙に反響する声で歌いだした。

「羊が一匹。羊が二匹。羊が三匹……」

「何のつもりだ？」

訝しげに眉をひそめる誠次がふと見ると、神は三人に増え、しかも羊のきぐるみを着ていた。

「羊が四匹。羊が五匹。羊が六匹……」

歌と共にきぐるみを着た神の数は増えてくる。

しかもみなで腕を組んで踊りだした。

とりあえず黙らせようとして誠次は突然襲い来た睡魔に体をぐらつかせた。

視界がゆがんで見えるほどの強烈な睡魔が誠次の意識を引きずり落とす。

湯船に膝をついて誠次は頭を振った。

瞼が重い。

思考が減速する。

世界がしだいに暗くなり、体から力が抜け、とうとう誠次は湯船の縁に突っ伏した。

「デメエ。何を……」

「ではお休みだ誠次」

閉ざされる意識の中その声だけが不思議と誠次の耳に残る。

世界が闇に閉ざされてから誠次の意識が落ちるまで数秒とかからなかった。

息苦しさと共に誠次は覚醒した。

息を吸おうとして口に流れ込んでくるお湯に一瞬パニックを起こす。混乱する精神を1秒で落ち着かせると、誠次は周囲を確認した。はつきりしない視界に、全身の暖かい感触。

お湯の中に沈んでいると理解した瞬間、誠次は全力ではね起きた。

跳ね飛ばされたお湯が盛大にしぶきを上げる。

「殺す気かあああああ！」

空気でありつけたと同時に誠次は叫んだ。

叫んでから周囲を見回す。

そこには見覚えのある少女たちがみな、驚いたような顔でこちらを見ていた。

すぐ近くで湯船につかっている少女——確か神楽坂明日菜だ——が軽く眼を見開いたまま言ってくる。

「ご、ごめん。気持ち良さそうに寝てたからもう少しほっといてもいいかって思ったんだけど。沈むなんて思わなかったから」

「あ、ああ。いやアスナに言ったわけじゃないんだ。気にしないでくれ」

周囲を視線で確認する。

ずらりと並ぶ一糸纏わぬ少女たちの姿。

まんまと神にはめられたわけだ。

こうなったら何か面倒が起きる前に出るまでだ。

見た感じ神はここにはいない。

覗いてはいるのだろうが、ここにいないのならできるちょっかいも限られよう。

湯船から出ようとして、かけられた声に動きを止めた。

「さっそく使ってるんだ。どう。広いでしょここ」

「びつくりするくらいにな。まるでプールだ」

いったいどれだけ金がかかってる事やら。

麻帆良は施設面で本当に恵まれているらしい。他を知らないのでも言えないが。

「どう？ 2 - Aは。やっていけそう？」

「いいクラスだ。楽しくなりそうだよ」

さっさと立ち去ってしまいところだが、話を持ちかけてくれているのにそれをぶつちぎって去ったら失礼に値するような気がした。会話の合間を見て、適当な理由をつけて退散するのがいいだろう。こちらの考えなど知る由もなく、アスナは誠次の顔を見上げながら思いついたように言ってきた。

「誠亜さんって結構背おつきいよね」

まあそうだろうホントは17歳だし。

誠次は内心苦笑しながら答えた。

「誠亜でいいよ。なんかむずかゆい。もっと大きいのもいるだろう？ 色黒のと糸目の。えーと……」

名前が出ずに言葉を止める。

というかまだ名前を聞いたことがない気がする。

アスナはすぐ思い当たったのか、ああと言って答えた。

「龍宮さんに楓ちゃんね。まあアレはホント規格外だし」

大人の女性だつてあれだけの長身はそういない。
中学生であれだというのだから驚きだ。

「背も高いし胸も大きいし。うらやましいな」

声に振り向くと小柄な双子の片割れが誠次の湯に浮かぶ胸を凝視していた。

苦笑しつつその頭をなでる。

「いやまあお前らもまだこれから伸びるだろうし」

誠次の言葉に彼女はキラキラと目を輝かせると身を乗り出して言うてくる。

「ホント!? あたしもナイスバディの大人の女性になれる?」

その期待に満ちたまなざしに誠次は少し眼をそらしていった。

「まあ……遺伝が関わってくる分もあるから一概にどうとは言えんが」

今度は一転して不満げな眼差しで口から下を湯船につけて去っていく。

それを見て苦笑しながら誠次は立ち上がった。

「のぼせそうなんで俺はもう出るわ」

言って誠次は反応がないのに眉をひそめた。

訝しげな眼差しでアスナを見ると啞然とした表情でこちらを見ている。

「？」

訳が分からず周囲を見回すと個人差はあれどみな驚いたようにこちらを凝視している。

誠次は不安になって自分の体を見下ろした。

（特に問題はない……よな？）

体をひねって背面も見るが不審な点は見当たらない。

だが相変わらず周囲の少女たちは誠次の体をじっと見つめていた。

「どした？まだ墨でも付いてるか？」

「いや、墨なんて付いてないけど……」

アスナはそう言うつと自然な動きで歩み寄った。

誠次の前までくると右手を伸ばし、その人差し指でそつと左わき腹をなで上げる。

「うひゃう！」

くすぐったい感触に思わず声を上げる。

あげた後でまるで女の子のような悲鳴の上げ方に軽く赤面した。

突然の奇行に目を白黒させる誠次を無視してアスナは今度は誠次の胸の双丘を優しく左右に開く。

そして胸の中心を凝視した。

「ど……どした？」

問いかけるとアスナは唾を飲み込んで誠次の胸の谷間に隠れているそれを恐る恐る撫でる。

「これ、痛くないの？」

「うんにゃ。痕があるだけで完全に治ってるからな」

アスナが触りながらこれと評したのは誠次の健康的な肌に刻まれた傷跡だ。

ブラジャーなどで胸を寄せると乳房の間に隠れて見にくくなるが、そこには大きな傷跡がある。

脇腹も同様だ。

アスナはわき腹の傷に視線を移しながら、どこか呆としたまま口を開く。

「これって爪痕よね……・いったい何があったの？」

言ったあと、我に返ったように自分の口を手で塞いだ。
すまなそうに言う。

「ゴ、ゴメン！言いくいことだったら別に言わなくてもいいから！」

なにやら慌てたようなアスナを不思議そうに眺めながら誠次はきよとんとした顔で答えた。

「は？別に言いくいもくそもないけど。その傷は……え〜と確か5歳のころに熊に襲われた時の傷だな」

「こんな痕が残るような怪我してよく無事だったわね」

感心したように言うアスナに誠次も頭をかきながら答えた。
無意識に腹の傷をなぞる。

「ん」。何かすごく腕のいい医者が爺さんの知り合いに居たらしい。
もつと跡が分からないように治療もできたらしいが、誠次はあえて
跡だけは残すことを望んだ。
自分への。

ぬる過ぎた自分への戒めとして。
胸の傷もまたしかりだ。

「じゃあさ。その胸の傷はどうしたの？」

問われて誠次は視線を宙に上げた。

何と答えようか。

ありのままを答えるわけにはいくまい。

この傷をつけたのは基本一般人には知られていない存在なのだから。

「なんつつか。とがった石がぶっ刺さった」

皆その傷を負った時の事を想像しているのか表情を小さく歪める。

この分だと背中 of 傷は見せない方がいいだろう。

胸の傷と同じ位置、肩甲骨の間あたりに似たような縦長の傷がある。
これを見れば否が応でも更なる想像を掻き立てる。

幸い、今誠次がいるのは湯船の端なので、隠すのはそう難しくない
が。

「まあ気にしないでもらえるとありがたいね。正直俺からすればこの傷もこれのもとの怪我也いい発破だったし」

からからと笑いながら言うと、少女たちも小さく笑みを浮かべた。その瞳に微かな同情の色などは見えても嫌悪の情は見えない。

まあ、それも2-Aの良さなのだろう。

一言告げて湯船を出ようとすると、まだアスナがこちらの体を見つめているのに気がついた。

誠次は訝しげに眉を跳ね上げた。

そんな間もアスナの視線は誠次の体をなぞっている。傷を見ているわけではないようだ。

「なあ……何見てるんだ？」

たまらず問いかけた誠次にアスナは感心したような口調で返した。

「いやさつきは傷に気を取られて気づかなかったけど、もの凄い筋肉だなあと」

言われて自分の体を見下ろす。

最初にも確認したが、やはり男だったところに比べるとだいぶ目立たなくなっただけだと思うのだが。

「そうか？」

問うとアスナは人差し指で誠次の体のあからさまに筋肉が見えている部位をつつく。

「そうだって。腹筋だって完全に割れてるし腕だってほら」

「まあ結構鍛えたからな。って、触んのやめてくれって」

だが、誠次の訴えにもかかわらず体を触る手は減るところが増えた。

「むう。全身これ鋼の如し。凄まじく鍛えこまれているアル。ひよつとして誠亜にか武術やってるアルか？」

振り向くと後ろから誠次の腕をぺたぺたと触っている少女の姿。色黒の中国人。確か古菲だ。

「あ、ああ。我流で人に自慢できるほどのもんじゃないけど一応。ところでさわんのやめてくんないか。地味にくすぐりたい」

苦笑しながら告げるが、古菲は変わらず誠次の腕を掴んで握って硬さを確かめている。

今度勝負するアルと息巻く彼女にあいまいな返事を返しておいた。

「おお。かちかちだ」

なんだか双子の元気な方が横っ腹にぽすぽすとパンチを打ち込んでいる。

それを大人しい方が止めようとしているが効果はない。

それどころか元気な方に誘われて触り出した。

別に痛くはないが気になることには違いない。

「細マッチョやな」

ほわりとした笑みを浮かべながらこちらを見てるのは長い黒髪の大

和撫子、近衛木乃香だ。優しく親しみやすい人柄が印象に残っている。

とりあえず今はこの娘たちを止めてほしいのだが。

唸っていると双子たちと反対側の腹がつつかれた。

「うーん。でもこれちょっと鍛えすぎじゃないかなあ。女の子としてどうよこれは」

少女（まだ名前と顔が一致していない）が難しい顔で唸っていた。誠次は苦笑しながら、

「強くなることを優先した結果だ。それよりもそろそろマジでやめてくれないかな」

汗を一筋たらしながら言うが周囲の少女たちはやめる気配はない。それどころか触りに来ていない少女たちまで誠次を囲んでなにやらざわざわと騒ぎ始めた。

途方に暮れた顔で誠次は天を仰いだ。深く嘆息する。

「なんか……珍生物にでもなった気分だ」

その呟きは白い天井に吸い込まれていく。まあいいかえれば天井以外には聞いてもらえなかったわけである。

「つまらんぞおおおおお！」

誠次が自分の部屋の扉を開けるや否や、当たり前のようにそこに鎮座していた神はそう叫んだ。
わけのわからない文句に誠次は眉間にしわを寄せて返す。

「はあ？」

不機嫌そのものの声を無視すると、神はその場で一回転して誠次をビシリと指した。

そのまま高らかに叫ぶ。

隣の部屋まで聞こえそうなもんだがまあたぶん聞こえないんだろう。

「まったくもって面白くない！欲望のままに女子のやわ肌を凝視するでなし、紳士を気取って眼をそらすでなし、欲望と理性に揺れ動きながら目をそらしながらチラ見するでなし！女子と同じ風呂に入って体をぺたぺた触られておきながら顔一つ赤らめずに何をナチュラルに接しておるか！」

「やっかましい！」

咆哮とともに神の顔面に拳を叩きこんだ。

唸る豪拳が一撃で頭蓋を砕き、衝撃を中にぶちまける。

神は悲鳴すら上げられずに血しぶきとともに倒れ伏した。

押さえられた手の下からだくと赤い血が流れ出している。

神は十秒ほど悶絶したあと震える声で言った。

「ちよつ、ちよつと待て誠亜。いつもよりだいぶ強いんだが。お前手加減という言葉知っているか？」

神の言葉を見無視して誠次は両の拳を握り締める。

「お前に……」

ゆらりゆらりと神のもとへと歩みを進める。

ただならぬ気配を感じたのか神は顔を青ざめさせた。

後ずさる神の体を踏みつけ、誠次は悪鬼の形相で拳を振り上げた。

「お前にわかるか。女の子の裸を見ても全く、欠片も興奮しない自分に気付いた時の俺の気持ち……」

神は踏みつけられたまま顎に手をあてて言う。

「どうやら……精神が肉体に引っ張られているようだな」

「……………」

無言で神を見下ろす。神は少し息苦しそうに呻いた後、ム力つくくらい明るい声で言い放った。

「名実ともに風間誠亜の誕生だな！」

誠次は全体重を神を踏みつけている足に乗せながら腰を曲げて神の顔を覗き込んだ。

一転して天使のような微笑みを浮かべて口を開く。

顔立ちが整っているだけにさまになる。

だがその柔らかな微笑は安らぎではなく背筋を凍てつかせるような何かを感じさせた。

「あのな神。俺は生まれ持った自分に愛着がある。風間誠次でいたんだよ。例えば体を女に変えられても心だけは男であり続けたかったわけだ。それを踏みにじられて俺はとても怒っている。このままお前をゴキブリのように踏みつぶしてやりたいと思うくらいにはなさあ。何か俺に言っておきたいことはないか？言っておくべき言葉はないか？」

あくまで優しく告げる。

内容と裏腹な口調が返って威圧感を生んでいた。

神は冷や汗を流しながら真顔でひとしきり唸った後口を開く。

「ぬっ……神たる私をゴキブリに例えるとは。少々敬意に欠けるのではないか？」

誠次は笑顔のまま拳を振り上げ、

「そうか……それが答えかあああああ!!」

鬼の形相で振り下ろした。

「ぎゃあああああああ!!」

一撃では終わらず、連撃は続いた。

ひたすらに、ひたすらに穿ち、潰し、砕きつくす。

体力の続く限り誠次は拳を振り続けた。

ひたすらに打ち続け、少し息が切れたあたりでようやく拳を止める。

荒れた息を深呼吸で整えながら誠次は床の上の血達磨を見下ろした。

神は無残な姿でびくびくと痙攣している。

それを見て多少は溜飲も下がったのか、誠次はだいぶ晴れやかな顔で息を吐いた。

「まあ俺つてもともとソツチ系の欲が薄い方だったしな。まだそれほど深刻な事態にはなっていないだろう」

「なら何も……ここまで殴らんでも……よかったのではないか？」

血達磨の神がとぎれとぎれに言うが誠次はそれを鼻で笑った。

「ふん。俺もやられっぱなしじゃねえってことがこれでわかったろ。もう悪戯は」

「だが断る！」

誠次の言葉を遮って神は叫ぶと回転しながら飛びあがった。
着地するころにはもう既に傷がすべて治っている。

神は鋭くボーピングすると誠次に向かって言い放つ。

「たとえ殴られようと、私は面白いことのためなら動くことをやめないだろう！そしてお前もいつかそんな私の威光の前にひれ伏す時が来るのだ！そのときまでひと時の安息を謳歌するがいい！」

叫ぶだけ叫んで閃光を残して消えうせる。

テレポートかな何かを使ったのだろう。

それを見送った誠次はしばらくの間立ち尽くしていたが、かぶりを振って心底疲れたような声音で呟いた。

「いいや……もう寝よう」

第4話 お前に俺の気持ちかわかるか！？（後書き）

どうもすちゃらかんです。

主人公の体つきは、まあぶっちゃけるならSHADOW SKILLのエレ・ラグあたりをイメージしております。描けませんが。

挿絵は……途中で力尽きました。

湯の表面とか無理。

紙に鉛筆でガシガシ描いていたころの方がマシだった気が……

第5話 こんにちは森のクマさん

第5話 こんにちは森のクマさん

鬱蒼と生い茂る木々。

右を見ても左を見ても見えるのは木ばかり。

足元には草花に交じって木々の根が張り出し、歩く者の邪魔となっている。

誠次は今山に居た。

この麻帆良、学園の敷地内に山がある。

凄まじい学園都市である。

誠次はその山の中をどこか懐かしい気分で歩いていた。

「田舎の山を思い出すな」

感慨にふける誠次の後ろから空気を読まぬ声が響く。

「ぬう。虫けらどもめ。神にたかろうとは僭越至極。滅ぶがいい。そりゃそりゃ」

セーラー服に登山家が背負うようなごついリュックを背負い、何やら後ろで怪しげな踊りを披露している神を誠次はジト目で見やった。ひたすらに怪しい踊りだが効果はあるようで、神の少し前を飛んでいた蛾が突然力尽きたかのように落ちて行っている。

「お前虫が嫌いならなんでついてきたんだよ」

誠次の問いかけに神は体は踊りをやめないまま、首だけをこちらに向けて答えてくる。

その様は一言で言うなら異様だったが、この神については今さらである。

「なんか面白いことが起きないかと思ってな」

悪びれもせずと言う神に誠次はわざとらしく嘆息する。

「だったら虫ぐらい我慢しろよ」

踊る神をおいてけぼりに誠次は歩き出した。

気配から察するに神も一緒になって歩き出している。

視線だけで確認すると神は怪しい踊りを続けたまま器用に歩いていた。

「こんにちは……は……」

声をかけられ振り向くと、思い思いの動きやすそうな格好をした少年少女たちが歩いて来ていた。

男3人の女2人だ。

みな高校生ぐらいで背中にリュックをしょっている。

山岳部だかハイキング部だか、そんなところだろう。

彼らは一様に目をまん丸に見開いてこちらを見ている。
いや、こちらというより神をだ。

ダンディなおっさんがセーラー服を着て山に居たら誰だって驚く。
どこに居ても驚く。

おまけにそれが、この上なく怪しげな踊りを披露しているのだから
なおさらだ。

神は人の目があっても踊りをやめるつもりはないらしく、首から下
だけ踊りながらぐりんと首を5人組の方に向けた。

女の子たちの口からか細い悲鳴が漏れたがそんなことを気にする神
ではない。

「こんにちは」

神のあいさつに5人組はあいまいな笑みを浮かべると、逃げるよう
に誠次達を追い抜いて行った。

かなり濃く木が生えていることもあり、その姿はあつという間に見
えなくなる。

こちらが一体どう思われたかを想像すると気が重い。

誠次は万感の思いを込めて肺の中の空気を吐き出した。

「ため息ばかりつきおって、辛気臭い奴め」

聞こえてきた言葉に青筋が浮かぶ。

凶悪に笑みながら誠次は振り向いた。

「誰のせいだと思ってんだ？」

唸る誠次を無視して神は真顔で言う。

「歌でも歌ったらどうだ。なんだったら私が歌ってやろう」

「慎んで遠慮するよ」

心底嫌そうに返すが神はやはり無視して歌いだす。

「あゝるゝ晴れたゝひゝるゝ下がりゝまゝきゝばゝへつづゝく道ゝ」

「ドナドナかよ。その歌こそ辛気臭いじゃねえか」

半眼で告げ、誠次は振り向いた。

どこから出したものやらマイクを片手に熱唱する神に歩み寄る。

神の手からマイクをもぎ取ろうとした瞬間、静かだった森につんざくような悲鳴が響きわたった。

「なんだ！？」

驚く誠次に対し、神はあくまで冷静に言ってきた。

「足でも踏み外したか。あるいは何かに襲われたか。そんなところだろっ」

「ほつつておくのは寝覚めが悪いな。行こう」

誠次は神をおいて駆けだす。

足場の悪い森を飛ぶように駆け抜けた。

並び立つ木々が前から後ろへと流れるように駆け抜けていく。

誠次が駆ける間も悲鳴は続いており、方向を見失うということとはなかった。

一本の木をよけて抜けた瞬間少し開けた場所に出た。

そこに先程の5人組がいた。

必死の形相でこちらに向かって走っている。

それはまるで何かに追い立てられているかのよう。

訝しむ誠次にこたえるかのように、木々の壁の向こうから、一抱えもある木をなぎ倒しながら巨大な熊が現われた。

雄たけびと共に両腕を振り回して走ってきている。

啞然としてその様を見るが誠次はすぐに我にかえり、踵を返して5人組に並びながら叫んだ。

「なんで学内の山に熊がいるんだ！学園は何やってる！」

焦燥に満ちた誠次の声に能天気な神の声が答えた。

神もまた誠次の隣を走っている。スキップで。

「気づいていないんだろう。学園とてこんな広大な森のすべてを把握しているわけではあるまい」

「面白くなってきた、みたいな顔して言うんじゃないか！」

怒鳴りながら後ろを振り向く。

熊は凶暴な叫びを発しながら激走している。

（このままだと追いつかれるな）

冷静に判断する。

誠次一人なら普通に振り切れる。

だがこの5人組の足ではすぐに追いつかれるのは目に見えていた。ここに居るのが誠次だけ。あるいは誠次と神だけなら迷いなく振り切るところだが、あの熊の前に5人を置いて行く気にはなれない。

（適当に熊の気をひいてこいつら逃がすか）

考えて誠次はポケットに手をつ突っ込んだ。

何か熊の気を引けそうな物がないか探す。

携帯ぐらいなら入っているが他には大したものが入っていない。

肉の塊でもあればよかったのだが、そんなものを持って散歩する力はいいない。

石でも投げつけるか。

そう結論づけたところで隣を走る実に楽しそうな神の姿が目に入っ

た。

「肉の……塊……」

思わず口に漏らした言葉に神がびくりと身を震わせた、戦慄の眼差しでこちらを見る。

「お前……何を考えている？」

答える代りに走る神の前に足を差し入れてやった。

ただでさえ足場の悪い森の中。さらにはスキップなどという変な走り方をしていた神にそれがかわせようはずもない。

あっけなく転倒して、神は地べたに顔をうずめた。

「げ、外道ううううう！」

神の叫び声もあつという間に後ろに流れていく。

誠次はそれを無視して、少し前を息も絶え絶えに走る5人組に声をかけた。

「今のうちに逃げるぞ！」

誠次の言葉にリーダー格らしい少年が叫びをあげた。

「ちょっと待て！いくら変な奴でもあれはひどいんじゃないか！？」

なぜか非難され、誠次は心外だとばかりに口を尖らせた。

「俺だってひどい目にあわされてる。おあいこさ」

「いやだつてあれ死ぬだろう！」

後方を指差しながら叫ぶ少年に誠次は軽く鼻を鳴らして答えた。

「ふん、あれぐらいじゃ奴は死なんよ。むしろどうしたら死ぬのか知りたいくらいだ。ほれお前らもサクサク足を動かせ」

言う誠次に少年は戦慄を顔に浮かべながら言う。

「ほんとに……彼を見捨てる気なのか？」

恐怖をにじませた少年の言葉には答えず誠次は後ろを振り向いた。

「あれが人食い熊で腹を空かせて人を襲ったんなら神で時間が稼げるが、縄張りに入った奴を皆殺しにするために襲ったんならあまり効果はねえな」

「本気だあああああ！」

なぜか涙目になりながら少年が叫ぶ。

「グオオオオオツ！」

雄たけびが森に轟いた。

見れば後ろの方から熊が猛スピードで迫ってきている。

「チッ！神の奴では足止めにもならなかったか！ほれほれ、あんな怒り狂った熊に追いつかれたら死ぬぞ。死ぬ気で走れ」

少年少女たちはそれぞれ必死の形相でかけ続ける。
誰しも死ぬのは嫌である。

「こ、このままじゃあ追いつかれちゃうよおっ！」

5人組の一人、気弱そうな眼鏡の少女が悲鳴を上げる。
後ろを見ると熊との距離がだいぶ縮んでしまっていた。
誠次は荒々しく舌打ちする。

「神の奴め、いつもは鬱陶しいぐらいあっさり復活するくせに肝心な時には寝やがって」

「君って人は……」

リーダー格の少年がぞつとしたような声音で呟く。

だが実際問題これはピンチだ。

ふだんから山を歩いているであろう5人組も、熊に追われているという恐怖からか必要以上に体力を消耗しており、どんどん走るペースが落ちてきている。

石かなんかを投げ付けて自分に引き付けるというのも考えたが、一人と五人。熊がどちらを優先して潰そうとするかわかったもんじゃない。

意外と冷静に思考する誠次の視界から少女が一人消えた。

とっさに足を止めて振り向くと、先に悲鳴を上げた眼鏡の少女が木の根に躓いて転んでいる。

ようやく仲間たちも気づいたのか、振り向いて悲鳴を上げた。

少女のすぐ後ろに熊が迫っている。

もう一人の少女が目を手で覆い顔をそむける。

少年たちが恐怖で顔をゆがめていた。

そんな中リーダー格の少年が動き出す。

倒れた少女に向かって駆けだしたのである。

それにつられて残った少年たちも駆けだした。

いまどきなかなか根性のある奴らである。

それを感じるように見ながら誠次は意識を研ぎ澄ました。

「さて、こうなったら12年前の雪辱を晴らすのも一興か」

足に力を収束させ全力で地を蹴る。

一瞬で少年たちを追い越し、倒れた少女も飛び越えて熊に肉薄した。

熊は獲物は誰でもよかったのか即座に目標を誠次に切り替えて剛腕を振るう。

人の体など一撃で破壊するそれが空を裂くなか、誠次は腰だめに構えた拳を強く握った。

優に2メートル半はある熊の頭上で。

「一撃……」

強大な筋力に腕がミシミシと音を立てる。

いまだにこちらに気づいていない熊を見下ろしながら誠次は文句なしに渾身の力を込めた拳を撃ち放った。

「必殺!!」

大気を突き破る鋼のような豪拳が熊の頭蓋を打ち砕かんと唸りを上げる。

その瞬間、木々の間からなにかがすさまじい勢いで飛び出してきた。それはそのままの勢いで誠次にぶち当たる。

誠次とそれは空中で互いに弾きあうと同時に地面に着地した。

誠次はとびだしてきた人物を見て驚愕の声を上げる。

「お前……楓!？」

「待つでござるよ誠亜殿!その熊を殺してはならんでござる!」

そこに居るのは同じクラスの少女、長瀬楓だ。

誠次を超える長身。開いてるかどうかわからない糸目で、今は忍者のような服を着ていた。

楓は表情にわずかに焦燥をにじませて、熊と誠次を見つめている。

「この熊は本当は心優しい奴なのでござる」

誠次は仕草で五人組に行けと示しながら視線を熊に固定したまま毒づいた。

「現にこいつは人を襲ってるじゃねえか」

転んだ少女を支えながら少年たちが逃げ去っていくのを確認して、誠次は再び腰ために拳を構えた。

「きっと何か理由があるでござる。だから……」

訴えるような声に誠次はしばらく無言で熊を睨み、嘆息した。拳を解いて楓を見る。

「わかったよ。で、どうすんだ？」

楓の顔に安堵の色が浮かぶ。

楓は誠次の隣に並びながら、唸り声をあげている熊を見やった。

熊は動物的勘が何かで死の気配を感じ取ったのだろう。

眼前に居るのは自分を殺しうる存在だと。

襲い掛かりはせずにこちらを睨んでいる。

「まずは理由を突き止めないとならないでござる。でないと巣穴に戻してもまた出てきてしまうでござるう」

「理由ねえ。俺は熊の考えてる事なんぞわからんぞ。忍者の術にやあ動物の言葉がわかるやつでもあんのか？」

軽く冗談を含めて誠次が問うと楓はニンニンとかいいながら言ってきた。

「拙者は忍者じゃないでござるよ。残念ながら拙者も動物の言葉はわからないでござる」

忍者じゃないって。

しゃべり方も服も完全に忍者のまねしてるくせに忍者と呼ばれて否定するとは。

内心でつつこみを入れながら誠次は頭をかいた。

「どうすんだよ。あれか。死なない程度に痛めつけて人の恐怖を刻んで送り返すか？」

「それはむしろ悪化すると思うでござるよ」

そのとき熊を前に頭を悩ます二人の耳に謎のファンファーレが鳴り響いた。

ファンファーレが終わると共に声が森に響き渡る。

「お困りか！この外道め！」

あらわれたのはやはり神だった。

怒り狂った熊の前に置き去りにしてやったというのに怪我らしい怪

我はない。

まあこいつだしと勝手に納得しながら、誠次は答えた。

「なんだよ。俺のどこが外道だよ」

「熊から逃げる私の足を引っ掛けて転ばせておいて自覚も反省も無しか！」

外道と書かれた鉢巻きを巻き、外道廃絶と書かれた旗を背負って叫ぶ神を誠次はうるさそうに追い払う仕草をしながら、

「お前なら絶対死なないと思ったからやったんだよ。現にあの連中はむしろ俺をおとりにして助けてやろうかと思ったくらいだ」

ふいに肩を叩かれて振り向くと楓が驚愕に目を見開きながら神を指さしていた。

「せ、誠亜殿。そちらの御仁はいつたい……」

「気にするな。神という名の変態だ」

淡々と告げると楓は冷や汗を浮かべながらうなずいた。

「なるほど。カミ殿でござるか。拙者は長瀬楓でござる」

「うん？なんか違う気がしたんだが……気のせいかな。神だ。よろしく」

言って神はびしりとポーズをとった。

その瞬間楓がわずかに身を震わせて誠次の影に隠れるような位置に

半歩動いたのだが、神は気づかなかったのかどうでもいいのか、構わず続けた。

「何かお困りのようだな。助けてください神様といったら助けてやらんこともないぞ」

「寝言は放っておくとして、どうやって熊の暴れている理由を探る？」

無視されて神が不満そうにしているがやはり無視する。

楓も誠次にならって、というよりあまりかわりあいになりたくないのか神を無視して答えた。

「熊が人を襲う理由としては縄張りに入られたとか人に突然会って驚いたとかがあるでござるが、あの熊はそんなことでは人を襲ったりしないでござるよ」

「じゃあなんでだよ。言つとくが俺は熊なんて一度しか会ったことねえからわからんぞ」

「熊との意思疎通を図りたいのか」

割り込んできた声に誠次は振り向かずにああと答えた。

神は世間話でもするようなノリで続ける。

「ならこれで練習するがいい。そらちようどよくこんなところに小熊が」

振り向くと神が一頭的小熊を抱きかかえていた。

小熊は嫌そうに神の手の中で暴れるが、さして力を入れてる風もな

いのに神の手はびくもしない。

楓は横で口をぽかんと開けている。

誠次は震える声で問いかけた。

「お前……それどこから……？」

神は当たり前のように真顔で答える。

「うむ。少し前に偶然巣穴を見つけてな。興味本位で連れてきた」

三人ともに声を発さず沈黙が森を支配する。

楓も誠次も神も動かずににらみ合っていた。

風がざわざわと木々の葉を擦り合わせる音が森の中を闊歩する。

「はあーはっはっはっはっはっは！」

沈黙を破ったのは神だった。

神は突然身をひるがえすと高笑いと共に駆けだした。

小熊を抱えて。

「全部お前のせいじゃねえかあああああ！」

絶叫と共に誠次がその後を追う。

「ま、待つでござるよ！」

その誠次の後を楓が駆ける。

「グオオオオオオオオ！」

さらにその後ろを子供を見つけてさらに暴走した熊が追いかけた。

麻帆良の森を舞台に一大鬼ごっこが始まった。

「ちつくしょう！何であんな走り方であんな速いんだ！」

誠次は森の中を風の如く駆け抜けながら毒づいた。
相変わらず誠次と、小熊を頭上に掲げながらダカダカと変な走り方で駆け抜けていく神との距離は縮まる気配を見せない。

隣を楓が悠々と走っていた。

二人ともまるで平地を走るがごとく、木の根や岩の多い森の中を駆け抜けていく。

その速さは先程五人組とともに走っていた時とは比べ物にならず、すでに熊はだいぶ引き離されてしまっていた。

不機嫌に唸る誠次に楓が少し驚いたように言った。

「それにしても誠亜殿。なかなか速いでござるな」

「山で育ったからな。山歩きは得意な部類だよ」

答えると楓は少し困ったように呟いた。

「そういうことではないのでござるが」

誠次は、むかつく走り方で前方を走る神の背中を睨みつけながら舌打ちした。

「埒が明かねえな。楓。なんか手裏剣とかそういうのもってねえか。忍者マニアだろう？」

「忍者マニ……！」

絶句する楓を横目に誠次は不思議そうに問いかけた。

「なんだ。違うのか？ひょっとしてホントの忍者なのか？」

楓は何やら葛藤した後、少し悲しそうに答えた。

「に、忍者マニアでござるよ……はは……」

言いながら懷から数本のクナイを出す。

一転して真剣な表情になると、楓は鋭くそれを投じた。

空を裂くクナイが神へと飛来するが、神が強く地面を踏みつけるとなぜか畳がめくれあがりクナイを受け止めた。

それを見た楓が素っ頓狂な声を上げる。

「畳いっ！？なんでござるかあれは！？」

「細かいことは気にすんな！それがあいつと付き合っていくのに必要不可欠なことだ！」

「細かくないでござるよ！何で森の中に畳が！？」

言っている間も神はポケットからスイカ大の袋を取り出している。それを見た楓が啞然とした口調で言った。

「誠亜殿。今カミ殿のポケットからあり得ない大きさのものが出てきた気がするのでござるが」

「気にすんな」

言葉短に答えながら誠次は神を見つめた。神は袋のなかのものを地面にぶちまける。それは大量のビー玉だった。

誠次と楓は同時に跳躍した。

誠次は猿のように木々から木々に飛び移ってビー玉のばらまかれた地面を通過する。

楓はまさしく忍者の如く木々の枝の上を跳んでいた。

それを見た神は難しい顔で唸ると、リュックの中に手をつっ込んだ。そしてずりりと巨大なバズーカ砲を取り出す。むろんリュックに入る大きさではない。

「誠亜殿……」

「気にすんな」

同じ言葉を吐いて誠次は神のバズーカを睨みつけた。

神はダカダカと妙な走りで、しかも後ろ向きに走りながらバズーカを構えている。

小熊は神の頭の上で眠らされていた。

神の指が引き金を引くと同時に黒いネットが発射された。

捕獲用のネットを発射するバズーカだったらしい。

それを見るや否や誠次は地を這うような低姿勢で駆け抜けた。

飛来するネットを潜り抜ける。

楓はあっさりとネットを飛び越えている。

楓は前を走る神に向かって声を張り上げた。

「小熊を返すでござるよカミ殿！」

「はははははは！やなこつた！」

神はバズーカを投げ捨てながら返した。
そのまま妙な走り方で走り去っていく。

「なっ！なぜでござるか！？」

「その方が面白そうだからだ！」

「おもしろっ……！」

楓は絶句したあと、怒気を込めて言い放った。

「そんな理由で子を親から奪っていいと思っているのでござるか！」

そのことばに誠次は胸中で呟いた。

（……何故だろうな。いたってまともな反応のはずなのに新鮮に感じる）

だいが神に毒されているようである。

義憤に燃える楓に誠次は淡々と言った。

「あいつは説得しようとするだけ無駄だ。面白いことのためなら血みどろになるまで殴られても全く懲りない男だ」

「……厄介な御仁でござるな」

楓が呻く。

その間も神は何やらリュックの中を探っていた。

黒い球体をいくつもばらまく。

握りこぶしより二周りほど大きいその球体にはあからさまな導火線がついていた。

よく見ると『脱げ』と大きく書かれている。

「よける楓！あれはたぶん『脱げ爆弾』だ！爆風に当たると服を吹き飛ばされて裸にされるぞ！」

「なんでござるか！『脱げ爆弾』って！」

いいながらも誠次と楓は地を強く蹴って強引に加速し、爆弾を追い抜いた。

後ろの方で爆音がこだまする。

爆発の余波が誠次と楓の服と髪を揺らす。余波には服を飛ばす効果はないらしい。

「おのれちよございな！」

神は叫ぶと同時にまたリュックの中に腕を突っ込んだ。

そこから何かを取り出そうとして、張り出した木の枝にしたたかに頭をぶつけた。

疾走の勢いのままに転倒する。

「しめた！チャンスだ！」

誠次は駆けだした。

神は頭を押さえて悶絶している。

横では小熊が地面に放り出されてなおすやすやと眠っていた。

先に神を殴ろうかそれとも小熊を拾おうか。

一瞬意識をそらした誠次を衝撃が襲った。

突如として巻き起こった爆風に吹き飛ばされ、地面を激しく転がる。跳ね上がる土と引きぎられる草が誠次の服を汚した。

舌打ちともに起き上がると、いつの間に立ち上がったのか神が無様に地面に転がるこちらの姿をカシヤカシヤとカメラに収めていた。

神はこちらが体勢を立て直したのを見るとすぐさま熊を抱えて走り去って行く。

「大丈夫でござるか？」

問いかける楓にこちらに来ないよう仕草で示しながら自分の足を見下ろした。

長ズボンをはいていたのだが膝より少し上まで布が吹き飛んでおり半ズボンと化している。

誠次は憎々しげに言った。

「やられたな。おそらく『脱げ地雷』だ。このあたりに埋められているに違いない」

「『脱げ地雷』って……」

「後で回収させにやらんな」

楓は何か納得がいかないようであったが、結局言葉を飲み込んだ。今は神を追う方が優先だと考えたのだろう。

誠次が跳躍して木の枝の上に飛び乗ったのを見て、楓も木の枝に飛び乗った。

そのまま二人で枝から枝へ跳躍していく。

神の姿はもう見えなかった。

離された距離は誠次達が思っていた以上に大きかったらしい。結局行けども行けども神の姿は見えることはなかった。

森の中で二人で向かい合って頭を悩ませる。

「完全に見失ったな」

小石四つを片手でお手玉しながら誠次が言う。
楓も重苦しい顔で頷いた。

「早く探し出さないとまたあの熊が人を襲ってしまいかもしれないでござる」

「熊が撃ち殺されるのが先かもしれねえな」

淡々と告げた言葉に楓が少し非難するような視線を向けるが、結局何も言わずに押し黙った。
代わりに問いを口にする。

「何か心当たりはないでござるか？カミ殿の行きそうな所に」

誠次は静かに首を横に振った。

「別に付き合いが長いわけじゃないからな」

その答えに楓が落胆の吐息を吐く。

その姿を視界に納めながら、誠次はお手玉していた小石を全てつかみ取っていった。

掴んだ小石を手の中で握り潰し、

「だがやみくもに探しても日が暮れちまう。考えるしかねえな。畜生。考えるのは苦手なんだよな、俺」

言って誠次は空を見上げた。
木々の間から覗く青空を。

「野郎は面白いから、事態を面白くしたいからあの小熊を連れ去った。だから事態を終息させちまうようなことはしないはずだ」

「というと？」

「小熊を親のもとへ帰す。これもゲームエンドだ。それと同時に親熊が人里に下りて撃ち殺されても事態は終わっちまう。だから親熊が人里に下りそうになったら小熊を見せて誘導するなり、得意のゴッドパワーとやらで森に引き戻すなりするはずだ」

「なら親熊に張り付いていればいずれ現れるのでござるか？」

希望が見えたというように表情を少し明るくする楓に誠次は難しい顔で言った。

「うーん、どうだろうな。俺達が張り付いていたら直接姿を見せずに済むゴッドパワーの方をとるかもしれねえ。いっそのことなんもかんも無視して家に帰ったら野郎も飽きて小熊を親のもとに返すかもしれないねえ」

「それは少し無責任でござるよ」

非難する楓に誠次は頭をかいて嘆息した。
困ったように首をかしげていた楓は何か思いついたようにぽつりとつぶやいた。

「逆にカミ殿をおびき出すことはできないでござろうか？」

誠次は表情を引き締めて答えた。

「できないことも……ないかもな。野郎のことだ。何か面白い事が起こればそれを見に現れることは十分ありうる」

「面白いこと、でござるか。どういうことが面白いのでござろうか？」

腕を組んで首をかしげる楓の問いに、誠次は嫌そうに顔を歪めた。

「ドタバタ騒ぎ自体が好きな方だろうな。そのドタバタ騒ぎに巻き込まれて俺が苦労してるさまを見るのも好きなはずだ」

「そう都合よくドタバタ騒ぎがあるとは限らないでござるよ。あつたとしてもそれを拙者達が見つけられるとは限らないし、さらに拙者達の見つけたそれをカミ殿が見つけられるとは限らないでござる」

「それは……たぶん俺達が見つければどうにかなる。神の奴はたぶん俺達のことを何らかの方法で監視しているはず。面白いことを見逃さないためにな。だから俺達の周りで面白い事が起これば奴も気づくはずだ」

そこまで行って誠次は嘆息した。気乗りしない様子で言う。

「問題は楓の言った通りそうそう都合よくドタバタ騒ぎを見つけないってことだ。だから不本意ではあるが“俺達自身”がなにか騒ぎなり面白いことを起こした方がいい」

「むっ……漫才でもするでござるか？」

「そついうのは違うんじゃないかなあ」

誠次は切り株に腰を落としながら、楓は木の幹に背を預けながらも頭をひねる。

5分近くああでもないこうでもない意見を出し続けた。

そして何度目になろうか。楓が口を開こうとして止めた。

口に出すべきかどうか逡巡しているのが見て取れる。

しばらくして楓は決心したようで咳払いを一つした。

微妙に顔が赤くなっているのに猛烈に嫌な予感がしたのだが、誠次は止めずに聞くことにした。

「古来より敵の気を引くのに使われてきた方法があるでござるよ」

「ほっ」

楓はそこで一瞬口をつぐんで意を決したように言った。

「色仕掛けでござる。拙者と誠亜殿でえっちなことをしてるふりをすればカミ殿も出てくるのでは……」

「……………勘弁してくれねえか。わりとマジで」

「う、うむ。それがいいでござるな。拙者も自分で言っというてなんでござるがこれは無いと思ったでござるよ。それにすぐに演技だとはれてカミ殿はでてこないでござるっし」

誠次はそれに乾いた笑いを洩らしながら、

「いやたぶん出てくると思うぞ。演技だとわかった上で、恥ずかしいのを必死に我慢してエロ演技してる俺達を見て爆笑するために出てくるはずだ」

「……………本気でたちが悪いでござるな」

冷や汗を流しながら言う楓に頷きながら誠次は頭を抱えた。

「どうしたもんか……………」

「しかたない。片っ端からやってみるでござる」

「おお〜ロミオ〜」

「ジュリエット〜」

演劇。

誰もいない森の中で二人だけで演劇のまねごとをしている様子はこの上なく異様だ。そして事情を知っているものから見ればさぞや滑稽だ。

しかし効果なし。

「どうも〜誠亜です〜」

「楓でござる」

誰もいない森の中で漫才のまねごとを以下略。

「その時柱の影から……」

誰も居ない森の中で怪談大会を以下略。

「これもダメか」

6つ目ほどを終えて誠次は嘆息とともに声を吐き出した。
相変わらず神の出てくる気配はない。

楓の顔にもわずかだが疲れと焦りの色が見えた。

「誠亜殿。拙者思ったのでござるが。ひょっとしてカミ殿は先ほどの作戦会議を見ていて、拙者達が一番嫌がつているアレをやるまで出てこない気なのではござらんか」

誠亜は無言で目をそらした。

それは誠亜が気づいていながら気づかないふりをしていた可能性である。

「こうなったらやるしかないでござるよ。アレを」

「いや、他の手段を探そう」

額に汗を浮かべながら誠次は言うが楓は構わずにじり寄ってきた。

「誠亜殿。あの熊の親子を救うために力を貸してほしいでござる」

「いやなにも熊のためにそこまでせんでも」

楓が近づいただけ誠次は後ずさる。

「あの熊たちも友達なのでござる。それとも誠亜殿は熊ごとき死ねばよいと？」

「いやそこまで言わねえけど」

どしんと背中に響く感触。

振り向けば木の幹がそこにあった。

「さあ腹をくくるでござるよ」

「ちょ、ちょっと待て！」

「大丈夫。所詮ただの演技。ホントにするわけではないでござる」

「いやだから待って。まっ、キイイヤアアアアアアア」

突然聞こえてきたその音はまあ擬音で表すならパシャリという音だった。

それを耳にした瞬間、誠次と楓は一斉に振り向いた。

双方ともに微妙に顔が赤いのはエロいことをしてる演技などやはりこの上なく恥ずかしかったからである。

二人同時に声を張り上げる。

「神！」

「カミ殿！」

同時に音の源を見やって同時に凍りついた。

そこにいたのはカメラを構えた神……ではなくそれほど長くない髪を後ろにまとめた好奇心の塊のような眼をした一人の少女——朝倉和美だった。

朝倉は手の中のカメラで一心不乱にこちらの姿を撮りまくった後、感極まったように言う。

「くううう！まさかこんな劇的瞬間に立ち会えるとは！“四天王”の一角と謎の転校生の禁断の愛！これは近年まれにみる大スクープだよ！」

言って再び写真を撮り始める。

「ちよつと待てええええええ！」

その音に誠次と楓は同時に我に返った。

楓は誠次の上から飛びのき、誠次は腹筋の力で跳ね起きる。

「朝倉殿！？なぜここに！？」

若干裏返りかけた楓の声に朝倉はカメラのレンズ越しに楓の顔を見

ながら答えた。

「ん？なんかたまたま通りすぎたおじさんが、森の中でたった二人で演劇やら漫才やらやってる変なコンビがいるって話しててさ。スクープにならないかなあって思って場所を聞き出して来たんだけど。いやあ、もつとすごいもんが撮れたよ」

「神イイイイツー!!」

頭を抱えて絶叫する。

朝倉はそんな誠次の狂乱など気にもならないのかメモとペンを片手に生ぬるい笑みを浮かべる。

「それで二人はいつからそんな関係なの？なれそめは？一目ぼれ？それとも戦いの中で愛がってやつ？見た感じ楓っぽかったけどどっちが攻め？」

矢継ぎ早に繰り出される質問に少したじろぎながら楓が手を振る。

「朝倉殿。違うのでござるよ。これには深いわけが……」

「ふっふっふ。ダメダメ。ネタは上がってんのよ。この真実の探究者、朝倉和美に見つかったのが運のつき。さあキリキリはきなさい！」

「あれは演技だ！とある馬鹿をおびき出すための演技なんだよ！」
誠次の必死の叫びに朝倉はぱたぱたと気の抜けたうごきで手を振った。

「まあたまたあ。うそつくならもつとマシなウソつきなさいって。で、結局のところどうなのよ？」

「なぜ信じないいいい！？」

いつそ朝倉に当て身を入れて気絶させてカメラのデータを全消去するか、などと誠次が危険な考えに染まりかけたとき、爆笑が森に響きわたった。

「ブファツハハハハハハハ！」

見ると朝倉の後ろの方で腹を抱えて笑い転げている男がいた。服は普通のスーツになっているが間違いない。神だ。

その横では澄んだ瞳できょとんとこちらを見つめる小熊の姿。神は笑いすぎで苦しそうに痙攣したあと再び爆笑を響かせた。

「っ……っ……」

誠次の喉が張り裂けんばかりの叫びをあげる。

「つかまえろあああああ！」

絶叫とともに大地を蹴りつけた。

疾風すら凌駕するスピードで誠次の体が撃ち出される。

同じように、否、それを凌駕する速さで楓もまた疾走していた。

あわてて立ち上がった神が小熊を拾い上げるより早く、その心臓に熊を討とうとしたとき以上の力をこめて拳を叩きつけた。

神の体が弾丸の如く吹っ飛び、激突した木を一本へし折ってその向こうの木にぶち当たった。

すかさず楓の投じたクナイが神の服を木の幹につなぎ留め、さらに投じられた鎖鎌が鎖で神の体を木の幹に縛り付ける。

回転した鎌が神の頭の5センチ横に突き立つと神の頬を一筋の汗が伝った。

「あ、あんたらどうしたの？急に」

啞然とした声で朝倉が言うのを無視して誠次は指をバキボキならして神に歩み寄る。

その顔にはいわゆる“殺す笑み”が浮かんでいた。

「やってくれたなあ神い。どうなるかわかってんだよなあ」

「誠亜殿それは後にするでござる。今は小熊を親のもとに帰するのが先決でござるよ」

楓の言葉に舌打ちして誠次は拳を引つ込めた。

楓は小熊を抱き上げてあたりを見回す。

「さて、問題は親熊がどこにるかでござるな。人里に下りてなければ良いでござるが」

心配そうにいう楓に誠次は軽く微笑んで首を振った。

「いや心配いらねえよ。……来た」

誠次の言葉に応えるように木々の間からのっそりと親熊が姿を現す。

「く、熊！？」

大きな驚愕とわずかな恐怖の声を上げながらも朝倉はカメラをクマに向けている。

熊は低いなり声をあげながらゆつくりとこちらに歩み寄ってきた。その眼には強い警戒の色が窺える。無理もない。

こちらには礫になっているとはいえ、小熊をさらった張本人と親熊本人を殺しに飛びかかった者がいるのだ。

小熊を抱いて歩みだす楓の背に声をかける。

「気をつけるよ」

しかし楓は穏やかな笑みを浮かべながら首を横に振った。

「心配いらないでござるよ」

ゆつくりと熊の前に立つ。

そしてそつと小熊を地に下ろした。

親熊は鼻を小熊にすりよせると、一声鳴いて踵を返した。

小熊を連れて森の中へと戻っていく。

木々の合間に消える直前、一度だけ振り返り、頭を下げて去っていく。

「これで終わりだな」

「うむ。助かったでござるよ誠亜殿」

互いに笑みを浮かべて握手する。

記者根性か一部始終を写真に収めていた朝倉は納得がいかないように問いを發した。

「んー？なにになに、つまり何がどうなってるわけ？」

その問いに誠次は口元に凶笑を刻み、神の頭をわしづかみにした。

「つまりこの馬鹿が、興味本位で熊の巣穴から小熊を連れ出し、怒った熊が暴れると騒動の激化を望んで小熊を連れて逃走し、撒かれた俺達が奴をおびき出すためにいろんな演技をし出したのを見てそれとなくあんたに知らせ、あんたに見つかって慌てふためく俺達を見て楽しもうとしたんだよ！」

ちなみに言葉の区切りごとに腕に入れる力を増している。

終わるころには神の頭蓋がメキメキと危ない音を立て始めていたが咎める者はいなかった。

誠次は黒い殺意を背負いながら朝倉に目を向ける。

「朝倉あ。まさかさっきの俺達の演技を真実であるかのように記事にしたりしないよなあ」

朝倉は微妙に顔を青ざめさせながら、

「あっははは。誤報とわかっててそれをそのまま記事にはしないよ。あたしは記者。真実を伝えるものだからね」

言って朝倉はカメラを構えた。

「まあインパクトは減っちゃうけどちょっといい話的な記事のネタ

にはなるし、あたし的にはそれで満足しておくとするわ。ねえちよつとその犯人の顔も撮つときたいから手をどけてくんない？」

いわれて誠次は仕方なく手をどけた。

アイアンクローから解放された神はカメラを向けられているのを見て、とりあえず何も考えずに凜々しい表情を作る。

それを呆れた顔で眺めていた誠次に楓が声をかけた。

「何やら大変なようでござるな。もし困った事があつたら拙者を頼つてくれていいでござるよ。拙者達は同じクラスの仲間でござるから」

「ああ。よろしく頼む」

笑みを浮かべて言う誠次。

傾きかけてオレンジ色の混ざり始めた日の光が二人の顔を照らしていた。

「うむ。すべて一件落着であるな。きれいに終わったようだし、そろそろこの鬱陶しいクナイと鎖鎌をどけてくれてもいいぞ」

自分のやったことの責任をなんら感じていない声で尊大なセリフを吐く神に誠次が振り返った。

天使のような微笑みとともに拳を握る。

「お・ま・え・は・もう少し反省しろおおおおお！！」

咆哮とともに拳打の嵐が荒れ狂う。

魔帆良の森の中に悲鳴が響き渡った。

後日。

朝倉和美の部屋。

「あつれ〜。あのカミって人の写真だけピンぼけてる。どうなってんだろ？」

第6話　こだわってます

第6話　こだわってます

最近桜咲刹那に嫌われている。

いやもともと嫌われていたのだがその度合いが酷くなったような気がするのだ。

ふと視線を感じて振り向くと彼女がこちらを睨んでいることが多々あった。

この前の脱衣所での遭遇以来視線がきつくなったようにも感じる。

何が気に入らないのか。

まあ男がクラスメートにいるのが気に入らないのだろうが、それにしてもやはり気になるものは気になる。

体育のための着替えのときも当然睨まれたし、なぜか体育をしている最中も睨まれた。

意外に多いのが、

「誠亜おはよ〜」

「おう。おはよう」

誠次はこのかの挨拶に応えながら、振り向いた。

こちらを睨んでいる刹那と目が合う。

そう、意外に多いのがこのかと話しているときにこちらを睨んでいるパターンだ。

「なあこのか」

このかと呼びとめる。

刹那の視線がさらにきつくなるがここは無視した。

「なに？」

「このかってひょっとして刹那と知り合いか？」

そう問うとこのかは少しだけ寂しそうに笑う。

「うん。そうやよ。幼馴染……みたいなもんや。せっちゃんがどうかしたん？」

まさかお前と話してるときいつも睨んでくるんです、とは言えない。いや別に言ってもいいのだがここは言わないでおく。

「いや、なんでもねえよ」

手をパタパタと振るとこのかはそうといって自分の席に向かっていった。

もう一度刹那の方を見るとすでに視線をそらしていた。

（なるほどねえ。幼馴染に悪い虫がつかないよう見張ってるわけだ）

確かに男であるのに女であると偽ってここにいる現状は、皆を騙し
てると言えなくもないのだが、正直自分の意志ではないので勘弁し
てほしいところである。

誠次が嘆息していると陽気な声が響いた。

「おーっす、誠亜！今日も力チ力チかー？」

次いで軽い衝撃が腹に走る。

「よーし！今日も力チ力チだー！」

「お、お姉ちゃん。駄目だよ」

挨拶代りに腹にパンチを打ち込んできた少女に誠次は苦笑しながら
口を開いた。

「おはよう史香、風香。それと毎朝人の腹にパンチくれるのはやめ
てくれないか」

風呂場で誠次の筋肉質な体がみんなに騒がれて以来、この少女は毎
日誠次の腹にパンチをしてくるようになった。

こんな小さな子のパンチなどそれこそ痛くも痒くもないが一応言っ
ておかなければなるまい。

まあどうせすぐに飽きるだろうから誠次もあまり強く言っていない
のだが。

案の定鳴滝姉妹はこちらの注意などどこ吹く風で自分の席へと駆け
て行った。

誠次も自分の席に向かう。

たどり着くと誠次の椅子が倒れていた。

まあ騒ぎも多いクラスだ。

誰かが引っかけて倒したんだろう。

誠次は無造作に倒れた椅子を蹴り上げる。

椅子はくるくると回転し、綺麗に足から着地した。

鞆を机の上に放って椅子にどっかりと腰を下ろす。

「おお〜」

周囲から小さな歓声が沸き起こる。

別に格好つけようとしたわけじゃなく、かがむのが面倒くさかった
だけなのだがまあいいかと適当に手を振っておく。

ふと強い気配を感じて振り向くと刹那がまたこちらを睨んでいた。

別に今のは睨まれるようなことじゃないと思うのだが。

（なんなんだろ。ホントに）

おおむね良好な新しいクラスでの人間関係で一番の問題といえるだ
ろう。

『なにやら嫌われているようだな』

頭に響く神の声。

まあ正直言って刹那の問題などこっちの問題に比べれば小さなこと
ではあった。

『余計なことすんなよ』

釘をさすように告げる。
だが神は不敵に笑うと

『余計なことなどせんよ』

『訂正する。 なにもすんな』

『はっはっはっはっは』

神は笑声を響かせる。

まったくこちらの言うことを聞く気のない神に嘆息しながら誠次は窓の外を眺めた。

今日の天気は曇り。

薄暗い灰色の曇天が誠次の気分をさらに落としていた。

眼の前のテントを眺め、誠次は首をかしげた。

魔帆良の森の中の一部。川に面したそこには緑色のテントが張られていた。

誠次は周囲を見回して嘆息した。

本来森や山は好きな部類なのだが、ここにいると先の楓とクマの一件を思い出してしまうのだ。

クマに追いかけられたり、神を追いかけたり。

まあそれは問題なかった。

問題は神をおびき出すためにしたアレである。

あのエロ演技は容赦なく誠次の心を抉ったのだった。

美人である楓のエロい姿に興奮したり気まずさを覚えたわけではない。

それならどれだけよかった事やら。

たとえば体を女にされようと心は男であると信じている、というか信じた誠次にとって、あの姿を見ても反応しない自分を認めるのは多分に苦しいことだったし、ましてやエロいこととしている女性の真似をするなど男としての自負をプライドをゴリゴリと金やすりで削り落すようなことだった。

誠次はかぶりを振って忌まわしい記憶を追い払った。

気分を変えるように隣で道具を並べているダイゴに問いかける。

「なんだって急にキャンプなんだ？」

問われてダイゴは顔をあげた。

恐れを含む眼差しで顔を川の方、しいては学園のある方に向ける。

「今日、姉貴が魔帆良の友達んちに来てんだよね……」

「あー」

それだけで誠次は理解した。

ダイゴは実の姉を大の苦手としているのである。

須藤麻美。

正確な年齢は知らないが（聞くと怒るのである）見た目からしてダイゴとそれほど年は離れていないように見えた。

もつともダイゴの母も20代にしか見えない驚異の若々しさを持っているのであまり見た目は参考にならないが。

彼女の恐ろしさは人をおちよくるのが大好きだということである。

さんざん麻美が飽きるまでおちよくられ続けるつらさは同じく神におちよくられている誠次はよくわかる。

おまけに神は振り回された恨みを拳で返せるが麻美の場合はそうもいかない。

もうひとつの恐ろしい点は彼女が大の酒好きでなおかつダイゴや誠次にも無理やり飲ませようとすることである。

彼女に付き合わされて倒れるまで飲まされた次の日の二日酔いは誠

次達にとって忘れられない悪夢である。

「あんのじょう『今日みんなで飲むからあんたも来なさい』ってさ。それでとっさに今日はキャンプするから遠慮しとくって答えたわけさ。言っただけでキャンプしないとあとでどうなるか分かんないしねえ」

言っただけでダイゴは手の中で包丁をくるりと回した。

誠次は袋の中の食材を覗いて呟く。

「キャンプだつてのにえらい材料豊富だな。調味料まで持ってきて」

「やるからにはしっかり作らんと気が済まないからね」

妙なところで凝り性な友人に苦笑しながら誠次はあたりを見回した。ある一点を見つめて眉をしかめる。

（気配が三つ。一つは……このかに似てる気がするが）

すでにあたりは暗くなっている。

一概には言えないが女子中学生が森を出歩く時間ではないことは確かだ。

気のせいだとスルーしてもいいが、放っておいて何かあったら寝覚めが悪い。

「ダイゴ。俺、少し散歩してくるわ」

「うーい。あんま遅くなんなよ。先食っちゃうからな」

「そうならないよう努力するぜ」

軽口を叩きながら地を蹴る。

ダイゴから見えないところまでくると誠次は一気に加速した。

風のように気配を追って夜の森を駆け抜ける。

光は木々の枝葉に遮られ、外以上に暗くなっていた。

幸い誠次はわりと夜目の利く方なので木の幹に激突したり、根に躓いたりすることもなかったが。

気配はあまり速くないようで、簡単に距離が詰まっていく。

これで相手が楓並みの敏捷性の持ち主だと追いつくのも一苦労なのだが、この気配は正直遅い。

誠次は闇の中を駆ける人影を見つけると木々の枝に飛び移った。

人影の視界に入らないよう、枝を飛び移って人影を追い越す。

眼を凝らしてみると、見慣れない男がこのかを米袋のように担いで走っていた。

黒髪黒眼の青年で平凡な顔立ちをしたいまいちパツとしない男である。

陰陽師のような独特の服を身にまとっているが、正直服に着られている感がある。

もう一人は

（ガキかよ！）

もう一人は年端もいかない少女だった。

7、8歳程度だろう小さな少女だった。

長くのびた金髪はぼさぼさで、着ている服もかなりぼろぼろである。身なりを整えればそれなりに可愛いのだろうが今はひたすらに貧相

だった。

そして何より特徴的なのは頭の上の大きな耳だ。

俗に言うネコミミがついていた。

しかもピヨピヨ動いている。

作りものでないのは明らかだ。

あれだけ生物的な動きをしていながら作りものだった場合、そのくだわりに驚愕するところだが。

普通の人間にはネコミミなど生えてはいない。

すくなくとも誠次の知る限りではそんな人間はいなかった。

つまり彼女は……

(……ぶっちゃけどうでもいいや)

誠次はそう切って捨てると彼女らの動きに意識を戻した。

少女は気の強そうな猫じみた目つきで油断なくあたりを見回している。

もつとも油断なくといってもこれだけ近くにいた誠次に気づけてないあたりまだまだだが。

このかは意識がないようではぴくりともしない。

パツと見誘拐であるが、それならこんな子供を連れてくるのも妙な話だ。

誘拐のエキスパートとしてでも育てる気だろうか？

訝しげに見下ろす誠次に気付かず男が口を開く。

「ククク、関西呪術協会の長の娘。そしてこの膨大な魔力。これでオレも上にのし上がれるというものだ。見ているがいい」

悪役決定。

あからさまである。

誠次は嘆息しつつ枝の上から飛び降りた。

唐突な登場に二人は驚愕の眼差しでこちらを見る。

つたないながらも拳を構えて戦闘態勢をとる少女にやりにくさを感じながら誠次は口を開いた。

「こんな時間に女の子がついでどこ行くつもりだ？俺にはあんたらがこのかを誘拐しているように見えるんだがな」

男は「見られたからには死んでもらう」とか言ってくるのかと思いきや突然人のいい笑顔を浮かべると、

「いやあゝじつは森の中でこの子が倒れてるのを見つけてね。交番に届けに行く途中なんだ」

少女が困惑した顔をするのを無視して誠次も笑みを浮かべて答えた。

「そうかゝそりや御親切にどうも。このかは俺のクラスメートでね。俺が彼女の部屋に連れ帰ってやるよ」

男は額に汗を浮かべながら視線をきよろきよと巡らせた。

「いやいや発見者として最後まで責任持って運ばせていただくよ」

「おやおや。そっちは森の深部だぜ。交番目指すなら逆さ」

「いやこれはうっかり。すまないね」

言って男はこのかをかついだまま誠次の指差した方向へ歩き出した。誠次もそのあとに続く。

男は一瞬嫌そうに顔を歪めると、また温厚そうな顔を取り繕った。

「べ、別についてきてくれなくても大丈夫だよ」

「いやあんたほつとくとまた迷いそうだからな」

「大丈夫さ！こう見えても方向感覚はいい方なんだ。というか君についてこられると困……いやなんでもない」

「さつき思いつきり方向間違えてたばかりじゃねえか」

「いやあれは」

おろおろと挙動不審になりながらも言いつのる男に少女が声をかけた。

「なあ……いつまで続けるんだ？」

男は焦燥に満ちた声で口元に人差し指をあてる。

「シーツ！何を言うんだ！せつかく騙せてるってのに」

「いや騙せてないよ。あの兄ちゃんどんどん馬鹿を見る目になっていってるもん」

男は心底驚愕したようにこちらを見る。

誠次はそれに頬を掻きながら答えた。

「いや。あわせてやったらどこまで行くのかなあと、興味がわいてな」

多分に呆れを含めて言ってやると男は震える声で呟いた。

「ば、馬鹿な。オレの完璧な演技を見破るとは。貴様何者だ？」

誠次は小さく嘆息すると半眼で告げた。

「あんな演技と穴だらけの嘘で切り抜けられると思ってたことが驚きだよ」

男は舌打ちすると踵を返して逃げ出した。

肩越しに少女に向かって叫ぶ。

「ティー！時を稼げ！もちろん倒してしまっても構わんぞ！」

そのまま走り去っていく。速くはないがまあ一人抱えているのだから仕方ないこともある。

誠次は追いかけてようとして足を止めた。

割り込むようにティーと呼ばれた少女が誠次の前に立ちふさがっている。

誠次は頭をかくとティーに語りかけた。

「あー。どいてくれないか？」

ティーは右拳を引いた姿勢で誠次を睨みつけると敵意に満ちた声音で言う。

「それではいそですかと引けるもんか！」

取りつく島もない返答に誠次は言い含めるように言った。

「あのな。誘拐は立派な犯罪だ。悪いことはしちやいけませんって親に習わなかったのか？」

「親なんか顔も知らないよ！」

「……そりゃ悪かった」

叫ぶティーに誠次は素直に謝罪する。

ティーはきつい眼でこちらを睨みながらじりじりと間合いを調節している。

その眼に実戦への恐怖が宿っているのを見て誠次は心の中で呻いた。

（やりずれえ……）

年端もいかない少女、それも素人氣味なのを相手に戦うなど正直気分が悪い。

相手がナイフなり銃なり持っていたならこつちもある程度割り切れるのだが、この少女は無手である。

こんな小さな少女のあんな細腕で繰り出された攻撃など正直問題にもならない。

負けることはないだろうが、こんな幼女をぶん殴るなど寝覚めが悪すぎる。

「なあ。お前じゃ俺には勝てんよ。怪我したくなかったらそこをどいてくれ」

だがティーはかたくなに道を譲らず怒声を上げてきた。

「うっさい！この仕事に成功したらいっぱいお金がもらえるんだ！そうしたらおなかいっぱいご飯が食べられる！もっと仕事してもっと稼げば屋根のある家に住むのだって夢じゃなくなる！」

誠次は絶句するとともに拳を握りしめた齒を噛みしめて胸中で絶叫する。

(やりずれええええええええ！)

今のセリフでティーがどれだけ不憫な状況に居るのかわかってしまった。

この少女をはっ倒し、このかを奪還するのはそう難しいことじゃないだろう。

だがそうすればティーはもとの生活に逆戻りである。

といってもこのかを渡すわけにもいかない。

（結局のところどっちを選ぶかってことだ）

黙考する。

そしてすぐに答えを出した。

見ず知らずの少女よりクラスメートのこのかをとる。

ティーは別にもとに戻っても死ぬわけじゃないしチャンスが消えてなくなるわけじゃない。だが、このかは連れてかれたらどうなるかわかったもんじやないのだ。

誠次は意識を引き締めてティーを見据えた。

「悪いがどかないんならはっ倒して行くぜ」

だがティーは不敵に笑うと拳を突きつける。

「あたいをそこらの子供と一緒に見てると痛い目見るぞ」

誠次は無造作に踏み出した。

この少女が何をしても対応できるという自信からである。

無防備な姿に馬鹿にされたと感じたのかティーは目を細めて誠次を睨んだ。

次の瞬間、ティーの体が残像を残すほどのスピードで弾きだされる。そのスピードのまま驚愕に目を見開く誠次の腹に渾身の一撃を叩きこんだ。

衝撃が誠次の体を貫き、その体を吹き飛ばす。

誠次は5メートル近く地面を滑り、一抱えほどある木の幹に激突して止まった。

衝撃に舞い落ちた木の葉を払いながら誠次は呻く。

「つつ〜。信じられん。何だ今のは。ガキのパワーじゃねえぞ。いや力を使っただんならこれぐらいいくか」

誠次は殴られた腹をさすりながら、ティーを見やる。その幼い体から“力”が立ち上っていた。

「っーか。その幼さでよくもまあ……」

感心したように言う誠次にティーもまた驚愕の面持ちで誠次を見つめた。

感情のままに叫ぶ。

「あ、あたいのパンチを腹筋締めて受け止めた！？何食ったらそんななるんだよ！？」

誠次は軽く胸を張りながら真顔で言った。

「たゆまぬ鍛錬のたまものだ。お前も本気で鍛えりやこれぐらい」

「なるかつ！」

ティーは大きくかがんでクラウチングスタートじみた体勢をとると、
獰猛に唸った。

だが残念ながらその気迫はライオンには届かず猫どまりだ。

「くつそー！もう一発ぶち込んでやる！」

ティーの足元に力がたまっていく。
それを感じ取りながら誠次は拳を構えた。

「一撃……」

ティーが雄たけびを上げる。

「突撃い！」

再びティーの体が残像を残すほどの速度で撃ち出される。
今度は軌道が若干高い。

こちらの頭を狙っているんだろう。

誠次は冷静にティーの動きを見ながら踏み込んだ。

「必倒！！」

叫びとともに拳を突き出す。

拳はティーの鳩尾に突き刺さり、彼女の小さな体を容赦なく吹き飛ばした。

悲鳴も上げられず5メートル以上吹き飛んで地面に転がる。

相手は子供。

大怪我させないよう手加減はしたがさりとてすぐに動けるほど手を抜いてもいない。

見ればティーは身を貫いた衝撃にひきつるような息をして身を震わせていた。

少しすると苦しげに咳きこみだす。

幼い少女が地面にうずくまって激しくせき込む姿にやはり罪悪感がつのる。

（いや俺の技は一撃必殺。強めに打ちこまにやなんのだ）

自分に言い聞かせ歩みを進めた。

ティーの横を通り過ぎる。

走り出そうとして、足を引つ張られる感触に足を止めた。

見下ろすと苦しげに咳こみながらティーがこちらの足を掴んでいた。

「ゴホッ。行かせない……ご飯……お家……ゲホッ」

痛みと苦しさのためかボロボロと大粒の涙をこぼしながらティーは誠次を睨みつけた。

(や……やりずれえ。やりずらすぎる)

誠次は頭を抱えたい衝動にかられながらも足を強引に動かした。

「攻撃食らって泣くくらいなら戦いなんてすんじゃねえ。お前にやまだ早いんだよ」

言って足をつかむ腕を振り払おうとした瞬間、夜の闇を引き裂くような叫びが響いた。

「うわあああああ!!」

誠次の体が浮遊感とともに加速する。

視界が回転し、衝撃が全身を襲った。

ティーに投げ飛ばされて木に叩きつけられたのだと誠次が理解した時には、ティーが全身のばねを使った突きを放ってきていた。

誠次は身をよじって突きをかわす。

空を切った拳は後ろの木を挟って止まった。

木の幹を蹴って距離をとった誠次は驚愕とともにその小さな少女を見つめた。

「なんちゅう頑丈さだ。力を使える奴はこんなに頑丈なのか」

ティーは相変わらず、というか先ほど以上に号泣しながら誠次を睨みつけていた。

「ぶっ飛ばしてやるうっうっう!!」

雄たけびとともに殴りかかってくる。

力を纏っているためそれなりの速さだが先ほどまでの突進技は使っていない。

問題なく回避できるレベルだ。

誠次は半身になってティーの拳をかわすところりと振り向いた。

着地に失敗して転びながらもティーは俊敏な動きで起き上がり再び誠次に殴りかかる。

誠次は闘牛士のようにひらりとかわした。

「かあわあすうなああー！」

「そついわれてもなあ」

感情のままに突撃しているだけなのでかわすのはわけない。

十度ほどかわしたところでティーは動きを止めて叫んだ。

「まじめに戦え！反撃してみろお！」

涙まじりに叫ぶティーに誠次は腕を組んで唸ると目をかっと思開いて叫んだ。

「断る！俺は二撃目は打ち込まん！」

わけのわからないことを聞いたショックかティーはきょとした顔で誠次を見詰めた。

それを見て誠次は高らかに叫ぶ。

「俺の拳は一撃必殺！一撃で仕留められなかったならそれは俺の負け！俺とお前の戦いはお前の勝ちだ！」

呆気にとられたティーはぼうとした口調で呟いた。

「あたいの……勝ち？」

誠次は大きく頷くと、

「うむ！悔しいがお前の勝ちだ！」

ティーは涙をぬぐうと晴れやかな笑顔で言った。

「じゃあお前はもうくらいあんとを追わないんだな！？」

誠次もまた笑顔で応える。

「それとこれとは話は別だ」

「え？」

動きを止めたティーを置いて誠次は跳躍した。

叫びながらあつという間に森の中へと消えていく。

「はーっはっはっはっは！待ってるのか！今俺が行くう
！」

「ちょ、ちょっと待て！何だそれ！めちゃくちゃだぞ！」

ティーも叫びながら誠次の後を追って駆け出した。

障害物の多い森の中を風のように駆け抜けていく誠次とは対照的に
ティーはたびたび躓いて転びながら走る。

眼尻に涙を浮かべながら必死に走るがあつという間に誠次の姿は見

えなくなつた。

「バツカヤロー……！」

夜の森に幼い少女の怒声が響き渡るのだった。

第6話　こだわってます（後書き）

どうもすちゃらかんです。

今回はちよつとバトルです。

作品初バトルで7歳児に敗北した主人公。それでいいのか？

誠次の戦士としてのキャラコンセプトは『相当強いはずなのになぜだかなかなか勝てない奴』です。

一撃必殺にこだわすぎるところは前に描いてたオリジナル漫画のキャラからもってきました。

毎回できる限り絵を入れていこうと思ったのですが、だんだん絵を描く余裕がなくなってきました。

まあそれでも読んでくれてる方々もいることですし最後まで行こうとは思ってるのですが。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

第7話 風魔小太郎（前書き）

挿絵を描いたらこちらに、という考えていたのですが、なぜだかも一つのサイトで作者メニューに全く入れなくなってしまうているので、直るまでこちらを主に投稿していくことにします。

放っておけば直るかと思い、静観していたのですが前話から一カ月たってしまいましたし……

第7話 風魔小太郎

第7話 風魔小太郎

このかを連れた陰陽師を見つけると、その周りには3体ほどの鬼としか形容できない生き物がこん棒や剣など思い思いの武器を持っているのが見えた。

常人では到底かなわぬ破壊と恐怖の象徴を前に誠次は口元を釣り上げた。

凶笑を浮かべながら間合いを詰めていく。

（6年前の借りを返してやるぜ）

接近するこちらに気づいたのか鬼たちが武器を構えてこちらを見た。だが誠次は構わず地を蹴って己の体を加速させる。

鬼たちの反応でようやく気付いたのか陰陽師はあわてて鬼たちの後ろに隠れた。

慌てるあまりこのかをとり落す。

どさりと音を立てて倒れるこのかの姿を見て誠次は熱くなっていた頭が冷えて行くのを感じた。

自分に言い聞かせる。

（落ち着けて。今はこのかの救出が優先だ。だいたいこの鬼たちは6年前のとは別もんだろうに）

鬼たちまであと2メートル。

鬼が自分の身長ほどもある棍棒を振り上げる。

だが誠次はそれが振り下ろされるより早く跳躍して木の枝葉の中に飛び込んだ。

誠次の姿を見失い、鬼たちは陰陽師を中心に円形に並ぶ。

きよろきよろとあたりを見回す鬼たち以上に周囲を確認しながら陰陽師がこのかを拾おうとする。

その瞬間、木々の中、陰陽師の真上から誠次が飛び出した。

腰だめに構えた拳を陰陽師に向かって叩きつける。

「一撃い必殺!!」

叫びとともに突き出された豪拳は大気を裂いて陰陽師に迫る。

陰陽師は声も上げられず、眼をまん丸に見開いてこちらを見ていた。

剛拳が陰陽師の頭を砕く寸前、一枚のお札が間に入り込んだ。

お札は拳を受け止めようとしますが、誠次はさらに力を込めてむりやり拳を叩きつけた。

陰陽師の体が地面に叩きつけられて跳ねる。

誠次は呆気にとられた鬼たちを尻目にこのかを抱きかかえた。

我に返った鬼たちが武器を構えるが、誠次の抱きかかえたこのかを見て動きを止める。

誘拐対象を殺すわけにはいかない。
だがこのままでは攻撃ができない。
その一瞬の逡巡を利用して誠次は鬼たちの間をすり抜けた。
慌てる鬼たちが陰陽師の方を向く。
おそらくあの陰陽師が主人か何かで指示を仰いだのだろう。

誠次は内心でほくそ笑んだ。

（いいの入ったから動けねえよ）

「追え！逃がすんじゃない！」

あの陰陽師の怒声が響く。

（あれ？）

誠次が不思議そうに振り向くと陰陽師は頭から血を流してふらふらしながらも普通に立って鬼たちに指示を飛ばしていた。
どういう原理で動いてるのか知らないが間に割り込んだあのお札で
だいぶ拳の威力が削がれていたということか。

人一人抱えているというのに誠次は飛ぶように森を駆けて行っただ。
このかの体で足元が見えないのだがそれを感じさせない安定した走りである。

一方鬼たちはその体の大きさが災いしてか木々の枝が邪魔になって
思うように走れないでいた。
追いつかれる心配はなさそうである。

3分ほどしたところには鬼たちの姿はとっくに見えなくなっていたし、
気配もだいぶ遠くなっていた。

このか救出作戦はおおむね成功といったところか。
だが誠次は視線を前に戻しながら嘆息した。

「また一撃で仕留められなかった。これで0勝4敗0引き分けか。
人生初白星はいつになるのかねえ」

呟きは風に流れ、夜の森に消えていく。

誠次はかぶりを振ると呟いた。

「さてこれからどうすりゃいいんだろ。ただ連れて帰るだけじゃ
ま狙われる危険があるからなあ。やっぱ警察かな」

誠次は足を止めぬまま思索し、結論に達した。ぽんと手を叩こうと
して両手がふさがっているのを思い出す。

「とりあえず森を出て人目のあるところに行こう」

言って誠次はさらに加速した。

ダイゴのキャンプ地点の近くを通らないよう迂回しながら、またあ
の鬼たちがそちらに間違っついていかないようわざと強く地面を踏ん
ではつきりと足跡を付けながら走る。

しばらくして行く先にまた人の気配があるのを感じた。
気配の数は一つ。

何となくティーの顔が浮かんだが誠次は否定した。
ここは誠次がティーを撒いた場所とはだいぶ違う。
少し慎重に迂回しながら気配を探る。

「……………これは……………刹那か！」

確か刹那はある程度魔法などのことも知っている裏側の人間である。手を貸してもらおうと誠次は木々の間を抜け、刹那の前に飛び出た。

「よう刹那……」

口を開いてすぐさま止めた。
いや止めざるを得なかった。

あろうことが突然刹那が手に持った長大な野太刀を抜き放ちざまに切りつけてきたのだ。

すんでのところで跳躍した誠次は刹那の頭をとびこえ、背後に着地した。

誠次が何か言う前に刹那は振り向きざまの斬撃を放ってくる。

空を裂く一閃は誠次の首へと迸り、その首を落とさんと唸りを上げた。

誠次はこのかをかかえたまま無理やり身をそらして斬撃をかわす。

刹那の刀はそのまま跳ね上がり、今度はまっすぐ振り下ろされた。斬閃は大きく身を反らした誠次の脚を切断せんと走る。

誠次はそれを足の力だけで無理やり跳躍してかわした。

空中でブレイクダンスのように足を回転させ、身をよじって木の幹に“着地”した。

そのまま木の幹から“跳躍”して近くの木の枝へと飛び移る。

誠次は落としそうになったこのかをもう一度抱きなおしてバランスを取ると、眼下の刹那に向かって怒声を叩きつけた。

「いきなり何しやがる!!」

だが刹那はこちらの言葉など聞こえていないかのように敵意に満ちた目で誠次を睨みつけると油断なく刀を構えた。

その構えにはほとんど隙がなく、ティーのようなにわか仕込みとはまるで違うことがわかる。

「ふん。この目で見てもには信じられんな。人間が気も使わずにこれほどの動きができるとは。知らなければ不意を突かれていただろう。だが知ってさえいればいくらでも対処のしようがある。むしろ気を使う普通の忍の方がよほど難敵だ」

誠次は訝しげに眉をひそめる。

「はあ？ 氣い？ つーかお前何言って……」

「問答無用！」

刹那は誠次の言葉を遮って誠次の立つ木の根元へと駆け寄る。

そして無造作に両断した。

一抱え以上ある木が驚くほどにあっさりと切れ、ゆっくりと倒れていく。

誠次が跳躍して木の下敷きにならない位置に着地すると狙ったように刹那が突貫してきた。

誠次は舌打ちとともに飛び退る。

だが絶対的なスピードが刹那の方が上だった。

あっという間に追いつかれる。

刹那が大上段に刀を構えるのを見て誠次はこのかの体から手を離れた。

地面に落下するこのかの体を右足で受け止める。

そして振り下ろされる唐竹割の一撃を両の手で白刃取った。

刹那は軽い驚愕の色を顔に浮かべるがすぐに真剣な表情に戻ると力任せに刀を押し込んで着た。
じりじりと刀が誠次に迫る。

「お前何考えて……」

刹那はまたしても誠次の言葉を遮るように叫んだ。

「お嬢様を返せ！風魔小太郎！！」

「……………は？」

呼吸とともに鋭い風切り音が響く。
何度も何度も。

一定のリズムで繰り返され続ける。
サイドでまとめた黒髪。

麻帆良女子中の制服を着て一心不乱に刀の素振りを続けていた少女
――桜咲刹那は手を止めて息をついた。
額ににじんだ汗をぬぐう。

刀を正眼に構えながら呟いた。

「風間誠亜……か」

突如として2 - Aに現れた元男といういかかわしい人物である。
心ない超能力者によって女にされたあげく、女子中の2 - Aに入る
よう仕向けられたらしい。

一応被害者ということになるのだが、だからと言って納得できるものではない。

女子中という男子禁制の世界に土足で上がりこんでいる存在。

おまけに女子たちに遠慮することもなく自然にクラスメートたちと会話し、学園生活を送っている。

体育の着替えの時も普通に居るし、時間は意図してはずしているようだが大浴場も利用しているらしい。

まあ女子たちの着替えを見ても目をそらすでもなく、いうなれば気にも留めてない節があるのが不思議であるが。

そして刹那が命に代えても守りたい存在——お嬢様こと近衛木乃香とも平然と親しくしている。

もし誠亜がもとは男だと知れば皆こんなに親しくすることもなかっただろう。

クラス全員を騙しているにも等しい行為。

どうしても好きになれない存在だった。

疑念が生まれたのは大浴場の脱衣所で遭遇したあの日だ。

その異常なまでに鍛え抜かれた体を見たとき刹那は確信にも近い思いを抱いた。

こいつはただものじゃない、と。

超能力者に女にされた、裏のことなど何も知らない一般人だというのは真っ赤なウソだと。

それから事あるごとに誠亜を観察した。

もしかしたら何か特別な任を帯びて潜入したかもしれないのだ。

もし、何らかの任務で来た特殊な訓練をされた人間なら、女子たちの着替えを前に平然としていたり、女の子ずくめの状況において、まるで自分も女であるかのように自然に溶け込んでいるのも納得がいく。

何が目的か。

それを考えたとき真つ先に思いついたのはこのことだった。

関西呪術協会の長の娘にして膨大な魔力の持ち主。

わざわざ女子中に潜入などという面倒なことをするだけの価値がある。

もしそうならばこのかお嬢様と仲良くしようとするのも頷ける。

親しくしておけばお嬢様を攫うチャンスを作りやすくなる。

「私が守らなくては……お嬢様を！」

言つて刹那は再び愛刀夕凧を振り上げた。

「悩んでいるな」

振り下ろそうとして突如聞こえてきた声に振り向いた。

気配はなかった。

おまけに真剣を振り回している姿を見せないために人払いの結界を張つてある。

一般人が入つてこれるわけがない。

振り向いてそれが目に入った瞬間、心が凍りつく音が確かに聞こえた。

そこにいたのは恐るべき生命体だった。

ひげを生やしたダンディなおじさんがカバの上に乗って妙なポーズをとっていた。

セーラー服を着て。

心は凍りついたが体は素早く反応した。

夕風の刃を問答無用で叩きつける。

しかし男はポケットから取り出した何かで刹那の斬撃を受け止めた。神鳴流剣士の刹那の斬撃を。

刹那は呆然とそれを見た。

男の手に握られた茶色で細長い（ポケットに入る長さではない）物体は、

「ゴ、ゴボウ？」

男の手に握られているのは正真正銘野菜のゴボウだった。無論そんなもので気で強化された刀と力で放たれた斬撃を止められるはずはない。

「貴様……何者だ？」

恫喝するように問うと男は口元に不敵な笑みを浮かべた。

「私がなぜカバに乗っているか知りたいか？」

「いやそんなことは聞いてない。何者だと聞いているんだ」

刹那は一步引いて刀を構えながら鋭く言った。

男は刹那の言葉に頷くと厳かに告げる。

「さもありなん。なら教えてやろう」

言って男はカバの上でポーズをとった。

「カバの英語名。ヒポポタマスという響きが面白いからだ！」

……この男、まるでこちらの話を聞いていない。

刹那はこめかみをひくつかせながら夕風の切っ先を突きつけた。

「質問に答えろ！貴様は何ものだ！？」

「悩む少女に手を差し伸べてやるのもまた一興。さあお前の悩みを言うがいい！」

「聞いているのか！？」

「うん、なんだ？恋の悩みか？それとも剣の道で伸び悩んでいるのか？」

「貴様！！」

声を荒らげる刹那に男は軽く肩をすくめると、

「お前は少しうるさいな」

などとのたまった。

刹那はこみ上げる怒りを抑えて震える声で言う。

「誰のせいだと……」

「私の正体は教えられない」

突然真顔で告げられた言葉に刹那はきょとんと見返した。
すると男は不思議そうに刹那を見下ろす。

「なんだ。お前が聞くから答えてやったというのに何を呆けている？」

おちよくられている。

それをはつきりと理解して刹那は怒りのままに吐き捨てた。

「去れ！貴様と話すことなどない」

そう言つて素振りを再開しようとする。

それを見て男は意地の悪い笑みを浮かべた。

「風間誠亜について知りたいんじゃないのか？」

その言葉に刹那は刀を振る手を止めた。

「知っているというのか？」

男は不敵な笑みとともに鷹揚に頷いた。
指を3本立て、刹那に語りかける。

「突然だが忍者の集団と聞いて何を思い浮かべる？」

「本当に突然だな」

おちよくられた経験から、またおちよくる気なのではという思いで
つい不機嫌に返した。

「だが関係のあることだ」

そう言われて刹那はしかたなく思いつく名前を挙げる。

「まずは甲賀忍者だな」

クラスメートの長瀬楓もまた甲賀忍者だ。それゆえにまず最初にこの名前が頭に浮かんだ。

それに男は満足げにうなずくと立てていた薬指を曲げた。

「あとは伊賀忍者か」

甲賀と対をなすそれを告げると、男は今度は中指を折り曲げた。

男は何も言わずに待っている。

指はあと一本残っている。

あと一つあるということか。

刹那はしばし記憶の中を捜し、首を横に振った。

それを見た男は最後の人差し指を曲げながら言う。

「風魔という名を知っているか？」

首を横に振ると男は両手を腰にあてて含み笑いを洩らす。

「風の魔物と書いて風魔だ。古くは北条家に仕えた忍たちの名で、彼らは風間という土地を発祥の地としており、風間が転じて風魔となった。そして風魔の頭領は代々小太郎の名を継ぎ風魔小太郎と名乗っている」

「風魔……風間……まさか……！」

驚愕に目を見開く刹那に男はくつくつと笑った。

「風間、風魔。ひねりのない名前だな」

強く夕風の柄を握り締める刹那をよそに男は続けた。

「極限まで体を鍛え、気を使わずに戦闘できるよつにすることで気を察知できるものからも隠れることができる。そうすれば暗殺や隠密行動が容易になるな」

刹那は悔しげに、焦燥をこめて呻いた。

「くつ。奴の狙いは何だ？」

「ふむ。それは知らんが、とりあえず近衛木乃香という少女なら現在進行形で誘拐されているぞ」

あまりにもあつさりと告げられたために刹那は一瞬言葉の意味を理解し損ねた。

その言葉が浸透した瞬間、刹那は叫んだ。

「なぜそれを早く言わない！！」

男は胸倉をつかまれながらも笑いながら手を振る。

「こんなことをしている暇はないのではないか？」

緊張感のない男の声に刹那は舌打ちしながらカバの上から飛び降りた。

「くっ！お嬢様。どうかご無事で！」

「今は森にいるぞ」

なぜそこまで知っている。そう問おうとして振り向いたところに男はいなかった。

そこには頭の上にゴボウを乗せたカバが眠そうな顔でたたずんでいるのみだ。

刹那は夕風を鞘におさめ、駆けだした。
胸の中を焦りの炎が焦がしていた。

刹那の手から放たれた斬撃が誠次の鼻先をかすめて過ぎる。

「お嬢様を攫うためにわざわざ女に変身してクラスに紛れ込むとは用意周到なことだな！」

「なんの話だ！」

叫びながら誠次は刹那の斬撃をかわす。

その動きには正直言つて余裕がない。

そもそも誠次には実戦経験がほとんどない。

おまけに戦い方も完全に我流だ。

刀を相手取る戦い方などほとんど知らない。

本能に従うようにしてかろうじてかわしていた。

誠次は素早く動いて、木を盾にした。

一抱え以上ある木が二本隣接して生えており、そう簡単には切られない。

「斬岩剣！」

一喝とともに繰り出された横薙ぎの斬撃はバターでも切るようにあっさりと二本の巨木を切断する。

誠次は度肝を抜かれながら飛び退った。

「うっわなんであの華奢な腕でこんな斬撃出せるんだ！？って“力”使ってるからか。ちくしょう。ティーといい刹那といいまるで“

力”のバーゲンセールだな」

誠次は呻きながら腰を低くして構える。

突進してきた刹那の袈裟がけの斬撃を誠次は身を捌いてかわした。

「少しは反撃したらどうだ風魔小太郎！」

「誰が風魔小太郎だ！」

叫びながら弾丸じみた突きをかろうじてかわす。

刹那はそのまま突き出した刀を横薙ぎに振るった。

ブリッジのように大きく反り返りながら誠次は首を狙った斬撃をかわし、そのままバク転で距離をとる。

だが刹那は先んじて動いていた。

ティーが使ったのと同じ突進技を使い、残像を残して先回りする。

そして地に足が付いていない誠次めがけて鋭い斬撃を放った。

誠次は舌打ちとともに腕の力だけで無理やり体をはね上げて斬撃をかわす。

「皆を欺きお嬢様を狙った罪。断じて許さん！」

「皆を欺きつてのは完全には否定しねえけど、俺がいつこのかを狙ったよ！」

「とぼけても無駄だ！」

「とぼけてなんていませんけど！？」

誠次は大きく跳躍すると木の枝に飛び乗った。

すぐさま跳躍した刹那が誠次の乗る枝を根元から切り落とす。

「最初に会ったときから気に食わなかったんだ！」

「多分に私怨まじってるだろソレ！」

誠次は叫びながら別の枝に飛び乗った。

刹那は今度は飛ばずにその場で刀を振る。

弧を描いて斬撃が飛び、誠次の頭に襲いかかった。

誠次はわざと枝から飛び降りてかわす

「そもそも男が女子中に来るなど！」

「文句あるなら神に言え！」

「人災だというのに運命を呪えと？」

「俺じゃなくて人災の元凶を呪えといつとるんだ！」

「お嬢様を狙うなど万死に値する！」

「戻ったぞオイ！お前混乱してるだろ！？」

振り下ろされた刀を誠次が白刃取りした状態で再び止まる。

力と力がせめぎ合う中、一本の大木が倒れこんできた。

誠次と刹那は同時に飛び退る。

土煙の向こうから大きな影が歩いてくる。

ずしんと地を揺らしながら歩み出てきたのは3体の鬼だった。

その後ろに陰陽師の姿も見える。

だがティーの姿は見えなかった。

迷子にでもなっているのだろうか。

陰陽師は若干息を切らしながら言ってきた。

「やっと見つけたぞ女。一人増えたようだがまあいい。このかお嬢様を渡してもらおうか。やれ！鬼ども！」

命令に従って鬼たちが動き出す。

自信に満ちた陰陽師とは対照的に誠次は面倒くさそうに嘆息した。刹那は鼻で笑って疾走する。

残像を残して一瞬で鬼たちの中心に達すると刀を持った腕を引き絞る。

「百烈」

鬼たちがようやく刹那に反応するが遅すぎる。

すでに撃鉄はあげられている。

あとは引き金を引くだけ。

裂帛の気合とともに斬撃が放たれる。

「桜華斬！」

全周すべてを薙ぎ払う強烈な斬撃が鬼たちの体をまとめてなます切りにした。

白い煙のように消えていく鬼たちを見て陰陽師が啞然とした顔で刹那を見つめていた。

「くっ、しょうがない！こうなったら私自ら……」

言って大仰なしぐさで懷から抜き放った札を掲げる陰陽師。

だが次の瞬間、どこからともなく信じがたい速度で爆走してきたカバにはねられ、木に激突して気絶した。

欠伸をして地面に横になるカバを呆然と見つめながら誠次と刹那は立ちつくした。

やっとの思いで言葉を口にする。

「カバ……？」

「ヒポポタマスと呼べ。その方が面白い」

カバを追うように響いた声に誠次は振り向いた。木々の間から神が悠然と歩いてきている。

何か文句を言っただろうとして刹那に遮られる。

「お前……なぜここに？」

その問いに神は軽く肩をすくめると、

「なかなか面白かったが飽きたのでな。そろそろ終わらせよう思っただけだ」

「面白……飽きた……？」

眼を白黒させる刹那をよそに誠次は嘆息交じりで言った。

「話が見えてきたぞ。つまりはまたお前の仕業ってわけだな神」

「はっはっは。なかなか面白かっただろう?」

軽く笑う神に誠次もまた笑みを浮かべた。
もつともだいぶ物騒な笑みだが。

「はっはっは。面白い冗談だなオイ。おかげさまでクラスメートに殺されるところだったぜ」

刹那はいぶかしげに眉をひそめると、

「お前たち……知り合いなのか?」

問う刹那に誠次は神の方を指差す。

指差すついでにこめかみに挟りこむように人差し指を突きこんだ。

「こいつが神。俺を女に変えて無理やり2・Aに放り込んだ張本人だ。それだけじゃ飽き足らず面白いことのためとかほざいているんな悪戯をしてやがる」

「うむ神だ。はじめましてではないがよろしく」

言って手を差し出す神を無視して刹那は一步退いた。

「ま、まさか誠亜……さんが風魔小太郎だというのは……」

誠次は苦笑しながら答えた。

「真っ赤な嘘だよ。あんたを騙して事態をややくしくしようとしたこいつのな」

「失敬な。私は風魔一族について語っただけだ。誠亜〓風魔小太郎などとは一言も言っていないぞ。勝手に二つを結びつけたのはその娘だ」

不満げに言う神を誠次は半眼で斬って捨てる。

「ただの詭弁だな」

「そうとも言っ」

存外あっさり認めて神はポーズをとった。

誠次は額に手をあてて嘆息する。

一発頭をへこませてやろうとしたところ、刹那が勢いよく頭をさげてきた。

「す、すみませんでした！お嬢様を助けてくれたというのに、礼を言い助けるどころか斬りかかってしまい、本当に……」

誠次はからからと笑って

「まあいいっていいって。そんだけこのかのこと心配してたってことだろ。結局俺もけがはなかったわけだしさ」

「……すいませんでした」

なおも頭を下げる刹那を真面目な子だなあと見ながら誠次は刹那の肩を軽く叩いた。

「どうしても気になるってんなら、そうだな……ほんの少しだけでいいから俺の2-A入りを受け入れてくれ。それでチャラにしよう。まあもつともこの神の頭を小突いて俺を男に戻してもとのクラスに戻るようしてくれたら一番うれしいんだけどな」

冗談めかして言うのと刹那もクスリと笑った。

刹那は地面に横たえられたこのかを抱きかかえると、ふと思いついたように言ってきた。

「お嬢様を運ぶ途中、何かしなかったでしょうね……たとえば胸を触ったりとか」

誠次はどこか乾いた笑い声をあげながらふと視線を虚空に上げ、

「そういうことしたくなるんならどれだけよかった事が。……なんか女になった影響なんかで女性を異性と見れなくなってきたてなあ。うんでもまあまだ俺の心は男だ。いや男のはず。男だよ。男だといいなあ」

虚無すら湛えた瞳で呟く誠次に刹那はあわてたように言う。

「だ、大丈夫ですよ。……まあ頑張ってください」

落ち込む誠次と慰める刹那。

奇妙な光景が夜の森で展開される。

神はそれを眺めながら右手をシュタツとあげて言った。

「うむ綺麗に終わったようなので私はそろそろ帰らせてもらおう」

踵を返すその肩を誠次はがしりと掴んだ。
指が食い込むほどの力で握りしめる。

「おいおい神い。まさかこのまま帰れるなんて思ってねえよなあ」

「H A H A H A。D A M E かね？」

妙な発音で言う神に誠次もまた妙な発音で答えた。

「H A H A H A。D A ・ M E ・ D A」

誠次は問答無用で拳を振りかぶる。
鶏を絞め殺したかのような神の悲鳴が森に響いた。

「おおりゃあああああああ！」

「ぎゃあああああああああ！」

拳打の嵐とともに血しぶきが舞う。

「どおりゃあああああああ！」

「ぎょおおおおおおおおお！」

「ちよちよちよちよと待ってください！」

刹那に止められて誠次は不満げに振り向いた。
拳についた血を振り払いながら、

「なぜ止める？……ああお前もやりたいのか。よし存分に殴るがい

い。たぶん何やっても死なないから遠慮はいらんぞ」

「違います！さすがにそれ以上やるとまずいと思うのですが。もう血まみれですし」

誠次はパタパタと手を振ってこたえる。

「いや大丈夫だって」

「ぬうつうつう！痛いではないか！」

神はガバリと起き上がり、両手で誠次を指差した。その時には既に神の体は無傷な状態に戻っている。

誠次はそれを指差しながら。

「ほら大丈夫だ」

「……そのようですね」

刹那は多分に呆れの含まれた眼で神を見つめる。

誠次は嘆息すると頭をかいて言った。

「このかことは刹那に任せていいか？」

「はい。ほかの魔法先生にももう連絡しました。あとは任せてください」

「うーい。じゃあ俺はもう行かせてもらっぜ。……ダイゴの飯まだ

食えるかな。だいぶ遅くなっちまったが」

誠次はぶつぶつと呟きながら森の奥に消えていく。

それを見送った後で神はカバへと歩み寄った。寝ているカバの顔をぺちぺちと叩き、起こす。

そのまま神は立ち上がったカバにまたがり立ち去ろうとした。

「ま、待ってください」

刹那は神を呼びとめた。

神は首だけを180度回して振り向くと平然と言ってきた。

「なんだ桜咲刹那？私に何か用か？」

刹那は神に問われ、視線を反らして逡巡した。
だが意を決して口を開く。

「あなたは……誠亜さんの体を完全に女に作り替えたそうですね？」

「うん？そうだが？」

刹那はひとりと神の目を見つめた。

無意識に夕風の柄を手が白くなるほどに強く握りしめる。

「もし……もし私が……」

「可能だ」

蚊の鳴くような声で言う刹那の言葉を遮って神は言った。

刹那は驚いたように神を見る。

神は世間話でもするかのような口調と表情で続けた。

「私は神だ。無論可能だが、お前の背中の上はこの先役に立つぞ。それがないせいで勝てるはずの相手に負け、守れるはずのものを守れんこともあるかもしれん」

刹那は啞然とした顔で神を見つめた。

自分の言いたかったことを先読みしたばかりか自分の素性まで見抜いている。

神は一度首を元に戻すと今度は腰から上を180度回転させて刹那の方を向いた。

「ついでに言う肉体の大幅な変質は精神にも影響があることが誠証で立証されている。あまりお勧めは出来ん。リスクをよく考えた上でどうしてもというのならもう一度私のもとに来るがいい」

言葉を失う刹那を置いて神はねじれた体を戻し、天を指差した。

「ゆけい！ヒポポタマス！」

掛け声に応えてカバがのたのたと歩きだす。

まるで目に見えない階段があるかのように天へと昇って行った。

刹那は動くこともできずにそれを見送る。

彼女は連絡を受けた魔法先生がやってくるまでずっとそこに立ち尽くしていた。

第7話 風魔小太郎（後書き）

どうもすちゃらかんです。

神と俺のコイントス第7話でした。

時系列が行ったり来たりしていて読みにくかったかもしれませんが、すいません。

ただしよっぱなで刹那と神の会話を書くとき、その先どうなるかがその時点でわかつちゃうのでこうしました。
時系列順にした方が良かったでしょうか。

とりあえずこれで刹那からの風当たりはだいぶましになる予定です。

もう少し長い話だったのですが長くなりすぎそうな気配があったのでいったん切りました。

今回は多分ティーがメインになると思います。

拙作ですが今後ともよろしくおねがいします。

第8話 迷子からはじまるストーリー

第8話 迷子からはじまるストーリー

鬱蒼と生い茂る木々は月明かりを遮り否応なく暗さを深くし、視界が利かないことが恐怖心を強める。

動物すら眠り込んでいるのかあたりは沈黙に包まれていた。

時折吹く風に揺らされた梢の音はまるで魑魅魍魎の声のように聞こえていた。

がさりと震える木々の音に何度身を震わせたことが。

密度の高い生え方のせいで強い圧迫感が生じ、木々自体がのしかかってくるかのような重圧を感じさせた。

今すぐここから逃げ出したい気持ちがわきあがるが、木ばかりで構成された景色はどれも同じように見え、森の外へと出る道を見つめることも容易ではなかった。

森を歩きなれているわけでもなく、この麻帆良の森に詳しいわけでもない。

さらにはまだ幼い彼女には到底道を見つけることは出来なかった。

まあわかりやすく言えば夜の森は不気味で怖く、おまけにそんなと

ここで迷子になっているということだ。

ばさばさの金髪を長く伸ばし、頭に猫耳を生やした7歳ぐらいの少女、ティーは再び響いた物音に身を震わせた。

きよろきよろとあたりを見回し、何もないことを確認しておっかなびっくり歩を進めていく。

「怖くなーいこわくなーい」

自作の歌を歌いながらティーは歩き続けていた。自分の負けだと宣言して颯爽と逃げて行った狼じみた眼をした女を追いかけるも、あっさりと撒かれ、それでもあきらめずに闇雲に探しまわった結果、ティーは自分がもうどこにいるのかわからなくなっていた。

「あれ？ここさっきも通ったような」

このセリフももう10回目である。

実際に同じところを通ったのは3回ぐらいなのだが幼いティーにはそんなことは分からなかった。

自分がまるで無限迷宮に迷い込んだかのような不安感が身を支配する。

ガサリと響く音に身を震わせる。

恐る恐る振り向いたティーの眼に入っただのはスーツを着た普通のおじさんだった。

「おや？どうしたのだ。こんなところで」

「うつさい！散歩だ」

ティーはぶつきらばうに返す。

怖がりであると同時に強がりであるティーは素直に助けを求めることができなかった。

男はニヤリと笑うと顎に手をあてる。

「ははあん。さては迷子だな」

「ちっ、ちがわい！」

両手を振り回して否定するティーに男は笑みを浮かべるとかがみこんだ。

視線の高さをティーに合わせる。

「おじさんが案内してあげよう。ここは怖いお化けがたくさん出るからね」

「おっおばけ！？」

思わず悲鳴を上げる。

男は頷くと語り出した。

「ここは昔合戦上でね。その戦で死んだ物達が恨みを持ってお化けになって出てくるんだ。この森の深くにうっかり迷い込んだ人間に自分たちと同じ苦しみを味あわせ、殺すためにね。そうやって殺された者もここのお化けの一員となってさらに多くの人間を殺すわけさ」

真つ蒼な顔をして震えるティーに男は立ち上がって手招きした。

「さあ急いでこの森から出ようか」

だがティーは震えながらも虚勢を張る。

「ふ、ふん！お化けなんていないやい！だからあたいは平気だよ！」

男は困ったように笑ってティーの頬に手を伸ばした。

「いやぁお化けはいるよ」

言葉とともに男の手の肉がぞろりと削げ落ちた。

呆然とするティーの前で男の顔を見ると顔の肉が腐り落ちていく。肉と一緒に右の眼球がボトリと落ちた。

体の随所が急激に腐り、白い骨が露出する。

スーツも血と泥に汚れ、あちこちに切り傷や噛みちぎったような傷が生まれた。

腐り落ちた喉で不気味に反響する声を発す。

「ほら。ここに」

「うわあああああああああ！！」

絶叫とともに駆けだす。

全身に気を纏い、必死に足を動かす。

風を裂いて走るティーの鼻に腐臭がとどく。

足を止めずに振り向けば、先ほどの男が腐った体でふらふらとしながらこちらについてきていた。

喉の奥で悲鳴をあげ、駆ける。

瞬きも忘れ、見開かれた眼からはとめどなく涙があふれた。
歪む視界に構わず走り抜ける。

木の音に躓いて転ぶが、死に物狂いで体勢を立て直して駆けだした。

後ろのゾンビは一向に距離が離れない。

そればかりか前方の地面が盛り上がり、中から別の死体が現れた。
鎧を着て刀を持った死体は夢に出そうなおぞましい叫びとともに飛びかってくる。

それをとび越えたティーは着地とともに瞬動を使つて飛び出した。
ひたすらに瞬動を連射する。

こんな障害物の多い森の中で瞬動を使うなど危険極まりないことだが、後ろから迫る恐怖に比べればよほどましだった。

距離を一気に話し、少し開けたところでティーは足をもつれさせて
転んだ。

恐怖と緊張で疲れ切った体に鞭を打って立ち上がる。

荒い息をつきながらあたりを見回す。

死体達の姿は見えなかった。

安堵の息をつく。

その瞬間、

「ツカマエタ」

くぐもった声とともに後ろから何かが抱き付いてきた。

振り返ると片足のなくなった女の死体がこちらの体を捕まえている。

「あ……」

ティーの喉がひきつったような音を出した。
涙を流しながら絶叫する。

「あああああああああああああ！」

体を捕らえる腕を引きちぎり、渾身の力をこめて殴り伏せた。
地面に叩きつけられた死体を踏み砕く。

何度も何度も何度も。

泣き叫びながら踏み砕く。

上半身が原形をとどめなくなった死体はそれでもなおティーに向かつて這いずってきた。

腕が、下半身が単独で迫ってくる。

ティーは短い悲鳴とともに後ずさる。

踵を返して逃げ出そうとして森の木々の間からぞろぞろと出てくる死体達に足を止めた。

右を見ても左を見ても、果ては後ろを見てもすべてずらりと並んだ死体達が目に入る。

おまけにその死体達の向こうからは制限なく死体があらわれている。軽く見積もっても200以上いた。

鎧を身に纏ったものから、学校の制服を着た少女まで。

様々な恰好をした死体達がゆらゆらとこちらに向かって歩いてくる。

後ずさるうとして足を引っ張られて転んだ。

見ればティーの足を骨だけになった腕がつかんでいた。

「あ……っ……」

すぐそこまで迫った死体達が一斉にティーへと腕を伸ばす。

「オマエモ……コッチへ……」

ぶつりと理性の糸が切れる。

「いやあああああああああああ……!」

張り裂けんばかりの悲鳴を上げる。

きつく眼を閉じ、頭を抱えてうずくまる。

ひたすらに涙を流して泣き叫び続けた。

肩がつかまれる。

声にならない叫びとともに肩にかかった腕を振り払った。

そのまま転がるように逃げる。

振り向くと一人の青年が腕を抱えて悶絶していた。

肩まで伸ばした金髪はあからさま過ぎる金色が染料つぼさを出している。

整ってはいるがよく言えば親しみやすい、悪く言えばひょうきんな顔の青年だ。

言葉が見つからず、呆然としているティーに青年は腕をさすりながら近づいてくる。

ティーの前でかがみこむと自然にほほ笑んだ。

「大丈夫？なんか泣き声が聞こえたんで来たんだけど」

ティーは震える声で問いかける。

「あ……え……人？」

青年は少し困惑したように眉をひそめる。

「うーん、人かって聞かれたのは生まれて初めてだなあ。うん。人だよ」

人だと証明しているつもりなのか両手を掲げてぱっぱと開いては閉じる。

ティーは恐る恐る周囲を見回した。
小さく呟く。

「お化け……は？」

青年は訝しげに言う。

「お化け？そんなんいるわけないじゃん」

ティーは恐怖がぶり返したのかヒステリー気味に叫んだ。

「いたんだ！おじさんがここは昔合戦場で、そこで死んだ魂が生きているものを恨んで殺そうとするって！」

青年は涙をにじませるティーの頭を優しくなでる。

「俺は5年以上この麻帆良にいるけど、この森に幽霊が出るなんて

聞いたことない。それにここが昔合戦場だったなんて嘘だよ」

「でもいたんだ！追いかけられたんだ！」

「でももついない。だから大丈夫だよ」

青年は震えるティーの体をそつと抱き締めた。

柔らかな温もりがティーの心を落ち着かせる。

青年はしゃくりあげるティーの背中をポンポンと叩きながらずっとそうしていた。

「おなか減ってない？ご飯でも食べて気分転換しようか」

告げられた言葉に無言で小さく頷く。

青年はゆっくり立ち上がると手を差し伸べた。

「俺は須藤大悟。君は？」

「……ティー」

ティーは応えながらも座り込んだままで動こうとしなかった。

青年——ダイゴは不思議そうに首をかしげる。

だがティーは動かなかつた。否、動けなかつた。

視線をそらす。

ダイゴはいぶかしげに視線を巡らせた。

その視線がティーの足元に移る。

地面に座り込んだティーの足元がぐつしよりと濡れていた。

ティーの顔が真っ赤に染まる。

眼尻にわずかに涙が浮かぶ。

恐怖の涙ではなく羞恥の涙だ。

ダイゴは何も言わずにティーの体を抱き上げた。
突然のことに戸惑うティーに人好きのする笑顔を見せて歩きだす。
ティーはあえて何も言わないダイゴの優しさを嬉しく思いながら、
彼の腕に体重を預けた。
そこには不思議な安心感があつた。

「おいしい！」

歓声がテントの張られた森の中に響く。

ダイゴはニコニコと微笑みながら目の前で一心不乱に料理を口に運ぶ少女――ティーを眺めた。

「おいしい！本当においしい！」

先ほどから何度もおいしいと連呼しながら食べ続けている。それ以外評価の言葉が思いつかなかったのだろう。

ただ感動を表わしたくて、それでも言葉を思いつかなくて、だから『おいしい』という言葉を繰り返す。

ダイゴとしては自分の作った料理でこれだけ喜んでもらえるというのは料理人冥利に尽きるというものだった。

ところがだんだんとティーのスプーンが動きを遅くし、やがて止まってしまう。

「どうしたの？」

問うとティーはふるふると首を横に振った。スプーンを持つ手が震えている。

眼からはとめどなく涙が溢れ、口からはとぎれとぎれの言葉が漏れた。

「こ……んな……こんな美味しいご飯……生まれて……初めてだ……」

ダイゴの顔が一瞬だけ悲しげに歪む。だがすぐにほほ笑みの形に戻ると、

「ならもつと食べてよ。おかわりもある」

「ホントか？」

「うん。誠ちゃんの分だけどまあいいさ。誠ちゃんも分かってくれるよ」

笑みとともに言った言葉にティーは少し俯き気味に言った。

「あり……がとう」

「うん？」

意味が分からず問い返すと今度はもう少し大きな声で言うてくる。

「ありがとう……こんな誰とも知れないガキを助けてくれて、ご飯までごちそうしてもらって……だからありがとう」

ダイゴは苦笑とともに返す。

「気にしないでいいよ。まあ感謝してくれているというのなら……」

言葉を待つティーにウィンクしながら、

「笑って。泣いたままよりきつとの方がおいしく食べれるよ」

ティーはしばし呆然としたが、服の袖で涙をぬぐうときこちないながらもにっこりと笑った。

今持っている皿の料理を平らげ、おかわりも食べきった。

「ごちそうさま」

「どういたしまして」

笑みを絶やさないダイゴにティーは問いかけようとして一度口を閉じた。

しばし逡巡したのち、膝の上で拳を握りしめ、か細い声で問う。

「ダイゴは……気にならないのか？」

「何が？」

問い返すとティーは手が白くなるほど拳を握り、蚊の鳴くような声で言った。

「その……頭の……猫の耳を」

ダイゴは言われて初めて気づいたかのように口を開く。

「猫の耳？ああそういえばあるね」

ティーは続くであろう言葉に身をすくませた。

幾度となく掛けられてきた身を裂くような言葉。

覚悟をしても、わかっていてもやはりつらい。

「うーん。で、それが？」

だが帰ってきたありえない答えにティーはきつく閉じていた眼を開き、呆然とダイゴの顔を見た。

「それが？つて……猫の耳だよ。そんなもの普通の人間にはついてないだろ！？」

「まあ……そうかな。で、それがどうかした？」

心底不思議そうに問い返すダイゴをティーは啞然とした面持ちで見つめた。

「だってだって！絶対あるはずないものがあつて、普通の人間じゃなくて……」

そこまでまくしたてて、ティーはうつむいて唇をかんだ。震える声で言う。

「……気持ち……悪い……だろ……」

今まで何度も言われたことがあるのだろつ。眼尻に涙を浮かべて言う。

だがダイゴは顎に手をあてると眉間にしわをよせ、難解な数式に挑む学者のような顔で唸った。首を傾げて虚空を見上げる。

しばらくそうしていたダイゴは視線をティーに戻して言葉を紡ぐ。

「うーん。正直その理屈は全く理解できないや。なんで猫の耳が生えてるのが気持ち悪いことになるんだ？」

「だって！」

身を乗り出すティーを見つめながら、ダイゴは 2×2 は4だとで

も言つような、いまさら論ずるのも馬鹿らしい当たり前のことを確認するような口調で言った。

「角が生えていようが、動物の耳が生えていようが、尻尾が生えていようが、翼が生えていようが、正直どうでもよくない？ 君は背が少し高い人間を見ていちいち騒ぐの？」

その言葉にティーは明いた口がふさがらないようすだった。わかってしまったのだ。

本当にダイゴにとって猫の耳が生えていることなど、少し背が高いぐらいのことではないのだということに。

驚いたように、だがどこか嬉しそうにティーは笑った。

ダイゴもまたくつくつと笑う。

「そつえば前も似たような問答をしたことがあったかな」

ダイゴの呟きにティーが興味深げに問うてくる。

「へへ。いつどこで？」

ダイゴは記憶の中を探り、目的の記憶を探し当てる。

「確か俺がまだガキの頃だね。京都の山奥でかわいい女の子に偶然会ったんだわ。とりあえずナンパしたんだけど、その娘、背中に真っ白な羽が生えてたんだよね。そのとき今と同じような問答をした覚えがあるよ」

「ふへん。それでどうなったんだ？」

「どうなったって？」

「ナンパの成果だよ」

言われてダイゴは苦笑した。
頭をかきながら、

「いやゝ駄目だったわ。なんつーか逃げられた。そりゃもうびっくりするぐらいの速さで」

二人でケラケラと笑う。
緩やかな時間が過ぎる。

唐突にガサリと物音がした。

ティーが身をこわばらせてそちらを向く。

そこからのんびりと歩み出てきたのは狼のような鋭い眼をした美女――誠次だった。

「いよーっす。まだ飯あるか……」

誠次とティーはお互いの姿を確認すると硬直した。
互いに驚愕の表情で彫像のように固まっている。

先に復帰したのはティーだった。

「あああああああ！お前！」

誠次は頬を掻きながらダイゴに向かって問う。

「どつたのこの子？」

「森の中で迷子になってるところに出くわしてね。食事に誘ったんだ」

「ふーん」

誠次はそれで十分だったのか周囲を見回した。

「悪いけど誠ちゃんの分はティーに食べさせちゃったよ。ああティーってのはこの子のことね」

誠次はちらとティーを見つめ、にやりと笑うと。

「美味かつたる？お前になら別にやつても構わんわ」

ティーは毒気を抜かれたように誠次の顔を見つめていた。誠次は再び周囲を見回し、ある一点で視線を固定させた。

その視線を眼で追ったティーの顔が真っ赤に染まる。そこには一枚の布切れが木の枝に干されていた。

濡れてしまったため、軽く水洗いして干した下着である。

誠次はそれを真顔で見つめた後、ティーに向かって無造作に言葉を放った。

「もらったのか」

「……………！」

ティーは顔を真つ赤に染めて無言でぶんぶか足元の石を投げ付けまくる。

それをひよいひよいとかわす誠次を見ながらダイゴは嘆息した。

「なんで女の子にそゆこと言っちゃうかなあ。誠ちゃんは」

「はっはっはっはっは」

力尽きて石を握りながら肩で息をするティーを見ながら誠次は言った。

「しかし迷子になっただけでもらしたのか？」

「誠ちゃん！」

叱咤するダイゴの声に誠次は片眉をはね上げる。

ティーが激昂して叫んだ。

「迷子ぐらいでもらすもんか！あたいはお化けに追いかけられたんだ！」

「お化けえ？んなもんいるわきゃねえだろ」

端から信じる気配の全く無い誠次にティーが声を荒らげた。

「いたんだ！あたいが迷子になってたらおじさんが話しかけてきてお化けが出るから早く出ろって！」

その剣幕に誠次が思わず言葉を吞む中、ティーは震えながら続けた。

「あたいが……お化けなんていないっていったら……おじさんの体が腐り落ちて……そのまま追いかけてきて……必死に……逃げたけど……ど……ど……出てきて……つかまって……ふりほどいたら……
… 囲まれてて……死体が……迫ってきてえ!!」

ボロボロと涙を流すティーを前に誠次もダイゴも押し黙る。
怒りの念をこめてダイゴは毒づいた。

「悪趣味な奴もいたもんだ」

誠次は無言で踵をかえし、森に足を向ける。

「誠ちゃん？」

誠次は能面のような無表情で、だが眼を炯々と輝かせ、平坦な口調で言った。

「ダイゴ。俺ちよつと行ってくるわ。まだこのあたりにいるかもしれねえ」

その背中を見送る。

ティーが困惑したように見ていた。

そのときだ。

場の何もかもをぶち壊すような能天気な声が響く。

「ヲホッ！何やらしい匂いがするな。私にも分けてくれい」

スーツ姿のひげを生やしたダンディなおじさんが現れた。

誠次の顔が嫌そうに歪む。

だが誠次が何か言うよりも早く悲鳴が夜の森を引き裂いた。

「あああああああああああ！」

男の顔を見たティーが狂乱じみた勢いで後ずさり、ダイゴの胸に飛び込んでくる。

それを抱きとめながら、ダイゴは困惑した表情で男をみた。誠次もまた同じだ。

とことん状況がわかってないのか男は軽い口調で呟く。

「む？お前はさっきの小娘」

轟音が轟いた。

わずかに大地の揺れが感じられるほどの強烈な踏み込みとともに繰り出された渾身の剛拳が男の体に突き刺さり、その体を吹き飛ばした。

男は木の幹にぶち当たりそれを粉碎して向こう側に抜けた。さらにもう一本をへし折り、3本目を半分ほど抉ったところで止まる。

折られた巨木が重音とともに地面に倒れこむ。

巻きあがる土煙の中へと誠次が声を投げかけた。

いくつも青筋を浮かべ、凶笑を浮かべながらだらりと垂らした両手の指をゴキゴキと鳴らす。

「なあるほどなあ。悪趣味な奴がいると思ったらお前だったかあ。殴られ方が足らねえと余った活力で子供をいじめはじめるわけかあ。

今度からはきつちり殺りきらないとなあ」

「せ、誠亜。正直これはシャレにならんのだが」

「なにか言つべきことがあるかあ神い。今なら聞いてやらんこともないぞお」

地獄の鬼すら連想させるとす黒い殺気を撒きながら誠次は男ににじり寄っていく。

男は口元に一筋血を流しながら、

「うむ。やはりからかうのは誠亜に限る。子供が相手だと若干罪悪感が邪魔して楽しみきれん……」

誠次は憤怒の形相で拳を振りかぶる。

「俺がお前の辞書に刻んでやる！反省の2文字をなあああああ！」

「待て！魔がさしたただけなんだ！済まなかったと思つてぎよあああああああ！」

何かが潰れ、砕ける音が夜のしじまに連続して響く。

一秒間に6回近く響く破碎音は1分近く続いた。

その頃になるともう悲鳴もかすれるような声になっている。

しばらくすると誠次が血まみれの何かを引きずって現れた。

ダイゴは誠次に問いかける。

「ソレは何？誠ちゃん」

「んあ？こいつは自称『神』。俺を女に変えた超能力者だ」

それを聞いてダイゴは目を細めた。

「超能力者？ひょっとして……」

それに誠次は右手の死体（そう見てもそう見える）を掲げると頷いた。

「そう。こいつだ。ほれ神。さっさと起きてティーに謝るがいい」

言つて男——神の頬と思われる場所をぺちぺちと叩いた。
血まみれなうえぼこぼこなため確証はないが。

「う、うう……死人に鞭打つとは外道か貴様」

それに誠次は半眼で告げる。

「死んでねえだろ。ほれほれティーの心臓に悪い。さっさと怪我治せ」

「しょうがないな」

言うや否や神の傷が消える。

少し驚いたがまあ誠次を女に変えるなどという離れ業をする男だ。
これぐらいはできるのだろつ。

ダイゴは胸の中のティーの頭をなでると優しく語りかけた。

「ティー。大丈夫だよ。アレはお化けじゃない。超能力者だそうだ。超能力で君を驚かしたんだ。だろ？神さん」

「うむ。だがカミさん（妻）ではないからしてあしからず」

なおも下らんとところに突っ込む自称神に嘆息する。

胸の中のティーが眼尻に涙を浮かべながらこちらを見上げて問う。

「ホント？」

「ああホント」

神が深々と頭を下げる。このときだけは神妙な表情をしていた。

「驚かしてすまなかった。あれは全部私のゴッドパワーによる悪ふざけだ。幽霊は実在しないとは言わないが、ここにはいないしそうそう出会ってもんでもない」

それを聞いてティーが安堵の息をついた。ダイゴの服を握る力がや
つと緩む。

誠次は嘆息とともに神の頭を軽く小突くとダイゴに向って言った。
た。

「それで？その子どうする？」

たしかにそれは早急に決めねばならぬ問題だ。
ティーは息をのんだ。

「ティーちゃん。家は？」

ダイゴが問うとティーは小さな声で答えた。

「ある街の路地裏に……住んでる」

不安に満ちた顔でダイゴたちを見回した。

何か言いたい、否願いたいことがあるがそれがあまりに身勝手であることを理解し、口にできずに終わる。

それでも思わず口に出した。

「あたいはおじょーさまを狙う手伝いを……だから突き出すのが……でも……」

どんなに小さい声でも今まで聞き洩らさなかったダイゴと誠次だが今回は聞こえていないのか普通に会話を続ける。

「誠ちゃんはどう？」

「俺は構わんど。お前は？」

「うーん。俺も構わないさ」

何のことかわからず眼を白黒させているティーを無視して誠次は言う。

「お前のところがいーんじゃねえか。今までまともなもん食えてなかったわけだし毎日美味いもん食えた方がいいだろ」

「でも男子寮に女の子をかくまうのはマズくないかな。ばれた時がさ。俺としては誠ちゃんの方で預かって、俺がご飯作りに行くってした方がいいと思うけど」

「それもそうか」

ティーはダイゴたちが何を話しているのか悟り、信じがたいものを見たように目を丸くした。

「あたいを……かくまってくれるのか？」

誠次は悪戯めいた笑みを浮かべると。

「お前が毎日10人前とか食うんだったら俺達だけじゃ面倒見切れんけどな」

ティーはぶんぶか首を横に振る。

「あり……がとう」

涙をにじませながらそう言うティーにダイゴと誠次は頬を緩ませた。

「とりあえずお前は俺が預かることになる」

誠次がそう言うときティーはちらりとダイゴの方を向いた。

「あたい……ダイゴの方が」

それにダイゴは困ったように眉を寄せた。

「晩ご飯は作りに行くからさ」

ダイゴにも言われティーは首を縦に振る。
誠次はよしと腰に手をあてると、

「さて、今日はどうする、ティー？ここでキャンプするか俺の部屋に来るか」

「ベッド……あるか？」

「ああ」

「じゃあ部屋に行く」

少し眼を輝かせて応えるティーに誠次は笑う。

「よっしゃ行くか」

言って木の枝に干されたティーの下着を無造作に取ってティーに放った。

手招きして踵を返す。

ティーは置いて行かれまいと慌てて立ち上がった。

ダイゴに深々と頭を下げてから誠次の後を追う。

その姿を見送ったあとダイゴは食事の後片付けを始めた。
ふと周囲を見回すと神が顎に手をあてて唸っている。
異様なことに頭の上にはばらあんでなを乗せている。

「むう私の面白いことリーダーに微弱ながら反応が。匂う。匂うぞ面白い事件の匂いが」

本当にこの男の辞書には反省の2文字がないらしい。
ダイゴは一言いさめようとして口を開きかけた。

「タマ！」

呼びかけとともに森の奥から一頭のライオンが姿を現す。
神はそれにまたがると颯爽と森の中へ消えて行った。
それを見つめて嘆息する。

「誠ちゃん。がんばれ」

誠次は扉の開く音に反応して首を回した。

寮の部屋に備え付けられた小ぶりの風呂を使って体を洗ったティーが体から湯気を立ち昇らせながら出てくる。

ただでさえ急に女に変えられてあまり服を持っていない誠次だ。無論子供服など持っていなかった。

ゆえにティーが今着ているのは誠次のパジャマである。

必然的にぶかぶかで手が袖から出ていない。

まあこれはこれでかわいらしさがあるのだが、誠次は服もそろえにやなと内心で呟いた。

自分もシャワーを浴びようと誠次は立ち上がった。

「ティー。あつちに冷蔵庫があるから喉が乾いたら飲むといい。テレビのリモコンはテレビの上だ。つかれてるだろうし寝たいならベッドで寝ちまっていいいぞ。俺は床でいい」

ティーが頷くのを確認して誠次は風呂場に入って行った。

誠次が風呂から出てくるとティーがテレビの前で子犬のようにプル

ブル震えていた。

心配して見に行くと思尻に涙を浮かべながらテレビを凝視している。誠次は訝しげにテレビを見る。

どうやら映画のようだ。時計を見るとちょうど毎週映画をやってる時間だった。

画面の中ではなにやら何人かの男女が必死に駆け回っていた。アクション映画だろうか？

そう思って眼をそらしかけた瞬間、大きな音とともに突然画面に恐ろしい悪霊が出現した。

そのまま主人公勢に襲いかかる。

なかなかインパクトがある。

ティーなど20センチ近く飛び上がっていた。

誠次は半眼で告げる。

「お化け関連で怖い目に会ったばかりだったのに何でホラー映画なんて見てんだ？お前」

ティーはブルブル震えながら、

「ホラーだとは知らなかったんだよう」

「ならホラーだと分かった時点で見るのやめればいいだろう」

誠次は呆れながらチャンネルを変えようとリモコンを持った。ボタンを押そうとした瞬間ティーが飛びついてくる。

「や、やめろよ！途中で見んのやめたら怖いだろ！」

「いや最後まで見た方が怖いと思うが」

ティーは誠次の手からリモコンを奪うとテレビの前に座った。
おそろのおそろ画面を見る。

震えながらテレビを見るその姿に誠次は嘆息しながらいった。

「やっぱやめといった方がいいと思うぞ」

「うつさい。主人公たちが助かる姿を見ないと安心して眠れないよ」

泣きかけながらもそういうティーに誠次は頭をかいてどっかティーの隣に座り込んだ。

ティーは何も言わないが誠次の腕をぎゅっと握ってきた。

無言でティーのホラー映画鑑賞に付き合う。

よくわからないが悪霊の封じられた封印を解き放ってしまった主人公たちが幽霊屋敷と化した広大な屋敷から逃げ出すという話らしい。

この映画をつくった人間はなかなか人の恐怖という感情を分かっている。

絶妙なタイミングで恐ろしいシーンを流し、見る者の恐怖をあとたてている。

時には安心できるシーンをつくり見る者に一時の安息を与えておきながら更なる恐怖展開でどん底に起こす。

あまり映画を見ない上にホラーなど全くと言っていいほど見ない誠次にはそれほど深く見ることはできないが、それでもあまり面白い話ではなかった。

なんというかひたすら怖さだけを追求したという感じだ。

クライマックスに近づけば近づくほど、悪霊も怖さを増していき、ティーのこちらの腕を握る力も強くなっていく。やはり心配になって誠次は語りかけた。

「なあ。やつぱりやめた方がよくないか？」

ティーはふるふると頭を横に振る。

「見る」

誠次は嘆息しつつ画面に視線を戻す。仲間を悪霊にやられながらも主人公たちがとうとう屋敷を抜け出したところだった。

10人いた仲間も既に3人まで減っている。だがそれでも全滅はしなかった。

主人公たちは歓喜に身を震わせている。

横ではティーも安堵の息をはいていた。

瞬間、轟音とともに屋敷から逃げ出したはずの3人を悪霊が襲う。なすすべもなく3人は殺され、悪霊の笑い声が響きわたった。

最後に屋敷が映し出され、悪霊の後ろ姿が移って画面が暗転した。

「え？」

次に来週の映画の紹介が始まるがそんなものはティーには見えていない。

眼を見開きがくぐくと震えながらテレビを見ている。

「え……？これで……終わり……？」

「みたいだな」

ティーは次いで大粒の涙をぽろぽろと流しながら誠次の顔を見つめる。

痛いぐらいに強くこちらの腕を握りしめていた。

「で、でもみんなやられて終わりなんて……」

「……ホラー映画だとよくあるんだろう。たぶん」

「あつうつうつ」

誠次はテレビの電源を消すとティーの頭をなでた。

「もう寝るぞ。寝て忘れる」

誠次は言って立ち上がった。

掛け布団を持って床に横になる。

「セ、セーア」

「あん？」

聞き返すとティーはおなかの前で両手を擦り合わせた。

「な、なんでもない」

「そうか。じゃあもう電気消すぞ」

ティーが頷くのを見て部屋の電気を消した。
あたりが闇に包まれる。

一瞬間こえてきた小さな短い悲鳴に、心の中で神に毒づきながら床に横になる。

掛け布団をかぶって寝る態勢に入った。

いざ寝ようとしたところでもぞもぞと背中中で動く感触を感じ誠次は振り向いた。
なんかティーがくつついていた。

「なにしてんだ？」

「うつさい」

言葉短に返ってくる。
誠次は嘆息しながら、

「ベッド使わねえなら俺が使っぞ」

「好きにしろよ」

ぶっきらぼうに答えが返ってくる。

誠次は立ち上がってベッドに移ると今度こそ寝ようと枕に頭をうずめた。

またしてももぞもぞとうごめく感触。

見るとまたティーが潜り込んできていた。

「……ひょっとして怖くて一人で寝られないとか？」

「うっさい。悪いのはあたいじゃない。悪いのは神とあの映画だ」

誠次は嘆息すると小さく震えるその体に腕をまわした。

「こうしてやるからさっさと寝ちまえ。神には改めて言っとくわ」

「うん」

5分もしないうちにティーは静かな寝息を立て始める。

よほど疲れていたのだろう。

誠次は苦笑しながら目を閉じた。

こちらの服をぎゅっとつかむ小さな手の感触や体温が誠次の体を緊張させる……などということとはかけらもなく、誠次もまた一分もしないうちにまどろみの世界へと旅立った。

「……ア。セー……。セーア。セーア」

微妙な発音で己の名を呼ぶ幼い声とゆさぶられる感触に誠次は目を覚ました。

窓からはもう白い光が差し込んでおり、すでに朝であることが窺える。

「セーア。セーア」

誠次は身を起こすと欠伸とともに大きく伸びをした。

「んあ？どしたティー」

問うとティーは視線を落とした。頬を朱に染めてもじもじとする。

「セーアごめん。……やっちゃった」

「やっちゃったあ？」

何をだよ、と問おうとして誠次は何やら冷たい感触に口を止めた。ゆっくりと布団を持ち上げる。

そこにはぐつしより濡れた布団があった。くつついて寝たためか誠次のパジャマもかなり濡れている

「そ、その……怖くてトイレに行けなくて……」

誠次は右手を持ち上げた。

ティーは叩かれると踏んできつく眼を閉じて身をすくめた。

誠次はその頭に手をポンと置いて嘆息とともに口を開く。

「とりあえずもう今後はホラー映画観んのやめろ。あと寝る前にはトイレ行くこと」

頷くティーに頭をなでてやりながら誠次はベッドから腰を下ろした。見事に世界地図の描かれた布団をみて腰に手をあてる。

「さて、洗って干すか」

「うめん」

「気にすんな。恐怖体験をした直後だ。しょうがねえさ」

言って誠次は掛け布団を取り払う。

濡れた敷布団をとりだそうとした瞬間、

パシャリパシャパシャパシャ

とつさに周りを見るが予想していた姿は見えない。

最後に残った可能性、上を見るとそこには神が家庭内害虫（G）のごとく天井に張り付いていた。

神は左手と両足で天井にへばりつきながら右手のデジカメでこちら

を激写している。

> i 1 0 2 7 6 — 9 2 6 <

「なにやって…… テメエツ！」

神の狙いに気づいて誠次が声を荒らげると神は高らかに笑った。

「ふははははは！ 貴様とその布団の世界地図は確かにこのカメラに収めた！ これをみた皆はどう思っかなあ。そう風間誠亜おねしょ疑惑のたんじょブクワアツ！」

勝ち誇った顔で天井でぼざいていた神は咄嗟に飛びあがったティーの拳で撃ち落とされた。

「う、うう。ぬかった。まさか小娘の方が攻撃してくるとは。だあが負けえん！！」

神はガバリとたちあがると部屋の窓へと疾走した。

「必ずやこのスクープをクラス中に広めてみせる！」

そのまま窓を突き破って外へと飛び出して行った。

「させるかああああああ！」

誠次もまた絶叫しながら飛びだす。

神は走りながらポケットから何か取り出す。

ポケットかのびた系の先にあるのは白い紙コップ。

糸電話だ。

「あゝもしもし朝倉か。私だ。神だ。実は非常に面白いネタがあるんだが……」

「さらにさせるかあああああああ！」

新しいメンバーを加えることとなったが結局あまり変わらないようである。

というか神がいる限り変わらない。
そんな予感が誠次の胸にあった。

第8話 迷子からはじまるストーリー（後書き）

どうもすちゃらかんです。

神と俺のコイントス第8話でした。

今回はティーメインです。

なんというかあまりギャグが入れられませんでした。

ちなみにティーはネコミミが生えてる（亜人？）ということで大変な生活を送ってきたようですがあまりそこを掘り下げることはありません。

普通ならそう言うのを掘り下げて物語を深くしようとするのですが、そうすると読後感が悪くなる気がするんです。

個人的に神と俺のコイントスはラストとかちよつとはシリアスになるかもしれませんが、基本ギャグでいきたいのであまり重苦しくしたくないのです。

ネギが出てくるのにはもう少しかかると思いますがどうぞお付き合いください。

第9話 ティーの平日（休日ではない）

第9話 ティーの平日（休日ではない）

神楽坂明日菜は早朝の街道を走っていた。
肩には新聞が詰まったカバンをしょっている。

彼女は毎朝新聞配達バイトをこなしながら学校に通う苦学生だった。

だが、本人はすでに慣れたもので、いまやそれほど苦に感じてはいない。

始めたころは早起きがきつかったのだが、今ではもう平気だった。

普通新聞配達バイクや自転車などを使うのだろうが彼女は自分の足で走ることにしていた。

人一倍すぐれた健脚の賜物である。

規則正しいリズムで歩を刻みながら新聞を配達していく。

いつもと変わらぬ作業。

いつもと同じように早朝の冷たい空気はアスナの心と体を引き締め
てくれていた。

そのときだ。

なにか後ろの方から足音が聞こえてきた。
叫び声も聞こえる。

気になって振り向こうとした瞬間、ソレはアスナの横を凄まじい速度で通り過ぎて行った。

ソレはいうなれば悪夢の権化だった。

ひげを生やしたダンディなおじさんがセーラー服を着て後ろ向きに爆走していた。

しかもその手には大量の女性ものの下着が抱えられている。

その男はアスナの後ろに向かって高らかに言った。

「フハハハハハ！大人しくノーパンで学校に行くがいい！そして恥ずかしがれ！私はそれを見て爆笑する！」

次の瞬間また別の何かがアスナの横を驚異的な速度で通り抜けていく。

「殺す！今日こそはマジで殺す！」

もともと狼を彷彿とさせる鋭い目つきをさらにきつくしてその人――クラスメートの風間誠亜はパジャマ姿で前方の男の人を追いかけていった。

> i 1 0 2 7 4 — 9 2 6 <

あっという間にその姿が小さくなっていく。

「返さんかあああああああ！」

「はーっはっはっはっは！」

叫びながら彼方に消えていく二人をアスナはただ見送った。見送るしかなかった。

3分ほどその場に立ちつくした彼女は何も見なかったことにして再び駆けだした。

「今日はいい天気だー」

意味もなくそんな事を言ってみる。そう。何もなかったのだ。

風間誠亜がとけていた。

桜咲刹那は困惑気味に机に突っ伏してそのまま溶け落ちそうならいにだれている誠亜に話しかける。

「大丈夫ですか？誠亜さん」

誠亜は刹那の方へと顔を向け、力なく呟く。

「夜明けごろに神が来てな。突然ノーパンで学校行けとか言い出した」

刹那がひきつった笑みを浮かべる。

それに構わず誠亜が頭を机に横たえたまま続けた。

「断ったら、履いてたものも含めてパンツ全部レポートで盗んだった。それを追いかけてまわしてやっと捕まえてぼこったのが30分前だ」

「壮絶ですね」

「なんかもう今日はどっと疲れたわ。なにもしたくない気分。このまま帰ろうかな」

ぐったりと告げる誠亜に刹那は教室に備え付けられた時計を見ながら言った。

「まだ1時間目も始まっていませんよ」

「いやもういいかなあってさ」

そのままとろけていきそうならいのだらけつぷりを見せる誠亜。
その机を何者かが叩いた。

「誠亜！今日こそワタシと勝負するアルよ！」

少し色黒の中国人少女——古菲が息巻いて言う。
だが誠亜は欠伸とともに言った。

「今日は疲れてるからまた明日な」

だが古菲は引き下がらなかった。
肩を持つて誠亜を引き起こすと半ばまで閉じられたその眼をひたと
見据えて言う。

「昨日もそう言うて相手してくれなかったアルよ」

誠次はしばし考え込み口を開いた。眠気のせいで思考が鈍っている。

「昨日も神に振り回されたからさ」

「一昨日も相手しくれなかったアルよ」

「一昨日も神に振り回されたからさ」

「一昨昨日も相手してくれなかったアルよ」

「一昨昨日も神に振り回されたからさ」

「その前の日も相手してくれなかったアルよ！」

「その前の日も以下略」

古菲はうっうと唸り声を上げると誠亜の体をパツと離した。誠亜の体がゴツンと机にぶつかるのだが構わず古菲は指を突きつける。

「駄目アルよ！今日という今日は」

突然電子音が鳴り響く。

周りの者が一瞬視線を巡らせるが、その源は誠亜にあったようだ。誠亜がのたのたとポケットから携帯電話を取り出している。しかし味気ない着信音である。

おそらく買った当初から設定をいじっていないのだろう。

まあ刹那も似たようなもので人のことは言えないのだが。

「はい。風間です」

誠亜が電話を取った瞬間、幼い声が響いてきた

『セーアア！とーすたーが火い噴いたあ！』

次の瞬間、誠亜が開いていた教室の窓から身を躍らせた。突然の凶行に刹那は窓に駆け寄る。

「ちよっ！ここ3階……」

刹那が窓から顔を出した瞬間、強烈な突風が吹き抜けた。思わず目を閉じた刹那が眼を開いた時には誠亜の姿はどこにもなかった。

「ああああああ！逃げたアル！」

同じように窓から外を見ている古菲が叫ぶ。
それに苦笑しながら刹那は呟いた。

「何者なんだあの人は？悪人じゃないんだろうが………というかあの声は誰だ？」

隣で地団太を踏む古菲を無視して刹那は窓の外を見つめ続けた。

ティーは夢中になって指を動かした。
テレビ画面の中ではライオンみたいな髪形をした巨漢の戦国武将が
二又槍を振り回してバツバツサと兵士たちを討ち倒していつてい
る。

順調に敵を倒していた戦国武将だが後ろからの不意打ちによるめい

た。

敵陣深くに斬りこんでいたのが災いした。よろめいた戦国武将は前から後ろからと次々と斬りつけられて行く。

「ああ〜！ああ〜！」

ガンガン減っていくライフに思わず悲鳴を上げる。

必殺技を使おうとしてどのボタンかわからないのに焦る。

ティーは体に気を纏って凄まじい速度で説明書をつかみパラパラとめくった。

「○ボタンだ！」

○ボタンを押すとカッティンとともに戦国武将が咆える。

『虎はなぜ強いと思う！？』

戦国武将は手に持った二又槍を高速で∞の字に振り回した、前後左右の敵兵士がまとめて滅多切りにされる。

戦国武将は10秒近く周囲を切り刻み続けると最後に数回槍を振り回して吼えた。

『もともと強いからよー！』

周囲の敵の掃討は完了した。

これでしばらくは安心だ。ティーは安堵の息をつく。

回復アイテムを探そうとした瞬間どこからともなく銃弾が飛んできた。

次々と飛来する銃弾に戦国武将はなすすべもなく貫かれる。

「ああ〜〜!!」

残りライフがわずかだった戦国武将はその銃撃にとうとう倒れる。
画面にゲームオーバーを示す文字が表示された。

「う〜」

ティーは唸りながらゲームの電源を消した。

横に置いておいたコップ一杯の麦茶を飲み干す。

ティーにとってはテレビゲームなど生まれて初めての体験だった。
一人でいるとき暇だろうと誠亜がひっぱり出してきたものである。
そもそもダイゴに勧められて買ったものの誠亜自身はそれほどはま
らなかったらしく、隅に追いやられていたのだ。

電源の付け方。コントローラーの使い方。基本的な操作方法などを
教えてもらった。

適当に選んだゲームだがなかなか面白かった。

ティーはふと時計を見る。

もうお昼時だ。

普段は誠亜やダイゴがお弁当を買ってきておいてくれたり、作って
おいてくれたりするのだが、今朝は夜明けとともに現れた神が誠亜
のパンツをすべて盗み出すという凶行に出たため、それどころでは
なかった。

面倒を見てもらっている以上少しぐらい自分で頑張らないと自分
で食パンを焼こうとしたのだが、突然火を噴いたトースターに驚き
誠亜に助けを求めてしまった。

誠亜はすぐに助けに来てくれた。

どんな手段を使ったのか知らないが、すぐに助けに来てくれた。手際よく部屋の隅に置いてあった消火器でトースターの火を消す。火を消し終わるとティーに火傷がないか案じ、無事だと告げると安堵の息を吐いて、2、3話してまた学校に向かっていた。

時間はお昼時だ。

ティーは外に出ることにした。

クローゼットの中に設けられたティーのコーナーから服を取り出す。この服は前の休みのときに誠亜とダイゴとともに買ったものだ。楽しく服を選んでいいるティーを店員がほえましげに見ていたのを覚えていいる。

白のワンピースを着て白の鰐広の帽子をかぶる。

鏡をのぞき、帽子で猫の耳が隠れているのを確認した。

次いでテーブルの上においてあった財布を持つ。

誠亜たちに頼んで買ってもらった猫の顔の形をした財布だ。

中には誠亜がくれたお小遣いが入っている。

開けてみる。

中には500円玉が3枚、金色の輝きを放っていた。

それに満足して扉に向かう。

誠亜に言われたことを確認した。

「戸じまりはちゃんとすること。補導されないよう注意すること」

復唱しながら財布をしつかりポケットの奥に押し込み、寮の部屋の扉を開ける。

扉を出たところでティーは後ろを振りかえった。

なにかまだ注意されたことがあったような気がしたのだ。

しばらく考えて答えが出なかったティーはまあいいやと気にしないことにした。

ティーは敵を睨むような顔で眼前の看板を睨みつけた。
緊張に早まる鼓動を抑えつつ、拳を握る。
正直初めての実戦以上に緊張していた。

長年追い求めていたものが目の前にある。
これを見ていったい何度、嫉妬と羨望の念を抱いたことが。
いつか必ずと誓いながら届かぬそれに何度悔しい思いをしたことが。
しかし、今日という今日こそは夢の一つをかなえる時だ。

ティーは頬を叩いて気合いを入れなおし、そこに入って行った。
マクドナルドに。

自動ドアが開くとともに明るい声が響く。

「いらっしゃいませー」

ぎくしゃくと、緊張で右手と右足を同時に出しながらティーはレジカウンターに向かう。

「ご注文はなにになさいますか？」

店員のお姉さんが聞いてくる。

7歳のうえ小柄なティーのためにメニューを見やすいよう動かしてくれた。

「あ、ああああの！」

緊張で舌がもつれる。

だが店員はほほえましいものを見るように笑顔で待ってくれている。

（うわあ。いっぱいある。どれにしたら……）

あんまり待たせちゃダメだろう。

一所懸命にメニューを見回すが美味しそうなものがいっぱいあつてすぐには決められない。

早く決めなきゃ。でも決まらない。

ぐるぐると思考を回転させるティーの耳に聞き覚えのある声が響いた。

「少しは落ち着け。多少迷ったところで文句は言われん」

声をたどって下を見ると足もとに猫らしき生物がいた。

らしきといったのは明らかに猫ではないからだ。

その生物、猫の体にダンディなおじさんの頭がついていた。

あまりと言えばあまりな姿に思わず言葉を失う。

だがその生物――神の頭をつけたネコは気にした風もなく続けた。

「お前は食べたいものがいっぱいあって悩んでいるのだろうか？ならそう難しく考えることはない。“まずは”何を食べようか。そう考えろ。今日選ばなかったハンバーガーはまた来たときに食べればいい。お前はもういつでも食べに来れるのだからな」

まずは何を食べようか。

そう考えるとやはりオーソドックスなのがいいだろう。

「チ、チーズバーガーセットを下さい」

「はい。お飲み物は何になさいますか？」

言われて慌ててメニューの飲み物欄を見た。

コーヒーは苦いし、ジンジャエールってなんだろう。

フانتは炭酸果汁ジュースだったはず。コーラは誠亜の部屋の冷蔵庫に入っていたので飲んだ事がある。

「フانتをお願いします」

「こちらでお召し上がりですか？」

「お、お持ち帰りです」

「525円になります」

ポケットの中から猫さん財布を取り出し、中から500円玉を二枚取り出す。

「1000円のお預かりです。475円のお返しになります」

おつりを受け取り、財布に入れてポケットにしまう。

お姉さんが品をとりに行くのを見ながらホット一息ついた。

ついでになぜかまつとうなアドバイスをくれた神にお礼を言おうとするが、すでに神頭のネコはいなくなっていた。

紙袋に入れられたチーズバーガーセットを持って店を出る。

適当にぶらぶらと歩いて、公園を見つけた。

ベンチに座って、紙袋を開ける。

紙に包まれたチーズバーガーを取り出し、紙をとってかぶりついた。

「おいしい」

念願のハンバーガーに思わず声を洩らす。

ダイゴのご飯の方がおいしいが、誠亜やダイゴの言うとおり、ジャンクフードにはジャンクフードのよさがあった。

次々と、だがしっかり味わいながらティーはハンバーガーを平らげていく。

ポテトもファンタもあったという間に食べきってしまった。

ほうと一息ついてから食べ終わったごみを紙袋に入れて30メートルほど離れた場所にあったゴミ箱に放り込む。

いっぱいになったおなかをさすってティーは周囲を見回した。

綺麗に整理された町並み。

ティーにとって手の届かない雲の上の場所だったそこに今立ってる。こちら側に来れたというだけでこれほどまで見え方が変わってくる。

なんて。

あの時仕事に成功していたらどうなっていただろうか。

自分は少しのお金を持ってまだあの場所を這いずっていたのだろう。

偶然出会った二人の優しい人と思う。

彼らと出会えたのだから神によって驚かされたのも無駄ではなかったのだろう。

「くおらあああああああ！」

誠亜の叫び声を聞いてティーは振り向いた。

見れば誠亜が制服姿で爆走していた。

その先をカラスのきぐるみを着た神がきぐるみの羽の部分をバタバタとはためかせて空を飛んでいる。

その周囲を20羽近いカラスが飛んでいた。そのうちの一羽がなにやら弁当箱らしきものをくわえている。

ティーが声をかける間もなくそのまま神と誠亜は走り去って行った。

「大変だなあセーア」

どうにかしてあげたいとも思うのだが幽霊騒動いらいどうにも神に対する苦手意識ができていた。

とりあえず追いかけることにする。誠亜の走り去って行った方向に2分ほど進むと人だかりができていた。

なんの集まりか気になるところだがあいにくと人の壁の向こうは見えなかった。

仕方なくティーは近くの木に登る。

人の輪の中心には誠亜がいた。

なにやら疲れた表情で弁当箱片手に立っている。

その向かいではシニョンを二つ付けた色黒の中国人少女が構えている。構えからして中国拳法だろう。

「さあ勝負アルよ誠亜！」

「なあ先に弁当食わせてくれねえか」

「駄目アル！弁当食べるのを待ってたら昼休みが終わってしまうアル！」

誠亜は嘆息とともに弁当箱をカラスのきぐるみを着た神に預ける。

そしてどつしりと腰を落として右拳を引いた。

「いくアルよ！」

掛け声とともに中国少女が鋭く踏み込む。

瞬きの内に誠亜の懷に飛び込むと拳を打ち込んだ。

誠亜はそれをよけるでもなく防御するでもなく、そのまま体で受けた。

それに何を感じたか、中国少女は拳を突き出しきる前に咄嗟に飛びのいた。

それをうけて誠亜もまた突き出した拳を引っ込める。

中国少女はすぐさま誠次の懷に飛び込みなおすと怒濤の連撃を繰り出した。

比較的軽めの打撃をとにかく数打っている。

誠亜はその連撃を弾き、受け止め、受け流した。

だが誠亜は反撃することなくひたすら防御に徹している。
おそらくはティーと戦った時のことを考えると決定的な隙を窺っているのだろう。

誠亜はどうも一撃必殺にこだわるきらいがある。
なかなか反撃しない誠亜を不審に思っただのか中国少女が眉根を寄せ
る。

そして大ぶりな一撃を放った。

すかさず反撃しようとする誠亜。

だがまたしても中国少女が攻撃をやめて引いたおかげで誠亜も拳を
止めざるを得なかった。

中国少女がにやりと笑う。

おそらく今ので誠亜が大きな隙を待つて一撃必殺を狙っていること
はばれただろう。

好きの少ない小技で攻めてくるはずだ。

だが、ティーの予想に反して中国少女は隙の多い大技で攻めてきた。
激しい踏み込みとともに右の拳を突き出す。

誠亜はこれを好機と拳を身をよじってかわし、カウンター気味に渾
身の一撃を叩きつける。

「一撃必倒お！」

空を裂く、熊すら倒す拳が中国少女の胸に迫る。

（取った！）

ティーは胸中で歓声を上げた。

だが、次の瞬間、中国少女の腕が誠亜の拳をそつと反らした。驚愕に目を見開く誠亜の腹に踏み込みとともに肘を埋め込んだ。誠亜の体が地面と平行に吹き飛び、地面を滑って止まった。

アレぐらいでどうにかなる誠亜ではないだろうが、一撃打ち込んで返されたのだから負けを認めるだろう。

ティーは木の上から飛び降りて、地面に大の字になっている誠亜のとなりに着地する。

「負けちゃったなー」

軽く言うと、軽く答えてきた。

「そうだな。負けちゃったなー」

中国少女は構えを解くと人差し指を立てて言ってきた。

「なかなかよかったアルが、少し焦りすぎよ。誘いを見抜けないようではまだまだね。もっとクンフーをつんで、また勝負するアル」

勝敗がついたとみるや野次馬は散り散りになっていく。

「やっぱ古菲部長の勝ちかー」

「しょうがねえってあの人強いし」

口々に話しながら去っていく。

古菲というらしい中国少女が誠亜に歩みいよって手を差し伸べる。誠亜は軽い掛け声とともに腹筋の力で跳ね起きた。

それを見た古菲がファイティングポーズをとる。

「ム。意外とピンピンしてるね。ひょっと狸寝入りだったか？」

誠亜は首を横に振りながら、

「俺は一撃必殺がモットーでね。一撃をしのがれちまったから俺の負けさ」

「むう。どこか納得いかないアルが、誠亜がそういうんならしょうがないアル」

言ってそのまま立ち去っていく

「見てたのか？」

「うんまあ」

答えると誠亜は嘆息とともにティーの頭をなでた

「どしたんだ？こんなところで」

「マクドナルドに行ってた。前から行きたかったから」

「そうか。それは良かったな。じゃあおれはそろそろ行くぜ。まだ午後の授業があるしな」

言って誠亜は神の手から弁当箱を奪い取った。
そのまま教室に戻ろうとして、鳴り響いた予鈴に硬直した。

「弁当……結局食えなかったな」

少し悲しそうに言う誠亜にティーは嘆息した。

だが誠亜はすぐに切り替えたようでティーに向かって言う。

「お前もあまり遅くならないうちに帰るんだぞ」

「ん。もう帰るよ」

軽く手を振って踵を返す誠亜にティーはブンブンと大きく手を振った。

誠亜が完全に去って行ったあとティーも寮に帰ることにした。

桜並木を通って女子寮にたどり着いたティーだが、そこで大きな問題が発生した。

部屋の番号をどわすれしたのである。

雰囲気と過去の記憶を必死に探るが答えが出なかった。

ひとしきり廊下をうろうつとしたところで声をかけられた。

振り向くとこの女子寮にいる女生徒だろう。

誠亜に比べると大分小柄だ。

前髪を短く切っておでこを広く見せている。

「お嬢さん。どうかしたですか？」

問われて答えようとしてティーは言葉を止めた。

少女の手に持った恐るべき名のジュースを見てだ。
抹茶コーラ。

ただでさえジュースなどの嗜好品には縁遠かったティーである。
全く味の想像がつかなかった。
とりあえずマズそうだというのだけはわかる。

「どうかしたですか？」

言いなおされてティーは我を取り戻した。

ふとなにかがひっかった。

だが結局そのなにかが何なのかわからなかったので無視することにする。

「セーアの部屋どこか知ってる？」

問われて少女は首をかしげた。

「セーア？ああ。誠亜さんですか。それならそちらですよ」

指差されたのはティーの眼前の扉の隣だった。

「ありがとう」

ぺこりと頭を下げて示された扉の前に立つ。

ポケットから鍵を取り出し鍵を開けると、部屋の中へ入る。

扉の前に立つてから一度もよそみをしなかったティーには少女が驚愕の表情で自分を見ていることに気付けなかった。

結局、誠垂のした注意の一つ、部屋を出入りするところをあまり見られるな、というのをティーが思い出すことはなかった。

（はて。何か面白いことはないだろうか。）

神は胸中で呟いた。

ここ最近は何日のように悪戯をしてきたためか微妙にネタ切れ気味だった。

いや悪戯のネタはいくらでもあるのだがいまいちぐつと来ないのだ。神は顎に手をあてて考え込んだ。

ふむと呟くと2・Aの教室に転移する。

空間ゲートを開くと気付かれやすいので存在座標を強制改竄することによって転移する。

した後でゲートそのものに認識阻害をかければよかったかと思いたくはない。

まあどうでもいいことだった。

こちらに気づいたものはいない。

神がだれもこちらに気付かぬよう認識阻害をかけたのだ。

魔法使いだろうがなんだろうが気づけるはずがない。

（さて何をしようかな）

神がそう考えた瞬間、扉をぶち開けて一人の少女が教室に飛び込んできた。

「みんな大変だよー！」

その少女は大変だと繰り返しながら教壇に立つと黒板に一枚の紙を張り付けた。

「風間誠亜に隠し子発覚だよ！詳しいことはここに書いてあるから読んで！」

「ええええええええええええ！」

教室中から驚愕の叫びがあがり、多数の少女が黒板の紙の前に殺到する。

「ここ最近風間さんが6、7歳の小さな女の子と一緒にいるのが目撃されている！あたしが撮影できたのは高校生ぐらいの男の人と一緒にその子を連れて服屋に入るところだけだけど、この子が風間さんの部屋に入るところが夕映に目撃されているわ！」

「ウツソ！じゃあまじで」

「相手は誰？やっぱダイゴさん？」

少女たちのボルテージは加速度的に上がっていく。
ストッパーがないのかとどまるところなしといった様相だ。

（というか14の、実年齢で言っても17の人間に7歳の娘がいるわけないのだが、どうして気付かないんだろうなこいつらは）

内心少々呆れながら、神はクラスを見回して呟いた。

「だが面白そうだ。放っておこう」

神の言葉を聞き咎める者はいない。
外でカラスが鳴いていた。

誠次は教室に入ると同時に注がれた生暖かい視線に戸惑って足を止めた。

しかも一つや二つではない。
数十もの視線だ。

（なんだ？）

内心で呟く。

次の瞬間、大量の生徒達が誠次のもとに殺到した。

そのさまに一瞬たじろぐが続く言葉にさらに言葉を失う。

「キヤー！誠亜ちゃん隠し子がいるってホント！？」

「相手は誰！やっぱりダイゴさん！？」

「ねえねえ何歳なのあの子！？」

「名前は！？」

やつぎばやに繰り出される質問に誠次は混乱していたが、質問の意味を理解すると同時に叫んだ。

「ちよちよちよつと待てええええええ！俺の隠し子！？どつから出てきたそんな話！」

「ふっふっふ。ごまかそうつたって駄目よ」

後ろから聞こえてきた含み笑いに誠次はこめかみをひくつかせながら振り返った。

そこには朝倉が腰に手をあて、不敵な笑みを浮かべてそこに立っている。

「朝倉……お前か」

毒づく誠次には構わず朝倉はどこからともなく一枚の写真を見せてきた。

「げっ」

思わず呻く。そこには服屋に入る誠次とダイゴ、そしてティーの姿が写っていた。

「ネタは上がってんのよ。他にもあんだとこの子が一緒にいるところを目撃した子も結構いるんだから。極めつけに夕映がこの子が鍵を使ってあんだの部屋に入るところを目撃しているわ」

得意げに言う朝倉に誠次は呻いた。

（つたく。ティーのやつ。部屋に入るところをなるべく見られんなって言ったのに）

「さあ。洗いざらい話してもらっわよ」

メモを片手ににじり寄ってくる朝倉に誠次はひきつった笑みを浮かべた。

「い、いや知らないって。そんなやつ」

「うそおっしゃい！ならこの写真に写ってるあんたと男の人と子供は誰なのよ」

写真を突きつけ詰問する朝倉。後ろではクラスメートたちが頷いていた。

「知るか。他人の空似だろ」

「じゃあ夕映が見たあんたの部屋に入って行った女の子はなんなの！」

「寝ぼけてたんだろ」

苦し紛れに答えを返す。

視界の端でスーツ姿の神がにやにやと見ているのを見て殺意がわきあがる。

助けろと言ったところで無駄なんだろう。

「服屋に入ってた子と夕映の見た子は一致するのよ。こんな偶然があると思う！？」

「いやそれはだな……」

言葉に詰まる。

そもそも一緒にいるところを写真に撮られてしまっているのではない訳するにも限度がある。

だがだんじて隠し子などと認めるわけにはいかない。

相手がダイゴだなどとなおさらだ。

そもそもティーのことがばれるのはいただけない。

彼女は学園長の孫を誘拐する手伝いをするために麻帆良にやってきたものだ。

もうそんなことはしないとはいえそれで魔法使いが納得するとは限らない。

何か言いわけしようと口を開きかけた瞬間、幼い声が教室に響きわたった。

「セーアー。おべんとー」

なにやらティーらしき少女が弁当箱を掲げて教室の入り口に立っていた。

胸中で泣きながら呟く。

（ありがとー。でもちょっとタイミング悪いかなー）

そんな誠次の思いにも気づかず、ティーは弁当を持ってパタパタと歩いてくる。

「セーア。はい弁当」

差し出される弁当を苦笑とともに受け取りながら誠次はどうすべきか考えた。

誠次が答えを出すよりも早く周囲の少女たちが反応する。

「この子が！？確かに写真と同じ」

「夕映。この子が？」

「はい。この子で間違いありません」

「可愛いじゃない」

盛り上がる年上の女子たちにティーはきょとんとした眼で周囲を見回した。

無意識のうちに誠次の体に抱きつく。

「ねえねえ。君、名前は？」

ペンをマイクのように向ける朝倉にティーは困惑しつつ答えた。

「ティ、ティー」

朝倉は質問に答えが返ってきたことに目をきらりと輝かせて、

「それじゃあもう一つ。ティーちゃんは誠亜の娘なの？」

あまり勘繰られるのは良くないがここでティーが否定すれば疑いは晴れる。

あとはさっさとごまかしてティーを返して終わりにしよう。
そう黙考した誠次の服を握りながらティーは口を開いた。

「セーアがかーちゃん……？」

ティーは呆然とそう呟いた後、頬を朱に染めはにかむように微笑む。

「いいな……それ」

「ちよっ！」

「「「「「かわいいiiiiiiiiii」」」」」

少女たちから歓声が上がる。

それとともに朝倉がさらに詰め寄ってきた。

「これで決定ね！さあもう言い逃れはできないわ。きりきり吐きなさい！」

「ぐっ。しかし」

返す言葉を見つけれずにいる誠次に後ろから声がかかる。

「くっくっく。ティーのあの笑顔を壊すことだけはしてはならんよなあ」

「黙れ。んなこたあわかつてる」

いつの間にか誠次の後ろに回り込んだ神の言葉に誠次は低く呻いた。

どうしたもんか。

確かに誠次の服を掴んで微笑むティーの姿は幸せそうに見える。

今のティーに向かって母親呼ばわりなどまっぴらだという気にはなれなかった。

「相手はやっぱりダイゴさんよね。二人の馴れ初めは？」

まるで記者のようになにやらたわけた質問をしてくる朝倉を無視して誠次は頭をかいた。

しゃがみ込み、ティーの目を見つめながら微笑む。

「ティー。ねーちゃんじゃだめか？」

「え？」

不思議そうに見つめ返すティーに誠次は頭を撫でながら続ける。

「俺は母親って年じゃないだろ。だからさ、かーちゃんじゃなくてねーちゃんじゃだめか？」

「……ねーちゃん……」

ティーはしばらく言葉の意味を噛みしめていたようだが、微笑むと同時に抱きついてきた。

「ん……いい。セーアはあたいのねーちゃんだ」

それを抱き返しながら誠次も微笑んだ。

「ふむ……なにやら面白い話というよりいい話になってしまったな」

後ろで呟く神を半眼で睨む。

それを気にした風もなく神は苦笑すると、

「まあこれはこれでいいか」

周囲の少女たちは微笑んでこちらを見ていた。なかには涙ぐんだりする者もいる。

「んー。つまりどゆこと？ ティーちゃんは誠亜の隠し子じゃないの？」

眉間にしわを寄せて言う朝倉にティーが不思議そうな眼差しで答えた。

「？ あたい7歳だよ。14歳のセーアの隠し子なわけないじゃん」

7歳の少女にそう言われ周囲の少女たちはうつ、と呻いた。言われてみれば当然のことだ。それに7歳児に指摘されるまで気付かなかったというのがきつかったのだろう。

ティーはこちらに抱きついたまま言う。

「あたはずつとある街の路地裏にひとりで暮らしてたんだ。それでこの麻帆良にきていろいろあつて、セーアとダイゴが拾ってくれたんだ」

さらりと出てきた過酷な過去に周囲の少女たちが言葉を失う。そのなかの一人の少女がティーに抱きついた。

「大変だったんだねー！」

勢い良く抱きついたため、ただでさえ小柄なティーは思わず倒れこむ。

それと同時にかぶっていた帽子がはらりと落ちる。

「あっ！」

ティーの喉が小さな悲鳴を上げる。

帽子が脱げてティーの頭にある大きな猫の耳があらわになる。

ティーの表情が恐怖に歪む。

それを見た瞬間誠次は大きく開いた右手を天にかかけ叫んだ。

「神！」

ためらいなく奥の手を発動させようとして、誠次は神に止められた。神はティーの方を見ながら首を横に振る。

ティーに抱きついた少女はきよとした表情でティーの猫耳を見つめていた。

きつく眼をとじたティーとは対照的に軽い表情で猫耳を触った。

「かーわいいー！。ねえみんな見てよ。ホントに生えてるよ」

「ウツソ！ホントだふわふわしてるし動いてる。かわいいー」

周囲の少女は口々に可愛いと言いながらティーやティーの耳を触る。ティーは不思議そうに口を開いた。

「気持ち悪く……ないのか？」

「んー、なんでー？」

軽く返す少女たちにティーの顔も緩む。

誠次はほっと胸をなでおろした。

これでクラスの皆がティーのことを気持ちわるいだのなんだのとい

つたら、ティーの心に深い傷ができてしまつところだ。

このクラスのおおらかというか気の良さに感謝する。

ところが輪から少し離れた一人、眼鏡をかけて皮肉気な眼差しをした少女――長谷川千雨が呆れたように、同時に不愉快そうに毒づいた。

「おいおい。猫耳がマジで生えてるなんて、どう考えても普通じゃねえだろうが」

どうやら悪い意味で一般的な感性の持ち主もいるようだ。誠次が動き出そうとした瞬間、千雨の隣に神が現れた。千雨のこめかみを指でつついて囁く。

「変じゃないさ。猫耳ごとき大したことじゃない」

神がそう言った瞬間千雨は不愉快そうな表情を消し、呆けたように呟いた。

「そうだな。猫耳ぐらいこの麻帆良じゃ別に变じゃないか」

そう言つて自分の席に戻っていく。

「助かったぜ」

誠次がそう呟くといつの間にか隣にいた神が苦笑する。

「なに。私が好きでやってることだ。気にするな」

そう言つて神は一度大きく息を吸つと、眼をかつと開いて一喝した。

「他言無用!!」

その言葉に反応するものはいない。

やはり神の存在はクラスの皆には気付けないようになってきているのだらう。

「今のは？」

誠次が問うと神は軽く肩をすくめて応える。

「暗示みたいなものだ。これでクラスの連中はティーのことを言いふらせなくなった」

「重ね重ね悪いな」

「気にするな。単に私がどろどろした差別劇なぞ見たくないのだからっただけだ」

「そうか」

言つて誠次は苦笑した。

心の中で少しだけ。ほんの少しだけ神の評価を上げる。

そして小さく呟いた。

「……いいクラスだ」

2 - Aの教室の前の廊下。
二人の男が立っていた。

「よかったですか学園長」

温和そうな表情でたたずむスーツ姿の男——高畑がそう問うと学園長はフォッフォッフォと笑い声をあげた。

「なにか問題があるかね？」

「彼女は一応このか君を狙った陰陽師に雇われていた者ですが」

学園長は白いひげをなでると片目を開けて言う。

「あの子がまたこのかを狙うことがあると思うかね？」

それに高畑は苦笑しつつ答えた。

「ないでしょうね。彼女の目的であつた食べ物と家、さらには家族まで手に入れたのですからこれいじょうこのか君を狙う理由がありません」

学園長は口元に笑みを浮かべて言う。

「なら問題はないじやろう？」

「そうですね」

そう言うのと学園長はフォッフォッフォと笑いながら去っていく。

高畑もまた笑みを浮かべて教室の扉に手をかけた。

中からはまだ楽しそうな声が聞こえてきていた。

第9話 ティーの平日（休日ではない）（後書き）

どうもすちゃらかんです。

今回、少し誠次視点が少なめでした。

それでもギャグを入れようと苦心したのですがうまくいったかどうか。

もうそろそろネギが登場して話が原作と絡んできます。

それにあわせて赤松板に移動しようかどうか悩んでいるのですが…
…どうしよう。

移動するしたら新話投稿時にあとがきにでも「次話投稿時に赤松板に移ります」みたいにかいてから移動しようと思っているのですが。

拙作ですが今後ともよろしく願います。

第10話 H A H A H A こいつが教師？そんな馬鹿な！

第10話 H A H A H A こいつが教師？そんな馬鹿な！

朝起きて無意識に金髪の幼い姿を確認している自分に気づいて苦笑する。

それだけ彼女が自分にとって日常となりつつあったのだろう。
そして彼女がいない状況にわずかの寂しさを感じているということか。

（アホらし）

誠次はベッドから降りようとして動きを止めた。

「寂しがるぐらいならティーをダイゴに預けなどしなければ良からう？」

いつの間にかベッドの脇に立っている神を半眼で睨む。

「無断で人の部屋に入るな。それと人の頭の中をのぞくんじゃねえ」
呻くように言って誠次は欠伸をした。
にじんだ涙をぬぐいながら真顔の神を眺める。

「いやしかし、なぜ急にティーをダイゴの方に預けると言ったのだ？前にお前たちが言っていたように男子寮の方に預けるのはリスクが大きい。ダイゴ周りの人間もみんな2 - Aのような気質のものというわけではないしな」

言われて誠次は天井を見上げた。淡々と告げる。

「先を見越して……かな。いつまでも、ティーが大人になるまで俺達が見えながら育てるってわけにもいかないだろう？折を見て彼女を正式に引き取った方がいい。そうすりや彼女を学校に行かせることだってできる。吸血鬼や半妖、忍者なんかを平気で受け入れる学校だ。猫耳ぐらいわけねえさ。そして引き取るならきつとダイゴの方がいい。だからあいつのところにも預けるんだ」

「なぜダイゴの方がいいのだ？」

問われて誠次は苦笑した。

ベッドから降りてキッチンに向かう。

コップに水を注いで眠気覚ましに一気に飲み干す。

「“家族”さ。ティーはずっと一人で生きてきた。だから家族のぬくもりがあるところの方がいい。ダイゴんちは姉が一人に両親がいる。個性的だがいい奴らだ。それに比べて俺の両親は物心つく前に死んでしまつて、家族らしい家族といやあ超然として何考えてんのかわからねえじいさんとしょっちゅうふらりと居なくなる姉さん

だけだ。どっちがいいかは明白だろ？」

神は納得したように頷くと顎に手をあててにやりと笑った。

「なるほどな。しかしお前の家族か。一度会ってみたいものだ。どんな奴なのだ？」

誠次はんーっと唸って答えた。

「さつきも言つたようにじいさんは超然とした人だ。俺の住んでた山の奥に屋敷がポツンとあつてそこに住んでるすうりとした初老の老人がいたらそうだな。姉さんはしょっちゅういなくなるから遭遇率できるかは知らねえけど、その屋敷に黒い髪をかなり長くのばした14、5歳ぐらいのやたらテンションの高い女の人がいたらその人だ」

神の表情が訝しげに歪む。

10秒ほど黙考したのち、問うてきた。

「14、5歳でなんで“姉”なんだ？」

誠次はからからと笑いながら答える。

「だって俺が4歳のころから14、5歳ぐらいだったし。なら姉さんって呼ぶのが普通だろ？」

当然のことのように告げると神は冷や汗を一筋流しながら言った。

「今何か妙な発言があつたような気がするんだが」

「んあ？」

訳が分からずに誠次は問い返す。
すると神はこめかみに手をあてて言うてきた。

「13年前からずっと14、5歳の姿というのはあからさまにおかしいと思うのだが」

言われて思考する。

自分が4歳のころ14、5で、そして17になった今でも14、5。

「ホントだ！変だ！」

「今の今まで気づかなんだのか！？」

誠次は戦慄をにじませながら呟く。

「そっぴやあ二人で街に行くって時にデートだとかぬかしてたから、じいさんに『年考えろや』つつたらふたりして意味ありげに笑ってたな」

「貴様の家族がますますわからなくなってきた」

呻く神に誠次はしばらく頭を悩ませていたが突然、表情を明るくするとあっけらかんと言った。

「まあいいや」

「いいのか！？」

誠次はけらけらと笑いながら、

「だってダイゴの母親だって20代半ばにしか見えないぐらい若々しいぜ。似たようなもんだろ」

「いや違うと思うが……」

なおも言いつのる神を無視して誠次は冷蔵庫から昨日コンビニで買っておいたカレーパンを取り出した。

「んー？今日はいつもより遅いな。急いで食うか」

呟きながらカレーパンを口に詰め込んでいく。

最後の一口を飲み込んだところで神が思い出したように言った。

「そう言えば今日は……」

そこまで言って口をつぐむ。

そのまま怪しい笑みを浮かべた。

誠次は半眼で呻くように問う。

「今日は……なんだよ？」

「ククク何でもない。気にせず登校するがいいぞ」

「急激に不安になってきた」

言いながらもたちあがって部屋の壁に掛けてあった制服をとる。

神を窓から放り捨て（ここは二階だが気にしないことにした）服を乱雑に脱ぎ放った。

適当に制服を着て自分の体を見下ろす。

「どうにもスカートってのは好きになれねえなあ。スースーする。刹那みたいにスパッツでもはこうかなあ」

呟く誠次に神が呆れたように言う。

さきほど放り捨てたはずだがいつの間にかそこに居た。

「そんなくそ長い靴下はいといてスパッツなぞはけるわけなかつた」
言われて誠次は自分の靴下を軽く引つ張った。

太ももの半ばまであるサイハイソックスという珍しい種類の代物だ。

いままでズボンをはいていたのに急にスカートをはくことになり、肌寒さに頭を悩ませていた時にクラスメートの綾瀬夕映がはいているのを見てこれはいいと求めた代物である。

いくつか服屋をめぐつたのだがなぜか見つからず、ダイゴに聞いたところ、ずり落ちやすいとか、これをはいていると下着が見えかねない短いスカートををはかなくてはならないなどの理由から敬遠されているのだと蘊蓄を聞かされた。

前者はわかるが後者は理解できなかったのだが（別に長い靴下に長いスカートをはいてもよからうに）とりあえず入手が困難だということにはわかった。

結局神に作らせたものをはいている現状である。

「ん〜？ いんじゃねべつに？」

「そんな妙なはき方するぐらいなら素直にタイツにしたらどうだ？」

言われて誠次はぼんと手を打った。

「をっ」

それを見つめながら神が言う。

「うすうす感じていたが、お前って少し頭の回転が悪いな」

神の言葉に誠次は憤慨したように言った。

「失礼な。ねーちゃんには頭の鈍いところも可愛いって言われてたんだぞ」

「……その言葉、頭が悪いってのは否定してないって気づいてるか？」

「……ホントだ！」

神は半眼になると平坦な声音で言う。

「うすうす感じていたが、お前って頭の回転が悪いな」

「“少し”が抜けた!？」

叫ぶ誠次に対し、神は右の手首のあたりを見ると驚愕したように言うてきた。

腕時計を見るようなくさだが、そこに腕時計はない。

「もうこんな時間か！まずいな。このままでは間に合わない」

「なんの話だ。今から出てもラッシュにや巻き込まれるが間に合わないってこたないぞ」

言って鞆を肩に担いで扉へと向かう。

「いやこちらの話だ。気にするな」

パタパタと手を振る神に誠次は猛烈に嫌な感覚を覚えて呻いた。

「すっげえ怪しい。決めた。今日は遅刻していいからゆっくりいく」

神は驚愕の眼差しでこちらを見ると人差し指をこちらに向け糾弾するように叫んだ。

「ええい何という理不尽！それでは何も起きないではないか！」

「理不尽じゃねえ。何もかもお前の思う通りに動いていたらこっちの身が持たねえよ」

誠次は毒づいて扉の取っ手に手を伸ばす。

「むうそんなつれないことを言うでない。せつかくお前のために足を用意したというのに」

「ああ？」

胡乱気な眼差しで振り向く。

見ると神が得意げな顔で手を叩く。

それに応えるように誠次の部屋の扉が開いた。いや蹴破られた。ぶつけないよう少し頭を下げて入ってきたのは一頭の馬だった。それもただの馬ではない。

燃えるような鮮やかな赤色の毛並みをした馬だ。

馬は神の横に行くとおもむろに顔だけこちらに向けた。

「見ろ！立派な馬だろう！私がこれで送ってやろう」

「車ですらないのかよ。ていうかドアどうすんだよ」

神はおもむろにその馬にまたがりながら答える。

「ううむ。ここは女子寮の中だし、少しドアがないぐらい問題ないだろう」

「問題あるよ。今すぐ直せ」

誠次が半眼で毒づく神は嘆息しながら馬の上で体の向きを180度回転させた。右腕をドアにかざす。

「では直すぞ」

言って神の手に光がともった瞬間。

ヒヒイイイイン

高い叫びが部屋に響いた。

馬は大きく竿立ちになるとそのまま壁に向かって突っ込んだ。

「む？」

どこをどうやったものか手綱が神の首に絡まる。

だがそんなことはお構いなしに馬はその体で部屋の壁を突き破った。木材や断熱材の破片をまき散らしながら朝日のもとにその赤い雄姿をさらして消えて行く。

無論手綱を首にからめられた神も一緒だ。

「たあすけてえええええ」

「……」

誠次は無言でドアに近寄ると、片手で持ち上げ、もとあつた姿にできるだけ近づくよう立て掛けた。

キヤアアアアアアアア

外からつんざくような悲鳴が響いてくる。

それに応えるようにドアがまた誠次の方に倒れてきた。

誠次は一度嘆息するとドアを蹴り上げる。

勢いよく一回転したドアに鋭い前蹴りをお見舞いした。

轟音を立てて、外周に若干を罅を入れながらドアがめり込む。

誠次は素早く踵を返すと鞆をひつつかんで壁の大穴から身を投じた。

少し離れたところで大きな土煙が上がっているのが見えた。

「うーむさすがは赤兎馬。かの三国志の武将、呂布の愛馬よ。とても馬とは思えん速度だ」

「言ってる場合か！！」

首に巻きついた手綱で引つ張られながら神は感慨深げに言った。それに怒鳴り返す。

眼前の馬が歴史上の著名な存在であることには驚きだがまあ神ならありなのだろう。

あいにく歴史などほとんど知らない誠次だったが、ダイゴに勧められたゲーム三。無双によって呂布と赤兎馬の名前ぐらいは知っていた。

風を引きちぎりながら疾走する。

その馬はまるでこの道は俺のものだと言わんばかりに車道を爆走していた。

あるときは車の間をすり抜け、ある時は車をとび越え、またある時は車の天井を踏み越えて走行する車を飛ぶように追い抜いていく。あまりの速さに神を引っかけた手綱が地面と平行になっている。

それにつかず離れず走りながら誠次は舌打ちした。

ぶら下がっているのが人間だったなら首がしまつて大変なことになつていただろう。

それ以前に神は何度か車に叩きつけられているので、常人ならそれで大怪我だ。

だがまあ神なので心配はいらないんだろうが。

なぜ付かず離れずなのかというと、この馬誠次が追い付こうとスピードを上げると自分もスピードを上げるのだ。

最初は普通の馬より少し速いぐらいだったのに、今じゃ道路を走る車が流れるように後ろに離れていつている。

道行く人々、運転席でハンドルを握っているもの、この様子を見かけた多くの者達が目を丸くしてこちらを見ている。

だが幸い事故などは起きていないようだ。

だがいつまでもラッキーが続くとは限らない。

危惧する誠次に対し、馬はこちらをちらりと一瞥するとにやりと不敵に笑った。

比喻ではなく本当ににやりと笑ったのである。

次の瞬間赤兎馬が天を翔けた。

高い高い跳躍で近くの4階建ての建物の屋上へと飛び乗る。

そのままこちらを見下ろして一声いらないた。

「チッ。馬じゃねえぞアレ」

誠次は荒々しく舌打ちすると馬の飛び乗った建物の壁に向かって跳躍する。

その壁を蹴ってさらに高くへ跳躍した。

ちょうど反対側にあった電柱を掴んで一回転すると、さらに電柱を蹴って飛びあがる。

再び建物の壁に張り付くと、壁を蹴って屋上の縁に指をかける。そのまま片手の力で自分の体をはね上げると、3回転ほどして屋上の中央に着地した。

そこには赤兎馬が待っていた。

不敵な表情でこちらを見ている。

神が何やら首の手綱を外すそうと四苦八苦していた。

「ようしここまでだ。大人しく馬小屋に帰るがいいぜ」

だが、赤兎馬は挑発的に鼻を持ち上げると高くいななく。

「ヒヒイイン！」

「我が走り止めたくば力ずくで来い、だそうだ」

神が真顔で通訳すると赤兎馬はそれに頷いた。

なにやら人語を解しているような気がするが気のせいだろう。

赤兎馬は踵を返すと、ビルの反対側へと跳躍した。

少し手綱が緩んできていた神が再び引つ張られて悲鳴をあげていたが、それを無視して誠次は追うように飛ぶ。

ずしんと重々しい音を立てて着地すると、誠次は顔をあげた。

無数の驚愕の視線が注がれていた。

誠次は周囲を見回して舌打ちした。

それは麻帆良名物通学ラッシュだった。

数えきれない学生たちが啞然とした眼で誠次を、そして何より赤兎馬を見ていた。

赤兎馬はその視線に気分を良くしたようにいなないて駆けだした。学生たちが蜘蛛の子を散らすように逃げだす。

そのさまは歩行者天国を爆走するバイクから逃げるようなものだ。もつともバイクでもこんなスピードを出しはしないが。

「待たんかあああああ！」

叫びながら追いかけると馬は挑発するように鳴いてスピードを上げる。

それに引き離されぬよう駆けながら誠次は少し前を引っ張られて宙に浮く神を怒鳴りつけた。

「おい神！あの馬止める！このままじゃ怪我人が出るぞ！」

だが神はまるで危機感など感じていない顔で言う。

「はっはっはっは。止められるもんなら止めているさ」

「使えねえなオイ！何とかしろよ。さもないとこうやってお前の脚掴んでブレーキ掛けちゃったりするんだぞ」

「ぬあああああああ！首が！首が千切れるっつっつっつっつ！」

悲鳴を上げる神に対し、誠次はさらに足に力を込めた。

赤兎馬もまた止められまいとさらに力をこめて踏み出す。

「よ、良かろう！ならこれで！」

神がようやく何かの道具を取り出したのを見て誠次は神の足を離し

て並走した。

「よしやれ！」

「うむ！」

威勢良く頷いて神がボールにトランペットの先端がついたようなアイテムのスイッチを押した。

パラリラパラリラパラリラパラリラパラリラ

「なんの意味があるうつつうつつうつつ！？」

誠次は絶叫しつつ隣で揺れる神の頭に拳を叩きこんだ。

馬に引っ張られて宙を浮いている状態ではその拳に耐えることなど出来ず、神の体はきりもみしながら飛んでいく。

だがすぐさま赤兎馬に引っ張られる力でもとの位置に戻ってきた。

「赤兎馬がこんなに我の強い馬だったとはな。これを従えるあたりやはり呂布は優れた武将だったのだろう」

「感心している場合か。このスピードでぶつかったら普通の人間はただじゃ済まねえぞ」

言っている間も赤兎馬は通学ラッシュの中を爆走し続ける。

どうやら神の起こした暴走族音は意外に人々の注意をこちらに向け、効果を生んだようで、みな慌てて道をあけるので事故はなかった。

道が開いたことで赤兎馬がさらにヒートアップしている気もするが。

「しかたない。こうなったらやっぱ手綱を掴んで無理やり止めるしかねえな」

そう言っただけで回りこむ誠次に神は真顔で問いかけた。

「そっけないながら貴様はなぜ私の足の方に回り込むんだ？」

それに誠次はどこか無責任な笑い声を上げると、

「はっはっは。気にすんな。とりあえずお前の首の強度を信じているとだけ言っておこう」

「果てしなく嫌な予感。かくなるうえはヒヒイイイイン！」

突然神が馬の無きまねをすると赤兎馬は驚いたように後ろを振り向いた。

そして神の足をつかもうとしているこちらの姿を見ると、瞳を燃え上がらせて地を蹴った。

その真紅の体が加速する。

強靱な脚力によって爆発的に加速した赤兎馬にみるみる引き離されていくのを見て誠次は大きく息を吸い込んだ。

「逃がすかああああああ！」

大地を踏みぬかんばかりに力をこめて疾走する。

一度は離れた赤兎馬の姿、そしてそれに引っ張られる神の姿がじりじりと近づいていく。

一瞬で後ろに流れていく別段見覚えもない少女の姿にふと自分たち
がどれぐらいのスピードを出しているのか気になった。

むろん誠次には車のように時速を表示するメーターなどついていない
のでわかるわけではないのだが、とりあえず一般に知れ渡っている
まっとうな動物では絶対出せない速度を出しているのは間違いない。

「ていうか何もんだあの馬。ウマじゃなくてUMAだろ」

毒づく誠次の耳に神のとぼけた声が響いた。

「あ」

「なんだよ!」

耳元で鳴り響く風切り音に負けじと声を張り上げる。
すると神は緊迫感に欠ける声で答えてきた。

「いやなに、この馬の前に立ちふさがる勇氣ある若者がいるような
のでな」

「のんきに言ってる場合か!」

叫びながら誠次は渾身の力で地を蹴った。

赤兎馬を追い抜き、その前で呆然と突っ立っている少女に飛びつく。

短い悲鳴を上げる少女を抱きかかえながら地面をころころと転がる。
出していたスピードがスピードだ。

激しく地面に打ち付けられるがその程度でどうにかなくなってしまっ
うなやわな鍛え方はしていない。

「めぎゃんっ！！」

何やら甲高い悲鳴が聞こえる。

おそろおそろ振り向くと、赤兎馬にはねられて宙を舞う少年がいた。

「うをiiiiiiiiiiii！」

悲鳴のような叫びをあげながら駆けだそうとするが、誠次が受け止める間もなく少年は首から地面に突っ込んで激しく地面を転がった。土煙を纏いながら地面に突っ伏す少年はびくりとも動かない。

「ちよつとちよつとまずいんじゃねえのか！これは！？」

「うむ確かにまずいな。このままでは始まる前に終わってしまう」

うしろから突如聞こえてきた声に誠次は振り向いた。

「なにのんきに言ってた。これほとんどお前のせウオワアアアアアアア！」

振り向いてすぐ悲鳴を上げる。

そこには神がいた。

しかしその神には首がなく、首から上はまるでサッカーボールか何かのように小脇に抱えられていた。

しかしその不気味さなど知らんと言わんばかりに神は含み笑いを上げる。

「ふっふっふ。首に引っ掛かっているのなら首を取ってしまえばい

いのだと気づいてな」

「背中に手が届かんならまごのて使えばいいみたいな軽さで言うなよ。ていうかいいからはよ乗せる。いろんな意味で注目を集めてる」

「何っ！注目を！？」

「ポーズはとらんでいいっ！首を乗せる！」

神は首を載せるとぐりぐりと体に押し付けた。

それでもうOKなのか、神は2、3度首をひねって見せる。

「しかたない。応急処置をしよう」

言って神はその10歳ぐらいの赤毛の少年の横に座り込んだ。
袖をめくって脈をとる。

「ねえ、大丈夫なのソイツ？」

問われて誠次は振り向く。

今になって気づいたが先ほど誠次が助けたその少女はクラスメートの神楽坂明日菜だった。

二つにくくった髪と髪止めの鈴。オッドアイが印象的な少女だ。

「それをいまから確かめるんだよ」

誠次がそう言ったのを見計らったかのように神は目を見開き、愕然とした面持ちで叫んだ。

「脈が……無い！」

「ええっ！」

驚くアスナに対し、誠次はいたって冷静に、半眼で告げた。

「そりゃあ掌じゃあ脈はとれねえだろ」

言われて神は手の平にあてていた指を手首に移した。

「うむ。どうやら脈はあるようだ」

「どうか怪我してんじゃねえか？あんだだけの勢いではねられたんだ」
誠次が問うと神はどこか面倒くさそうに少年の顔を叩きながら答えた。

「問題ない。というか問題ないことにした。応急処置も看病もこれ以上やっても別に面白くもなんともないからな」

「お前な……」

頭痛のする頭を抱えながら誠次が呻く。

すると少年が小さく呻いた。

パチリと目を開くと飛び起きて周囲を見回す。

「う、馬！馬が！赤い馬が通常の3倍のスピードで……」

何やらよくわからないことを口走る少年に神は立ち上がりながら口を開く。

「3倍なんてものではなかったが」

どうでもいいツッコいをする神にアスナが呆れたような表情を浮かべる。

「そついやああの馬どうしたんだ？公道を走らたら面倒なことになるだろ」

誠次も誠次でどこかずれたことを問う。
神は鷹揚に頷いて天を見上げると、

「うむ。なんか速さの限界に挑んでくるといって旅立っていった」

「迷惑な」

「いやそんな問題じゃないでしょ」

アスナの突っ込みに誠次達は顔を少年の方に向ける。

少年はまだ混乱しているようだが、そんな少年に神は優しく語りかけた。

「あの馬は赤兔馬。かつて三国志の時代に名高き武将、呂布が乗った伝説の馬だ」

少年は幾分か落ち着いたようで、だがそれでも戸惑いの残る声で言った。

「あの……三国志ってずっと昔の話ですよ。なんでそんな馬が」

「私が呼び出した」

場が凍りつく。

アスナも少年も、さらに今気づいたが少し離れた所にいたこのかも凍りついていた。

そんな面々に対し、神はふっと自嘲の笑みを浮かべる。

「むしろくしゃしてやった。今は反省している」

そこに誠次が無表情に絶妙な合いの手を入れる。

「だが」

それにこたえるように神はビシリとポーズを決めて言い放った。

「自重はしない」

「駄目じゃないか」

後ろからかかった声に神がぐりんと首を回す。

まわしすぎて首がボトリと落ちた。

一瞬息を呑むアスナ、このか、少年、そして今現れた高畑を尻目に誠次はぽつりとつぶやいた。

「あ。くつついてなかったんだ」

「そのようだな」

何事もなかったかのように首を乗せる神。

呆気にとられているアスナたちを無視して誠次はめんどくさげに言った。

「もうボンドかなんかでつけとけよ」

あんまりと言えばあんまりな物言いに、しかし神は真顔で答えた。

「あいにくと神用ボンドは手持ちがない」

「なんだよ神用ボンドって」

聞こえてきた妙な単語に誠次は眉根を寄せて呻いた。

「読んで字のごとく神用のボンドだ。紙用ではない。髪用でもないぞ。マルカミデパートにも入荷は一週間後だな」

またも聞こえてきた言葉に誠次は頭を押さえる。

「マルカミデパート？」

「うむ。神の神による神のためのデパートだ」

「さぞかしふざけたデパートなんだろうな」

皮肉をこめて言う誠次に神はお返しとばかりに爆弾を投下した。

「オーナー、店長、従業員に至るまでスタッフはすべて私の分身だ」

「なんだその地獄のような空間は。頼まれても行かねえぞ俺あ」

「無論レストランコーナーのウェイトレスも皆私の分身だ」

「訂正する“地獄のような”ではなく地獄そのものだ。そして死んでも行かねえ。そんなトコ」

「オホン」

聞こえてきた咳払いに誠次と神は同時に振り向いた見れば高畑が呆れを含んだ視線でこちらを見ている。

「それで？ 一体何の騒ぎなんだい、これは？」

「かいつまんで話せば『馬が走った』といったところだな」

答える神に高畑は汗を一筋流しながら言う。

「かいつまみすぎだよ。もう少し詳しく言ってくれないかな」

神に任せていてはいつまでも終わらない気がしたので誠次が代わりに答える。

「まあ要点を言えば神が赤兎馬を呼び出したらそれが暴走してあちこち走りまわった挙句、そのガキを轢いちまったってわけだ」

高畑はその言葉に慌てたように少年を見た。

「なっ！それでネギ君は無事だったのかい！？」

「うむ無事だ。というか“無事だということにした”。面倒くさかったのだな」

その言葉に高畑が安堵 4 割 非難 4 割、ついでに戦慄 2 割ぐらいの表

情で神を見る。

「それにしても赤兎馬って……なんてもう気軽に呼び出してるんだい君は」

「なかなか速かったぞ」

反省の色など髪の毛一本ほども見えない神の様子に高畑は嘆息しつつ、ネギに声をかける。

「大丈夫だったかい。ネギ君」

「うん。どこも痛くないし」

自然に話す二人にアスナが困惑したように問う。

「え？二人は知り合いなんですか？」

「うん。まあね」

答える高畑。

いっぽう誠次は少年の顔を見ながら真面目な顔で呟いた。

「葱……ひよつとして名字は深谷か？」

「どこの埼玉産野菜だ」

ポケットから取り出した１メートルほどのハリセンで誠次の頭を叩く神。

スパンというこぎみい音とともに誠次の頭が揺れる。

役目を終えたハリセンをぐしゃぐしゃと握りつぶし、そのまま片手で握って開くともう手の中には何もない。

感心したように神の手元を見るこのかにはたばたと手を振りながら神は口を開いた。

「そのつの名はネギ・スプリングフィールド。ウェールズの方の出身で、まあ言えることから重要なことをピックアップするなら大学卒業並の頭脳を持った天才少年で今度お前たち2 - Aの新しい担任になる人物だ」

「ええええええええええええ！」

少女たちの絶叫が響き渡る。

あたふたと慌てるアスナとあらあらと口元に手をあてるこのかに対し誠次は半眼で呟いた。

「神。今度は何の遊びだ。あんま被害が周囲にまで広がるようまねをされると俺としても『スペシャルコース・滅殺』あたりまで視野に入れにやならなくなってくるんだが」

「なんだスペシャルコースって。言っておくが今回のことは私が仕組んだことじゃないぞ。学園長や高畑など“アッチ”皆で仕組んだことだ」

神の言葉に誠次は戦慄の表情を浮かべた。
ついでに嫌そうに眉を寄せる。

「なんてこった。あちらさん」も神と同類だったとはな。先行き

が不安でならないぜ」

吐き捨てた誠次のセリフに高畑がひきつった笑みを浮かべる。

「彼といっしょくたに扱われるのは心外だなあ」

誠次は高畑に視線を向けながらアスナを指差して言った。

「なに言つてやがる。いくら頭がよかろうと10歳のガキを先生にしようなど言語道断。普段神のやつてるぶつとび悪戯となんの差がある。見る。アスナなんてシヨックのあまり泣きそうだぞ」

「いやその娘の場合、多分に高畑に対し好……」

「キャアアアアアアアアア！」

悲鳴とともに繰り出されたビンタが何か口走りかけた神を張り飛ばす。

勢いよく回転して倒れる神を視界の端にとらえながら誠次はアスナを眺めた。

アスナは涙目になってまくしたてる。

「あたしこんな子嫌です！さっきだってイキナリ失恋……いや失礼な言葉を私に」

涙ながらの訴えにネギというらしい少年は空気を読まずに片手をあげて告げた。

「いやでも本当なんですよ」

「本当言っなー！」

こつんと足に当たる感触にふと足元を見下ろしてみる。
倒れた衝撃でまた取れたのか神の首が落ちていた。
体がのたのたと回収に来ている。

誠次は無言でその首をあさつての方向へ蹴り飛ばした。
生首（まだ生きてるのでまさに生首だ）蹴りこまれてギャラリィが
パニックに陥るといふこともなく、気がつけば周囲にはほとんど人
がいなかった。

冷静に考えればまあ通学ラッシュは遅刻ギリギリに生徒が殺到する
現象をいうのだから、皆遅刻せぬようすでに行ってしまったのだろ
う。

もう開き直って遅刻上等、と歩いているものと、遅刻より好奇心を
優先したわずかなものしかない。

飛んでつた首を追いかける神の体に足を引っかける。
勢いよくこけるその姿に内心ほくそ笑んで、次の瞬間凍りついた。
眼をそらし、先ほど見たものを記憶から排除する。

何が見えたかというと、まあ今日の神の服装は誠次が出会ってから
最も着ていた率の高いものだったとだけ言っておけばよからう。
おっさんのパ（以下略）など悪夢以外の何物でもない。

そらした視線の先ではアスナが涙を流しながらネギの胸倉をつかみ
上げているところだった。

「大体あたしはガキがキライなのよ！あんたみたいに無神経でチビ
で……」

まくしたてるアスナに対し、ネギは不満そうに頬を膨らませている。
とりあえずアスナを宥めようと近づいて、誠次はネギに収束する力
の気配に目を丸くした。

慌てて割って入る。

「ちよつと待て……」

だが止まらない。

それは最悪のタイミングでさく裂した。

「ハクシユン！」

くしゃみ一発。

弾かれるように誠次とアスナの服が体から吹き飛ばされた。

かろうじて下着だけは残っているのは慈悲だとも言うのだろうか。まったくもって味気ない白の下着を着た誠次と上は同じようなものだが、下はくまパンのアスナが二人往来で立ち尽くす。

先ほどの力の収束や現状を鑑みるにこれは前に神の言っていた脱げ魔法なのだろう。

アスナのあげる甲高い悲鳴を聞きながら誠次は能面のような無表情で眼前の小僧を見下ろした。

ネギは憤懣やるかたないといった面持ちで不満げにしている。

この表情から見ても一切の罪悪感を感じていないのだろう。

静かな、とても静かな世界。

そこで誠次は天の声を聞いた。

YOUやっちゃんなよ。

にこりと微笑む。天使のような微笑みにネギは毒気を抜かれたようにぽかんとする。

微笑んだまま誠次は思い切り右足を振り上げた。

鈍い音とともにネギの体が40センチほど浮き上がり、そのまま地面に落ちた。

泡すら噴きそうな勢いで痙攣しながらうずくまる。股間を抑えて。誠次の、常人離れた肉体を持つ誠次の蹴りがヒットしたのだ。そのダメージたるや推して知るべし。

「ねっネギ君！」

慌てて駆け寄って背中をさする高畑。

だがそれらすべてを傲然と見下ろして誠次は怒気に染まった声で叫んだ。

「往来で女剥こうたあい度胸だ！ガキだからって許されると思うなよ！！！」

その言葉にざわざわとわずかに残っていたギャラリーがざわめく。

「ねえどうしたの？」

「なんでもあの子があの子を脱がしたらしいわよ」

「へっ。人畜無害そうな顔してねっ」

「せ、誠亜君！」

高畑が何やら慌てたように言ってくるが、無視して誠次は踵を返す。

「神！服！服出せ！」

誠次は言って無造作に手を出す。

神はその手になぜか雀を乗せながら答えた。

「むう。なんというかお前はもう少し恥じらいというものを持ったらどうだ。見ていてつまらん」

誠次は手の平を掲げて雀を放ちながら毒づいた。

「お前を楽しませるためにいるわけじゃねえからな。いいから服出せって」

神はつまらなそうにむうと唸ると、すたすたと大股で誠次のもとへと歩み寄ってきた。

そのまま誠次の前に来ると、誠次の胸の谷間に人差し指と親指を突っ込んで、そこからずるりと服を取り出した。

「ほれ」

言いながら麻帆良女子中の制服を広げてみせる。

誠次は震える拳を振りかぶった。

「どこから出しとんだお前はあああああ！！」

絶叫とともに神の体を打ち上げる。

天の日に神の影が重なった。

天高く、10メートルぐらい飛んでいく。

殴られた瞬間神が取り落した制服二人分を拾いながら誠次は嘆息した。

心底疲れたように呟く。

「面倒なことになりそうだ」

第11話 デエストロオオオイ！

第11話 デエストロオオオオイ！

ネギに服を？かれたその日に学園長たちに呼び出されてされたのはネギの魔法がばれるようなことはするなということだった。

だったらそもそも使うなよ、と言ってやりたいところだったが、こは大人の対応として少し遠慮気味に「だったら使わなければいいことでしょう？被害を被ったのならそれ相応の対応をしますよ。それともなんですか？服をはぎとられても魔法の秘匿だが奇特だからために『自分で脱ぎました！』とか言えとでも？それじゃあ俺の方こそ奇特ですよ」

というだけにとどめておいた。

どこが遠慮気味なのかという意見もあるだろうが、そこはそれ誠次にしては珍しく敬語なのである。

ちなみに「何！？誠次が奇特なことをした！？それは是非見たい」とか言つてドラ。もんの如く学園長の机の引き出しから出てきた神は一発ぶん殴つて黙らせた。

このネギという少年、なんだかとても抜け目あり。

人に隠せと言っておきながら少年本人が隠していない。

初めて教室に入って来た時も力の壁を周囲に張り巡らせてそれで黒板消しトラップを受け止めて皆の視線を集めたりしていた。

神が言うにはその後も倒れそうになった宮崎のどかを助けようとして魔法を使つて、そこをアスナに見られ、彼女の記憶を消そうとしてスカートとパンツを消した揚句にそこを高畑に見られるという醜態を演じたらしい。

それに関しても何らペナルティは課せられていないようだ。
ずいぶんと優遇されている。

何でそんなことまで知っているのか、まさかクラスメート全員の私生活を監視しているのかと神を詰問してやったところ、封印されし全知のかけらを引きずり出してどうのこうのとよくわからないことを言い出したのでとりあえず殴っておいた。

まあ被害を受けたのはアスナであるし、そのアスナが別段これといつて復讐を考えていないというのであれば誠次としても首をつっこむのはアレなのだろう。

もつともアスナ自身がネギにお仕置きという名の復讐を望んでいるというなら誠次としても春野葱を『武つ血KILL』（ぶつちぎる）のもやぶさかではないが。

「えーと、じゃあこの英文を……」

誠次が物騒なことを考えているとも知らずにネギは笑顔であてる対象を探している。

そらすそらす。

面白いぐらいにみんな眼をそらす。

ふと眼があつた。

あつてから自分も眼をそらすべきだったかと後悔する。

「風間さん。訳してください」

「わかりません」

即答されてネギが凍りつく。

「えーっと。わかるところでいいから訳してみてくださいませんか？」

言われて誠次は手元の教科書に眼を落した。ネギの指定する英文を
眺めて心の中で読み上げる。たぶん

(The fall of Jason the flower .
……fallつてなんだっけか？落ちるだったか？ジャソン？ひょ
っとしてジェイソン？flowerは確か花……だった気がする)

頭の中では仮面付けてチエーンソー持った殺人鬼がラフレシアのよ
うな大きな花に落下して食べられる光景が映っている。

それを振り払いながら誠次はかつてダイゴに試験勉強させられたと
きのことを思い出していた。

(えーっとこういうときは何を意識して見るんだったっけか？)

『構文じゃないのか？』

突如頭に響く声に慌てずに返す。

『ああそうそう。構文だ。そして人の頭の中を気安く覗くな。Th
is is a penではthisがなんかでisが何かでpe
nがなんだっけ?』

『全滅ではないか。ここまでひどいとはな』

頭の中に響く呆れたような声を無視して黙考する。

『んー。俺的直感によるとthisがjasonでpenがflo
werに対応していると見た』

『こんな初歩的なレベルで直感に頼ってる時点でかなり終わってる
と思うのだが』

『黙れ。あれisはどこに対応してるんだ?』

『あの一風間さん。英訳を』

言われて誠次は顔をあげた。

晴れやかな顔で言う。

『まったくわかりません』

どつと笑いが巻き起こる。

ネギは困ったように次なる犠牲者を探し出した。

『お前もたいがい馬鹿だな。それでももと高校生か?』

呆れたような声に欠伸交じりに応える。

『勉強なんてほとんどやってこなかったからなあ』

『それにしてもひどい』

『いーんだよ。別に……』

誠次の言葉を遮って強烈な風が教室内を吹き抜けた。

見れば教室の前の方で、いつかの焼き直しのようにアスナが下着姿になっていた。

周囲のものからは笑い声とともに「何を脱いでいるんですの」という言葉が投げかけられている。

今回はまずいと思っっているらしくネギもあたふたと腕を振り回している。

誠次はカッと目を見開いてネギを睨みつけた。同時に強い殺気を叩きつける。

なんかもうビキュウウウン！とか擬音がつきそうな感じで、
というか実際頭の中で響いている。おそらく神が鳴らしているのだ
ろうが意図は不明だ。

おそらく特に何の意味もなくノリで鳴らしているのだろう。

瞬間ネギが股間をおさえ、股を閉じて眼をつむる。

条件反射の行動。

どうやら先日の蹴りの痛みはだいぶネギの中枢へと刻みこまれたようだ。

それにわずかながらの満足を覚えながら誠次は嘆息した。

始まってすぐこれではこの先どうなる事やら。
神がネギの参戦（赴任に非ず）を待ち望んでいた理由がわかった気がした。

駆け抜けていく小さな後姿。

風に揺れる赤い髪は我らが担任ネギ・スプリングフィールドのもの。

それを目の当たりにして誠次は一喝した。

「神！俺を殴れ！」

「どっせえええええい！！」

神の放った強烈なコークスクリューが誠次の横っ面に突き刺さる。

誠次はきりもみしつつふ吹っ飛んで地面に倒れ伏した。

「ク……ククククククク」

倒れ伏す誠次から低い低い声が漏れる。

流れ落ちる一筋の血を拭いながら誠次はゆらりと立ち上がった。
幽鬼のような表情で、悪鬼のような瞳で言う。

「神……俺は男か？」

「どこからどう見ても女どうぶはっ！！」

戯言を抜かす神を殴り伏せながら誠次は叫ぶ。

周囲の目など気にする余裕は彼にはなかった。

無かったとしても神がどうにかするのではあるうが。

「そっ！俺は男だ！体は女でも心は男なんだ！」

「いまさら何なのだ？」

床にできた自分の顔型を足で払うだけで消しながら神が問い返した。

「その俺が……その俺が……」

訝しげに見る神の前で、うつむいた誠次は肩を震わせている。

神が何か声をかけようとするよりも早く誠次は両の拳を振り上げ、

天を仰いだ。

あまつさえ血涙を流しながら絶叫する。

「なんでガキに！しかも男にときめかにならんのだあああああ
！」

その勢いに無表情に一步引きながら神が呟く。

「ああネギか。まあ顔立ちは整っている方だし、抜けているとはい
え根は真面目な奴だしな」

「うぎれぎぎやあああああああああ！」

かなり壊れた絶叫を喉から迸らせながら誠次が壁に拳を打ち込む。
その破壊力に耐えきれなかった壁が直径2メートルほどの円形に陥
没する。

そのまま誠次は頭を思い切り壁に叩きつけた。
クレーターから無数のひび割れが広がり悲鳴のように破片をパラパ
ラと落す。

神はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると顎に手をあてて流し眼で
言った。

「女として可愛い少年に恋心を抱いてしまったわけか」

ズドン。

凄まじい音とともに壁全体に無数の罅が走り、とうとう誠次の前の数
メートルほどの壁が崩落する。

ガラガラと崩れゆく壁の破片の中で額から血を流した誠次がゆらり

とこちらを向く。

その眼はもはや人のカテゴリーに当てはめるのをためらうようなどす黒い殺意に染まった怪物の眼だった。

悪鬼羅刹という言葉すら生温い。真の怪物の眼だ。

はてと考えると神は思い当たる。

この殺意は何に対するものか。

おそらく何に対するものでもあるまい。

ただ自分が、男でありたいと願う自分が子供、それも男にときめいている。

その受け入れがたい事実が、そんな現象を引き起こしている要因すべてが憎いのだろう。

はてこのまま放っておいたらどうなるか。

そう考えて神は2秒で答えを出す。

男の子供なぞにときめく理由で誠次が真っ先に思い当たるのが“女になったこと”だ。

放っておけば十中八九その怒りはこちらへ向く。

別に受けてもいいのだが、放置すれば誠次は神を殴り潰してことは終わりだろう。

それでは味気ない。

もつと面白くできないか。そう悩む神の前で誠次は頭を抱えて絶叫する。

「なぜ俺がああああああ!!」

ふと思いついたことを言ってみた。

「ひょっとして……人生初TO・KI・ME・KIだったか？」

「っがあああああああああああああ！！」

誠次が咆哮とともに拳を反対側の壁に叩きつける。
今度は一撃で崩れた。

1メートルほどの穴があく。

荒い息をついて、獣のような眼差しで世界すべてをやぶにらみにするその男に神はどうしたものかと息を吐いた。

「なぜ俺がなぜ俺がなぜ俺が……」

何やら爆発寸前、もう導火線の先に火のついてしまった爆弾を思わせる危うさを持った誠次。
いくら神でもその爆弾を放置するような真似はしない。

「惚れ薬のせいだろう」

ゆっくりと誠次がこちらを向くのになんら表情の変化を見せずに神は続けた。

「お前の考える通り、女になったからというのもある。体が男ならそもそも効かんからな。だがあの小僧にときめいたのはあの小僧が飲んだ惚れ薬のせいだ」

「ホレ……グス……リ」

誠次は神の言葉の意味をゆっくりと反芻しているようだ。
そして次第にその瞳の焦点が確かなものとなっていく。

それと同時に誠次の中で渦巻いていた、形無い殺意が確固たるものとしてあふれ出してきた。

行き場のなかったどす黒い憎悪が獲物を与えられて獰猛に唸る。

「まあぶっちゃけるならそのときめきの原因は私と」

「ネギイイイイイイイイイイイイ！！！！」

そして吼えた。

誠次は一瞬で神のもとへとたどり着くとその顔面に拳をぶちこみ、そのまま渾身の力で壁に叩きつけた。

壁は一瞬で粉碎され、壁の破片とともに神の体が外に投げ出される。

いくら神でも導火線に火のついた爆弾を放置するような真似はしない。

なら神ならどうするのか。

押し付けるのだ。火種を。導火線の根元に。

神は浮遊感と痛みの中でにやりと笑った。

「さて……どうなるかな」

ネギは困り果てた顔で周囲を見回した。

予想外だ。

いや予想はできたことだ。

あの惚れ薬は自分の作ったものなのだから。

だがあれを自分が飲むことになるとは思ってもみなかった。

ついでに言うと言葉では理解していてもしつかりとは理解できていなかったのだろう。あの惚れ薬の強力さを。

飲んだらたちまち効果が出た。

抱きついてくるもの、花束をくれるもの、食べ物くれようとするもの、服を脱がせようとする者。

好意の示し方は人それぞれだったが、例外なく周囲の女性たちがネギに好意をもった。

そして行動に移した。

押し寄せる女の子たちから逃げ出し、逃げた先で会った女の子たちにまた追いかけられる。

そんなことを幾度か繰り返し、自分がどの棟のどの階にいるのかもわからなくなってきたころ。

ネギは聞こえてくる足音に恐る恐る壁の影から顔を出して確認した。4人づれの女の子の集団が来るのを見て素早く壁の影に隠れながら

ネギはその集団が通り過ぎるのを待った。

少女たちは特に変わった様子もなく通り過ぎていく。

どうやらこの惚れ薬、相手がこちらを認識した時点で何らかの強い効果が発現するようだ。

そうでなければ効果範囲に入った女性たちが無差別に突然ネギの存在に気づいてアタックを仕掛けてくることになっていたはず。

とりあえず一つの難をしのいだことに安堵の息を吐く。

その瞬間ほんと肩に手を置かれ、ネギは振り向いた。

振り向いてそれが女性であつたことに焦る。

また惚れ薬の効果で迫られてしまう。

「あつ！だ、駄目ですよ！今僕は……詳しくは言えないけどあまり女の人に近づかない方がいいんです」

だがその女性は微笑むだけで何もしない。

訝しげに思いながら改めて女性の顔を見た。

それは見覚えのある顔だった。

彼の担当するクラスの生徒なのだから見覚えがあるのも当然なのだが、それ以上にネギにとってそれは忘れられない顔だった。

忘れもしない就任初日、ネギのことを轢いた赤兎馬の後を追いかけてきた女性。

そして、ネギがクシャミで服を吹き飛ばしてしまった女性。

なにより、そのネギの大事なところを思い切り蹴り上げてきた女性だ。

彼女——風間誠亜の顔は痛みとともにネギの心に刻み込まれていた。

彼女は何もしていない。

ただ微笑んでいるだけだ。

微笑んでいるのだから怒っているわけではないようにも思えるのだ
が相手が相手だ。

彼女は前にネギの大事なところを蹴り上げる前も微笑んでいた。

正直この人の笑顔はあまり安心できない。

何というか猛獣の檻に放り込まれた餌のような気分になるのだ。

「ネギ先生」

明るい声音で言う。

一体何事だ？

ネギは自問した。

自分で言うのもなんだが彼女に笑顔を向けられるようなことをした覚えがない。

むしろ怒られるようなことなら現在進行形でしてしまっているところだ。

ならばこれは“殺す笑み”なのか。

でもそこまでされるほどのことはしていないはずだ。

思考に集中するあまりネギは気づかなかった。

その笑顔に、その瞳に、その声に集中するあまり気付かなかった。

誠亜の指が万力のような力でネギの肩を締め付けていることに。

顔がさあつと青ざめていくのが自分でもわかる。見れば誠亜の顔は悪鬼のような形相に変わっていた。

殺意すらこもった声で吼える。

[illegible]

空を裂く拳がぎりぎりで首をすくめたネギの頭上を通り過ぎ、後ろ

の壁に突き刺さって木っ端みじんに打ち砕いた。

1メートルほどの穴を壁にあけた拳を引きながら誠亜が獣のような息使いでネギを見下ろす。

まさに彼我の関係は猛獣とそこに放り込まれた餌だ。

「うわあああああああ！」

臆面もなく悲鳴をあげながら駆けだす。

（なんでなんでなんでなんで！）

心の中で繰り返しながらネギは足を動かす。

確かに彼女を怒らせるようなことをしたかもしれない。

あの蹴り一発では彼女の溜飲はさがっていなかったのかもしれない。

だがそれは命を狙われるほどのこととは思えなかった。

誠亜の振るう拳は当たれば普通に死もあり得る代物だ。

命を狙われる理由が分からない。

だが事実誠亜は襲ってきていた。

背後の彼女は凄まじいスピードで追ってきている。

たまらず魔法で体を強化して地を蹴った。

先ほどまでとは比べ物にならない速度で風のように駆け抜ける。

「これなら……」

「ネエエギイイイイイイ！」

ネギの言葉を遮って怨嗟の声が響く。

すぐ後ろに誠亜が迫っていた。

振り上げられた拳が鎌首をもたげた蛇のように恐ろしいものに見える。

めいっばい体を前へ抛り出す。

つい一瞬前までネギの体のあった床を誠亜の拳が撃ち抜いた。

1メートル近く陥没した床を蹴ってさらに肉薄してきた誠亜の拳をネギはブリッジのように身を反らしてかわす。

外れた拳の突き刺さった教室の扉が真つ二つに割れながら吹っ飛んでいく。

その扉と自分の体が一瞬重なって見えてネギは悲鳴とともに駆けだした。

つきあたりで90度曲がり、見えた階段に飛び込む。

一段飛ばしならぬ全段飛ばしで一気に駆け下り、というか飛び降り、一気に下の階へと向かう。

そのまま手近な教室に飛び込むと勢いよく扉を閉めた。壁に張り付いて息を殺して鬼の通り過ぎるのを待つ。

コツコツコツ。

何かを探すようにゆっくりとした足取りで歩いている。

足音が真後ろに来る。

一瞬止まる足音にむしろ自分の息を一瞬止めながらネギはひたすらに通り過ぎてしまうのを待った。

コツコツコツ。

足音が遠ざかっていく。

それが戻ってこないのをしばらく確かめてネギは安堵の息を吐いた。

「はあああああ。助かつ」

「オオオオオオオオオオッ！」

咆哮とともに壁が突き破られる。

ネギは頭の2センチ横を通り過ぎていく拳を見開いた眼で見送りながらひきつった息を漏らした。

壁を突き破りながら入ってくる鬼の姿にネギは地面を這いずりながら悲鳴を上げた。

「なんで……」

尻もちをついたネギを見下ろしながら誠亜は地獄の鬼のような声で言う。

「**ダアイ**(die)」

「なんでえええええええええええええええええ！」

麻帆良女子中の校舎に少年教師の悲鳴が響く。
命をかけた鬼ごっこが始まろうとしていた。

「何をやっているんだ？あれは？」

女子中学生離れた身長とプロポーションを持つ色黒の少女、龍宮真名は隣にいる少女に問いかけた。
隣にいる艶やかな黒髪をサイドでまとめた少女――桜咲刹那は興味なさげに龍宮のさす方を一瞥して答えた。

「さあな。追いかけてこでもしているのだろう」

ぶっきらぼうな言い草に苦笑しながら龍宮もまた視線を向けた。

「ずいぶんと殺傷力の高い追いかけてだね。私ならやりたいとは思わないよ」

若干の皮肉交じりに言うと刹那は仕方なくというふうになんか見えた。

5秒ほどそれを眺めて改めて言う。

「誠亜さんがネギ先生を追いかけているようだな。別に放っておいてもいいだろう」

「ついでに言うと誠亜さんはさっきから一発で壁や床を砕くような

攻撃をネギ先生に向かって放っているね。あれが一発でも当たったらまずいことになるんじゃないか？」

刹那は半眼でネギに殴りかかる誠亜とその攻撃をなんとかかわしているネギ先生を眺めた。

ゲームオーバーが死につながる鬼ごっこのようだ。

「どうせまたネギ先生が何か誠亜さんの逆鱗に触れるようなことをやっただろう。あの人、赴任初日で初対面のアスナさんと誠亜さんの服を魔法で吹き飛ばして、誠亜さんに股間を蹴りあげられたらしいしな」

ここ数日でわかったことだがどうやらこのルームメイトはあまりネギ先生にいい感情を抱いていないらしい。

頭がいいとは言え10歳の少年に教師が務まるのかという不審もある。

そしてやはり大きいと思われるのが彼女の大事な“お嬢様”と同じ部屋にあっさり上がりこんでいることだろう。

学園長の決定ということで仕方なく認めているのだろうが、納得のいくものでもないのだろう。

もと男の風間誠亜が入ってくるのがなかなか受け入れられなかったのと同じように。

理屈で言っても、どこか魔法の秘匿に対し意識の欠如しているネギをこのかのそばに置くのは、このか嬢には基本こちら側のことは教えないというこのかの親の方針にも反することだ。

理屈ではない感情の上ではいわずもがなだ。

「それにしても誠亜さんの様子が変わらないか。“あの”ネギ先生を大怪我なんてさせたら彼女の立場もだいぶ悪くなるはずだ。それ

がわからない彼女じゃないと思うんだが」

龍宮がそう言っていると刹那は不思議そうに首をかしげた。

「そうか？なんか誠亜さんはあつさり人を半殺しにするイメージがあるんだが。ああ。あれは相手が神だからか。そう考えると確かに妙だな。まさに怒り狂っているという感じだ」

さりげなく刹那の口から出てきた物騒な言葉に苦笑を返しながら、龍宮は口を開こうとしてやめた。

後ろから声をかけられたためだ。

念のために言っておけば龍宮はたとどこにしようとも、一定のレベルで周囲の気配を探っている。

奇襲に対応するためだ。

それはこの平和な麻帆良に来てからも欠かしたことがない。

同じように裏側で生きてきた刹那もいる。

そのどちらにも気づかせずにこの背後の気配の主は接近して見せたのだ。

「そう。奴は今“怒り狂っている”」

軽い驚愕とともに振り向き、今度は強い驚愕の念とともにそれを見た。

いつの間にかそこにはセーラー服姿のダンディなおっさんが立っていた。

意味のわからないものを見たショックで多分に戸惑いながらも、龍宮はそれを表には出さずに問いかけた。

セーラー服オヤジではない。隣で額に手をあてている刹那にだ。

「なんだコレは？」

「神……らしい。誠亜さんを女に変えた張本人だ。私もこいつに扇動されてお嬢様を助けてくれた誠亜さんに斬りかかってしまったことがある。聞く話では他にもいろいろと騒ぎを起こしているようだな」

刹那の説明に龍宮は半眼で神を眺めた。

「で、その神がなぜここにいるんだ？」

刹那もまた半眼で神を見る。

「どうせあの騒ぎもこの人のせいなんだろう」

冷たげに告げる刹那に神はどこからともなく三角マークの書かれた札を出しながら言う。

「残念ながらそれは微妙に外れた。どれくらいはずれかというと7割ぐらい外れた。むう……7割外れたとどちらかというと微妙に当たりといった方がいい気がしてきたんだがどうだろう？」

真顔で問うてくる神に軽い頭痛を覚えながら龍宮は呻いた。

「知らないよそんなことは」

すると神は突然ポケットからパラボラアンテナを取り出して頭に乗せた。嘆息しつつ呟く。

「仕方ない。赤兎にでも聞いてみるかな」

「赤兎って噂に聞く君の呼び出した赤兎馬のことだろう。馬に聞いてどうするんだ」

龍宮が告げると神は指を左右に振りながら不敵な笑みを浮かべた。ちなみにそんな仕草をしながら真顔なせいでかなり異様な雰囲気醸し出している。

「甘く見てもらっては困るな。赤兎はそんじょそこらの馬とはわけが違う。あくなき速さへの挑戦に燃える漢よ。この前も新幹線より早く走れるようになったと言っていたしな」

何気なく言われた言葉に龍宮と刹那はそろいもそろって冷や汗を流す。

「新幹線より速く……本当に馬なのか、それは？むしろUMAじゃ」

戦慄の表情で言う刹那に龍宮もまた口を開く。

「どちらかというと私は、その新幹線より速いというのが数値の上で越えたという意味なのか、真正銘直接比べたものなのか気になるね」

神は頭の上のパラボラアンテナを手で押しつぶしつつにやりと笑った。

「まあ赤兎は普通より少し速く走れる馬だがメーターが付いているわけだし、自分が今時速何キロ出しているかなどわからんただけ言っておこう」

「それはつまり……直接比べたという方の答えでいいんだな」

微妙に頬を引きつらせながら刹那が言う。

新幹線と並走し、あまつさえ追い抜いていく赤い毛並みの馬。

一大ニュースだ。

あの赤兎馬の存在を隠すためにきつとかなりの人数の魔法使いが働いたことだろう。

突如響いてきた轟音に目を向けるとちょうど誠亜のパンチでひときわ大きく壁が崩れたところだった。

ネギも特に問題なく逃げおおせているようである。

ところどころ擦り傷を負っていたり、土煙の色に染まりかけているのだが一発ももらっていないようである。

「逃がすかああああああああ！」

「逃がしてくださいいいいいいい！」

凶気（NOT誤字）に染まった誠亜の叫びと半ば涙声のネギの叫びが響く。

全員でそれを眺める。

30秒ほどしたところで神が視線をこちらに戻しながらポツリと呟いた。

「さて何の話をしていたか……」

刹那もまた視線をこちらに戻す。

「あなたの呼び出した馬がまた面倒を起こしていたという話だったような」

「ああ赤兎が自分の速さが何キロかわからんという話だったか」

龍宮もまた視線を刹那に戻しながら（あまり神は長時間直視していたい代物ではない）、

「それだけ優れた馬のくせに自分の速さが分からないのか？」

単純に不思議に思っただけで聞いたのだがどうやらある種の皮肉と受け取ったらしく、神は若干不満げに返してきた。

「むう。別に自分の速さを数値で言い表せる人間などレーサーぐらいしくないだろう。そう言うお前たちだって自分の走ってる速さを時速なり分速なりで言い表せるのか？」

「言われてみるとそうだな」

このわけのわからない存在に諭されるというのも釈然としないものがあつたが、これと言って間違っていることは言っていないので同意しておいた。

そんなこちらの様子に満足したのか神はからからと笑いながら、

「というか赤兎は大昔の中国から引つ張ってきた奴だしキロなんて単位は知らないがな」

場が凍りつく。

刹那が震える声で問いかけた。

「も、もしかしてお前の連れて来た赤兎っていうのは……」

「そろそろ返さないと呂布が困ってるかもなあ、と今現在思ってい

る」

友人に借りているゲームをそろそろ返さなくては、というような口調で告げる神に龍宮は盛大に痛み出した頭を抱えて言った。

「今すぐ返してきなよ。歴史が変わったらどうする気だい？」

「そうだなあ。明日あたり行ってくるか」

笑う神に龍宮と刹那がそっくりな仕草で嘆息する。

再び聞こえてくる轟音。

見れば誠亜が天井を突き破ってネギに奇襲をかけたところだった。

拳はネギの頬をかすめて床を打ち砕く。

「かすったああああ！今かすったあああああ！」

ネギの悲鳴が響き渡る。

それをまた3人で30秒ほど眺めて、今度は龍宮がぽつりと呟いた。

「結局アレはなんであんなんだい？何やら3割ぐらいあなたのせいらしいけど」

神がどこから出したのか湯のみでお茶を飲みながら答える。

「んー、ぶつちやけて言うならネギ・スプリングフィールドの飲んだ魔法の惚れ薬が原因だな。どうやら行く先々で少女たちに追い回されて逃げていたらしいが、近くを通りがかったときに誠亜にも作用してな。お前たちも知つての通り誠亜は私によって女に変えられ

た者だ。精神が体にひっぱられ気味で男としてのアイデンティティを失いかけているときに、魔法薬で男にときめかされたのに激怒してな。ああなった」

「なるほど」

龍宮が頷きながら言う。神はふうと息をついて付け加えた。

「どうやら人生初トキメキだったようで」

「……な、なるほど」

少し引きつった表情で刹那が頷く。

向こうでは誠亜が放り投げた机が砲弾のようにネギの隣を通り過ぎて、壁と激突して粉々になったところだった。

それを3人で眺めながら、というより眺めることしかない神と刹那の二人を眺めながら龍宮は一筋の汗を垂らしながら問いかけた。

「ええと……止めなくていいのかな？ だいぶまずいことになってきていると思うんだが」

だが至極まっとうなはずのその問いに神は心底不思議なものを見る目で問い返した。

「止める？ なぜだ？ せっかく面白くなってきたというのに」

「面白くなってきたじゃないよ。あなたの行動理念はそれだけなのか？」

非難するように、というより非難のつもりで言った言葉に神はしばらく首を傾げていたが、やがて得心が言ったように手を打った。

「ああ！つまりもつとスパイスを加えろと。確かにこのままだとあまり進展がなさそうだしな」

ここまでくるともう戦慄すら覚える。

これほどまでにたちの悪い者にはそうそう出会えまい。

「私の言葉からその結論を導き出したのか。私は今、無性にあなたの思考回路を覗いてみたい衝動にかられているよ。ぱくつと割ってみていいかい？」

多分に皮肉をこめて言葉を叩きつけると神は顎に手をあてて唸った。少しして、頭に手をあてる。

「割ってもあまり面白くないぞ」

そのまままるで鍋の蓋を持ち上げるような気軽さで頭の上の部分を持ち上げた。

刹那と同時に思い切り噴き出す。

「ななななななな！」

刹那は驚きのあまり神の頭を指差してなの音を連呼している。そのさまを楽しそうに眺めながら神は開いた頭の中に手を突っ込んだ。

そのままパック詰め味噌汁のもとを取り出す。そしてそれをにこやかに差し出した。

「うむ。くれてやろう」

「「いらん！」」

綺麗にハモって全身全霊で拒否する。

そんな場所から取り出した味噌など死んでも受け取るものか。

頭の中に味噌を戻して頭を閉じる神の姿に、世界の理とかそういうものの歪みを一瞬感じたが、それを振り払うように刹那に問いかける。

「で、刹那はどうなんだい？」

「ん？何がだ？」

必死に神から視線をそらしている刹那が上の空で答える。
それに苦笑しながら龍宮は続けた。

「だからネギ先生だよ。助けに行かないのか、とね」

そう問うと刹那はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「フン。放っておけ。話を聞くに完全に自業自得じゃないか」

刹那は半眼で完全にバーサーカーと化した誠亜に追い回されるネギを一瞥した。

眼を閉じて肩をすくめる。

「これもいい機会だ。この機会にネギ先生ももう少し……」

「あ、近衛木乃香」

何気ない神の呟きに刹那が凄まじいスピードで振り向いた。

見ればふらりと階段からあらわれたこのか嬢がいつも以上にふわふわした表情でネギに抱きついたところだった。

「やゝん。ネギ君やつと見つけたわ」

それにネギが反応するよりも早く、一人のバーサーカーが床を突き破って現れる。

一階下から天井を破ってきたというのにそのまま2メートル近く飛び上がった叫んだ。

その瞳には欠片の理性すらうかがえない。

「デストロオオオオオオイツ!!」

「おおじょおおさまあああああああ!!」

瞬転、刹那が絶叫しながら凄まじい速度で駆けていく。

その速さたるや普段侵入者などの撃退で龍宮が組んだ時をはるかに上回っていた。

それを見送った神はわななきながら力強く言い放った。

「なんと！まだ面白くなるといのか！」

「面白くないよ。止めなよ」

盛大に嘆息しながら龍宮は呻く。
だが神はいたって不満そうに眉を寄せた。

「いやだね。そんなに私に働かせたければ力づくで来るがいいさ」
言って龍宮から興味を失ったかのように刹那を加えてより力オスになり始めている“事件現場”に視線を移した。

「なるほど。力づくか」

龍宮は口の端を歪めながら呟く。
それに神は振り向きもせずに応えた。

「んー。力づくだ」

次の瞬間、龍宮は素早くどこからともなく二丁の拳銃を取り出した。
長年、ともに闘ってきた無二の相棒。

二丁のデザートイーグルを。

とても女の子が片手で扱える代物ではないが、そんな理屈この龍宮
真名の前ではなんの意味ももたない。

玩具の銃のように軽々とそれを取りまわす。

龍宮が神のこめかみに銃口を押し付け、トリガーを引いた瞬間、神
の頭が突然ぶれた。

まるでコマ落としのように神が体を反らしていたのだ。

吐き出された弾丸は空を切る。

だが次の瞬間、神の胴体に押し付けられていた反対の銃が咆哮を上げた。

それすらよくわからない謎のひねりでかわすと神は一瞬の早業で自分の肩口に向けられていた銃に触れた。

構わず龍宮がトリガーを引くと、重々しい銃声とは似ても似つかない軽い音とともに銃口からいくつかの花が飛び出て来た。

神は余裕の表情で笑う。

「まあ銃なんかで私をどうこうしようとすること自体ナンセンスなんだがね」

それに龍宮もまた余裕の笑みを浮かべた。

「そうかい？」

言うや否や細工された銃を離す。

手品のように袖の中から500円玉を取り出すとそれを親指で弾いた。

弾丸の如く神の横つつら目がけて突き進む500円玉だが、神が視線を向けた瞬間、千円札へと姿を変える。

ひらひらと舞い落ちるお札を前に神が肩をすくめた。

「無駄だというに」

鋼の咆哮が響く。

崩れ落ちる神の姿を見下ろしながら龍宮は言った。

「そつでもないさ」

指弾をカモフラージュに神の足に向けて撃ちこまれた弾丸。弾頭が鋼でないため死にはしないが骨ぐらいは確実に折れているだろつ。

「ぐわあああああああああ！」

盛大な。

少々盛大すぎる悲鳴をあげて神がのたうちまわる。

それを見下ろして龍宮は嘆息した。

そのまま銃をしまう。

神に声をかけようとして、突き飛ばすようにそばを駆け抜けていった人影に言葉を飲み込む。

「神iiiiiiiiiiiiiiii！」

叫びながら倒れ伏す神に駆け寄っていく男。

それは神だった。

倒れているのと同じ顔した男がカウボーイみたいな恰好をして、倒れている方の神を抱き起こしていた。

気がつけば倒れている方の神も雰囲気は違うがカウボーイスタイルになっている。

「神！しっかりするんだ！お前はこんなことで死にはしないはずだ！」

あとからやってきた神は必死に声をかける。

だが撃たれた神は顔面も蒼白で息も絶え絶え。とても助かるようには見えない。

とぎれとぎれに

「グ……私はもう……駄目だ。神……お前に……頼みがある」

「なんだ神！」

盛り上がる二人にマガジンに残ったすべての残弾を叩きこみたい衝動が沸き起こる。

だめだろうか。

わりと本気で悩みながら龍宮は腰のデザートイーグルにそっと触れた。

気がつけば寸劇は佳境に入っていた。

「妻と息子に……よろしく……たの……む……」

撃たれた神の手が力を失い地に落ちる。

それを見たもう一人の神が悲しみに顔を歪め、天を仰いで涙した。

「神iiiiiiiiiiii!!」

次の瞬間、全く同時に神二人で立ち上がりサタデーナイトファイバーのポーズで告げる。

「「飽きたな」」

龍宮は無言で両腰の銃を引き抜くと容赦なく神の頭に照準を合わせ、弾の続く限り撃ち続けた。

「「はあーはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!」」

神二人は高笑いをあげながら龍宮の銃弾をかわしつつ走り去っていく。

弾を打ち尽くした銃にリロードすることも忘れて龍宮は憮然と呟い

た。

「悪戯好きの神。ロキとはよく言ったものだね。現存している分こちらの方がたちが悪い」

その眩きを聞くものはいない。

桜咲刹那は緊張の面持ちで眼前に立つ鬼を見据えた。

鬼といつても本物ではない。

クラスメートの風間誠亜の変わり果てた姿だ。

無茶な破壊活動の反動か裾がぼろぼろになった麻帆良女子中の制服に悪鬼のような形相で、吹きつけるような殺意をネギに叩きつけている。

改めて対峙するとどう考えても様子がおかしい。

怒り狂つてるという次元じゃない。

完全に理性を失っているように見える。

それほどまでに惚れ薬によってネギにときめかされたのが許せなかったのだろうか。

前に森で話をした時は精神が女の肉体に引っ張られていることに、少なからず悩んでいるようだった。

そこにきて魔法によって男にときめかされたのだからショックも大きかったのだろう。

しかも人生初ときめきとか言っていたし。

だからと言ってこのかを傷つけさせるわけにはいかなかった。

このかは今、ネギを抱きかかえて頬ずりしている。

そのネギは尻もちをついて恐怖の眼差しで誠亜を見ていた。

自分が割って入ったことで少なからず安堵の息を吐いていたようだが。

改めてみると、確かにネギ先生を見ると胸の鼓動が激しくなって、無性に抱きしめたくなる。

頬も紅潮しているかもしれない。

これが惚れ薬のせいとわかっていると、かえって不自然な好意が怒りと不快感を生んでいた。

魔法にせよなんにせよ心に勝手な干渉されるのは気分が悪い。

心を踏みにじる行為だと言い換えてもいいだろう。
ふつつと怒りがわいてくる。

こんな奴なんで守らなくては、という穿った考えも頭をもたげ始めていた。

だがこのかを守るためには誠亜さんを倒さなくてはならない。
生半可なことではないだろう。

ただでさえ人間離れた身体能力の持ち主である上に、今はつつすらと気の力すら感じられた。

あの身体能力が気で強化されたらどうなるか。
想像するだに恐ろしい。

理性を失いかけていたとはいえ、容易に倒せる相手ではないだろう。
怪我をさせてしまうかもしれない。

誠亜もまたある意味では被害者だというのに。

(……………?)

ふと気づいて刹那はネギの顔を見下ろした。

幸せそうなのかの顔を見て、そのあときょとんとかちらの顔を見返すネギの顔を見る。

ふと何気ない口調で刹那は呟いた。

「ああそうか……別にお嬢様をお守りするだけなら誠亜さんを倒さなくてもいいのか」

ネギがぎょつとしたようにこちらを見る。

「あ、あの……」

冷や汗を浮かべてひきつった笑みを浮かべるネギに刹那は淡々と言った。

「ネギ先生は四字熟語は好きですか？」

突然の無意味な質問。

だがネギは真剣に頭をフル回転させた。
直感で悟ったのだ。

ここが自分の生命線だと。

「え、ええと……四字熟語じゃないですけど援軍到来とか一発逆転
っていい響きですよね」

しかし刹那はふるふるとかぶりを振ると沈痛な面持ちで告げた。

「代わりにこの言葉を送りましょう。自業自得。因果応報」

言うや否や刹那はこのかを抱きかかえて跳躍する。

窓の外にちょうどあつた街灯に飛び乗ると、一度ネギを振り向いた。

「た、助けてくれないんですか!？」

何処か懇願の色を含む問いかけに刹那は軽く眉間にしわを寄せて答える。

「まあ私にとつての最優先事項はお嬢様の安全です。さらには誠亜さんには前に攫われたお嬢様を救ってもらった恩があります。なによりも今誠亜さんが怒り狂っているのはネギ先生の惚れ薬によって心を土足で踏み荒らされたからです。先ほども言いましたが自業自得かと」

「そ、そんなあ」

もはや泣きそうな表情でじりじりと誠亜から後ずさるネギ。それに背を向けながら刹那は付け足した。

「一応高畑先生に連絡はしておきます。たぶん5分くらいで来るでしょうからせいぜいそれまで頑張って逃げてください」

そう言つて刹那は街灯から飛び降りた。周囲に不思議と人影はない。

これだけの大騒ぎなら野次馬が集まってもいいと思うのだが。だれか魔法使いが人払いの結界でも張ったのだろうか。

しかしそれならネギを助けに入るはずだ。ならばネギ自身が？

自問してそれはないと答えを出す。

ただでさえ魔法の秘匿に気の回らないネギだ。

こんな絶体絶命の状態でそんな気遣いができるわけがない。なら他に誰が？

考えてこの事態を終始見ていたものがあることに思い当たった。

「ああ、あの人か」

呟いた刹那にこのかが少し戸惑い気味に問いかける。

「あ、あの……せつちゃん一体どうしたん？急に抱きかかえたりして」

「あ……」

刹那は軽く眼を見開いてこのかを見るとそつと地面に下ろした。

「私はもう行きますが、お嬢様。今日はくれぐれもネギ先生と誠亜さんの近くにはいかないようにしてください。では」

言って踵を返して駆けだす。

駆けながら内心で毒づいた。

（何やっているんだ私は。……いやこれでいい。私はお嬢様を影からお守りできればよいのだ。このままで……いい）

そつ自分に言い聞かせながらも胸の奥でチクリと痛む何かがあるのは否定できなかった。

逃げるようにこのかから離れていく。

刹那が高畑先生への連絡を思い出したのは5分後だった。

「以外にあっけなく終わったな」

地に倒れ伏す誠亜を見下ろして神は呟いた。

それに応えるように、誠亜の頭の前で紫煙をくゆらせながら高畑が神を咎める。

その少し後ろではネギが安堵の息をついていた。

「こんな大ごとになるまでなぜ放置したんだ？」

高畑の詰問に神は不思議そうに首をかしげた。

「ん？その方が面白いからだが？」

いつもどおりと言えはいつもどおりの神の返答に高畑は深く嘆息しながら誠亜を見下ろす。

「これだけ大暴れしたんだ。校舎もかなり壊されたし、ネギ君に至っては命の危険にさらされた。残念だけどそれ相応の責任を取ってもらわなくてはならないよ」

判決を告げる判事のように言う高畑に神は無表情に、わりとどうでもよさそうに答えた。

「んー。まあ良からう。火に油を注いだものとして誠亜の分の責任とやらは私がまとめて支払おう」

意外に殊勝な言葉に高畑が目丸くした。
ネギは事態がよく分かっているのか眼をぱちくりさせている。

「それで、そちらの責任の方だが……」

続く神の言葉に高畑は訝しげに眉を寄せた。

「こちらの責任……？」

問い返す高畑に神は相変わらず、世間話でもするような軽さで言う。

「言っておくが誠亜の暴走は9割方その小僧の作った魔法の惚れ薬が原因だぞ」

その言葉にネギが息を呑む。

あの暴走の責任が自分にあるといわれて驚愕しているようだ。
ネギ自身は全ての異性に好かれる薬を作ったのだから、それで人が
怒り狂って暴走するなど納得できない部分もあるに違いない。

「ただ惚れさせられて、そのことを自覚しただけでは、怒りはしても理性を失ったりはせんよ。惚れ薬の強制的な精神干渉とそれに抵抗しようとする誠亜自身の精神作用の闘ぎあい精神バランスを崩壊させ、怒りを鍵に暴走したのだ。私の責任は誠亜を惚れ薬の効く女にしたことと事態を終息させようとしなかったこと。誠亜の責任は薬に流される弱さも、完全にはねのける強さも持っていなかったことか？」

神はそこまで言っただけで地面に倒れている誠亜を担ぎあげた。

高畑の方を向いて淡々と言う。

「さて。では双方の責任の取り方についても話し合おうか？」

高畑が苦虫を噛みつぶしたような表情で押し黙る。

ネギは多分にシヨックを受けているようだった。

その二人を神は無表情に眺める。

30秒ほどして突然神は肩を震わせてくつくつと笑い始めた。

「クククク。まあいじめるのはこれぐらいにするとして、私としては私の力で全部うやむやにするという選択肢を提案するのだが、どうする？」

高畑はネギと誠亜をそれぞれ一瞥すると深々と嘆息した。

「わかった。それでいいこう。というかはじめからそのつもりだった

んだろう？どうせこれだけの騒ぎなのに裏側の人間以外には気づかれていないしネギ君も大怪我しないようになっていたんだろうね」

神は意地悪く笑う。

「責任うんぬんなどと言って女子中から追い出そうとしなければ、私も別にいじめたりはせんよ」

ネギは少し離れたところで小さくなっていた。この騒ぎの元凶の一人として責任を感じているのだろう。

「ふああーっはっはっはっは！せっかくトラブルメイカーも増えて面白くなってきたというのに途中退場など絶対させぬわあ！！」

もっともかけらも反省していない者もいるが。

こうして誠亜の知らぬうちに、もと男子高校生だというのに女子中に通うという異常から解放される可能性の一つが摘み取られたのだった。

第11話 デエストロオオオイ！（後書き）

どうもすちゃらかんです。

はじめに宣言しておきますがすちゃらかんは別にネギアンチでも魔法使いアンチでもありません。

ただ書いてたらなぜかたまたまこうなりました。

不快に思った人がいたら申し訳ないです。

なんか高畑先生が少し嫌な奴になっている気がします、ネギ・スプリングフィールドの道を妨害する要素の排除と誠次を悪戯女子中生活から解放して男子校に戻す一石二鳥を狙ってのことなので、嫌な奴として書いたわけではありません。

第12話　なんかすごいのが来た。来てしまった

第12話　なんかすごいのが来た。来てしまった

神楽坂明日菜はいつもと同じように新聞の詰まったカバンをたすき掛けに担いだ。

ただし今日は二つだ。

同じく新聞配達の子供をしている人が風邪で休んだのだ。

そこでその人の分まで自分が行こうと申し出たのである。

「大丈夫かい？ 凄い量だよ。アスナちゃん中学生だし女の子だしよ」

事務所のおじさんが心配そうに言うてくる。

だがアスナは澁刺とした笑みを浮かべると、元気よく言った。

「大丈夫ですよ！ 私体力だけは自信ありますから！ 任せてください！」

「そうかい？ でも気を付けるんだよ。最近なんか妙なことを叫びあいながら街中を駆けまわる二人組がいるらしいからね」

脳裏に浮かぶのはパンツをめぐって追いかけてこをしていたクラスメートの姿。

「あゝ。たぶんその二人のうち片方は被害者だと思いますよ。それじゃあ」

苦笑しながら、駆けだす。

途中すれ違った警官に挨拶しながらアスナは左右の足を前に出しつづけた。

おじさんの言っていたことを思い出す。

「やっぱり誠亜さんのことよね。噂になってるってことはあたしが見たとき以外にもあんなことやってんのかな？」

だとしたらご愁傷様である。

不意にいつもの倍の量の新聞の重みによるめく。アスナは鞆を見下ろしながら呟いた。

「やっぱちよつと重かったかな」

ちよつとだけ後悔していると声がかけられた。

顔を上げると彼女の担任のネギが杖に乗って朝日を背に宙に浮いていた。

ネギはにこりと微笑む。

「おはようございますアスナさん。朝早くからごくろーさまです」

アスナは驚愕の表情で叫んだ。

「あ、あんた空飛べるの!？」

ネギはそれに応えるように杖から降りた。

軽い足音が響く。

「ええ。配達手伝いますよ!速いんですよーコレ」

その姿に興奮冷めやらぬ様子でアスナも言う。

「うわーうわー。すごいじゃん!あんた本当に魔法使いなのねー」

感心したよう言うと、ネギは杖に跨ってアスナを促した。

アスナも期待に満ちた眼で杖に乗る。

「じゃあ行きますよー」

そう言って浮上するが少ししか浮き上がらない。

拳句はぷすんぷすんとガス欠のような音を出し始めた。

「なによ?浮かないじゃん」

期待していただけに不満そうにアスナが言う。

それにネギは首を傾げるとアスナに問いかけた。

「おつかしいなー。アスナさん体重何キロですか?120kgくらい?」

とても乙女に向けるものではないセリフを吐かれてアスナが青筋を

浮かべてネギの頭を小突く。
そのまま無言で駆けだした。
その後をネギが杖で追う。

早朝の追いかけっこを始めた二人は、まったく同時に足を止めた。
眼の前の小さな交差点で、角から出てきた大きなトラックが前を横切ったからだ。

大きなコンテナを積んだ運送用トラックだ。
トラックはさほど広くもない道を壁にこすることもなく進んでいく。
バスやトラックの運転を見るたびに思うが、よくあんな大きなものをどこにもぶつけず乗りまわせるものである。

一昔前にテレビ番組でやっていた電撃イ。イラ棒がふと脳裏をよぎった。

隣に並んだネギが感心したように口を開く。

「よくぶつけずにできますよね」

奇しくも同じことを考えていたことに苦笑してアスナは軽くネギの額を指ではじいた。
苦笑する。

轟音。

眼を丸くするアスナとネギの眼前でトラックのコンテナ部分を突き破って、何かが飛び出してきた。
ソレは20メートルほど吹っ飛んで、地面を転がって止まる。
よく見ればそれは二人の人間だった。

さらに言うならば片方はアスナもネギもよく知っている人物である。残りの一人にも見覚えはある。

二人のうち、体が変な形に折れ曲がっていない方、クラスメートの風間誠亜は激しくせき込んだ後、顔をあげた。

「ちつくしょう！なんだあのパワーは！？500メートルはぶっ飛んだぞ！神を盾にしてなけりや今の一発で終わってた！」

それに応えるように明らかにやばい折れ曲がり方をした男のほうも立ち上がった。

メチリと生々しい音を立てて体を無理やり元に戻すと。もうつぶれていた部分も治っていた。

「500メートルは言いすぎだな。400メートルぐらいしか飛んだらん」

真顔で指摘する男——確か神だ——に誠亜が獰猛に唸る。

「んなこたあ問題じゃねえんだ……」

誠亜の言葉を遮るように甲高い音が早朝の白い日のもとに響きわたった。

瞬間、金属製のコンテナがど真ん中で真っ二つに裂け、一人の男が飛び出してくる。

一言で言うならばそれは異様な男だった。

無論、セーラー服を着たダンディなおじさんというのも十分異様なのだが、それとは別に異彩を放っている。

2メートルを超すであろう長身で、大昔の中国っぽい鎧に身を包んで、手には巨大な戟を持っていた。

男の全身から吹き出す鬼氣にアスナとネギは凍りついた。

生まれて初めて叩きつけられた本物の殺氣に二人は指先一つ動かせずただ震える。

ネギに関しては先の惚れ葉騒ぎのときに誠亜に向けられてある程度免疫はできていたはずだが、それですら動くことすらできないほどの覇氣を男は纏っていた。

まるで自分の体がもともと動くことなどない石像にでもなったかのように体が動かない。

いや、違う。

動こうとという考えを持てなくなっていた、攻撃も逃走も、選択肢のうちからいつの間にか抜け落ちてしまっている。

男は赫怒に燃える瞳で高らかに言い放った。

「盗人めが……去ねいっ!!」

叫ぶと同時に隣に転がる切り落とされたコンテナの後ろ半分に手をかけた。

そしてそのまま片手で投げつける。

信じがたいことに巨大なコンテナの半分がボールのような気軽さで、砲弾のような速さで大氣を突き破りながら誠亜たちめがけて突き進んだ。

呆然と立ち尽くすアスナたちとは違い、誠亜はすかさず動いていた。

神の頭をひつつかむと飛来するコンテナめがけて全力で投げつける。コンテナと同じように砲弾じみた速度で飛んだ神の体がコンテナの鋼の壁に激突して跳ね返る。それを見て誠亜は荒々しく舌打ちした。大地に罅を入れながら跳躍してコンテナをかわす。

「くっそ無理だったか！」

言いながらも空中で跳ね返っていた神の体をひつつかむ。

「どう考えても質量的に無理だろう。少しぐらいは頭使え。鈍いなら鈍いなりにうまく使ってやらんとすぐ死ぬぞ」

明らかに即死級のダメージを負っているはずなのだが傷らしい傷もなく神がつつこんだ。

誠亜は惘然とした表情で地を見下ろし、男の姿を探した。そしてその姿がないことに驚愕する。

一歩も動けず顔だけ振り向いていたアスナはクラスメートに警告するためには叫ぼうとする。

だが遅すぎた。

男は。

吹っ飛んで立ち並ぶ家々の石塀を粉碎して止まっていたコンテナの影にいる男は、方天画戟を持っていない方の腕でコンテナをつかんだ。

いかなる力が働いたものか鋼鉄製のはずのコンテナに指が食い込んでいる。

「ぬあ！」

雄たけびとともに男が腕を振るう。

コンテナが弧を描き、空を裂いて空中の誠亜たちに叩きつけられる。

「なんのおっ！」

誠亜が苦し紛れにコンテナと自分の間に神の体を持つてくる。

しかし、それだけで衝撃が殺せるはずもなく、誠亜の体がボールのように吹っ飛ばされた。

そのまま地面に叩きつけられる。

軽く地面を陥没させる破壊力に誠亜の喉が声にならない悲鳴を上げる。

口の端から血をこぼしながらすぐさま立ち上がる誠亜に向けて男はコンテナを蹴り出した。

誠亜は眼を見開いて顔の前で両腕を交差した。

そのまま受け止めようというのか。

まったくもって無謀だ。

あれだけの大量の突撃を人間が止められるはずがない。

ネギがあわてて何かしようとしているが何もかもが遅い。

今から魔法を唱えても間に合わない。

それは素人であるアスナにすらわかった。

コンテナが誠亜まであと15メートルほどまで迫った瞬間、男の顔に凶暴な笑みが浮かんだ。

「オオオオアッ！！」

咆哮一閃。

全身のばねで撃ち放たれた戟の斬撃が大気を破壊した。

生まれ出た衝撃波がアスファルトを、石塀を、電柱を粉々に粉碎しながら驀進する。

果ては鋼鉄のコンテナをぐしゃぐしゃにひしゃげさせて何もかもを吹き飛ばした。

吹き荒れる暴風に思わず目を閉じていたアスナたちが恐る恐る目を開くと、そこにはまるで爆撃でも食らったかのように木っ端みじんになった街並みが広がっている。

あまりの惨状に言葉を失うアスナとネギ。

塀など一つとして残ってはいないし道路に面していた家には跡形もなく吹き飛んでいるものもあった。

並び立っていた電柱や街灯は一つ残らず粉碎され、向こうの方では原形をとどめていないコンテナが大地に深々と突き刺さっている。

さらには一件のアパートがまさしく戦車砲でも食らったかのように大穴をあけていた。

大穴の中のがれきの山からやたら長い靴下に包まれた脚が覗いていた。

あんな靴下をはいている人間はそうそういない。

ならあれは……

最悪の想像に身を震わせるアスナの前で男は口元に笑みを浮かべた。殺意をにじませた怒りの笑みではない。

面白い得物を見つけた狩人の笑みだ。

男は低くよく通る声で言う。

「ほおう。咄嗟に後ろに飛んでダメージを軽減したか。それだけじゃないな。体そのものも並の頑丈さじゃない」

男はそう言つて大穴に向けて手招きした。
瞬間、がれきを吹き飛ばしてアパートの大穴から一つの人影が飛び出してくる。

空中で一回転して地面に降り立つた誠亜は荒い息をつきながら男を睨みつけた。

ひどい有様だ。右足の靴下はぼろぼろになって、布のほとんどが破れている。

左腕の袖も似たような感じだった。

ボロボロになったコートを引きちぎつて投げ捨てる。

体の各所で服が破けているが不思議と服の下の体は軽傷だった。

視線をぐるりと巡らせて、近くの民家の壁に直立の姿勢で突き刺さっている神を見て、毒づく。

「つかえねえ」

そんな誠亜を見下ろして男は不敵に笑った。

「面白い。実に面白いぞ小娘。まだ何かあるなら見てやらんこともない。やって見せろ」

言つて、戟を構える。

一分の隙もない構えだけでもその男がどれほどの強さを持っているのかわかるというものだ。

それを見て誠亜は眉間にしわを寄せた。
いつもの10倍ぐらい険しい眼で呟く。

「どうやら……出し惜しみする余裕はねえみたいだな」

腰を落とし、両の手を胸の前で打ち合わせる。

ギリリと目を輝かせ、黒く幻視しかねないほどの鬼気を発して、低く押し殺した声で告げる。

「とつておきを見せてやる。構えろ、呂布。さもなきゃ一撃で死ぬぜ」

その言葉に、その気迫に男は喜悦に顔を歪ませた。

「……来い小娘！」

男——呂布と呼ばれたがひょっとしてあの呂布だろうか？——の言葉に誠亜の眼が見開かれる。

それと同時に爆発的な光が誠亜の体を包む……ということもなくどさりと重めの音を立てて誠亜の体が倒れ込んだ。

そこにはいつの間にか真つかな毛並みの立派な、立派すぎる馬が右の前足をあげてたたずんでいた。

心なしかその蹄が煙を上げているように見える。

その姿にネギが冷や汗をかきだす。

はねられたときの事が記憶に残っているのだろう。

呂布はそれを見ると深く嘆息した。

何処かふてくされたように告げる。

「赤兎……余計なことを。こいつの言っていたとおき。久々にこの俺も楽しめるかと思ったのだが」

赤兎と呼ばれた馬はそっぽを向いていないいた。

呂布が赤兎と呼ぶのだからやはりこれも三国志に出てきた赤兎馬なのだろうか。

「言っただろう。俺が貰うと」

「そんなことはさせない！ラステル・マ・スキル……」

決死の覚悟で呪文を唱えだすネギを、しかし呂布はつまらなそうに見下ろすと鼻で笑って跳躍した。

そのまま赤兎馬に飛び乗ると馬の腹を蹴る。

赤の馬は高いいなきとともに大地を蹴ると爆発的に加速した。あっという間に豆粒のようになり、大きく跳躍して天に昇って行った。

地上から50メートル弱だろうか。

そこに赤黒い円形の穴が開いていた。

赤兎馬と呂布はそのままその穴に飛び込んで消えてしまう。それを合図にしたかのように穴も閉じてしまった。

「くそっ！」

ネギが叫んで杖にまたがり、穴の消えた空へと飛んでいく。

しばらく穴のあったあたりをぐるぐると回っていたが、あきらめたように降りてきた。

「どうだった？」

アスナの問いにネギは力なく首を横に振る。

「駄目です。ゲートらしいものはあとかたもありません。僕は……どうすれば……」

「そんなの……あたしにだってわからないわよ」

二人でうつむく。

とんでもない事態になってしまった。

2・Aの仲間が攫われた。しかも相手は三国志の時代におり、おまけに最強の猛将呂布だ。

呂布と戦えるだけの人員を集められたとしても過去に行く手段がない。

まさに八方塞がり。

「そもそもなんで三国志の武将が現代にいるんですか!？」

「うむ。それはだな」

ヒステリックに叫ぶネギに後ろから声がかかった。

そこには傷一つない神が立っている。

驚く二人をよそに神は周囲を見回して嘆息すると右手の指をパチンと鳴らした。

その瞬間、先ほどまでの破壊など最初からなかったかのように、もとどおりの町並みが現れた。

さらに驚く二人に神は顎に手をあてて語りだす。

「お前たちの知っての通り先日赤兎馬を呼び出した私だが、さすがにそろそろ返そうと思ってな。三国志の時代に赤兎馬を連れていったのだ。しかし運悪くあの呂布に見つかって、さんざん追いかけまわされたあげく元の時代にもどるゲートにも飛び込んで着てしまう始末。そして現代でも追いかけまわされて、たまたま誠亜に遭遇し、奴を巻き込んで今に至るわけだ」

啞然とした表情で固まる二人。
肩を震わせ、一斉に叫んだ。

「な、なにやってるんですかああああああ！」

はっはっはっはと笑う神にじれったいものを感じながらアスナは地団太を踏む。

「アంతのせいで誠亜さん連れてかれちゃったのよ！返してほしくば見合う何かをもってこいって！」

「時間を超える魔法があればどうにか出来ますけど、そんなものは……」

対照的にうつむくネギ。

神の胸倉を掴んで揺さぶり続けていたアスナはふと動きを止めた。神の眼を覗き込みながら口を開く。

「ね、ねえ。あんた“返しに行った”って言ったわよね？あんたひよっとしてタイムスリップできるんじゃない……」

「うん？　できるが？」

当たり前のように返す神にネギとアスナは同時に凍りつく。そして解凍されると同時に絶叫した。

「さっさと助けに行けええええええええええ！」

「さっさと助けに行ってくださいiiiiiiiiiii!」

叩きつけられた二つの拳が神の体を天高く打ち上げるのだった。

まず時を超える前に寄るところがある。

そう言って神が向かったのはコンビニだった。

昨今のコンビニの常、24時間営業のためこんな早朝でもやっている。

神は無造作に扉へと歩み寄ると……ガラス扉に頭をぶつけた。

訝しげに首をかしげ、一歩引いた後また扉の前に立つ。

眉を寄せながら視線を上げた。

扉の上、人の接近を感知するセンサーを睨みつけるとその前で手をひらひらと振る。

やはり開かない。

「むう。自動扉のくせに自動で開かないとは。何のための自動扉だ
と思ってるのだ。貴様など自動扉ではない。手動扉だ。名前を書
いてやるう」

「何やってるんですか？」

超油性と書かれたマジックを片手に扉に向かう神にネギは呆れたよ
うに言った。

ネギが近づくと、扉はあっさりと開いた。

しかし神が近付くとうんともすんとも言わない。

アスナが扉の前に立つと自動扉は普通に開く。

「今だ！」

言いながら神が扉に駆け込む。

すると狙い澄ましたかのようにすごい勢いで自動扉が閉まった。体を思い切り挟まれて神が悲鳴を上げた。

「あいたっ！なんだ！？私に何か恨みでもあるのか！？」

しかし扉は答えない。まあ扉なのだから当然なのだが。

「そうか貴様がその気ならば……」

神が不敵に笑うとその体は自動扉を容赦なくすり抜けた。

勝ち誇った顔で自動扉を見つめる。

「何やってんのよ」

呆れたように言いながらアスナが入ってくる。

それに神はふんぞり返りながら答えた。

「神に反逆する愚か者に力の差を見せつけてやったただけだ」

「それで。何なんですか？必要なものって」

ネギの問いに神は神妙な顔で頷くとかがみ込んだ。棚に陳列されたものをいくつか手にとって笑う。

「いやあ。やっぱ旅行に行くならお菓子だろう」

ネギが憩いよくこける。

同じようにずっこけたアスナは勢いよく立ちあがると無言で靴底を神の顔面に埋め込んだ。

くつきりと足型を付けた神がグミやらチョコやらポテトチップスやらを抱えながら立ち上がる。

「お前たちも好きなものを買うがいい。意外とたくさん入っているから遠慮はいらんぞ」

「意外とって……あああああ！それ僕の財布じゃないですか！」

「その通り！だから私の懐は痛まん。ゆえに好きなだけ買うがいい！」

かなり駄目なことを自信たっぷり言い放つ神にネギが食って掛かる。

それを半眼で眺めながらアスナは口を開いた。

「あの一」

だがそれよりも早く大人し眼の声がかかる。

一言で言うならばそれは可愛らしい声だった。

小学校1年とかそんなあたりを連想させる可愛い声だ。

振り向くと、レジの向こうで店員のお姉さんが微笑んでいた。

高校生ぐらいだろうが少し小柄な人だ。

年齢と声が全く釣り合っていない。

コンビニ店員の制服に身を包んだその人は微笑んだままレジの影から何かを取り出した。

幼子のような声で告げる。

「お客様。買わずに騒ぐのなら出て行ってください？」

その言葉に、というよりその手に握られた釘バットにアスナたち3人は顔を青ざめさせると逃げるように店を飛び出して行った。

念のためかなり離れたところまで逃げた後、神はぽつりと呟いた。

「まあ悪ふざけはそろそろ終わりにして、まじめにやるとしようか」

「アンタね……」

青筋を浮かべて唸るアスナをよそに神はふうむと考え込んだ。

「やはり相手が相手だ。もう少し戦力を整えよう」

ネギが拳を握って力説する。

「わかりました！じゃあすぐに学園長に連絡しましょう！魔法先生達の力を借りればきっと……」

携帯電話を取り出してボタンをプッシュし始めるネギに対し、神はかっと目を見開いて一喝した。

「待てい！！」

声と同時に神の右手がばね仕掛けで飛び出す。容赦なくネギの横っつらに突き刺さった拳はネギの小さな体を3メ

「トルほど吹き飛ばす。」

ばねを手繰り寄せて拳を手首にはめ込みながら神は言った。

「魔法先生どもでは面白くない。メンバーは私が選ぶ」

ビシリとネギを指差すがはめ込む時に向きを間違えていたため手が
ねじれていて指先が微妙にずれている。

「では行ってくるぞ〜〜」

間延びした叫びを残しながら神は走り去っていく。

それを見送りながらアスナは隣を見下ろした。

神のスプリングパンチで地に沈んだネギを見る。

「むー！むー！」

なんかロープでぐるぐる巻きにされていた。

口には猿轡まで噛ませてある。

嘆息しながら解こうとすると、バチリと静電気のようなものが走っ
て触れない。

かすかな戦慄とともに呟く。

「魔法先生を呼ばせないため……？ どんだけ“面白さ”を優先して
んのよ」

神が助っ人を連れてきたのはそれから3分後のことだった。

「というわけで！こうして勇者たちがそろったわけだ！」

「何がというわけなんだい？」

半眼で呟いたのは色黒の背の高い、とても中学生とは思えないクラスメート、龍宮真名だ。

それに神は肩をすくめてかぶりを振った。

「やれやれ察しの悪い奴だな。斜め45度的に察しが悪い」

神の言葉にもう一人の少女、黒髪をサイドでまとめた桜咲刹那は眉間にしわを寄せてつつこむ。

「まったくもって意味がわからん。大体私たちは寝ていたところを有無を言わずに連れてこられたんだぞ。事情を理解しろという方が無理だ」

そうなのである。

龍宮と刹那は戦闘服どころか制服ですらない。パジャマ姿だった。本当にいきなり突入して問答無用で連れてきたのだろう。

ふと気づいてネギがどこか気まずそうに視線を泳がせているのに気付いた。

「どうしたのよ。ネギ」

「い、いやなんでもないです！なんでもないんですよ」

ネギはあわてたように腕を振った。

その様子にアスナは訝しげに眉を寄せる。

「たぶんこの前暴走した誠亜に追い回されたときに、あっさり見捨てられたので苦手意識でもできているんだろう」

「い、いえそんなことは……！」

「ぶっちゃけ小僧の心の機微など今は知ったこっちゃないので、要件に移りたいと思う」

神がそう言つと、突然あたりが暗くなり雷鳴が轟き始めた。

「余計な演出はいらないよ」

あっさり龍宮に切つて捨てられ、神は不満げに腕を振った。

すると空に立ちこめていた暗雲はあっという間に晴れ、雷鳴もなくなる。

神は両手を掲げると高らかに言い放った。

「お前たちは勇者だ！お前たちにはこれから魔王に攫われた姫を救い出しに行ってもらおう！」

全員凍りつく。

一番に復活したのは刹那だった。
深く嘆息すると踵を返す。

「くだらん。単なる悪ふざけなら私はもう帰らせてもらっからな」

歩きだす刹那に続き龍宮もまた踵を返した。

その二人を呼びとめようとして、アスナは隣から響いた声に言葉を飲み込んだ。

「待ってください！攫われた誠亜さんを助けるために力を貸してほしいんです！」

ネギの訴えかけに二人は同時に振り向く。

その顔には少なからず驚きの色が見て取れた。

「誠亜さんが……攫われた？」

軽く眼を見開いて問う刹那に神は鷹揚に頷く。

「うんむ。その通りだ」

一瞬で間合いを詰めた刹那が踏み砕かんばかりの力で神の足を踏みぬいた。

突き抜ける痛みに神がうずくまる。

その神を傲然と見下ろしながら刹那は拳を握って叫んだ。

「なにやってるんだお前は！そういうことは早く言え！」

「ぬっつ」

唸りながら立ち上がる神に今度は龍宮が語りかける。

「誘拐とは穏やかじゃないね。相手がどこの誰かは分かっているのかい？」

神は2、3度踏まれた足を振ると、真剣な表情で頷いた。

「無論だ。この神に抜かりはない。敵の名は呂奉先。三国志最強の猛将呂布ぶぐふあつ！」

神の言葉が終るのを待たずに龍宮の手元からはじき出されたコインが神の眉間を撃ち抜く。

神は綺麗に一回転半して首から地面に突っ込んだ。

そのまま頭で逆さに直立しながら抗議の声を上げる。

「いきなり何をする？」

「うるさいよ。どうせあなたの仕業なんだろう？赤兎馬を返しに行つて見つかった挙句、そのまま連れて来てしまったぐらいしか考えられないからね」

言いながらも龍宮の手にはいつの間にか次弾が装填されている。それに気づいているのかいないのか神は感心したように言った。

「さすがというべきが。素晴らしい洞察力だ。じつちゃんの名にかけて真実はいつも一つというやつだな」

「なんか混ざってる……」

アスナがポツリというがやはり神は相手にしない。

「まあそういうわけで戦力増強のためにお前たちを呼んだわけだ。まあなんだ。報酬が欲しければちゃんと払うぞ。ユーロとかペソで」

「なぜユーロ？」

首を傾げるネギに神は当然のことのように答えた。

「ただの悪戯心だ。意味などない」

アスナたちはみんな揃って嘆息する。

「……まあそういうことなら手を貸さんでもないが……」

呟く刹那に龍宮が嘆息しつつ続けた。

「それなら最初に言っただけでよかったね。こんな服では戦えないし、武器だって部屋の中だ」

それに神は胸を張って鼻を鳴らす。

「ふん。問題ない。いったらう。この神に抜かりはない。見るがいいゴッドパワー！喰らえ！」

叫ぶや否や、どこからともなく出したロケットランチャーを刹那と龍宮に向けて発射した。

しかしそれをただで食らう二人ではない。

龍宮は指弾を、刹那は手刀による気の刃を放ってロケットランチャ

一の弾を撃ち落とす。

瞬間、爆風の代わりに真っ白な閃光が世界を満たした。誰もがそのあまりの眩しさに目をつむる。

アスナもまたその一人だ。

アスナがゆっくりと目を開くと、そこには同じように眼に手をかざして光を防いでいた刹那達がいた。

二人は不思議そうな顔であたりを見回している。その姿を見てアスナは驚愕の表情で二人を指差した。

「な……な……」

隣ではネギも言葉を失っていた。

二人はアスナたちの視線と指の向きに、自分の体を見下ろした。そして絶句する。

先の閃光で彼女らの服が変わっていたのだ。

刹那はピンクと白でフリルがふんだんに使われた、一見して可愛い服だ。

しかしその服を言い表すもう一つの言葉がある。

すなわち魔法少女、だ。

ご丁寧にピンクと白で羽やら珠やらが配されたこてこての剣まで手に持っている。

一方龍宮はまた違った仮装だった。

青と白で構成された近未来的な鎧やら肩あてなどを纏っている。

これまたこれを言い表すもう一つの言葉あった。

すなわちガン。ム。

ガ。ダム。の肩や腕、胸、脚の装甲というか外側を鎧のように纏った姿だ。

腰の部分にはビームライフルらしき代物がつるされていた。

「うむ！完璧だ！」

「何がだ！」

叫びながら刹那は頬を赤らめ、手に持った剣の腹で神の頭をひっぱたいた。

衝撃に頭をがくんと揺らしながら、神は頷く。

「完璧ではないか。まあ私自身何が完璧なのかは説明できないがきつとこれは完璧だ」

龍宮は軽く青筋を浮かべながら腰のビームライフルを手にとってみる。

「いろいろと言いたいことはあるが、とりあえずあなたにこんな趣味があったとはね」

皮肉気に告げる龍宮に神は笑いながら答えた。

「はっはっは。私にそんな趣味はないぞ。単に妙な格好をさせられて恥ずかしがったり戸惑ったりしているお前たちを見て爆笑しよぐぶふおっ！」

ビーム的な音とともに発射されたビームが神の右胸を貫く。

倒れゆく神を見下ろして龍宮は嘆息とともに手に持ったビームライフルを下ろした。

「戦闘が発生するのなら使い慣れた武器と恰好が一番に決まってい

る。協力してほしいのなら戻すんだね」

「一理ある」

あつさりと肯定して神はうごめいた。

同時に胸に風穴をあけられた神の体から、種から草花が生えるように神の体が生えてくる。

その姿を呆然と見ながらアスナは呻いた。

「な、なんか滅茶苦茶ね、この人。ネギの魔法使いとかそう言うのが霞んで見えるわ」

それにネギが苦笑する。

撃たれた方の神の体が砂のように崩れるのを一瞥しながら神は指を鳴らした。

同時に刹那と龍宮の服が光った。

すると二人とも動きやすそうな普通の服になり手には銃や刀などを握っていた。

これが二人の使い慣れた武器なのだろう。

「さてまあこれで準備もすんだわけで……」

「行きましょう！誠亜さんを助けに！」

ネギが意気込んで言う。

アスナとネギはエイエイオーと掛け声をかけて拳を振り上げた。

龍宮と刹那は拳こそ振り上げないが、やる気は十分なようだった。

あがるボルテージをそれをぶち壊すように能天気な声が響く。

「んー。んじゃま行くとしますか。ゲートを開くからお前たち私より後ろに下かれ」

頭をかきながら神が言う。

全員が下がったのを見届けると神は右手を掲げた。

「開け。時空の……」

突然轟音とともに光の円が何重にも現れた。

円と円の間には漢字のような複雑な紋様がずらりと並んでいる。

雰囲気は本などに登場する魔法陣のようだが、少し雰囲気が違った。強いて言うならば少し中国風味がまじっているといったところか。

そこから吹き出す風にアスナたちは吹き飛ばされそうになりながらも、叫んだ。

「ちょっとちょっと！なんなのよコレ！！」

そう問うと神はどこか訝しげに眉を寄せた。

台風のような風の中、よろけるどころか姿勢一つ変えずに眼の前の中華風の魔方阵を見つめる。

「いや私はまだゲートを開いていない」

「じゃあ一体何なんだ！！」

風の音に負けじと声を張り上げる。

今も陣は大きく複雑になっていており、発せられる光も強くなっている。

「これは……仙陣？いやしかし連中はとうの昔に仙界に引っ込んだはずだが……」

一人呟く神。

唐突に刹那と龍宮が各々の武器を構えた。
ネギも慌てて自分の杖を構える。

次の瞬間、光の陣から幾条もの雷があふれ出した。

それと同時に人影が映りだす。

水の膜を突き抜けるように何者かが歩み出してきた。

その姿は陣の光によって逆光になっていてシルエットしかわからない。

人影が陣から離れると、光は急速に弱まっていった。

紋様が大气に溶けたように解けていき、円がぼやけて消えていく。
陣の光が弱まるにつれて次第に人影の姿が明らかになってくる。

それは美女だった。

アスナ、龍宮、刹那とタイプは違えど疑う余地もない美少女に囲まれても遜色ない整った顔立ち、少し鋭い双眸もある種の魅力となっている。

ゆったりとした、煌びやかな装飾が至る所に刻まれた中国の方の衣装に身を包んだ姿は絢爛ですらある。

そして決して服に着られてはいなかった。

その美女は閉じていた眼を開くと、両腕を振り上げた。

そのまま天に向けて絶叫する。

「あいるびーばああああつく！！麻帆良よ！私は帰って来た！！」

！」

その声に啞然とした面持ちでアスナはその人物を見た。
見ればネギをはじめとする誠亜救出部隊の面々も驚いたようにそれ
を見ている。

彼女はおもむろに背負っていた箆笥ぐらいの大きさの箱を地に下ろ
す。

そしてその場に集まった面々の顔を順に見回した。

誰もが言葉を失うなか、やはり神は空気を読まずに呟く。

「アイルビーバックは違うだろう。やはり英語駄目だなおま……」

言葉は途中で止まる。

いや止められた。

勢いよく振り下ろされた方天画戟が深々と神の頭に突き刺さってい
た。

噴水のように鮮血を吹き上げながら、真顔で神が問う。

「いったいどうやって戻ってきたのだ、誠亜？ただの武将やその周
りの人間に時間跳躍などできんと思うが」

問われた誠亜——服は全然違うし、髪もかなり伸びているが間違い
なく誠亜だ——は獰猛な笑みとともに答える。

「通りすがりの仙人とやらが助けてくれたんだよ」

「なるほどな。あの時代にはまだ奴らも下界にいたのか」

うんうんと頷いて神は踵を返した。
そのまま逃げ去ろうとして頭に突き刺さった方天画戟の柄を誠亜に
押さえられる。

「待てやコラ。なに逃げようとしてんだ」

神は乾いた笑みを浮かべながら答えた。

「はっはっはっは。まあ無事に帰ってこられたわけだし一件落
着だろう？私は急用を思い出してな。すぐに火星あたりまで逃げ…
…いや遠出しようと思うのだが」

誠亜もまた乾いた笑いをあげながら地味にぐりぐりと方天画戟の柄
をひねる。

「くふはははははは。一体何ヶ月たったと思ってんだ？毎日毎
日化け物には振り回されるし、貂蟬には着せ替え人形にされるし、
董卓はハンサムだけど超エロおやじだし、拳句は生で虎牢関を体験
させられたわ！！武器の一振りで数百人単位で人がぶっ飛ぶ化け物
についていかされたぞ！！」

殺す笑みとともに叫ぶ誠亜に、神が冷や汗を流しながら口を開く。

「ぬう……何か風向きが悪いので話題を変えて誤魔化そうと思う。
ところでそのでかい荷物はなんなんだ？」

「帰る時に呂布たちがくれた土産だよ。服とか宝とか色々だ。それ
とそういつ本音は口にするもんじゃねえぞ」

誠亜は無造作に方天画戟を神の頭から引き抜く。

一際大きく血が噴き出すが、誠亜はそれを浴びないように軽く右に跳躍した。

明らかに致死量噴き出しているが神は顔色一つ悪くしないでさらりと頭をなでる。

すると無傷な頭が現れた。

誠亜は再びタンス大の荷物を背負い方天画戟を担ぐと神の頭をひつつかんだ。

そのまま引きずっていく。

「さあー神。今日はとことん付き合ってもらうぜ。俺、前からお前がどこまで壊されても生きていられるのか興味があったんだ。とりあえず返り血がついてもいい服に着替えたら早速実験開始と行こうぜ」

凄まじく物騒なことを言いながら呆然と立ち尽くすアスナたちの前から歩み去っていく。

「たとえミンチにされても私は死にやしないのでやるだけ無駄だぞ。私が痛いだけだからやめてくれやがるがいい」

神は神で相変わらず言葉の端にも反省の片鱗も見えない。

「はっはっはっは。俺は向こうでいろいろ学んだぞ。お前も時と場合に合わせた口のきき方を覚えたらどうだ」

犬歯を見せる笑みを浮かべながら誠亜が言う。

「だが断る。私は神。退かぬ媚びぬ省みぬ。アレこれなんのネタだ

ったか？まあいいや。天上天下唯我独尊を地でいかせて頂こうと思うのだがこれいかに？」

頭に誠亜の指が食い込んで血が流れているが眉一つ動かさずに神が言う。

「はっはっはっはっはっはっはっはっは」

最後は二人同時に笑い声を上げる。

「誠亜……無事だったのかい？」

龍宮が問いかけると誠亜は苦笑しつつ答えた。

「ん〜。いろいろ大変だったけど一応無事だったかな。お前らこそどうしたんだ？」

「あなたを助けようということを集められたんですよ」

刹那が答える。

それに誠亜は軽く頭を下げた。

「そうだったか。それはありがとう。見ての通りなんとか帰還できたよ。とりあえずただいまと言っておこうかな。神の奴が迷惑をかけたし、こんどご飯でもおごるよ」

「いや気にしないでいいよ。君が無事帰ってこれて何よりだ」

龍宮が苦笑とともに返す。

それじゃあなと言って歩み去っていく誠亜たちをアスナたちは二人

が角を曲がって見えなくなるまで見送っていた。

そこで刹那が呟く。

「誠亜さんが無事に帰ってきたのだから万々歳のはずなんだが……これはなんていうのか……」

それに龍宮が答えた。

「肩すかしってやつだね」

全員が各々の用を果たしに動き出したのはそれからきっかり10分後だった。

それまで4人はずっと立ち尽くしていた。

第12話　なんかすごいのが来た。来てしまった（後書き）

……あれ？なんかうまくいかなかったです。

せっかく赤兎馬を出したんだし呂布も出そうかと思ったわけですよ。最初はいつかのパンツ事件の時と同じでただ呂布に追い回される二人をアスナが見かけるだけで終わっていたのですが、ちょっと膨らませてみようと思いたち、実行したらこうなりました。

おかしいなあ。

何がいけなかったんだろう？

とりあえずわかったのは己の未熟さのみ。

拙作ですが見捨てずにおつきあいいただければ幸いです。

第13話 帰還後第一イベントはドッジ。ドッジ！ドッジボオオオオオオ！

第13話 帰還後第一イベントはドッジ。ドッジ！ドッジボオオオオオオオオオオ！
オオオオ！

不思議なもので、あれだけ帰りたい帰りたいと思っていたにもかかわらず、実際に帰りついてみるとやはり胸には一抹の寂しさがあるのだった。

望まぬものであったとしても何ヶ月も過ごせば愛着もわくというもののだろう。

手の中のそれを見下ろしながら誠次はひとりごちた。

（大変っちゃ大変だった。それこそ命がけですらあったけど、楽しかったってことなんだろうな）

苦笑してふと感じた気配に顔をあげた。

寮の階段をかなり速めの速度で上ってきている。

速度的には階段を6段飛ばしぐらいに駆けのぼればこんなスピードだろうか。

誠次は口元に笑みを浮かべながら気配が自分の部屋の扉の向こうに

たどり着くまでじつとそこを見つめていた。

ノックもなしに開いた扉から飛び込んできたのは金髪をはね散らかせた7歳ほどの愛らしい少女だった。

「セーアー！おじゃましまーす！！」

澁刺とした声と表情で飛び込んで着た少女——ティーは飛び込んだ姿勢のまままるでビデオの一時停止でもかけたかのように動きを止めた。

両手を上げ、片足を上げたその姿はなんだかグリコのあのマークを彷彿とさせる。

そのままの姿勢でティーは言う。

「ど、どうしたんだセーアー！そんな綺麗な服着ちゃって！！」

言われて誠次は自分の体を見下ろした。

貂蟬からもらった服の中では質素な方の服だ。

それは装飾という点でも生地という点でもだ。

明らかに上等だとわかる品は祖父のもとに送ってきちんと管理してもらったことにした。

なぜだかあの祖父は大昔の服をたくさん持つていて、街に下りる時でもなければそういう服を着ていることが多い。

だからこそ正しい保管方法を知っているだろうと踏んでの選択だ。

よって誠次の手元に残っているのは“アッチ”で普段着的に着ていたのや、それより少しいいもの程度である。

しかし現代の日本でそうそうお目にかかれる代物ではないし、一般的な洋服に比べれば綺麗だろう。

何となく何ヶ月も着ていたものだから当たり前のように着ていたが、冷静に考えれば奇抜かもしれない。

誠次は作業を止めてティーに顔を向けた。
軽く微笑んで言う。

「友達からのもらいもんだよ」

誠次は手の中のものを壁に立て掛けるとティーのもとへと歩み寄った。
そっと抱き締める。

「え？え？」

戸惑うティーをよそに誠次は感慨深げに呟いた。

「ん〜。なんていうか懐かしいなあ……」

そんな誠次を不思議そうに見上げるとティーは首をかしげた。
それに伴いかぶっていた帽子がずれ、大きな猫耳がぴよこりと顔を見せる。

「なに言っただよ。ついこの間会ったばかりかだろ？」

その言葉に誠次は苦笑しながら返す。

「そうだな」

誠次はティーの体を離すと一度軽く頭を撫でて壁に立て掛けたもの

を手を取った。

それをじっと見つめ、満足げにうなずくと白い綺麗な布で軽く拭いた。

初めてそれに気づいたのか、ティーは猫のようなつり気味の眼をまん丸に見開くと戸惑い気味に指差した。

「セーア……それは？」

問われて誠次はやはり軽く笑みながら答える。

「友達からのもらいものだ」

言いながら誠次は手の中のソレ、方天画戟を壁にしつらえられた置き場に立て掛けた。

「あれ？ダイゴはどうした？」

「晩ご飯の買い物行ってから来るって」

若干の戸惑いを残しながらティーは答えた。

相槌を打ちながら誠次は軽くティーの頭をなでる。

ティーはそれにくすぐったそうに笑うと、今度は少し不満そうに口を尖らせた。

「聞いてくれよセーア。けーじよりただかつの方が動きが派手で強いんだよ！」

唐突にそう言われて誠次は首を傾げる。

「ん？何の話だ？」

「ああごめん。ゲームの戦国無双の話だよ」

「ああ」

たしか誠次がティーに貸した戦国武将を操って戦うアクションゲームだ。

「それで、なんだって？」

誠次が問うとティーは両手をぶんぶか振りながら答えた。

「だ〜から〜！1ではけーじが最強キャラだったのに2では新顔のただかつが最強になってるんだよ」

不満げに言うティーに誠次は眉根をよせる。

「なんかいかんのか？」

「うーん。言われてみるとそれほど問題じゃないかな」

ティーも存外あっさりそう言うので今度は腕を組んで唸った。

「ひと通り気に入ったキャラをやったんで、今度は三国無双にも手を出してみたんだ」

「ふーん」

適当に相槌を打ちながら誠次は冷蔵庫から2本コーラを取り出した。

日には大丈夫かと賞味期限の数字を探して缶の上面側面底面をのぞく。

のぞいた後、誠次の時間的には何ヶ月も経っていてもこっちの時間的には1日しか経っていないことに思い当たり苦笑する。

右手に一本左手に一本持ち、右手の人差し指で器用に右手の缶のふたを開ける。

それを飲みながら左手の缶をティーに渡した。

ティーはそのプルタブを持ち上げながら言った。

「それに出てくる虎牢関の呂布が強すぎてさ」

「ブフウウウウ!!」

ティーの口から出てきた名前に思わず誠次は口の中のコーラを噴きだした。

それに眉をしかめたティーが言う。

「ばつちいなあ。どうしたんだよセーア」

「い、いや。なんでもない」

まさかその時代に行っていましたなどと言えるはずもなく誠次は言葉を濁した。

ティーは訝しげに誠次の着ている服と壁に立てかけられた方天画戟に視線をやる。

何を言われるのか。

どう返すのか。

数パターンの返答を頭の中で組み上げながら誠次はティーの言葉を

待つ。

だがティーは結局思いつかなかったのか何も言わずにコーラをぐびぐびと飲み始めた。

そのときだ。

ボタンと勢いよく扉が開いて何者かが飛び込んで着た。

それはダイゴだった。

スーパールの袋を両手に提げてくるりと一回転しながら入ってくる。

「こんにちばんわ！誠ちゃん元気にして……た……？」

ダイゴはこちらの姿を見ると同時に言葉を止めた。

どさりと両手の袋を床に落とし、両手を戦慄かせ、驚愕の表情を浮かべる。

「？」

ダイゴの妙な反応に眉を寄せる誠次。

だがそんなことにはお構いなしにダイゴは跳躍した。

両手を揃え、プールに飛び込むかのようなそのジャンプはぶっちゃけルパンが不二子に向って飛ぶときのジャンプだった。

「チャイニーズ誠ちゃん！いったい何のサービス！？でもたまらーん！」

いうなればルパンダイブで突っ込んでくるダイゴに対し咄嗟に誠次は動いていた。

「何さらすあ！」

振り上げた右手で思い切りダイゴの頬を張り飛ばす。

強烈無比なビンタにダイゴの体がきりもみしながら飛んだ。

2メートルほど飛んで、床に突っ込むダイゴ。

訪れた一瞬の静寂を破ったのはティーだった。

「う、うわああああ！ダイゴ兄iiiiiii！」

倒れ伏すダイゴに駆け寄り、その頭を抱き上げて誠次に向って非難の声を上げる。

「セーア！いくらなんでもやりすぎだろ！ダイゴ兄も悪いけど手加減ぐらいしてくれてもいいじゃないか！」

誠次はそれに戸惑いながら答えた。

「あ。ああ。悪い。つい癖で」

ダイゴが打たれた頬をさすりながら起き上がる。

「い、いいんだ。ティー。今は確かに俺が悪い。でもまあ次からはもう少し手加減してくれると嬉しいかな」

「す、すまん」

謝って小さくなる誠次にダイゴは立ち上がりながら問いかけた。

「で、結局その服はどったの？」

「うんまあ友達からのもらいものだ」

それにダイゴは軽く首を傾げると

「うーん？友達ってーと誠ちゃんのクラスの中国人の娘？」

「うんにゃ」

首を横に振るとダイゴは先ほど落としたスーパーの袋を拾い上げながら言った。

「じゃあ今度紹介してよ。是非ともその人に言いたいしね。G」と
「！」

「G」かよ！」

つつこんだ後、誠次は頭を掻いて苦笑した。

「まあ紹介するのは無理だろうなあ」

その言葉に何か感じたのかダイゴはそれ以上何も言わずに、食材の
つまったスーパーの袋を持ち上げた。

「今日は何食べたい？ひと通り買ってきたから何でも作れるよ」

小さなところで気の利く親友に感謝しながら誠次は答えた。

「じゃあ中華以外で」

その言葉にダイゴは驚いたように目を丸くする。

「どしたの？誠ちゃん中華好きじゃん」

「いやなくなくな」

三国志の時代では毎日のように中華だったので、久しぶりに違うものが食べたかったのだが、突然そんなことを言われれば戸惑うのも無理はない。

こっちにとっては数か月でもダイゴたちにとっては1日なのだ。

「ダイゴ兄！あたいハンバーグ食べたい！」

微妙な空気を見捨てて右手をあげて言うティーにダイゴは笑うと

「それじゃま今日はハンバーグにしますか」

スーパの袋とともにキッチンに入っていく。

途中で一度振り向くとサムズアップして笑った。

「あえてもう一度言おう！誠ちゃん！実にグッドだよ！」

「ありがとう」

苦笑しながら答える。

しばらくして食材を刻む音が響き始める。

それに耳を傾けながら誠次は自分の服装を見下ろした。そして壁の方天画戟を見つめる。

「まあいいか」

一言そう言っと、手の中のコーラを一気に飲み干した。
隣でティーがあつと声を上げる。

あまりをもらうつもりだったのか少し悔しそうにしているティーの
姿に笑みを漏らしながら胸中で言う。

（帰って……来たんだな）

そう思うと実に感慨深かった。

「手伝わんのか？」

そう問われて桜咲刹那は顔をあげた。

晴れやかな蒼天の下、視線の先では体操服に身を包んだクラスメイトたちがコートの中でやる気に満ちた眼で相手を睨んでいる。

それに相対するは聖ウルスラの面々。つまりは高校生だ。

教会のシスターが着るようなデザインの制服のままで立っている。

何やら体育のために屋上に来たところすでにこの高校生連中がいたらしい。

この麻帆良は敷地の広さや学生の数に対して運動用コートの数が必要なり足りていない。

とはいえ高校生たちの校舎は隣の隣なのでたまたまここに来たという可能性は低かろう。

前も既に使っていた場所を追い出されたあのなんだのいろいろなあったらしいが正直言ってあまり興味はなかった。

話がどう展開したのかは知らないがこのドッジボール勝負に負けるとネギ先生が高校生たちに奪われるらしい。

もともと、学生たちの口約束ぐらいで教員の担当が変えられることなどまずないので、この勝負はいわば茶番だった。

だからこそ刹那は嘆息交じりに応えた。

「くだらん。第一私たちが参加したらパワーバランスが滅茶苦茶になるだろうに。勝負にもならんぞ」

現に刹那をはじめ、龍宮、楓といったハイスpek連中は見学している。

同じように見学しているエヴァンジェリンとその隣の茶々丸が花火らしきものをうちあげていた。

チアリーディング部の3人がチア衣装で応援しているが、いつ着替

えたのだろうか疑問だ。

刹那が来た時には同じように体操服姿だったのだが。

「そうか。だが誠亜さんはやる気のようにだぞ」

言われて視線を向けると誠亜が腕を組んで仁王立ちしていた。
覇気すら纏っている。

刹那は嘆息しつつ呟く。

「あの人は……」

霸王の貫録を見せる誠亜に高校生一同は少し気圧されているようだ。

戦いは女子高生チーム11人とネギチーム22人によるドッジボール対決。

女子高生のリーダーらしき人物はハンデと言っていたが、その実2

- Aに有利でも何でもない。

一つのコートに22人もいたら動けるものも動けない。

まあだからと言って女子高生チームに有利かと言えば一概にそうとは言えなかった。

人数が多くて動きにくいというハンデも、内野の者達があてられて行って女子高生チームと同じ11人になった時点でなくなる。

ドッジボールという競技が、内野の者を全員あてるか制限時間が過ぎた時点で内野に残っていた人数の多かった方が勝ちというルールである以上、2倍の人数というのは必ずしもどちらに有利というのではないのだ。

まあ女子高生チームがこの数の差を有効に使うには2-Aチームの中の運動神経のいいものを正確に見つけ出し、それらを動きにくさ

が残っているうちに倒す必要があるだろう。

そのことに気づいているのかいないのか。

自分たちの有利を疑っていない 2 - A 勢と女子高生勢双方の顔を見比べながら、刹那は片目を閉じて呟いた。

「茶番だ」

その言葉に龍宮が苦笑する。

その時だ。

「はあーはっはっはっはっはっはっは！」

聞き覚えのある、だがあまり聞きたくはない笑い声が響き渡った。皆は突然響いた謎の声に困惑したようにあたりを見回している。

だが一部、違う反応をする者がいた。

刹那や龍宮、楓にアスナなど、そして誰より誠亜だ。

全員一様に嫌な表情で額に手をあてていた。

耳を澄ませばバタバタとヘリコプターのプロペラの回る音が聞こえる。

上空には小さいがへりのものらしき影があつた。

プロペラ音に負けじと笑い声は風を貫いて降ってきていた。

[illegible]

掛け声一つ。声の主がへりから飛び降りたのが影から見て取れた。主は凄まじい速度で落ちてくる。

風を貫きながら落下するソレは一切の減速なしに屋上コートへと激突した。

大砲でも打ち込まれたかのような轟音とともに粉塵がまき散らされる。

誰もが言葉を失い立ち尽くす中、静かに風が立ち込める土煙を吹き払った。

刹那をはじめそこにいた全員の目に映ったのは、上半身が屋上の床に突き刺さりピッチリと伸ばした下半身が柱のように立っている謎の男の姿だった。

誰もが硬直する中、誠亜が嘆息しつつそれに歩み寄った。

そのまま無造作に片手で引き抜く。

大根のように引っこ抜いた男を誠亜は放り捨てる。

大地に落ちて一度バウンドした男はガバリと跳び起きると、この上ない綺麗な気を付けの体勢で叫んだ。

「その勝負私が受け持った！」

両腕を天にかかげ、そのままビシリと両腕で両チームを指差す。

「私が審判だ！！」

その男はやはり神だった。

ダンディなひげが風にわずかに揺れている。

いつものセーラー服ではなく白のタンクトップに白の短パン。

マラソンランナーあたりが着そうな服装だ。

いつもに比べればはるかにましな恰好だが、やはり神という単語からはかなりかけ離れたところを疾走する恰好である。

「なるほどー」

「この人が審判かー」

明らかに怪しい男なのだがそんなことにはお構いなしに2 - Aも女子高生たちも一部を除いて受け入れていた。

おそらく何らかの力が使われているのだろうが、あいも変わらず超能力のバーゲンセールな奴である。

「……………あの人は……………」

先ほど誠亜に言った時の2倍ぐらいの間を開けて刹那は呟いた。

龍宮もまた半眼で神を見つめている。

だがそんなこちらの様子など完全に無視して神は高らかに言った。

「教師、ネギ・スプリングフィールドの身柄を賭けた真剣勝負。存分にはげめい!!」

「「「オーーーーー」」」

ごく一部。

もともと神を知っている面々を除いた全員が拳を振り上げて叫んだ。

「始めイ!!」

神が告げるとボールが2 - Aチームに手渡された。

受け取ったアスナがさっそくその運動神経のよさを発揮する。

躍動感のある動きでボールを放ると、勢いよく飛んだボールが女子高生チームのうちの一人を打ちすえた。

アスナは仲間とハイタッチするとびしりと女子高生連中のリーダーを指差す。

「このドッジボール勝負絶対勝つわ！年下だからってなめてると痛い目にあうんだから！」

さつそく一人を失った女子高生チームだがその表情にはまだ余裕の色が見て取れる。

「ふ……やるじゃない。と言いたいところだけど何も分かってないわねあんた達。やっぱりその子供先生は私たちのモノのようね」

確かにアスナたちも分かっていないが、女子高生たちもわかっているのやら。

「行くわよ子スズメ達！」

リーダー格らしき女性が軽くボールを投げつけると、それは2 - Aチームの何人かをまとめて外野送りにする。

さつそく多すぎる人数があだになっている。

刹那が眺めるうちに次々と2 - Aの面々はボールをあてられて行った。

どいてだのうごけないだのといまさら騒いでいる。

「ちょっと皆さん！今のは大した球じゃないでしょう！もっとボールをよく見なさい！」

叱責する雪広に朝倉が返す。

「こんなギューギューじゃ動けないって」

その言葉に雪広とアスナはようやく気付いたように声を上げた。

「あつ！ドッジボールで数が多いのは全く有利じゃない！単に的が多くなって当てやすいだけ！？」

「じゃあ22対11ってあんまりハンデにならないじゃないの！？気づきなさいよー！」

「いいんちよだってその条件のんだでしょー！」

いまさら騒いでいる二人を眺めていると隣の龍宮が声をかけてきた。

「彼女らはようやく気付いたようだよ」

「どちらかというと私は神が何か余計なことをしないか心配でならん」

その言葉に龍宮は神の方を一瞥すると、まじめな表情で言った。

「いや、今回は神だけじゃだめかも知れないよ」

「？」

訝しげに眉をひそめる刹那に龍宮は苦笑を返すと、視線をドッジボールに燃え上がる面々に向けなおした。

2-Aの面々は密集してはいいいのだと慌てて散らばり出した。
これで大人数故のよけにくさというハンデはだいぶ薄れたが女子高生のリーダー格に焦りはない。

こうなる前にアスナや古菲などの運動神経がいい面々を潰さなきゃダメだろうに。

「こうなるのも予定通りよ。次に狙うのは……」

言ってリーダーはボールを持った手を振りかぶった。

視線から推測するに狙われているのは鳴滝史伽だろう。

体も小さく気もあまり強くない。

当てやすさではかなり上に位置している。

「どー見ても取る気のない奴！」

案の定リーダーは敵に背を向けて逃げていた史伽に向けてボールを投げつけた。

ボールは史伽の後頭部に激突してリーダーの手元に跳ね戻っていった。

「ひどいです！後ろから頭に当てるなんて！」

ネギが非難するがリーダーは悪びれる風もなく不敵に笑った。

「後ろ向いているのが悪いのよ！」

そもそもドッジボールは頭は無効だったような気がするのだがここではそのようなルールはないのだろうか。

まあ審判が神である以上そんな細かいルールはあってなきがごとし

だろう。

リーダーはそのまま史伽と同じように背を向けていた宮崎のどこを指差す。

「次はあんたよ！」

宣言してどうする。

内心ツツコミを入れながら事態を傍観する。

宮崎に向けて投げられた鋭い球は咄嗟に割って入ったアスナによって受け止められた。

「大丈夫本屋ちゃん！？後ろ向いたら狙われるだけなんだからね！」

言うや否やアスナは女子中学生の底力を見せてやるだのなんだのと言いながらボールを振りかぶる。

その時だ。

刹那は脇腹をつつく感触に視線を横に移した。

そこでは真面目な表情で龍宮がこちらを見ていた。

「何だ？」

問うと龍宮は視線で神を指した。

「どう思う？」

主語が抜けているが先ほどのアイコンタクトでそれが神のことを言っているのだと察する。

刹那はしばし神を見つめた後返した。

「どう思いつて……別にいいんじゃないのか？何も起こしていないんだし」

それに龍宮は軽く首を横に振った。

「確かに今はな。だが奴の顔を見ろ」

言われて刹那は仕方なしに神の顔を見つめた。

改めて観察するとどこかつまらなそうに、そして不満げに少女たちの試合を見ている。

なるほどこれは……

「今にも何かやらかしそうだな」

そう言うのと龍宮も頷いた。

ある種の警戒を含む眼で神を見る。

どよめきに視線を向けると女子高生連中が制服を脱ぎ、その下に着ていたらしいユニフォーム姿で立っていた。

胸には麻帆良ドッジと英語でプリントされている。

よくわからないが関東大会で優勝したらしい黒百合というチームのようだ。

しかしそれを聞いた2・Aの少女たちは驚くでもたたえるでもなく皆で顔を寄せあわせてひそひそと話した。

「高校生にもなってドッジ部って」

「小学生ぐらいまでの遊びちゃうの？」

「関東大会ってあいつらしか出なかったんじゃない？」

失礼な連中である。

ドッジボールとて別になに恥じる必要のない普通の、れっきとしたスポーツだろうに。

ネギだけは素直に称賛して拍手しているが、かえってそれも黒百合の面々には刺となっているようだ。

「うるさい余計なお世話よ！ビビ！しい！トライアングルアタックよ！」

直球すぎるネーミングにまたも笑いが沸き起こる。

だがそんな面々には混ざらず、雪広が真剣な表情で言った。

「ネギ先生気をつけて！私が受けて立ちますわ！！」

雪広は余裕の表情を浮かべると、

「さあ来なさいおばサマ方！2・Aクラス委員長の雪広あやかがネギ先生をお守りしますわ！」

たかが2・3歳の違いで女子高生をおばサマ呼ばわりできる感性は正直理解しかねるが、挑発としては十分な働きをしたようだ。黒百合のリーダーは目に見えて怒気を纏う。

それにしても雪広。

名前の通りトライアングルにパスが回されるたびに女の子らしい可

愛い悲鳴をあげて縮こまっている。
先ほどの威勢はどこに行ったのやら。

「く……パスの軌道が読めませんわ。トライアングルアタック。一体どんな陣形ですの」

「だから三角形やん」

ふと気になって短パンタンクトップの審判に目を移す。

そこには先ほどの雪広のボケがお気にめしたのか少し表情を和らげた神がいた。

それを見つめながら横の龍宮にだけ聞こえるような小さな声で言う。

「なあ龍宮。奴がまだ何もしていない今のうちに首筋あたりに一撃入れて黙らせた方がいいと思うのは私だけか」

「どうだろうね。黙らせられるのならそれに越したことはないが、あの神に生半可な攻撃が効くとは思えない。下手に刺激して暴走させても困るからね」

「そうか」

気がつけばすでに双方の人数はほとんど同じになっていた。

2-Aの中には不安そうにしているものもいるが、ここからが本番だ。

幸い、アスナ、古菲、超といった運動神経のいい者もそこそに残っている。

神を警戒しながら試合を観戦していると黒百合がバレーボールのトスのようにボールを打ち上げた。
それを追うようにリーダーが高々と跳躍する。

「必殺、太陽拳！」

ちょうど太陽が背に来るように計算された跳躍でアスナの眼をくらませる。

そのままバレーボールのアタックのようにアスナに向けて打ち下ろした。

体制を崩していたアスナにかわすすべはない。
当たる。

誰もがそう思う中、一人の少女が動いた。

龍宮ほどではないにしろ中学生にあるまじき長身とスタイル。
長そで長ズボンのジャージの上からでは分かりにくいが、細身ながらも鋼のような体をもった狼のような眼をした少女。

風間誠亜だ。

今まで不気味なほどに大人しくしていた彼女がついに動き出した。

いつの間にかアスナの隣に立っていた誠亜は無造作に右足をボールとアスナの間に差し込んだ。

そのまま足で受け止める。

弾いたのではない。受け止めた。

ボールが足に触れた瞬間から少しずつ力をかけ、ボールの勢いをじりじりと殺していく。

そしてついにボールのスピードがゼロになると誠亜は足の甲の上にボールを乗せて不敵な笑みを浮かべた。

その離れ業を見た黒百合のメンバーたちに動揺が走る。

誠亜は足の上のボールを軽く上に放って右手でつかみ取った。
左手を腰に当て、低く笑う。

「クククク。これで条件はタイ。そろそろ俺も動かせてもらおうとしよう！」

しかし黒百合のリーダーも負けじと言い返す。

「くつ、子ザルが！大道芸一つでいい気になるんじゃないわ！」

その言葉を誠亜は鼻で笑うとボールを持った腕を大きく振りかぶった。

「大道芸だけだと思っな！」

一喝とともに持ち上げた足を地に下ろし、全身のばねを使ってボールを撃ち出す。

信じられないことに反動で誠亜の足元に罅が走った。

発射された砲弾は大気を突き破って轟音とともに飛翔する。

何か光の軌跡すら幻視しかねない凄まじい一球が容赦なく黒百合のコートへと飛び込んで行った。

凶弾はいまだ反応すらできていない黒百合の一人に綺麗に突き刺さる。

ボールは跳ね返ることもなく、そのまま被害者ごと地面と平行にす

味方外野から渡されたボールを片手に第二の被害者を探す誠亜を眺めながら刹那は呟いた。

「誠亜さんはどうしてしまったんだ？アレか？一般常識とかそういうものをまとめて三国志時代に忘れてきてしまったのか？」

「単に自分の時代に帰ってきてハイになっているだけというのも考えられるけどね」

龍宮の返答に刹那は嘆息しつつ答えた。

「そうであることを祈るよ」

誠亜のターゲット選定は終わったようだ。刹那の視界の中で誠亜がボールを振りかぶっていた。止めなくてはなるまい。

そうひとりごちて立ち上がった刹那の耳に響いたのは甲高いホイッスルの音だった。

その場の全員が音の源に目を向ける。

それを吹き鳴らした張本人である神は白いホイッスルを口から離すとポケットの位置から一枚のカードを取り出した。

ちなみに見たところ神の履いている短パンにポケットはない。

神はそのカードを掲げて宣言する。

「風間誠亜。レッドカード退場」

「なにiiiiiiiiiiiiiiii！！なぜだ！？一体どこに違反があった

！？」

誠亜が自覚ゼロの驚愕の叫びをあげる中、刹那もまた驚愕の念を抱いていた。

あの神が事態を收拾させるようなことをしたのがにわかには信じられなかったのだ。

隣を見ると龍宮もまた同じような表情で神を見ていた。

なぜかさらに隣の長瀬楓も似たような表情だ。

そんな刹那達の驚きなど欠片も歯牙にかけず、神はレッドカードを短パンのポケットの位置にしまいこむ。

くどいようだが神の短パンにポケットなどない。

詰め寄る誠亜に神は肩をすくめると、さも当然と口を開いた。

「いやだってお前を放置していたらつまらんワンサイドゲームになるじゃないか」

「ぬうつうつうつ」

誠亜はひとしきり唸った後、一歩分飛びのいた。

右の人差し指を神の鼻先に突きつけて叫ぶ。

「ならば！一人仕留めることに相手チームに移動するのはどうだ！これならばワンサイドゲームにはならん！」

「何血迷ったこと言ってるんですか！ここにいる者を全滅させるつもりですか、あたなは！」

あまりと言えばあまりな発言に刹那は思わず声を上げた。

それに誠亜はちらりと視線をこちらに向ける。

だが誠亜が何か言うよりも早く、神がぽんと手をついた。

「なるほど。それはそれで面白そうだ」

しよせん神は神か。

頭を抱えて叫びたい衝動がわきあがるのを抑えながら刹那は呻くように言った。

「誠亜さんが加減して他に合わせればいいことでしょう」

ごくごく当たり前のことを言ったのだが誠亜はどこか不満そうに眉を寄せている。

神は刹那の言葉を思案しているのか顎に手をあててふうむと唸っていた。

そして何か天啓を得たかのようにこちらに振り向いた。
心なしか眼を輝かせて言う。

「いや待て！誠亜を他に合わせるより他を誠亜に会わせた方がきつと面白いぞ！」

「余計なことを考えるな、お前は！」

つつこむ刹那の後ろで誠亜が燃える瞳でガッツポーズをとっている。

「よっしゃ、バッチ来い！！」

「誠亜さんも大人しくしてください！！」

言ってる間も神はヨガじみた怪しげな踊りを始めるとよく通る声で叫んだ。

「喰らえゴッドパウワア！」

「やめろと言っている！！」

刹那の奮闘もむなしく神から放たれた無上の雷はその場にいた生徒達を撃ちすえた。

2-Aも黒百合も、例外なく淡い光を纏いだす。
その輝きは気や魔力と似ているようでまた違うものだった。

黒百合のリーダーが自分の体を見下ろして半ば呆然と呟いた。

「力が……力がわいてくる！これならいける！あのアクセル全壊滅
滅狼娘を倒せる！」

「誰が狼娘だ！」

誠亜のツツコミを無視してリーダーは自コート内に転がっていたボールを拾い上げるや否や先ほどのお返しと言わんばかりに誠亜に向けて投げつけた。

銃弾じみた速度で放たれたボールが一直線に誠亜へと迫るが誠亜は不敵な笑みを浮かべて右腕を前に構える。

「甘いわ！！」

着弾の衝撃が轟音となって周囲に轟き誠亜の体が数メートルスライ

ドする。

だが誠亜は決して体勢を崩さぬまま、リーダーの放った豪球を受け止めた。

それを見たリーダーが不敵に笑う。

「ふっ。一筋縄ではいかないようね。でも望むところよ！来なさい！」

「上等！」

弾丸級でボールが飛び交う。

空を突き破る豪速球をリーダーが受け止めれば、反撃の弾をアスナが受け止める。

反撃の弧を描くカーブボールを黒百合の一人が取りこぼせば、4メートルほど離れた場所にいたはずの仲間が一瞬で滑りこんでボールをノーバウンドで拾う。

地面すれすれを飛翔するボールを宮崎が眼を閉じながら3メートル近く跳躍してかわせば、黒百合の外野が空中の宮崎を狙う。

避けられない弾（もはや球にあらず）に宮崎が眼を閉じて悲鳴を上げるもすんで割って入った古菲がそれを受け止めた。

眼前で繰り広げられる超人決戦にしばし放心した刹那だがはっと我に帰ると神に詰め寄った。収めたままの夕風の鞘の先で神のこめかみを挟む。

「おい神。アレは大丈夫なんだろうな？」

「しーんぱいらんさ。連中の記憶はあとで適当に調整しておくさ」

こちらに視線一つよこさない神に若干のいらだちを感じながらも刹那は夕凧をひねる力を増しながら言葉を重ねた。

「そうじゃない。あんな無茶なブーストをかけて体は大丈夫なんだろうなと聞いているんだ」

神の力で強化されたものの中には刹那が命に代えても守りたいと思っている近衛木乃香もいた。

もしなんらかの害があるならば今すぐにでもやめさせなければなるまい。

「ん、大丈夫だろう」

はつきりしない返答に刹那は無言で鯉口を切った。

それを横目にした神は軽く肩をすくめて嘆息すると人差し指を立てて言った。

「地獄の筋肉痛で半日ほど動けなくなるぐらいで済むはずだ」

「反動あるんじゃないか！今すぐやめろ！！」

怒声を上げる刹那に神は僅かに舌を出して答える。

「やなことだ」

「……………っ！」

憤怒に目を見開いて刹那は夕風を抜き放った。

高速の居合で抜き放って、収める。

常人には到底視認不能な速度で行われるがために騒ぎになる心配はない。

頭を掠めるように刀を振るい、髪をひと房切り落とす。

そう狙って一閃した刹那は帰ってきた異様な手ごたえに眼を見開いた。

弾かれたのだ。

気によって強化された斬撃が。髪の毛に。

しかし髪がとつもない硬度を持ったわけではない。

かといって障壁に弾かれたわけでもない。

いふなれば普通の強度の髪の毛に弾かれたのだ。

岩すら切り裂く刹那の斬撃が。

驚愕に目を見開いたまま、今度は刹那は数か所に思い切り斬り込んだ。

後頭部、胸、腕へと高速の居合が喰らいつく。

だがその全てが先ほどと同じように弾かれた。

障壁はない。

服も髪も体も鉄の用のように固いわけでもない。

だが弾かれる。

髪の毛一本、布一枚、薄皮一枚傷つかない。

全くもって理解できない現象だが、わかったことがただ一つあった。

今の神は攻撃では止められないということだ。

己の無力さに歯？みする刹那を一瞥すると神は真剣そのものの表情

で口を開いた。

「なあ。今思っただが別に誠亜レベルにとどめておく必要はないのだよな。いつそいけるところまで行ってしまうた方が面白いとおもわないか」

「やめんかあっ!!」

精一杯の抵抗として力の限り言葉を叩きつける。

だがやはり神は完全にシカトすると右腕を天にかざした。

「今こそ宿れ!ぶつちぎりの超パウワアアア!」

神の声に応えるように少女たちに宿る光が一気に強さを増す。

それと同時に2・A、黒百合双方のテンションが際限なく上がっていく。

なんだか眼がぐるぐると渦を巻いているような気すらしてくる。

悪い言い方をすれば見学しているものを除いたほぼ全員が眼が完全にイッっている。

「喰らえっ!!」

叫び声とともにアスナの投げた球は何か物凄い光を纏いながら弾丸を軽く凌駕する速度で黒百合のリーダーに向けて突き進んだ。

「くっ!生意気なっ!!」

リーダーは左手を前にかざし、それを右手で支えてアスナの渾身の一球を受け止める。

ボールに込められていた力が爆発を引き起こし、爆風で皆の髪を髑

った。

「う、受け止めた!？」

驚愕の叫びをあげるアスナにリーダーはお返しとばかりにボールを振りかぶった。

ボールにはアスナのとき以上の力が籠められている。

「今度は私がプレゼントしてやるわ!死ねえっ!」

リーダーは咆哮とともにボールを投じる。

アスナの球を遥かに凌駕する力でもってボールは突き進んだ。死ねってなんだ死ねって。

これはドッジボールなはずだが。

本当に死にそうな気がするから怖い。

アスナの回避は間に合わない。

それどころか防御すらできそうになかった。

しかしてその絶体絶命の危機に疾風すら生温い何かが駆けつけた。

刹那ですら捉えられないほどのスピードで割って入った誠亜がただでさえ鋭い目つきを3倍ぐらい険しくしてボールをつかみ取っていた。

他の面々の例にもれず誠亜もまた神の力の影響下にあるようだった。瞳の中が渦巻いている。

誠亜は寧猛な声で告げた。

「死ぬのはてめえのほうだ……!!」

誠亜は膨大な力を湛えた右手で持ったボールを振りかぶる。

「す、すべての力を指先だけに集めて……！」

驚愕に目を見開くリーダーに向けて誠亜が渾身の力でもってボールを撃ち出す。

「魔貫光殺放うけてみるおおおおお！」

ボールは一直線の光の帯を残しながら音などおに置き去りにする速度で撃進した。
その弾道に沿うように螺旋状の光が並進している。

眼もくらむような閃光が屋上コートを埋め尽くした。

閃光のおさまらぬうちに、刹那は目の前に手をかざしながら詰問した。

「おい。何か撃ったぞ。どうなっている？」

多分に怒気を含めたのだが神にとってはどうでもいいことのようにだ。
何食わぬ顔で答える。

「んードラゴ。ボールだな。私は漠然と“力”を与えたただだ。それがどういう形で表れるかなど知らんよ」

閃光がおさまったあとには右肩から先のユニフォームが消し飛び、右肩に血を滲ませたリーダーが不敵な笑みを浮かべて立っていた。

右肩を指差しながら言う。

「掠ってすらいらないのに風圧だけでユニフォームが破れ飛んだわ。なかなかの技ね。まともに受けていたらアウトだった。でも当たらなければ意味がない」

それに相対する誠亜もまた不敵に笑っていた。自分の必殺投法が破られたというのに、だ。

それを不審に思ったのかリーダーが訝しげに眉を寄せる。

こつんとかかとに当たる小さな観測にリーダーはふと後ろを振り向いた。

振り向いて凍りつく。

そこには大穴をあけた壁と、その下に倒れ伏す一人の黒百合のメンバーがいた。

「じ、しい……」

震える声で仲間の名を呼ぶ。

だが返答はなかった。

しいと呼ばれた少女は白目をむいて気絶している。腹の部分のユニフォームが無残に破れていた。

「ま、まさかさっきの一撃は私を狙ったものではなく私の後ろのしいを……」

返答は誠亜の笑みで十分だった。

リーダーの肩が震えだす。

こめかみに青筋が浮かび上がった。

「ゆ、許さない……絶対に許さない」

リーダーの体から絶大な力があふれ出す。それと同時に赫怒に染まる声で咆哮した。

「もう子供先生などいるものですか！！校舎もろとも粉々に打ち砕いてあげるわ！！」

吼えるとともに大きく跳躍する。

40メートルほど上空でボールを持って捻った右手の甲に左手を添えた。

これまでのどの攻撃も比ではない強大な力がリーダーを中心に渦巻く。

「神！凄まじく物騒なこと言ってるぞ！今度こそ彼女らを止める！」

胸倉を掴んで揺さぶりながら言うが神はまるで取り合わない。

「ファッハハハハハハ！心配するな！私が監督している以上怪我人などでん！面白くなってきた！面白くなってきたぞ！！」

軽いパニックになりかけている屋上の現状が目に入っていないかのように神は天に向かって哄笑する。

相変わらず見学者そっちのけでドッジボール（？）はヒートアップしていた。

「避けられるものなら避けてみなさい！あなたは助かっても校舎は粉々よ！！」

「考えたな畜生！やるしかねえ！3倍界王拳だ！」

誠亜の体が今までとは異なる赤い光に包まれる。

それと同時に誠亜から感じられる力と闘気が膨れ上がった。

莫大な力と力がにらみ合い、大気が緊張に軋む中刹那は強烈な脱力感に身を傾がせた。

このかの身を案じるが故の焦りや、こちらのことなど何一つ鑑みない神への怒りに荒れ狂っていた心が白く染まっていく。

「私のギャリック放は絶対に食い止められないわ！校舎もろとも麻帆良の塵になりなさい！！」

刹那の顔に乾いた笑みが浮かぶ。
そして疲れ切った声で告げた。

「もう知らん」

それだけ告げると刹那はこのかを連れて離脱するために駆けだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5870k/>

神と俺のコイントス

2010年10月9日18時20分発行